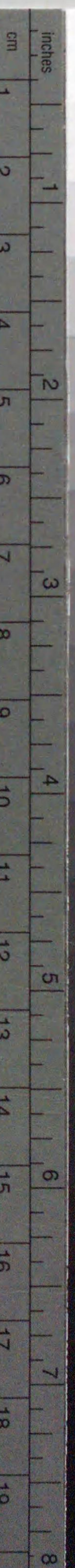


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

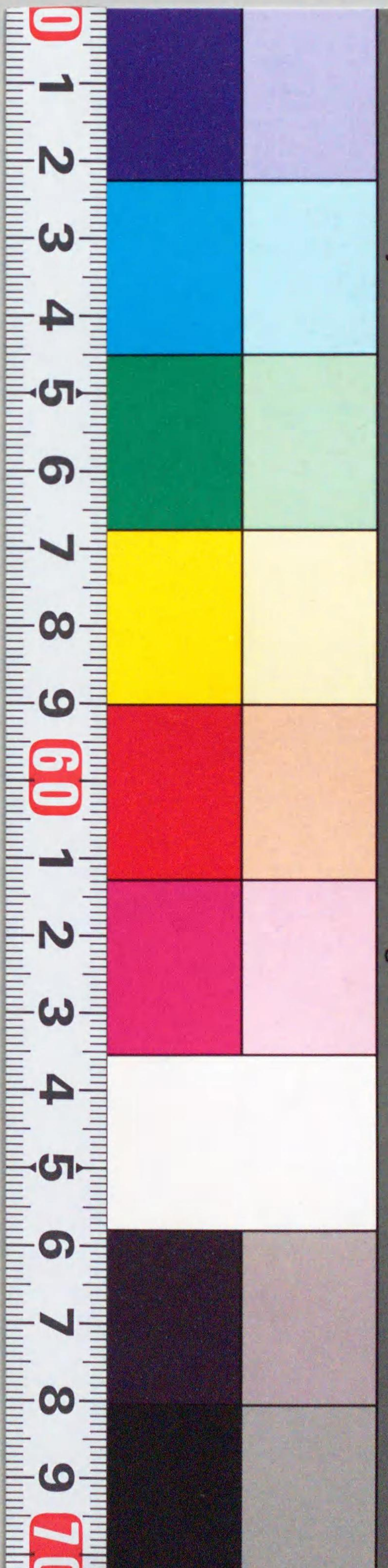
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Y994

J6468

明治十六年十二月

大政紀要

秘

興亞院政務部

明治十六年十二月

大政紀要

執務參考資料

興亞院政務部

Y994-J6468

序

本書ハ大正元年九月二十四日東京市文教會ヨリ謹刻發行セラレタル
モノニシテ、我邦歷朝大政ノ綱要ヲ略記シ、有益ナル資料ナルモ、發
行後既ニ三十年ニ垂ントシ、今ヤ一般書肆ニ於テ之ヲ求メ難キヲ以テ、
茲ニ複製シ、當院執務參考資料トスル次第ナリ。

昭和十四年九月

興亞院政務部



I種

W



1200800682404

進大政紀要表

臣美靜臣周

等言。伏以、

鏡象懸天、螢祆收耀、高千穗峯、肇基
人皇之述。

劍靈鎮地、草賊勦根、大八洲國、戴纘

神祖之功。

皇威赫奕、配乎日月、而無以渝。

寶祚聯縣、求之寰區、未見其比。雖時有盛衰、一日不虛

宸位、匪治無隆替、何人敢竊

大名。洵是

國體攸存、夏貊塗殊、職由

天倫有敘、尊卑分定、欽惟

天皇陛下。

英資天縱。

聖德日躋。

膺泰運之隆。

御乾元之極、幕府還政、

朝廷之權復古、藩侯納封、郡縣之制維新。

底大誓于神祇、博采公議、

萬幾之裁、無偏無頗、取良模於亞歐、痛除弊風、

百度之舉、盡善盡美、蓋鑒前轍、考往軌、實明

王之通規、闡

微猷、昭

宏謨、誠

隆世之盛典、此所須於記述、尤宜擇乎體裁焉、親王舍人之書、則

表年繫時、納言光圀之史、則立紀列傳、若夫舉綱要而論沿革、自古未

聞其著、分部門而詳始終、於今猶闕其編、迺

諭

宮內、新開史曹。

詔故右大臣從一位大勳位岩倉具視爲之總裁、臣等設科分編。

提調纂述、不意石室方紬羣籍、台階俄坼、右星於是參議陸軍中將正

四位勳一等山縣有朋、權監其事、臣等極慮極精、隨修隨校、始限半載、

責成、竊嘆無長繩之繫日、尋紓六旬告竣、尙惜有一簣之虧功、脫稿者

百有餘卷、名曰大政紀要、謹繕寫

上呈其關編纂者廿餘員別錄氏名敢贖
 御覽其埃補修者十數目仍疏方案伏祈
 欽裁臣等識倅蠡測不得探學海之淵才比雀羣豈堪擇史林之美叨銜
 丹編繆汗青簡雖任筆削有慙陽秋恭奉
 表以

聞臣等不勝瞻

天仰

日恐懼戰兢之至

明治十六年十二月

參事院議官從四位勳二等 臣福羽美靜
 元老院議官從四位勳三等 臣西 周

編纂氏名

總裁

右大臣從一位大勳位

臣岩倉具視

編修事務主幹編修委員長

參事院議官宮內省御用掛從四位勳二等

臣福羽美靜

編修委員長

元老院議官宮內省御用掛從四位勳三等

臣西 周

編修委員

參事院議官補宮內省御用掛正六位勳五等

臣秋月新太郎

農商務權大書記官宮內省御用掛正六位

臣若山儀一

參事院議官補宮內省御用掛從六位

臣落合濟三

編纂氏名

一

內閣權少書記官宮內省御用掛正七位	臣小野正弘
太政官權少書記官宮內省御用掛正七位	臣青木貞三
大藏權少書記官宮內省御用掛正七位	臣金田清風
文部權少書記官宮內省御用掛正七位	臣菱田重禧
東京帝國大學教授宮內省御用掛從六位	臣小中村清矩
參事院御用掛宮內省御用掛准奏任	臣妻木賴矩
參事院御用掛宮內省御用掛准奏任	臣村岡良弼
太政官御用掛宮內省御用掛准奏任	臣萩原裕
宮內省御用掛准奏任	臣木村弦雄
太政官二等屬宮內省御用掛	臣澁谷啓藏
參事院書記生宮內省御用掛	臣高島張輔
宮內省十三等出仕	臣加藤嚴夫

編修御用取扱

海軍權少書記官宮內省御用掛正七位	臣土岐裕
宮內省御用掛准奏任從四位	臣平松時厚
太政官御用掛宮內省御用掛准奏任	臣川村正平
太政官四等屬宮內省御用掛	臣櫻井光裕
太政官六等屬宮內省御用掛	臣宮崎幸麻呂
宮內省六等屬	臣山田安榮
陸軍省十三等出仕宮內省御用掛	臣石村貞一
元老院七等書記生宮內省御用掛	臣三輪彥輔
大藏省御用掛宮內省御用掛准判任	臣大森惟中

大政紀要

凡例

一此書ハ。我邦歷朝大政ノ綱要ヲ略記スル者ニシテ。分テ上下二編ト爲ス。上編ハ神武天皇建國ニ始リ。今上天皇慶應丁卯ニ訖リ。下編ハ徳川慶喜、太政ヲ奉還スルニ起リ。明治十六年ニ至ル。兩編首ニ總記ヲ提シテ。其經ト爲シ。次ニ各部門ヲ分テ。之カ緯ト爲ス。但上編ハ往古ヲ記シテ數千年間ニ互ル。故ニ記事專ラ簡要ヲ主トス。下編ハ今代ヲ記ス。故ニ敘事務メテ詳明ヲ主トス。其各部中分ツ所ノ細目。兩編其例ヲ一ニセサルモノハ。古今ノ異、詳略ノ差アルニ因テナリ。

一總記ハ。歷朝大權ノ所在、變遷ノ事跡ヲ敘シ。開闢以來政治隆替ノ由ル所ヲ明カニス。故ニ總記ノ主腦トスル所ハ。我邦國體ノ特ニ海外各國ト異ナリ。皇統一系萬世不易君臣ノ名分確定シテ。動カス可ラサルヲ表示スルニ在リトス。

一各部門ハ。其部ニ就テ源委ヲ詳ニシ。以テ治體ノ沿革ヲ見ルヘカラシム。凡ソ我邦ノ制度、典禮、若クハ風俗、氣稟等ノ特ニ海外各國ト異ナルモノハ。務メテ明白ニ之ヲ表示ス。例ハ官府一體、天皇政閣ニ親臨シ。祖祭ヲ慎重シ。農ヲ以テ國本ト爲シ。又全國徳義ヲ尙ヒ。氣節ヲ勵ムノ類是ナリ。

一國郡ノ沿革ハ。古今ニ通スルヲ以テ。上下ノ編ヲ分ツニ難ク。儒佛ニ教ノ沿革ハ。自ラ庶政ノ外ニ在ルモ。大ニ世

治ニ關係セリ。竝ニ本書ノ一部ニ具フヘキモノトス。因テ別編ト爲シテ其末ニ附ス。

一各部中。其事相干涉スルモノハ。互ニ各部ニ載ス。但較其詳略ヲ異ニシ。重ヲ其主トスル所ニ歸ス。例ハ學校ノ沿革ハ。主トシテ教育部ニ屬スレトモ。儒教部ニ於テ。亦之ヲ略敘スルカ如シ。

一此書。編年ノ史體ニ倣ハス。故ニ一事ニシテ首尾相距ル遠キ者モ。往々其本末ヲ總敘ス。或ハ初見ノ一條ニ於テ。備ニ其終ヲ言ヒ。或ハ最後ノ一條ニ於テ。遡リ其始ヲ敘ス。但是ヨリ先是ニ至テ、初メ、尋テ等ノ字ヲ用ヒテ分別記録ス。

一凡ソ事ヲ紀スル。月ヲ書シテ日ヲ書セス。其事重大ナルモノ。若クハ日ニ關係アルモノハ。特ニ日ヲ具ス。

一歷代天皇ノ舉動ヲ書スルハ。必ス天皇ト稱ス。其紀年中。前後ノ天皇ヲ敘スルモノハ。某帝ト書シ。以テ當代ト分別ス。其今上ヲ書スルハ。之ニ臨ミ或ハ上ト稱ス。

一神武天皇以後。歷代諡號アル者ハ。某天皇ト書シ。宇多天皇以後。院號ヲ稱スル者ハ。某院天皇ト書ス。其文ニ臨ミ。神武帝ト書シ、宇多帝ト書スルハ。通シテ一例ト爲ス。但北朝五帝ハ。竝ニ帝ト書シ。天皇ト稱セス。以テ正閏ノ別ヲ明カニス。

一神功皇后ノ紀年ハ。攝政何年ト書シ。天智帝即位以前ハ。稱制何年トス。又弘文帝ヲ紀スル。壬申ノ歲ヲ以テ之ニ係ケ。其明年ヲ以テ。天武帝ノ元年ト爲ス。

一外國ノ君ハ。某主、某王元主忽必烈、高麗王ノ類ト稱シ。若クハ其廟號唐太宗、宗ノ類ヲ稱シ。其死ハ殂ト書ス。現今縮交ノ各國ハ。某國皇帝、若クハ某帝、某王ト稱シ。其死ニ崩ト書ス。

但大統領ノ死ハ。殂ト書ス。以テ同盟ノ大誼ヲ存ス。

一薨卒ヲ書スル。親王及ヒ三位以上ハ薨ト稱シ。四位以下ハ卒ト書ス。三位以上ト雖モ。罪アルモノハ死ト書シ。以テ筆誅ノ例ニ從フ。其庶人ニシテ才名功業アリ。一概ニ死ト書シ難キ者ハ卒或ハ没ト曰フ。僧侶ハ死若クハ寂ト曰フ。

一凡ソ職名、刑名、其他制令中ノ用語。當時ノ稱謂ニ係ルモノハ。其字雅馴ナラスト雖モ。敢テ改易セス。以テ其實ヲ存ス。其制令等ニ關カラス。他字ニ換用シテ妨ナキモノハ。此例ニアラス。

一凡ソ臣下不軌ヲ謀リ。神器ヲ覬覦スル者ハ。反ト書シ。其兵ヲ聚メ亂ヲ作シ。或ハ家臣其主ニ倍クカ若キハ。竝ニ叛ト書ス。

一此書編成期ヲ剋スルヲ以テ。各員ニ分課シテ。其功ヲ急ニセシム。故ニ豫メ各部ヲ比照シテ義例ヲ一ニスルニ追アラス。是ヲ以テ體裁互ニ異同アルヲ免レス。他日ノ重訂ヲ待テ。完整ヲ致サンコトヲ期ス。

大政紀要總目

右大臣從一位大勳位臣岩倉具視等奉 敕撰

上編
總記
官職
法令
兵制
財政
禮儀
外交
戶籍
教育附文藝
農業
工業
商業
下編
總記

總目

官職
法令
兵制
財政
禮儀
外交
戶籍
教育
農業
工業
商業
雜編
國郡沿革
儒教沿革
佛教沿革
附錄
若干卷

上
編

大政紀要上編總記

目錄

第一	神武帝ヨリ開化帝ニ至ル	一
第二	崇神帝ヨリ皇極帝ニ至ル	五
第三	孝德帝ヨリ稱德帝ニ至ル	一五
第四	光仁帝ヨリ仁明帝ニ至ル	三三
第五	文德帝ヨリ御冷泉帝ニ至ル藤原氏權ヲ專ニス	三三
第六	後三條帝及ヒ白河帝ノ親政	四四
第七	堀河帝ヨリ安德帝ニ至ル院中政ヲ決ス	五二
第八	後鳥羽帝ヨリ順德帝ニ至ルマテ鎌倉霸府政權ヲ分掌ス	六二
第九	順德帝承久元年ヨリ後醍醐帝元弘二年ニ至ル北條氏國命ヲ制ス	六六
第十	後醍醐帝ノ中興	七七
第十一	後醍醐帝ヨリ後龜山帝ニ至ル南北朝ヲ分ツ	八三

目錄

一

目録

第十二 後小松帝ヨリ正親町帝永祿三年ニ至ル足利氏天下ノ事ヲ制ス……………九二

第十三 正親町帝永祿三年ヨリ後陽成帝慶長四年ニ至ル織田氏王事ニ勤メ及豊臣氏天下ヲ合一ス……………一〇三

第十四 後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル徳川氏天下ノ事ヲ制ス……………一一三

大政紀要

自第一卷
至第二卷

上編總記自一至二

第一册

大政紀要上編

總記一

神武帝ヨリ開化帝ニ至ル

皇統一系
君臣ノ名
分定マル

神武天皇。天祖天照大神五世ノ孫ナリ。天祖。既ニ群臣ニ命シテ下土ヲ平定セシメ。廼チ天孫天津彦彦火瓊杵尊ヲシテ降テ葦原中國ニ居リ。之カ主タラシム。賜フニ八咫鏡、草薙劍、及ヒ八坂瓊曲玉ノ三神器ヲ以テス。因テ謂テ曰ク。豐葦原瑞穗國ハ。是レ吾子孫玉タルヘキノ地ナリ。爾宜ク就テ治ムヘシ。寶祚ノ隆。當ニ天壤ト窮マリ無ルヘシト。蓋シ皇統ノ萬世一系ニシテ。君臣名分ノ班然タル。既ニ此時ニ於テ定マレリ。是ニ於テ。瓊瓊杵尊。日向高千穗峯ニ降り。遂ニ吾田ニ至ル。彦火火出見尊。彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊ヲ生ム。瓊瓊杵尊ヨリ下。葺不合尊ニ至ルマテ。世世相襲キ、天津日高ノ號アリ。後世之ヲ尊テ亦皆天祖ト稱ス。天祖ノ胤。無窮ニ傳フ。故ニ騰極之ヲ日嗣ト謂フ。上世ノ事。年代悠遠。神異測ラレス。總テ之ヲ稱シテ神代ト曰フ。天皇ハ。葺不合尊ノ子ナリ。生レナカラニシテ明達。意確如ナリ。高千穗宮ニ在リ。是時ニ當テ。西州久シク王化ヲ被リ。東國未タ服從セス。部落割據シ。統一スルコトナシ。天皇曰ク。天祖降迹以來。多ク年所ヲ歷。而シテ時運草昧。此ノ西偏ヲ治ム。

神武帝ヨリ開化帝ニ至ル

神武天皇
即位萬世
開鴻基ヲ

無爲ノ徳
不宰ノ功

遼遼ノ地。猶未タ王澤ニ霑ハス。遂ニ邑ニ君アリ、村ニ長アリ、各自疆ヲ分チ、用テ相陵轢セシム。聞ク東方ニ美地アリ、以テ大業ヲ恢弘シ、天下ニ光宅スルニ足ルト。宜ク就テ之ニ都スヘシ。甲寅歲。十月。天皇。群臣ヲ帥キテ東征シ。進テ筑紫、安藝ヲ經テ吉備國ニ入り。高島宮ニ居ル。舟楫ヲ備ヘ。兵食ヲ蓄ヘ。將ニ一舉シテ天下ヲ平定セントス。戊午歲。二月。舟師遂ニ東ス。舳艫相接シ。浪速國ニ抵ル。四月。兵ヲ勒シテ中州ニ入ル。十二月。進テ長髓彦ヲ討ス。饒速日命。長髓彦ヲ殺シ。衆ヲ率キテ歸順ス。己未歲。二月。諸將ニ命シテ偏師ヲ分遣シ、群醜ヲ殲ス。是ニ至テ中州平定ス。時ニ習俗朴陋。巢棲穴處ス。天皇宮室ヲ經營シ。以テ民心ヲ鎮ント欲ス。令ヲ下シテ都ヲ畝傍山ノ東南樞原ノ地ニ奠メ。有司ニ命シテ之ヲ經始ス。元年。正月。天皇。樞原宮ニ即位ス。神籬ヲ建テ八神ヲ祭り。國家ヲ鎮護ス。天富命。諸齋部ヲ率キ。三神器ヲ捧テ正殿ニ奉安ス。天種子命。天神壽詞ヲ奏ス。可美眞手命。内物部ヲ率キ。矛楯ヲ執リ儀衛ヲ嚴ニス。道臣命。來自部ヲ率キテ宮門ヲ護衛ス。群臣朝賀ス。天種子命、天富命ニ命シテ。共ニ祭祀ヲ掌ラシム。二年。二月。功ヲ定メ賞ヲ行フ。道臣命ニ宅地ヲ賜ヒ。椎根津彦ヲ倭ノ國造ト爲シ、弟猾ヲ猛田ノ縣主ト爲シ。弟磯城ヲ磯城ノ縣主ト爲シ、劍根ヲ葛城ノ國造ト爲ス。又可美眞手命、天日方奇日方命ヲ竝ニ申食國政大夫ト爲ス。四年。二月。諸虜已ニ平キ。海内無事ナルヲ以テ。詔シテ靈時ヲ鳥見山ニ作り。皇祖天神ヲ祭ル。天皇。神聖ノ烈ヲ承ケ。東征ノ略ヲ奮ヒ。一舉シテ海内ヲ定メ。祭祀ヲ慎ミ、政理ヲ察シ、有徳ヲ舉ケ、有功ヲ賞シ、三器ヲ奉安シテ、以テ萬世ノ鴻基ヲ開ク。盛徳大業至レル哉。是ヨリ以降、綏靖天皇神武帝、英武武ヲ以テ、庶兄手研耳命ノ子ノ天位ヲ覬覦スルヲ誅セシヨリ。安寧帝、綏靖帝、懿德帝、安寧帝、孝昭帝、懿德帝、孝安帝、孝昭帝、孝靈帝、孝安帝、孝元帝、孝靈帝ヲ經テ。開化帝、孝元帝ニ至ルマテ。列聖相承テ天位ヲ繼續シ。率土ヲ平治ス。總テ八代。四百八十

餘年。民俗淳朴。時風和順。無爲ノ徳。不宰ノ功。人得テ名クルコトナシ。所謂衣裳ヲ垂テ治マル者ナリ。是ヲ以テ政事ノ沿革。亦記載スヘキコトナシ、崇神帝立ツニ至テ。政治大ニ潤飾スル所アリ。

大政紀要上編

總記一

崇神帝ヨリ皇極帝ニ至ル

崇神天皇。開化帝ノ子ナリ。資性聰敏。幼ニシテ雄略アリ。壯ナルニ及テ。寬博謹慎。神祇ヲ崇重シ。恆ニ大業ヲ經綸スルノ志アリ。四年。十月。詔シテ曰ク。惟フニ我カ皇祖諸天皇。宸極ニ光臨スルハ。豈一身ノ爲メナランヤ。蓋シ人神ヲ司牧シ、天下ヲ經綸スル所以ナリ。故ニ能ク世々玄功ヲ闡キ。時ニ至德ヲ流ス。今朕大運ヲ奉承シ。黎元ヲ愛育ス。何ヲ以テ聿ニ皇祖ノ跡ニ遵ヒ。永ク無窮ノ祚ヲ保タン。群卿百僚。爾ノ忠貞ヲ竭シ。共ニ天下ヲ安セヨ。六年。是ヨリ先。天照大神ヲ殿内ニ祭ル。此ニ至テ。其神ヲ瀆サンコトヲ畏レ。皇女豐楸入姫ヲシテ神鏡、靈劍ヲ倭ノ笠縫^器傳國ノ神^器 邑ニ遷シ。天照大神ヲ祭ラシメ。別ニ鏡劍ヲ摸シテ殿内ニ奉安シ。神璽ト與ニ護身傳國ノ神器ト爲ス。歷朝繼傳スル所ノ三種神器。則チ是レナリ。數年以來。諸國疾疫シ。百姓流離ス。天皇深ク之ヲ憂ヒ、以爲ラク。朝ニ善政ナク、咎ヲ神祇ニ取ルニ由ルト。乃チ八十萬神ヲ別祭シ。天社、國社、神地、神戶ヲ定ム。是ニ於テ。年豐ニ民安シ。天皇。又遠荒ノ民、未タ王化ニ霑ハサル者ヲ教化セント欲シ。十年。七月。大彥命、武渟川別、彥五十狹芹彥命、丹波道主

御肇國天
皇外邦服屬
ノ始

命ヲ北陸、東海、西道及ヒ丹波ニ分遣シ。命シテ曰ク教ヲ受ケサル者アラハ、兵ヲ擧テ之ヲ伐テト。既ニシテ共ニ印綬ヲ授ケテ將軍ト爲ス。明年。四道將軍。竝ニ戎夷平定ノ狀ヲ奏ス。是歲。異俗歸附シ。海内安寧ナリ。十二年。九月。詔シテ。人民ヲ校シ、調役ヲ課ス。是ニ於テ。官ニ廢事ナク。下ニ逸民ナシ。教化流行シ。衆庶業ニ樂ミ家々給シ。人々足ル。天下太平ナリ。故ニ稱シテ御肇國^{ハツクニシラスメラミコト}天皇ト曰フ。天皇。又百姓ニ勸課シテ船舶ヲ造ラシメ。以テ運輸ノ便ヲ開キ。多ク池溝ヲ開テ以テ農業ヲ寬ニス。六十五年。七月。任那國。始メテ使ヲ遣シ朝貢ス。外邦服屬ノ事。此ニ始ル。六十八年。十二月。天皇崩ス。天皇。皇祖ヲ距ルコト十世。年ヲ歷ルコト五百。時運推移シ。風氣開化ス。國家漸ク多端ナリ。然リ而シテ善ク神武ノ德ヲ繼キ。心ヲ政事ニ盡ス。鬼神ヲ崇敬シテ民ノ義ヲ務メ。屢、詔シテ祖業ヲ恢廓ス。眞ニ肇國ノ號ヲ虛クセスト謂フ可キナリ。

狹穗彥逆
ヲ謀ル

垂仁天皇。先帝ノ子ナリ。天皇。眞率政ニ從ヒ。矯飾スル所ナシ。五年。狹穗彥反ス。狹穗彥ハ皇后ノ兄ナリ。陰ニ異圖ヲ懷キ。后ヲ誘テ逆ヲ行ハントス。后實ヲ告ク。天皇將ニ命シ。討テ之ヲ誅ス。願フニ神武帝ヨリ。一傳シテ手研耳ノ事アリ。十傳シテ今復タ狹穗彥ノ叛アリ。皆變ノ大ナル者ナリ。蓋シ立君垂統ノ國體タル。繼續ノ事、尤モ重シトス。而シテ繼續ハ婚姻ニ原ツク。二者ハ。禍福ノ由テ分ル所。后ヲ立テ、儲ヲ建ツルノ間。慎マサル可ラサルナリ。天皇性仁慈ナリ。嘗テ殉葬^{古俗貴人死ス}レハ殉葬^ハアリ。ヲ廢シ。土像物ヲ以テ之ニ代ヘシメ。以テ永制ト爲ス。天皇亦能ク先皇ノ志ヲ繼キ。神祇ヲ敬祀シテ敢テ或ハ怠ルコト無シ。其二十五年。二月。詔シテ倭姫ヲシテ豐鍬入姫ニ代リ、天照大神ヲ奉齋セシメ。祠ヲ伊勢ニ立テ齋宮ヲ五十鈴川上ニ建ツ。是ヨリ後。朝廷ノ崇敬、人民ノ尊奉、永ク渝ラス。以テ今日ニ至ル。

伊勢神宮
創立

外叛ノ始

景行天皇。先帝ノ子ナリ。十二年。七月。筑紫熊襲反ス。八月。天皇親征ス。六年ヲ經テ。筑紫悉ク平ク。乃チ還ル。二十七年。秋。筑紫復タ亂ル。皇子日本武尊ニ命シテ代征セシム。皇子。賊酋ヲ殺シテ。餘衆讐服ス。乃チ還ル。四十年。東夷反ス。日本武尊ヲ遣シ、之ヲ討平セシム。三年ニシテ東夷悉ク平ク。是ニ於テ。東國、大ニ王化ヲ被レリ。神武帝以還。數十世ヲ經テ。時ニ變故アリト雖モ。難ヲ靖シ亂ヲ戡ムル。頃刻ニシテ辨シ。天下搖カサル者ハ。兵權上ニ在リ、綱維掣クヘキノ故ニ非スヤ。然トモ皆内變ニ係ル。其外叛アルハ此時ヲ以テ始トス。蓋シ神武帝。能ク中土ヲ肇造シテ。東西諸道ハ。號令未タ周ネカラス。崇神帝ヨリ已漸。將ニ命シテ四出セシムルモ。此ニ至テ。熊襲ヲ治ムルニハ。則チ親ヲ將トシテ之ヲ伐チ。兵權ヲ臣下ニ委セス。其事ヲ重スルナリ。賊ノ再燃スルニ及テ。之ヲ再ヒスルニ難カリ。皇子ヲ遣シテ代リ往カシム。其慎ミヤ此ノ如シ。故ニ東國ヲ巡察スルニ至テ。初ハ大臣ヲ遣スト雖モ。經略ノ任ニ至テハ。亦之ヲ皇子ニ任ス。其意、以テ見ル可キノミ。尋テ皇子ヲ美濃ニ封シ。又皇族ヲ以テ東海ヲ管領セシム。思フニ是レ亦深意有テ存セリ。夫レ未タ全ク服セサルノ國ニシテ。其土、沃ニ。其兵、強シ、未タ之ヲ牧宰ニ任ス可ラス。是ニ於テ。宗室ヲ封建シテ。自ラ之ヲ經紀セシメ。其力ヲシテ以テ當時ニ鎮撫シテ。異日ニ藩屏タルニ足ラシメ。以テ内外輕重ノ勢ヲ制ス。皇謨深遠ナリト謂フ可キナリ。

國造縣主
ヲ定ム

崇神帝ヨリ皇極帝ニ至ル

成務天皇。先帝ノ子ナリ。三年。正月。武内宿禰ヲ以テ大臣ト爲ス。其四年。二月。詔シテ曰ク。我先帝。聰明神武。籙ニ膺リ圖ヲ受ケ。天ニ順ヒ人ヲ治メ。亂ヲ撥シ正ニ反ヘス。德、覆燾ニ俸ク。道、造化ニ協フ。是ヲ以テ。普天率土。玉臣タラサル莫ク。稟氣懷靈。各、其所ヲ得。朕嗣テ寶祚ヲ踐ミ。夙夜兢惕ス。然トモ黎元蠢爾。野心ヲ悛メス。是レ國、長ナク。縣、首ナキニ由レリ。自今以後。國縣、首長ヲ置キ。當國ノ材幹アル者ヲ選テ之ニ任シ。以テ中區

ノ藩屏ト爲ント。明年。國造、縣主ヲ定メ。竝ニ楯矛ヲ賜テ表ト爲ス。又山河ヲ界シテ國縣ヲ分チ。阡陌ニ隨テ邑里ヲ定ム。是ヨリ以後。百姓安居シ。天下無事ナリ。

外交ノ事ヲ開ク

仲哀天皇。景行帝ノ孫日本武尊ノ子ナリ。元年。十月。大伴武以ヲ以テ大連ト爲ス。二年。三月。熊襲反ス。天皇親征ス。九年。天皇軍中ニ崩ス。皇后息長足姬尊。新羅ヲ征シ。三韓服屬ス。此ヨリ我邦外交ノ事開ケ。大ニ異域ノ技工ヲ致シ。國威以テ強ク。文物以テ炳ナリ。皇后。三韓ヲ伐テヨリ還リ。太子。幼沖ナルヲ以テ。政ヲ攝スルコト七十年。崩スルニ及テ。皇太子立ツ。是ヲ應神天皇ト爲ス。

亞細亞ノ文物ヲ移入ス

應神天皇。先帝ノ子ナリ。十五年。儒士ヲ百濟ニ徵ス。是後。又諸ノ技工及ヒ書籍ヲ獻セシム。是ヨリ後。漸ク亞細亞大陸當時ノ文物ヲ移入シ。制度其面目ヲ革ムルニ至レリ。四十一年。二月。天皇崩ス。初メ天皇。稚郎子ヲ愛シ。立テ太子ト爲ス。稚郎子素ヨリ其兄大鸕鷀ノ賢ヲ知り。位ヲ讓ラント欲シ。避ケテ菟道宮ニ往ク。大鸕鷀名分已ニ定マルヲ以テ。確ク執テ聽カス。互ニ相讓ルコト三年。民ノ貢獻スル者。適歸スル所ヲ知ラス。稚郎子。其奪フ可ラサルヲ知り。遂ニ自殺ス。大鸕鷀馳セ至テ慟哭ス。群臣勸進シテ遂ニ位ニ即ク。是ヲ仁德天皇ト爲ス。

仁德天皇。先帝ノ子ナリ。務テ節儉ニ從ヒ。民業ヲ勸ム。其至仁ノ德。至治ノ化。載セテ史籍ニ詳ナリ。是ヲ以テ。在位ノ間。百姓殷富。海内無事ナリ。末年ニ及テ。二十四年ノ間。一人ヲ刑セス。崩スルニ至テ。兆民父母ヲ喪スルカ如シ。

史官ヲ諸國ニ置ク

履中天皇。先帝ノ太子ナリ。天皇。喪ヲ除テ未タ位ニ即カス。會、住吉仲皇子罪アリ。誅ヲ恐レ兵ヲ舉ケテ反ス。天皇。皇弟瑞齒別皇子等ヲシテ之ヲ誅セシム。四年。始メテ史官ヲ諸國ニ置キ。政事ノ得失ヲ記シ。四方ノ志ヲ通セシ

ム。八月。天皇崩ス。瑞齒別皇子即位ス。

反正天皇。先帝ノ弟ナリ。在位ノ間。風雨時ニ順ヒ。五穀成熟シ。人民富饒ニシテ。海内虞ナシ。五年。正月。天皇崩ス。

允恭天皇。先帝ノ弟ナリ。先帝崩シテ嗣無シ。群臣議シテ神器ヲ天皇ニ上ル。天皇辭謝ス。群臣固ク請フ。遂ニ位ニ即ク。四十二年。正月。天皇崩ス。

安康天皇。先帝ノ子ナリ。元年。讒ニ因テ大草香皇子仁德帝ノ子、天ヲ殺ス。三年。八日。大草香ノ子眉輪王。天皇ヲ弑ス。皇弟大泊瀨皇子。變ヲ聞テ。親ヲ甲ヲ擐シ。兵ヲ執テ馳至ル。眉輪逃テ大臣圓ノ家ニ匿ル。大泊瀨。兵ヲ率

キテ之ヲ圍ミ。遂ニ之ヲ誅ス。是ヨリ先。天皇大泊瀨ヲ立テ皇太子ト爲シ。又市邊押磐皇子ヲ履中帝ノ子愛シ。位ヲ傳

ヘント欲ス。大泊瀨之ヲ啣ミ。是ニ至テ。市邊押磐ヲ殺シテ即位ス。是ヲ雄略天皇ト爲ス。押磐ノ二子。難ヲ避ケテ遁ル。

雄略天皇。先帝ノ弟ナリ。在位二十三年ニシテ崩ス。天皇初メ心ヲ以テ師トナシ。性甚タ嚴峻ナリ。百姓怨謗ス。然レトモ能ク諫ヲ納レ。末年ニ速テ心ヲ政事ニ留ム。國家無爲ナリ。天下更ニ其有德ヲ稱ス。

清寧天皇。先帝ノ子ナリ。三年。九月。臣連ヲ諸國ニ遣シ、風俗ヲ巡省セシメ。專ラ意ヲ政事ニ注ク。是ニ於テ。海表ノ諸藩徠服シ。百姓業ヲ樂メリ。五年。正月。天皇崩ス。

顯宗天皇。履中帝ノ孫。市邊押磐皇子ノ子ナリ。初メ市邊押磐皇子。雄略帝ノ爲ニ殺サル。天皇。兄、億計王ト禍ヲ民間ニ避ケ。人ノ爲ニ傭作ス。清寧天皇召シテ宮ニ入レ。億計王ヲ立テ皇太子ト爲ス。清寧帝崩スルニ及テ。億計王、

位ヲ天皇ニ讓ル。是ニ至テ。天皇即位ス。天皇久シク民間ニ在リ。百姓ノ疾苦スル所ヲ知ル。天位ニ登ルニ及テ。専ラ心ヲ政事ニ留メ。孤寡ヲ賑卹シ。徭役ヲ屏省ス。枉屈ヲ見ル毎ニ。己レ推シテ溝隍ニ納ルルカ如シ。數年ナラスシテ群黎富庶。天下又安ニシテ。歲又比稔ス。三年。四月。天皇崩ス。

仁賢天皇。先帝ノ兄ナリ。天皇恭儉仁恕ニシテ、克ク清寧、顯宗ノ成法ヲ守リ。在位ノ間。吏胥其職ニ稱ヒ。民庶其業ヲ樂ム。五穀豐登シ。戶口蕃殖ス。遠近清平ニシテ。海内仁ニ歸ス。初メ顯宗帝ノ位ニ即クヤ。市邊押磐王ノ罪ナクシテ雄略帝ノ爲メニ殺サルルヲ恨ミ。天皇ニ謂テ曰ク。吾聞ク。父ノ驛ハ與ニ天ヲ戴カスト。匹夫且ツ然リ。況ヤ吾既ニ天子タリ。今大泊瀨天皇雄略帝ノ陵ヲ發キテ。之ニ報セント欲ス。亦可ナラスヤ。天皇泣テ之ヲ諫テ曰ク。大泊瀨天皇、躬萬機ヲ綜フ。先王、皇胤タリト雖モ。天位ニ登ラス。此ヲ以テ之ヲ見レハ。尊卑ノ分定マレリ。而ルニ忍テ陵墓ヲ壞ラハ。何ヲ以テ天ノ靈ニ奉セン。且ツ陛下。億計ト共ニ白髮天皇清寧帝ノ殊恩ヲ蒙リ。以テ此ニ至ル。大泊瀨天皇ハ。其父ニ非スヤ。億計聞ク。言、酬イサル無ク。德、報イサル無シト。陛下國ヲ饗ケテ。德行廣ク聞ユ。而ルニ今之ヲ以テ華裔ニ見サハ。恐クハ國ニ蒞ミ民ヲ子トスルノ道ニ非シト。顯宗帝嘉シテ之ニ從フ。十一年。八月。天皇崩ス。是時。平群眞鳥武内宿雄孫雄略帝ノ朝ヨリ大臣ト爲リ。三朝ニ歷事シ。世、國鈞ヲ秉リ。權勢薰灼ス。天皇崩スルニ及テ。益、威福ヲ弄シ。人臣ノ禮無シ。皇太子小泊瀨。大伴金村ト謀リ。之ヲ誅シテ即位ス。武烈天皇。先帝ノ子ナリ。天皇、刑理ヲ好ミ。法令嚴明ナリ。斷獄、情ヲ得。幽枉必ス達ス。然トモ性忍酷ニシテ殺ヲ好ム。且ツ累聖隆平ノ餘ヲ承ケ。百姓殷富、四境虞ナキヲ以テ。大ニ奢侈ヲ極ム。但人ヲ知テ善ク任シ。各、其才ヲ竭ス。故ニ政大ニ亂ルルニ及ハス。八年。十二月。天皇崩ス。

素戔
無倉ノ臣

繼體天皇。應神帝五世ノ孫。彥主人王ノ子ナリ。人トナリ大度アリ。賢ヲ禮シ士ヲ愛ス。武烈帝崩シテ嗣ナシ。大連大伴金村。大臣巨勢男人、大連物部麤鹿火等。議シテ神器ヲ天皇ニ上ル。乃チ即位ス。元年。三月。詔シテ。群僚百姓ヲ諭シ。農桑ノ業ヲ勸メ。天下殷富ヲ圖ル。蓋シ當時ノ制。朝ニ素戔ノ臣無ク。府ニ聚倉ノ兵無ク。下民亦浮浪ノ徒アルコト鮮シ。而シテ勤勉戒飾スルコト此ノ如シ。即チ當時上下ノ富有ヲ致スコト亦宜ナラスヤ。天皇、又儒ヲ崇ミ教ヲ興シ。能ク乃祖應神帝ノ業ヲ修シ。文學ヲ弘ム。二十四年。二月。詔シテ曰ク。朕、大業ヲ承ケ。今ニ於テ二十四年。天下清泰ニシテ。内外虞ナシ。年穀亦登リ。元元生ヲ樂ム。朕恐クハ是ヨリ吏人貪婪ヲ習ヒ。國人奢侈ノ俗ヲ成サンコトヲ。其レ廉節ヲ旌擧シ。務メテ政治ヲ清セヨト。天皇ノ心ヲ政事ニ用フル以テ觀ル可キナリ。二十五年。天皇崩ス。

泰平
極ル

安閑天皇。先帝ノ子ナリ。是時ニ方テ。國愈、富ミ民益、安ク。泰平殷富。殆ト其極ニ達セリ。二年。天皇崩ス。

佛法始
入ル

欽明天皇。繼體帝ノ子ナリ。是時ニ當テ。天下久シク無事ニシテ。政法亦變革スル所ナシ。時ニ三韓屢、亂ヲ作スト雖モ。内治ニ影響スルコト無シ。十三年。十月。百濟王、使ヲ遣シ。佛像經論ヲ獻シ。上表シテ其功德ヲ讚述ス。是レ佛法吾邦ニ入ルノ始ナリ。爾後數歲ニシテ上下共ニ之ヲ信シ。大ニ治體ニ關係スルニ至ル。三十二年。四月。天皇崩ス。

敏達天皇。先帝ノ子ナリ。天皇ノ政事。亦先朝ニ異ナル所ナシ。大連物部守屋。大臣蘇我馬子。五ニ政權ヲ專ニシ。漸ク釁隙ヲ爲セリ。而シテ天皇位ニ在ルノ間ハ。猶ホ禍ヲ作スニ至ラス。六年。天皇崩ス。

崇神帝ヨリ皇極帝ニ至ル

守屋ヲ攻殺ス

用明天皇。先帝ノ子ナリ。二年。四月。天皇不豫ナリ。群臣ニ詔シテ曰ク。朕。三寶ニ歸セント欲ス。卿等之ヲ議セヨ。大連物部守屋等奏ス。佛ハ蕃神ナリ。敬スルニ足ラス。大臣蘇我馬子。詔旨ヲ贊成シ、僧ヲ引テ宮ニ入ル。四月。天皇崩ス。繼嗣未ク定マラス。是ヨリ先。敏達帝ノ朝ヨリ。馬子、守屋ト。竝ニ朝政ヲ執リ。權ヲ爭テ相惡シ。是ニ至テ。守屋、穴穗皇子欽明帝ヲ立テント欲ス。馬子、兵ヲ遣シテ皇子ヲ殺シ。遂ニ皇子厩戸ト謀テ。守屋ヲ攻テ之ヲ殺ス。炊屋媛皇后ニ奏シテ。皇弟泊瀨部ヲ立テテ天皇ノ位ニ即カシム。是ヲ崇峻帝ト爲ス。崇峻天皇欽明帝ノ子。母ハ蘇我氏ナリ。大臣蘇我馬子。既ニ物部氏ヲ仆シテ復タ虞カル所ナク。驕暴益々甚シ。天皇之ヲ疾ム。嘗テ厩戸皇子ニ謂テ曰ク。馬子暴恣。朕堪フルコト能ハス。如何。答テ曰ク。陛下唯忍ハンノミ。五年。十月。山猪ヲ獻スル者アリ。帝指テ左右ニ謂テ曰ク。孰カ能ク朕カ疾ム所ノ者ヲ斫ル。此猪頭ヲ斫ルカ如クセン。馬子之ヲ聞テ惧ル。十一月。馬子、東漢駒ヲシテ天皇ヲ弑セシム。皇女弟額田部ヲ勸進シテ天皇ノ位ニ即ク。是ヲ推古帝ト爲ス。既ニシテ馬子。漢駒ヲ縛シ。其罪ヲ數メテ曰ク。是レ君ヲ弑スルノ賊ナリ。吾レ爲メニ誅ヲ行フト。乃チ之ヲ殺ス。厩戸之ヲ聞テ曰ク。此誅アリト雖モ。蘇我氏、君ヲ弑スルノ名。千載雪ク可ラスト。蓋シ朝臣ニシテ弑逆ヲ行フコト。國朝開闢以來無キ所ナリ。實ニ天下ノ大變ト謂フヘシ。然トモ馬子ノ兇暴、憚ル所ナキヲ以テ。猶弑逆ノ名ヲ諱ミ。之ヲ他人ニ諉シ。以テ世人ヲ瞞過センコトヲ計ル。名分ノ犯ス可ラサル。其レ嚴ナル哉。

蘇我馬子弑逆

始テ冠位ヲ定ム
憲法ヲ撰ヒ朝禮ヲ制ス

推古天皇。欽明帝ノ女。敏達帝ノ皇后。母ハ蘇我氏ナリ。元年。四月。厩戸皇子ヲ立テ皇太子ト爲シ。萬機ヲ攝行セシム。此時。大臣馬子ノ輩。政權ヲ專ニスト雖モ。天皇、心ヲ民政ニ注キ。太子亦務テ制度文物ヲ開達シ。政事整革スル所少カラス。十一年。十二月。始メテ冠位十二階ヲ定ム。明年。皇太子、憲法十七條ヲ撰ヒ。又朝禮ヲ改制ス。

是ヨリ文質漸ク彬彬タリ。十五年。七月。大禮小野妹子ヲ隋國ニ遣ス。是ヨリ使命來往シ。漸ク支那ノ文物ヲ移轉シ。後來制度法律ノ變革ヲ致スモノ。實ニ此ニ原セリ。二十九年。二月。皇太子薨ス。三十四年。蘇我馬子死ス。三十六年。天皇崩ス。崩スルニ臨テ。故太子厩戸ノ子山背王ヲ召シ。後事ヲ囑ス。馬子ノ子大臣蘇我蝦夷。遺詔ヲ矯テ。皇子田村ヲ立テント欲ス。群臣敢テ異議スル者無シ。獨リ境部摩理勢可カス。蝦夷、遂ニ之ヲ殺シテ。田村皇子ヲ勸進ス。是ヲ舒明天皇ト爲ス。是ヨリ蝦夷朝權ヲ專ニス。

舒明天皇。押坂彥人大兄皇子ノ子。敏達帝ノ嫡孫ナリ。在位十三年ニシテ崩ス。皇后位ヲ嗣ク。

皇極天皇。茅渟王敏達帝ノ曾孫ノ女。先帝ノ皇后ナリ。大臣蝦夷、驕僭益々甚シ。二年。十月。蝦夷、病ト稱シテ朝セス。私ニ紫冠ヲ其子入鹿ニ授ケ。代テ大臣ノ事ヲ行ハシム。蝦夷、山背王ノ位望素ヨリ高ク中外望ヲ屬スルヲ疾ミ。之ヲ滅サント欲シ。先ツ先帝ノ子古人大兄ヲ立テテ皇嗣ト爲ス。蘇我氏ノ出ナリ。十一月。蝦夷、兵ヲ遣シ。山背王ヲ圍ミ。遂ニ之ヲ殺ス。是ニ於テ。復タ憚ル所無ク。遂ニ篡奪ヲ謀ル。居ヲ宮ト稱シ。其子ヲ王子ト曰ヒ。出入天子ニ擬ス。皇弟輕、皇子中大兄、及ヒ中臣鎌足等。之ヲ切齒シ。密ニ匡濟ノ策ヲ議ス。四年。六月。策ヲ決シ。入鹿ノ入侍スルヲ伺ヒ。直ニ御前ニ就テ之ヲ誅シ。伏シテ其罪ヲ奏ス。蘇我氏誅ニ伏ス。是ニ於テ。天皇位ヲ皇子中大兄ニ讓ラント欲ス。皇子之ヲ鎌足ニ告ク。鎌足曰ク。古人皇子ハ殿下ノ兄。殿下、次ヲ越テ統ヲ承ケハ。恐クハ恭遜ノ義ヲ失ハン。輕皇子ハ。殿下ノ舅。齒德俱ニ高シ。之ニ讓テ民望ニ答フルニ如カシ。皇子之ニ從ヒ以テ辭ス。天皇乃チ位ヲ皇弟輕ニ傳フ。是ヲ孝德帝ト爲ス。

蘇我氏誅ニ伏ス

六百年間時勢總論

以上論敘スル所。崇神帝以還。六百餘年間。國體ノ在ル所。治體ノ由ル所。之ヲ概見スルニ足ルヘシ。之ヲ要スルニ。

此年代ノ政治ハ。其基本皆先皇ノ創造スル所ニ則トリ。敢テ變更スル者アル少ナシ。蓋シ風化猶ホ無爲ヲ尙ヒ。庶政甚タ多端ナラサルヲ以テ。變革更改ヲ要セサルニ因ルナリ。然リ而シテ年所ヲ經ルコト久シク。外交漸ク開ケ。文教盛ニ興リ。人民相生養スルノ利益大ニ起テ。而シテ弊害モ亦之ニ從ヘリ。夫レ利益ナル者ハ。昕夕ノ能ク興ス所ニ非ス。弊害亦數百年前ニ根蒂シ。漸クニシテ滋蔓スル者ナリ。抑神武帝、制ヲ定メシヨリ以來。歷世加婆禰ヲ以テ職ヲ制ス。其大臣、大連、及ヒ造、長等ハ。朝廷其人ヲ選テ之ヲ命スト雖モ。多クハ門望ニ因テ其職ヲ世ニセリ。其初メ恩威上ニ在テ能ク之ヲ統御スルニ當テヤ。綱張テ目舉リ。手足ヲ使フカ如シ。既ニシテ其弊ヲ生スルニ及テヤ。臣連跋扈シ。造首私ヲ營ム。用明、崇峻、推古、舒明、皇極ノ朝。大臣、大連。内ハ黨與ヲ樹テテ朝權ヲ爭ヒ。外ハ部曲ニ依テ兵力ヲ專ニス。然トモ當時猶ホ歷朝積威ノ約スル所アルヲ以テ。其弊朝野ニ充滿スルモ。之ヲ洩發スルノ機ナシ。佛教ノ漸ク傳フルニ及テ。口ヲ取捨ニ藉リ。一タヒ刺衝シテ堤防乃チ決セリ。橫流滔滔。遂ニ蘇我馬子、物部守屋兵ヲ蕭牆ニ構ヘテ。搏噬ヲ逞フスルニ馴致ス。既ニシテ物部氏滅ヒ。蘇我氏獨リ橫ナリ。是時ニ當テ。宗社ノ危キコト累卵ノ如ク然リ。頼ニ中大兄皇子ノ英武ナルアリ。奮テ大慝ヲ誅シ。孝德帝。位ニ即クニ至リ。往ヲ顧ミ來ヲ察シ。深ク禍弊ノ由ル所ヲ觀テ。大ニ政法ヲ釐革セリ。

大政紀要

自第三卷
至第四卷

上編總記自三至四

第二册

大政紀要上編

總記三

孝德帝ヨリ稱德帝ニ至ル

孝德天皇。皇極帝ノ弟ナリ。天皇深ク前朝弊害ノ因ル所ヲ察シ。大ニ舊慣ヲ破テ大政ヲ料理セント欲シ。即位ノ始メ。大臣大連ヲ廢シ。改メテ左右大臣及ヒ内臣ヲ置ケリ。是ニ於テ。加婆禰ニ由テ朝權ヲ偏倚スルノ弊一洗シテ。官ニ依テ之ヲ平衡セシムルヲ得タリ。天皇尙漸次ニ凡百ノ弊害ヲ除カント務ム。而モ變故ノ後。人心未ク定ラス。事或ハ澁滯センコトヲ恐ルルヤ。皇太子中大兄ト共ニ皇祖母尊ヲ奉シ。朝ニ臨テ大ニ群臣ニ盟ヒ。神祇ニ告ケテ曰ク。天覆ヒ地載セ。帝道唯一ノミ。而シテ末代澆薄。君臣序ヲ失フ。皇天手ヲ我ニ假テ。暴逆ヲ誅殄ス。今共ニ心血ヲ瀝キ。自今以後。君ニ政ナク。臣ニ心無ケン。若シ此盟ニ貳カハ。天災地妖。鬼誅人伐。曠トシテ日月ノ如クナラン。乃チ是歲ヲ紀シテ大化元年ト爲ス。年號此ニ始ル。天皇既ニ紀綱ヲ振張シ。朝威肅然タリ。乃チ前朝地方政治ノ弊害ヲ除カント欲シ。民心猶ホ之ヲ信セサランコトヲ恐ル。七月。左右大臣ニ詔シテ曰ク。天下ヲ治ムルノ方。當ニ上古聖王ノ軌轍ニ遵フヘシ。政ヲ爲スノ務。信ヲ天下ニ失フコト無キニ在リト。是ニ於テ。國造伴造ヨリ以下庶民ニ至ルマテ。

大政ヲ變
革セント
シテ朝ニ
盟フ

孝德帝ヨリ稱德帝ニ至ル

天皇ノ政ハ。上古聖王ノ跡ニ遵テ。其宜ヲ制スル者ニシテ。新ヲ追ヒ奇ヲ好テ。舊章ヲ改革スルニ非サルコトヲ知レリ。天皇以爲ク可ナリ。八月。東國ノ國司ヲ拜シ。之ニ詔シテ曰ク。朕天神ノ附記スル所ニ遵ヒ、以テ天下ヲ修治セントス。凡ソ國家所有ノ公民。大小所領ノ人衆。皆戶籍ヲ作り。田畝ヲ校シ。其園池水陸ノ利ハ。百姓ト之ヲ共ニセヨ。國司國ニ在ルトキハ判罪ヲ專ニシ。及ヒ賄ヲ受ケテ以テ民ノ貧苦ヲ致スコトヲ得ス。其京師ニ朝スルトキハ。多ク民ヲ發シテ以テ自ラ隨フコトヲ得ス。若シ伴テ國造、伴造、縣主、稻置ト稱シ。私ニ官家ヲ領シ。郡縣ヲ治ムル者ハ。國司審カニ考覈シテ。具狀奏聞セヨト。是ニ於テ。地方政治改良ノ舉。稍ク將ニ緒ニ就カントス。然トモ事誠ニ重大ニシテ。一タヒ機宜ヲ失ヒ事變ヲ激セハ。復タ之ヲ何如トモスルコト能ハサルノ勢アルヲ以テ。天皇先ツ民命ヲ安センコトヲ圖リ。鐘匱ヲ朝ニ設ケ。詔シテ曰ク。凡ソ憂訴ノ人。伴造アル者ハ。伴造先ツ議シテ而後ニ奏シ。尊長アル者ハ。尊長先ツ議シテ而後ニ奏セヨ。如シ伴造、尊長達セサル者ハ。牒ヲ匱ニ納レヨ。朕群臣ト共ニ議シテ之ヲ罪セン。官司或ハ阿黨稽留シテ。剖斷直ナラサル者ハ。當ニ鐘ヲ撞クヘシ。天下ノ民ヲシテ咸ク朕カ意ヲ知ラシメヨト。民心大ニ悅伏セリ。天皇乃チ將ニ斷シテ地方ノ弊政ヲ改メ。造長ノ私ヲ除カントス。九月。詔シテ臣、連、伴造、國造等。各、私民ヲ置キ。情ヲ恣ニシテ驅使シ。且ツ國縣山海林野池田ヲ割テ以テ私財ト爲シ。百姓ニ賣與シテ。年々其價ヲ索ムルコトヲ禁シ。以テ兼并ノ路ヲ杜ケリ。百姓大ニ悅フ。蓋シ吾國ノ體タル。君主國ヲ開テ。民斯ニ蕃殖ス。他邦ノ民アリテ而後ニ君アルカ如キニ非ス。故ニ率土ノ濱。王有ニ非サルハ莫シ。豈亦別ニ所謂人民所有ノ權ナル者アラシヤ。神武帝、天祖ノ命ヲ承ケテ制ヲ定ムルノ意實ニ然リトス。其後加婆禰世襲ノ弊。土地ヲ兼并シ。民庶ヲ驅使シ。以テ私有ノ形ヲ爲セリ。天皇其古ニ非サルヲ以テ。斯ニ造長ノ私利ヲ除キ。又私ニ地ヲ賣ルコトヲ禁ス。是レ

私民私財ヲ禁ス

班田租庸調ノ制ヲ定ム

八省百官ヲ置ク

兵馬ノ權ヲ收ム

蝦夷ヲ討シ版圖ヲ廣ム

百姓ノ悅服スル所以ナリ。二年。正月。詔シテ新制ヲ下ス。其一。前代置ク所ノ子代ノ民。處處ノ屯倉。及ヒ臣、連、伴造、國造、村首有ツ所ノ部曲田莊ヲ罷メ。大夫以上ニ食封ヲ賜ヒ。官人百姓ニ布帛ヲ賜フコト差アリ。其二。新ニ畿内ノ國界ヲ定メ。京師ヲ修シ、國司郡司ヲ置ク。其三。戶籍ヲ造リ。班田收授ノ法ヲ制シ。田畝ヲ定ム。其四。賦役ヲ罷メ。租庸調ノ法ヲ行フ。是ヨリシテ後。國司ノ政績ヲ考ヘテ之ヲ易置シ。天下大小ノ政權。皆之ヲ朝廷ニ收メ。確乎トシテ拔ク可ラサルニ至レリ。乃チ更ニ新禮ヲ制シ。七色十三階ノ冠ヲ制シ。尋テ八省百官ヲ置キ。又十九階ノ冠ヲ改制セリ。是等ノ禮文衣冠。概ネ皆法ヲ唐朝ニ採ルト雖モ。亦妄ニ倣ヒ輕シク起ス者ニ非スシテ。能ク政事ノ實體ニ適スルコトヲ務メタルヲ以テ。文質彬彬トシテ觀ル可キニ至レリ。凡百ノ制度。既ニ斯ノ如ク其舊弊ヲ一洗シテ餘ス所無ラントス、即チ武備モ亦同時ニ於テ之ヲ改正シ。治體ト相戾ラサラシメ。兵馬ノ權亦之ヲ朝廷ニ收メ。復タ内顧ノ患ナク。以テ國ヲ護リ民ヲ安スルコトヲ致セリ。此他天皇治世ノ間。庶政ヲ良改スル者多シト雖モ。其先ツ心ヲ用フル所ノ者ハ。國博士ヲ朝廷ニ置テ。文學ヲ掌ラシメ。葬祭ノ式ヲ定メテ。以テ追遠ノ義ヲ彰カニシ。使ヲ諸國ニ遣シテ農事ヲ勸獎スル等。其他ノ施置枚擧スルニ遑アラス。然トモ國家本體ノ組織ニ於テハ。一ニ舊章ヲ祖述シ。敢テ改作セス。之ヲ要スルニ簡ニシテ煩ナラサルヲ旨トセリ。白雉四年。十月。天皇崩ス。齊明天皇。先帝崩スルニ及テ。皇極帝重祚ス。天皇在位ノ間。政事皆前朝ノ定ムル所ニ率ヒ。之ヲ變更セス。其特ニ歴史籍ニ顯レタルハ。阿部比羅夫ニ命シ。蝦夷ヲ討セシメテ。版圖ヲ廣メ。又百濟ヲ扶匡スルカ爲ニ軍旅ヲ起セリ。七年。七月。天皇崩ス。

孝德帝ヨリ稱德帝ニ至ル

禮ヲ定メテ百度ヲ興ス。孝德帝ノ善政ハ。實ニ天皇ノ補翼贊成ニ由ラサルモノ無シ。蓋シ我邦ノ建ツヤ。神武帝ニ創シ。崇神帝ニ開ケ。而シテ仁德帝ニ成レリ。其後皇德漸ク衰ヘ。敏達、用明二朝ニ至テハ。即チ大權下ニ移リ。姦臣國ヲ專ニス。若シ天皇出テテ之ヲ靖スルコト微カリセハ。王業或ハ熄ムニ幾シ。天皇宗室ノ中ニ奮起シテ。謀ヲ運ラシ機ヲ決シ、大姦ヲ黜坐ノ下ニ斃シ。功德已ニ天下ニ布ク。其天位ニ登ルハ。天下ノ望ム所ナリ。而シテ退讓シテ兩朝ヲ歷。其間力ヲ補翼ニ致シ。齊明帝崩シテ。然後始メテ即位ス。曠世ノ度アルニ非レハ。何ソ能ク此ノ如クナランヤ。其政務メテ質樸ニ從ヒ。能ク皇祖ノ丕績ヲ紹述シ。制度ヲ裁定シ。天地ヲ經緯シテ。以テ萬世ノ太平ヲ開ク。時人稱シテ中宗ト爲シ。歷朝特ニ之ヲ祭祀スル宜ナルカナ。四年。正月。大友皇子ヲ太政大臣ト爲シ。蘇我果安等ヲ御史大夫ト爲ス。太政大臣及ヒ御史大夫ヲ置ク此ニ始マル。十月。天皇崩ス。是ヨリ後弘文、天武、持統、文武、元明、元正六朝ヲ經テ。聖武帝ニ至ルマテ。天皇畫一ノ政。之ヲ或ハ更ルコト莫ク。其舊章ニ率由シテ。倍、之ヲ修治セリ。聖武帝ノ末ヨリ孝謙帝ヲ經。淳仁ニ至テ。其德漸ク衰ヘ。孝謙帝、淳仁帝ヲ廢シテ重祚スルニ及テ。紀綱ノ紊弛。主權ノ衰微。復タ言フニ忍ヒサル者アリ。然トモ天皇以後。相繼テ善ク心ヲ民政ニ用フルヲ以テ。民心服シテ動カス。光仁帝立テ其後ヲ善クスルニ至テ。王道復タ盛ナリ。且ツ此間。文物制度ノ美ナル。前數朝ノ間ニ於テ。其根本ヲ培養セシモノ。漸ク鬱然トシテ煥發スルノ期ニ至レリ。故ニ法律ノ制定。國史ノ編修等。凡ソ文物ノ進化スル。歴々トシテ大ニ觀ルヘキ者アリ。而シテ天皇ノ創設スル所ニシテ。未タ完備セサル者。此年代ニ於テ補修スル所甚タ尠カラストス。

弘文天皇。天智帝ノ子ナリ。初メ天智帝ノ不豫ナルヤ。將ニ位ヲ皇弟大海人ニ讓ラントス。皇弟、帝ノ大友皇子ヲ愛スルヲ知り。固辭シテ僧ト爲リ。吉野ニ入ル。是ニ於テ大友皇子立ツ。是ヲ天皇トナス。元年壬申。五月。天皇潛ニ兵ヲ遣シテ吉野ヲ圖ラシム。大海人之ヲ聞テ曰ク。事既ニ此ノ如シ。吾豈坐シテ亡ヲ取ランヤト。乃チ兵ヲ稱ケテ京師ニ逼ル。七月。天皇軍ニ崩ス。天皇文藝ヲ以テ人ニ驕リ。人附クヲ樂マス、藤原鎌足ハ其舅ナリ。屢、以テ言ヲ爲ス。天皇悛メス。遂ニ難ニ及ヘリ。是ニ於テ大海人入テ即位ス。是ヲ天武天皇ト爲ス。

天武天皇。天智帝ノ弟。先帝ノ叔父ナリ。天皇英武ニシテ。能ク先皇ノ業ヲ繼キ。内外ヲ治ム。在位ノ間。制度ノ改飾セル者少カラス。三年。諸國百姓ノ貧富ヲ定メテ三等ト爲シ。中戸以下稅ヲ貸スコトヲ許ス。四年畿内及ヒ陸奥長門ノ外國司ノ任格ヲ定ム。六年。内外官吏考課黜陟ノ令ヲ定ム。九年。二月。親王諸王群臣ニ詔シテ律令法式ヲ改修セシム。三月。皇子群臣ニ詔シテ帝紀ヲ選述セシメ。又禁式九十二條ヲ制ス。十二年。詔シテ親王以下諸臣ニ至ルマテ兵馬ヲ訓練セシメ。又諸國ニ詔シテ陣法ヲ習ハシム。十三年。爵位ノ號ヲ改メ。階級ヲ增加ス。九月。神寶ヲ伊勢ノ天祖ノ宮ニ奉リ。詔シテ二十年毎ニ兩神宮ヲ改造セシメ。著シテ永式ト爲ス。又朝使ヲ諸道ニ分遣シ。判官、史官各一人ヲ副ヘ。國司群司ノ能否ヲ巡察シ。民ノ疾苦ヲ問ハシム。朱鳥元年。九月。天皇崩ス。

神宮改造ノ制

持統天皇。天智帝ノ女。先帝ノ皇后ナリ。深沈ニシテ大度アリ。先帝在位ノ間。常ニ機務ニ參與セリ。先帝崩シテ。天皇朝ニ臨ミ制ヲ稱ス。朱鳥四年。三月。天下ニ詔シテ農桑種樹ヲ勸ム。四月。皇太子草壁薨ス。元年。正月。天皇即位ス。七月。高市皇子ヲ以テ太政大臣ト爲ス。九年。二月。百官ヲ召シテ建儲ヲ議ス。衆議決セス。葛野王ノ子進ミ奏シテ曰ク。子孫相承クルハ皇朝ノ典ナリ。兄弟相及フカ如キハ亂ノ端ナリ。今先太子ノ子珂瑠王在リ。誰カ敢テ聞然セント。議乃チ定ル。八月。天皇位ヲ皇太子ニ讓リ。太上天皇ト稱ス。太上天皇ノ號此ニ始マル。

太政大臣
知太政官
事ヲ論ス

文武天皇。天武帝ノ孫。草壁皇子ノ子ナリ。四年。忍壁親王及ヒ藤原不比等ニ敕シテ律令ヲ選定セシム。我邦當時ノ憲法。此ニ至テ完備セリト云フ。三年。三品忍壁親王ヲ以テ知太政官事トシ。左右大臣ノ上ニ列ス。蓋シ我邦初メ大臣大連アリ。竝ニ軍國ノ政ヲ聞ク。其權ヲ分テ偏重無ラシムル所以ナリ。蘇我氏外戚ヲ以テ大臣ト爲リ。政ヲ擅ニスルヤ。物部氏大連ヲ以テ之ト抗爭ス。物部氏敗レテ蘇我氏弑逆ヲ行フニ至テ。則チ政權一ニ歸ス。其後厩戸中大兄ト。竝ニ太子ヲ以テ朝政ヲ管シ。大友高市ト。皇子ヲ以テ太政大臣ト爲ル。其權ヲ人臣ニ委ネサルノ意一ナリ。天皇ニ至ルニ及テ。乃チ知太政官事ノ目ヲ定メ。親王ヲ以テ之ニ任シ。位左右大臣ノ上ニ在リ。是ヨリ後。宗室ノ耆德。迭ニ其任ニ膺リ。以テ聖武ノ初メニ至ル。朝廷ノ綱紀畢ク張リ。權姦政ヲ壞ルノ事無シ。是レ當時祖宗ノ意ヲ斟酌シ。克ク至當ノ制ヲ立ツ。後世ノ法ト爲スヘキ者ナリ。夫レ太政大臣ノ名ハ。大友高市ニ見エ。前後無キ所。蓋シ常置ノ官ニ非ス。特ニ之ヲ親王ニ屬シ。敢テ官名ヲ立テス。知太政官事ノ如キモ。亦大政ヲ總理スルニ在テ。實ニ庶政ニ任スルモノニ非ス。其庶政ニ任スル者ハ。則チ左右大臣ニシテ。又之ニ分任シ。而シテ其下ニ納言アリ。辨官アリ。外記、史アリ。體統相屬シテ。天皇之ヲ親決ス。是レ人主ノ勢ヲ尊ミ。權柄ノ下移ヲ防ク所以ナリ。其後元正ノ時。右大臣藤原不比等外舅ノ故ヲ以テ太政大臣ト爲ントス。不比等敢テ拜セシテ已ム。孝謙ノ僧道鏡ニ於ケルカ如キハ姑ク之ヲ論セス。文德ニ至テ。始メテ藤原良房ヲ以テ太政大臣ト爲シ。爾後帝戚タル者往往此任ヲ猥ニシ。之ニ居テ疑ハス。然後祖宗ノ制一變セリ。再變シテ武門政ニ干ルニ至テ。主將此官ニ任スル者アルニ至ル。世變ノ極ト謂フヘキナリ。大寶元年。正月朔。天皇大極殿ニ御シテ朝賀ヲ受ク。儀衛嚴正ニシテ蕃客位ニ陪ス。朝廷ノ禮儀是ニ於テ大ニ備レリ。是後官位ヲ制シテ位冠ヲ停メ。巡察使ヲ諸國ニ分遣シテ。政績ヲ伺察ス。又五位以上ニ詔シテ。賢良ノ士

制度典章
ヲ大成ス

ヲ擧ケシメ。田祖ノ法ヲ定ム。慶雲四年。五月。天皇崩ス。天皇博ク經史ニ涉リ。心ヲ政治ニ留メ。民庶ヲ賑恤シ。孝義ヲ旌表シ。天下其澤ヲ蒙ル。蓋シ我邦ノ制度、典章孝德帝ヨリ後多ク唐制ニ效ヒ。天皇ニ至テ而シテ大成ス。故ニ文物ノ盛ナルハ。上古ニ軼クル者アリト云フ。

女中ノ堯
舜

元明天皇。天智帝ノ第四女。先帝ノ母ナリ。和銅元年。天下ニ大赦シ。窮老ヲ賑シ。節孝ヲ旌ス。此後數朝ノ間。此三事ヲ行フコト史ニ筆ヲ絶タス。以テ常典ト爲ス。七月。百官ニ敕シテ忠精ヲ勵マシ貪濁ヲ戒シム。四年。始テ郵驛ヲ置キ交通ニ便ス。五年。五月。詔シテ諸國郡司及里長等大稅ヲ賑貸シテ。百姓ノ窮乏ヲ濟ハス。自ラ奸利ヲ爲ス者ヲ戒シム。八年。正月。諸國ノ朝集使ニ敕シ。百姓ヲ撫導シ。農桑ヲ勸メ。資産ノ豐足ヲカメシム。和銅六年。五月。郡司大小領ノ任限ヲ制シテ終身ト爲ス。又諸國ニ敕シテ風土記ヲ選セシム。天皇能ク先帝ノ令典ヲ守リ。民ヲ閔ムニ心アリ、勞徠綏撫意ヲ用ヒサルコト莫シ。稱シテ女中ノ堯舜ト曰フ。八年。九月。天皇位ヲ皇女氷高内親王ニ讓ル。元正天皇。文武帝ノ姉ナリ。靈龜元年。十月。諸國司ニ詔シテ。百姓ヲ教導シ。カヲ耕種ニ盡シ。時候ヲ失フコト莫ク。以テ民財ノ富阜ヲ圖ラシム。養老三年。七月。始メテ按察使ヲ置キ。諸國ヲ巡省セシム。四年。八月。右大臣藤原不比等薨ス。不比等ハ内大臣鎌足ノ子。四朝ニ歷事シ。右大臣ニ累遷ス。養老二年。詔シテ太政大臣ニ任ス。固辭シテ拜セス。薨スルニ及テ。太政大臣一位ヲ贈ル。後世藤原氏ノ盛ナルコト此ニ基セリ。是月。舍人親王ヲ以テ知太政官事ト爲ス。五年。二月。群臣ヲ殿前ニ召シ。詔シテ國家ノ事。萬機ニ益アルモノヲ奏聞セシム。六月。太政官奏シテ按察使ヲ以テ正五位ニ準シ。祿及ヒ公麻田仕丁ヲ賜ハンコトヲ請フ。詔シテ曰ク。朕ノ肱股。民ノ父母。獨リ按察ニ在リ。重ヲ寄セ繁ヲ務ムルコト。群臣ト異ナリ。宜ク祿一倍ヲ加フヘシト。當時按察ノ重要ナルコト以テ觀ル

藤原氏隆
盛ノ基

孝德帝ヨリ稱德帝ニ至ル

大政紀要上編

總記四

光仁帝ヨリ仁明帝ニ至ル

光仁天皇。天智帝ノ孫ナリ。稱徳帝ノ崩スルヤ。皇嗣未タ定ラス。右大辨藤原百川等策ヲ禁中ニ定メテ天皇ヲ迎フ。天皇乃チ即位ス。前朝ノ末。紀綱大ニ紊亂ス。天皇之ヲ振新シ。以テ崇神、天智帝ノ大業ヲ光復シテ。上神武帝ニ接セント欲ス。即位ノ初。銳意ニ前朝ノ政弊ヲ除キ。先ツ僧道鏡ヲ貶竄シ。尋テ和氣清麻呂ヲ召還シ。又使ヲ淡路ニ遣シテ。淳仁帝ヲ改葬ス。天皇前朝以來。冗官漸ク多ク。上下凋弊スルヲ憂フルヤ。神護景雲四年。九月。詔ヲ下シテ令外官ノ冗員ヲ沙汰セリ。是時ニ當テ。天下ノ民皆田アラサル莫シ。人生レテ五年以上。之ニ口分ヲ給シ。女及ヒ奴婢ハ。三分ノ一ヲ減ス。凡ソ田アレハ則チ租アリ。家アレハ則チ調アリ。身アレハ則チ庸アリ。其官ニ在リ役ニ在ル者ハ。租庸調並ニ之ヲ除ス。又老窮自存スル能ハサル者ハ。之ヲ賑恤シ。孝節國郡ニ聞ル者ハ。其課役ヲ除ク。而シテ官ニアル者。五位以上ハ則チ位田アリ。職田アリ。勳勞アル者ハ。功田アリ。賜田アリ。其他ハ則チ祿俸アリ。官ヲ解キ職ヲ免スレハ則チ戚ク皆田ニ歸ル。是ヲ以テ官員、増セハ則チ課口減シ。農業廢シ。田園荒ル。故ニ官ヲ省キ

役ヲ息メ。カヲ農事ニ致スハ。當時ノ善政ナリ。寶龜四年。天下穀貴キヲ以テ。常平法ヲ定メ。穀ヲ糶シテ民ヲ賑ハス。又檢稅使ヲ諸國ニ遣シ。出入ヲ糺サシム。五年秋。蝦夷亂ヲ作ス。鎮守府將軍大伴駿河麻呂ニ命シテ之ヲ討ス。是ヨリ奥羽屢擾レ。征討止マス。桓武帝ニ及テ。大ニ之ヲ討平セリ。六年。八月。是ヨリ先。京官祿薄ク。國司利厚キヲ以テ。庶寮咸ク外任ヲ望ム。是ニ至テ。諸國ノ公廩四分一ヲ割テ京官ノ俸祿ヲ益ス。十一年。太政官奏スル所ニ由リ。三關邊要ヲ除クノ外。每國額ヲ定メ。殷富ノ百姓弓馬ニ堪フル者ハ。專ラ武藝ヲ習フテ。徵發ニ應セシメ。其羸弱ナル者ハ。皆農業ニ就カシム。蓋シ上古ノ政ハ。官文武ノ別ナク。海内皆兵ナリ。天下事アルニ當レハ。天子親ラ元帥ト爲リ。兵馬ノ權ヲ攬ル。中世唐制ヲ摹倣スルニ至テ。官途文武ヲ異ニシ。六衛將帥ヲ置ク。然トモ國民ニ在テハ。兵農未タ分レス。諸國ノ正丁三分一ヲ點シテ。兵役ニ充テ。以テ京ヲ衛リ邊ヲ戍ラシム。此ニ至テ。兵農漸ク分レ。後世終ニ武門武士ナル者アルニ至レリ。天應元年。四月。天皇位ヲ皇太子ニ讓ル。天皇臨馭ノ間。政事大綱ヲ擧ケ。苛察ニ在ラス。官無用ヲ省キ。化清簡ヲ崇フ。是ヲ以テ。寶龜ノ政。海内晏如。幾ト刑措ヲ致セリ。其中興光復ノ勢。日ノ昇ルカ如ク。百官萬姓。皆自ラ誠飭勤勉シ。以テ上意ニ副フコトヲ求ム。天皇ノ勵精自強息マサルニ非レハ。曷ソ能ク此ノ如クナラン、是ヨリ以還。桓武帝能ク大業ヲ承繼シ。平城、嵯峨、淳和、仁明帝ニ至ルマテ。主權王室ニ在リテ。批政アルコト莫シ。仁明帝ノ末ヨリ。藤原氏漸ク權ヲ專ニシ。文德帝ニ至テ。太政ノ實權殆ト下ニ移レリ。

桓武天皇。先帝ノ子ナリ。天應元年。六月。詔シテ曰ク。先王ノ官ヲ建ルヤ。材ヲ量リ能ニ授ケ。職員限アリ。其後事務稍ク繁ク。遂ニ員外ヲ置ク。近古因循シテ。民其弊ヲ受ク。朕肇メテ區夏ニ君臨ス。務メテ民害ヲ除カント欲ス、

凡ソ内外文武官。常員ノ外一ニ皆解卻セヨ。但郡司軍毅ハ此限ニ在ラス。又國司朝委ニ乖キ。奸濫著シキ者ハ。秩未タ滿タスト雖モ。事ニ隨テ貶降セヨ。自今以後。内外官人。清謹公正ナル者ハ。之ニ顯官ヲ授ケ。貪殘濁濫ナル者ハ。之ヲ黜降シ。以テ國ヲ安シ民ヲ撫セント。先帝ノ時既ニ冗官ヲ省クノ令アリ。而シテ積弊未タ遽ニ一洗スル能ハス。故ニ又此詔アルナリ。延暦元年。四月。詔シテ造宮敕旨ノ二省。法花鑄錢ノ兩司ヲ罷ム。以テ儉約ニ遵ヒ。簡易ノ化ヲ崇ス。三年冬。詔シテ國司等公廩田ノ外。更ニ林野ヲ占メ。田園ヲ營ムコトヲ禁シ。又王臣諸司及ヒ寺家、山林藪澤ヲ兼并シテ、其利ヲ專ニスルヲ禁ス。天皇又深ク運輸ノ便ヲ開キ。交通ノ利ヲ濟スヲ謀リ。七年。七月。伊勢美濃越前等ノ國ニ敕シテ。關ヲ廢シ。以テ通利ヲ便ニシ。往來稽留ノ苦ヲ濟フ。其後南海東海ノ驛路ニ新道ヲ關キ。又諸國ニ敕シテ舟楫浮橋ヲ設ケ。以テ運輸ニ便セシム。八年正月。學生登庸ノ例ヲ定メ。尋テ又勸學田ヲ大學ニ置キ。學資ヲ濟フ。是ヨリ平城嵯峨帝ノ朝ニ及テ。文學大ニ開達セリ。十年。始メテ吉備眞備等刪定スル所ノ律令ヲ行ヒ。其後新制彈令八十三條ヲ彈正臺ニ下シ。又令格四十五條ヲ有司ニ頒ツ。是歲都ヲ山背ノ長岡ニ遷ス。十一年。陸奥出羽佐渡及太宰府ヲ除クノ外。諸國ノ兵士ヲ廢ス。其羸弱ナルヲ以テナリ。十二年。京城ヲ山背葛野郡ニ築キ。伊勢ノ大廟及ヒ諸國ノ神社ニ奉幣シテ。遷都ヲ告ク。十三年。十月。車駕新京ニ遷ル。詔シテ曰ク。此地山河襟帶。自然城ヲ爲ス。因テ山背國ヲ改テ山城國ト爲スヘシ。且ツ庶民號シテ平安京ト曰フ。宜ク之ニ從フヘシト。蓋シ上古ヨリ歷朝世、其都ヲ遷シ。或ハ一世ノ間屢、遷スコトアリ。上下從テ其弊ヲ承ク。是ニ於テ。天皇地ヲ相シ勢ヲ察シ。以テ帝都ヲ奠ム。皇居以テ固ク。士民以テ安シ。此ヨリ以降。明治維新ニ至ルマテ。復タ都ヲ遷スコト無シ。十八年。十一月。敕ス。先ニ問民苦使ヲ遣シ、政迹ヲ探訪スルニ。違犯スル者多シ。須ラク刑ヲ峻ニシ。永ク後輩ヲ懲スヘシト。是ニ

蝦夷邊陲
遂ニ寧シ

於テ。直ヲ擧ケ枉ヲ罰シテ。群僚肅然タリ。二十四年。十二月。公卿ヲ召シ。政事ノ得失ヲ議セシメ。兵役營造ヲ停ム。又壯丁衛士等ノ數ヲ減ス。天皇武ヲ好ミ。心ヲ政治ニ勵マス。先帝ノ時ヨリ。蝦夷屢亂ヲ爲ス。天皇坂上田村麻呂ニ命シテ。大ニ之ヲ討セシメ。邊陲遂ニ寧ク。武備亦爲ニ擴張スル所アリ。曾テ群臣ヲ召テ民瘼ヲ咨訪ス。參議藤原緒嗣言フ。方今天下ノ苦ム所。兵土木トニ在リ。請フ此ノ二者ヲ罷シ。天皇之ヲ善トシ。事皆停廢ニ從フ。聞者感歎セサルハ莫シ。天皇ノ政。務メテ治體ヲ張り。舊弊ヲ除ク。故ニ上下又安ニシテ。兵強ク國富メリ。二十五年。三月。天皇崩ス。

平城天皇。先帝ノ長子ナリ。天皇在位ノ間。政事率ネ前朝ノ制ニ率ヒ。又能ク先帝ノ意ヲ繼テ。舊弊ヲ改革ス。大同元年。五月。六道ニ觀察使ヲ置ク。二年。八月。憲法十五條ヲ頒ツ。十月。國司交替ノ期ヲ改メ。限ルニ六歳ヲ以テス。後復タ改メテ四歳ト爲ス。四年。四月。天皇位ヲ皇太弟ニ傳フ。九月。觀察使起請ヲ天下ニ頒ツ。史ニ稱ス。天皇識度沈敏。躬萬機ヲ親ラシ。法令嚴整ニシテ。群下肅然タルコト古先哲王ノ治ト雖モ之ニ過キスト。

嵯峨天皇。桓武帝ノ子。先帝ノ弟ナリ。弘仁元年。九月。上皇ノ尙侍藤原藥子。上皇ノ敕ヲ矯リ。其兄仲成ト亂ヲ作サントス。時ニ天下久シク泰平ナルヲ以テ。人心動カス。數日ナラスシテ事悉ク平ラク。是ヨリ以後。後白河帝ノ朝ニ至ルマテ。三百五十年間輦下靜穩。刑罰大夫ニ上ラス。五年。五月。詔シテ皇子皇女數人ニ源朝臣ノ姓ヲ賜フ。皇族源姓ヲ賜フコト此ニ始マル。天皇ノ諸子前ニ親王タル者四人。後ニ源姓ヲ賜フ者十八人。其姓ヲ賜フノ詔ニ據ルニ。出身ノ初。皆六位ニ敍ス。皇族ノ尊ヲ以テ。人臣ノ列ニ同クシ。封邑ノ濫ヲ停メ。府庫ノ費ヲ省ク。其後世ノ爲ニ慮ル者深遠ナリト謂フヘシ。此後淳和、仁明、文德三帝竝ニ此式ニ仍テ。諸親王ニ朝臣ノ姓ヲ賜ヒ。後遂ニ恒例トナレ

大權下移
ノ兆

リ。九年。四月。詔シテ服御常膳後宮ノ用度。及ヒ左馬寮ノ秣穀等ヲ減省ス。炎旱ノ故ヲ以テナリ。是ヨリ以後。數朝ノ間天災變異アル毎ニ。大抵此詔アリ。以テ費用ヲ節シ。民苦ヲ體ス。十年。二月。公卿奏ス。頻年稔ラス。百姓飢饉ス。倉廩空盡シテ。物ノ賑粟スルナシ。窮民飢ニ臨マハ。必ス廉恥ヲ忘レン。伏テ望ム畿内富豪ノ貯ヲ錄シテ。困窮ノ徒ニ貸シ。秋收ノ時、數ニ依テ償ハシメン。庶幾クハ富者失フコト無ク。貧者ヲ全セント。之ヲ許ス。十二年。正月。刑法斷例十條ヲ定ム。十四年。四月。天皇位ヲ皇太弟ニ傳フ。天皇幼ニシテ聰敏博學。長シテ人君ノ量アリ。在位ノ間。政事概ネ前朝ノ成績ヲ保守シ。變更スル所少シ。末年ニ及テ。常ニ嵯峨ノ離宮ニ在リ。太政アル毎ニ空位ヲ朝堂ニ設ケ。五位藏人ヲシテ側ニ居リ。群議ヲ聽テ以テ奏セシム。之ヲ職事ト曰フ。時ニ天下久ク泰平ナルヲ以テ、上者漸ク怠惰ニ流レ。下者隨テ慢易ニ趣ク。大權ノ下移スル。漸ク此ニ兆セリ。

淳和天皇。桓武帝ノ子。先帝ノ弟ナリ。弘仁十四年冬。諸國ノ力田衆ニ超ル者ニ爵一級ヲ賜フ。天長元年。八月。右大臣藤原冬嗣奏シテ曰ク。當今諸國ノ牧宰、治聲ヲ崇セント欲スルモ。法律ニ拘シテ馳騫スルヲ得ス。邦國ノ殄瘁スル。職トシテ之ニ由レリ。自今才德ヲ簡テ。以テ諸國ノ守介ニ任シ。其施爲經ニ反シ。宜ヲ制スルコトアルモ。私ノ爲ニセサル者ハ。須ク寬恕ニ從ハン。又古制ニ遵テ。巡察使ヲ諸國ニ遣シ。國守ノ治否ヲ考ヘ。民ノ疾苦ヲ問ハン。中納言良岑安世奏シテ曰ク。國守ノ良者ハ。多ク得易カラス。一良守ヲ得ハ。則チ宜ク數國ヲ兼帶セシムヘシ。小大ノ政。其請フ所ニ從ヒ。一兩ノ僚屬亦。請ニ依テ之ニ任セン。若シ其公廩ハ。攝國ノ中。其殷阜ヲ擇ヒ。二守ヲ以テ之ヲ分給シ。諸ヲ一國ニ試ミ。明ニ治否ヲ知り。然後ニ之ヲ兼シメント。之ニ從フ。二年。八月。畿内七道ノ巡察ヲ置ク。三年。九月。中納言清原夏野奏ス。今親王八省ノ卿ニ任スルモ。地望素ヨリ高ク。庶務ヲ知ルコト無シ。是ヲ

以テ、官軍日ニ懈ル。請フ數國ヲ點定シテ。迭ニ親王ヲ任セン。奏可ス。乃チ上總常陸上野三國ヲ親王ノ任國ト爲シ。守ヲ改テ太守ト曰フ。十年。二月。天皇位ヲ皇太子ニ傳フ。

仁明天皇。嵯峨帝ノ子ナリ。即位ノ初メ。淳和上皇ノ皇子恒貞親王ヲ立テ皇太子ト爲ス。上皇書ヲ致シテ固辭ス。天皇聽カス。天長十年。五月。大和言ス。頻年登ラス。例舉闕クコトアリ。請フ弘仁十年ノ官符ニ準シ。國中富民ノ稻ヲ借り。以テ飢民ヲ賑ハサント。之ヲ許ス。承和七年。四月。改正格式ヲ頒ツ。九年。七月。敕シテ皇太子ヲ廢ス。

八月。皇子道康親王ヲ立テ皇太子ト爲ス。十三年。三月。五畿諸國ニ敕シテ所在ノ皇胤ヲ甄錄セシム。嘉祥三年。

皇太子廢
立ヲ論ス

三月。天皇崩ス。天皇博學ニシテ衆藝ヲ包綜シ。政事舊章ニ由レリ。在位ノ間。上ニ孝ニ下ニ慈ナリ。然トモ中コロ讒ヲ信シテ。皇太子恒貞ヲ廢シ。皇子道康親王ヲ立ツ。道康ハ左大臣藤原冬嗣ノ女ノ生ム所ナリ。蓋シ嵯峨帝其子ヲ舍テ淳和帝ヲ立テ。淳和帝亦其子ヲ舍テ天皇ヲ立ツ。皆天下ノ爲ニ其器ヲ撰フニ在テ。情ヲ矯リ私ヲ濟スモノニ非ス。天皇ノ恒貞親王ヲ立テ太子ト爲スハ。善ク二帝ノ意ヲ體スト謂フ可シ。然リ而シテ此時藤原氏朝廷ノ顯職ニ列シ。勢威漸ク盛ナリ。嵯峨淳和二上皇崩スルニ及テ。乃チ其出ヲ立テント欲シ。遂ニ太子ヲ構陷ス。天皇竟ニ悟ラス。且ツ右大臣藤原良房ハ新太子ノ舅ナルヲ以テ。天皇引テ之カ羽翼ト爲シ。又其女ヲ納レテ太子ノ妃ト爲ス。天皇崩シ。文德帝立ツノ月。清和帝生ル。生テ九月。立テ太子ト爲ス。七年ニシテ良房ヲ超拜シテ。太政大臣ト爲シ。帶劍シテ殿ニ上ルヲ許ス。其明年文德帝崩シテ。而シテ鬻亂ノ天子立チ。良房攝政ス。而シテ後王室ノ事言ニ忍サルモノアリ。故ニ大權ノ相門ニ移ルハ。天皇ノ太子ヲ廢立スルヲ以テ近因ト爲スヘシ。

大政紀要

自第五卷
至第六卷

上編總記自五至六

第三册

大政紀要上編

總記五

文德帝ヨリ御冷泉帝ニ至ル藤原氏權ヲ專ニス

文德天皇。仁明帝ノ子。母ハ贈太政大臣藤原冬嗣ノ女ナリ。天皇意ヲ政事ニ留メ。性甚タ明察ナリ。然トモ在位ノ間。禁網漸ク密ニ。憲法頗ル峻ナリ。官署ノ遷除。吏人ノ廢置。相繼テ已ム無シ。嘉祥三年。十一月。皇子惟仁親王ヲ立テテ、皇太子ト爲ス。此時ニ當テ。天皇四子アリ。長ハ惟喬、生テ七歲。次ハ惟條、竝ニ紀氏ノ出ナリ。三ハ惟彥、滋野氏ノ出ナリ。惟仁ハ則チ藤原氏ノ出。生レテ僅ニ九月ナリ。天皇固ヨリ惟喬ヲ立ント欲ス。而シテ藤原氏ヲ憚テ果サス。遂ニ惟仁ヲ立ツ。實ニ右大臣藤原良房ノ外孫ナリ。當時。藤原氏ノ權。能ク天子ヲシテ忌憚セシムルコト此ノ如シ。天安元年。二月。右大臣藤原良房ヲ以テ太政大臣ト爲シ。寶劍ヲ賜ヒ。佩テ殿ニ上ラシム。漢蕭何ノ故事ノ如クス。大納言源信ヲ左大臣ト爲シ。大納言藤原良相ヲ右大臣ト爲ス。藤原氏ハ天兒屋命ニ出ツ。天孫降臨ノ時。兒屋命奉扈シ。神武帝東征ノ時。其子種子命輔佐ス。之ヨリ以降。子孫世々朝廷ノ貴紳タリ。大職冠鎌足ニ及テ。天智帝ヲ輔ケテ。大難ヲ定メ制度ヲ建ツ。功ヲ以テ内大臣ニ任シ。姓ヲ藤原ト賜フ。其子不比等。持統。文武、元明、元

文德帝ヨリ後冷泉帝ニ至ル藤原氏權ヲ專ニス

藤原氏太
政大臣ノ
始
藤原氏ノ
勳績

大權將門
ニ移ルノ
原因

藤原氏攝
政ノ始

正ノ四朝ニ歷事シテ勳勞アリ。其後藤原百川。稱徳、光仁ノ朝ニ功アリ。蓋シ我王家。一タヒ皇極帝ニ危ク。再ヒ孝謙帝ニ傾ク。而シテ之ヲ匡正スル者ハ。皆藤原氏ナリ。鎌足微カリセハ。天智帝アリト雖モ。誰カ之ヲ翼戴セン。百川微カリセハ。光仁、桓武帝アリト雖モ。誰カ其策ヲ定メンヤ。此三君ハ。皆大業ヲ光復シ。澤後世ニ浹ネシ、之ヲ上神武、崇神帝ニ接スト謂フモ愧ツルコト無キナリ。而シテ藤原氏。援ケテ之ヲ立ツ。其功豈偉ナラスヤ。然リ而シテ太政大臣ハ。大友、高市ニ皇子ノ外。古之ニ任スル者ナシ。桓武以降。賢哲ノ皇子。勳功ノ朝臣アリト雖モ。未タ嘗テ此官ニ登ラス。而シテ左右大臣。亦概ネ每ニ其偏ヲ曠シクス。是レ徒ニ謙恭ヲ爲スノミニ非ス。實ニ上其舉ヲ慎ミ。下其任ヲ重シ。威權ノ下移ヲ慮ル所以ナリ。仁明帝ヨリシテ後。左右闕クコト無ク。是ニ至テ。三臺始テ備ハル。願フニ良房ノ勳勞。固ヨリ乃祖ニ過ル無シ。其才器何ノ必シモ前代數公ニ賢ランヤ。而シテ獨リ能ク此官ニ任スル者ハ藤原氏積累ノ勢。外戚親任ノ厚。然ラシムルノ致スノミ。是ヨリ以後。藤原氏外舅ヲ以テ。世、其官ヲ襲キ。其權ヲ執リ。確呼トシテ抜ク可ラス。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐、朱雀、村上、冷泉、圓融、花山、一條、後一條、後朱雀帝ヲ經テ。後冷泉帝ニ至ルマテ。十五世二百十餘年間。天下ノ事。皆其欲スル所ナリ。中ニ就テ。凡百ノ政事。光孝、宇多帝ニ盛ニシテ。圓融、花山帝ニ衰ヘ。後三條立ツニ至テ。大權再ヒ復古セリ。且ツ此年代ニ於テ。他日大權將門ニ移ルノ原因ヲ爲ス者尠カラス。故ニ我朝政治ノ沿革ヲ觀ント欲セハ。宜ク先ツ眼ヲ此間ニ注クヘキナリ。天安二年。八月。天皇崩ス。

清和天皇。先帝ノ子ナリ。天安二年。八月。天皇即位ス。時ニ年九歲ナリ。太政大臣藤原良房、外祖ヲ以テ。政事巨細トナク皆之ヲ與リ聞ク。貞觀四年。參議以上ニ敕シテ。時政ノ得失ヲ言ハシム。八年。八月。太政大臣良房ニ敕シ

大權下移
ノ始

テ。天下ノ政ヲ攝行セシム。藤原氏攝政此ニ始ル。前史ヲ按スルニ。應神帝ノ神功皇后ニ於ル。推古帝ノ太子廐戸ニ於ル。齊明帝ノ皇子中大兄。元明帝ノ皇女淨足姬尊。皆其庶政ヲ攝行セリ。然トモ是レ皆皇族ノ至親ニシテ。皇母若クハ皇太子タルヲ以テ。實ニ輔翼ノ力アリ。今良房、至尊ノ外戚ト雖モ。人臣ヲ以テ萬機ヲ攝行スルハ。古來此例アルコトナシ。願フニ天皇、即位ノ初メ尙幼沖ナリ。良房、元老ヲ以テ政ヲ相クルハ。姑ク可ナリトスヘシ。天皇漸ク壯ニシテ。應ニ萬機ヲ親ラスヘキニ及テ。忽チ此敕アリ。實ニ大權下移ノ始トナス。十三年。二月。天皇始メテ紫宸殿ニ御シ。政ヲ視ル。承和以往。天子日ニ紫宸殿ニ御シ。政事ヲ視ル。仁壽以來。遂ニ廢ス。是ニ至テ。良房老ルヲ以テ之ヲ復ス。四月。太政大臣良房ニ食祿ヲ加ヘ。隨身兵仗ヲ賜ヒ。准三后トス。准三后ノ爵ヲ賜フコト此ニ始ル。十四年。九月。良房薨ス。敕シテ朝ヲ廢スル三日。正一位ヲ賜リ。美濃公ニ封シ。忠仁ト諡ス。是後歷朝攝關薨スレハ。即チ朝ヲ廢シ。及ヒ其贈位封爵皆此例ニ據ル。其病ムヤ之ニ度僧ヲ賜ヒ。又天下ニ大赦スルニ至ル。是後四年間。攝政ヲ置カス。十八年。十一月。天皇位ヲ皇太子ニ傳フ。天皇、寬仁明恕。好テ書傳ヲ讀ミ。精ヲ政事ニ專ニス。外祖良房攝政シ。國家寧靜ナリ。天皇已ヲ恭シ。成ヲ仰キ。默シテ憲綱ヲ握ル。良房薨スルニ及テ。始テ政ヲ親ス。既ニシテ藤原基經國ニ當リ。内外清肅ナリ。故ニ前代ノ政ヲ道フ者ハ。悉ク貞觀ノ治ヲ稱ス。

陽成院天皇。先帝ノ子。母ハ贈太政大臣藤原長良ノ女ナリ。右大臣藤原基經ヲ以テ攝政トナス。良房ノ故事ノ如シ。元慶二年。三月。出羽ノ倭夷叛ス。官軍之ヲ討テ利アラス。右中辨藤原保則ヲ以テ出羽權守ト爲シ。之ヲ討ス。四年。四月。出羽平定ス。藤原保則召レテ京師ニ入ル。天下皆以爲ラク。保則一卒ヲ勞セスシテ。大寇ヲ平定ス。廷必ス當ニ其殊勳ヲ賞スヘシト。而シテ遂ニ優崇ノ命ナシ。秋田城司良岑近、貪婪ニシテ此寇亂ヲ致ス。而シテ亦懲罰ノ典ナ

文德帝ヨリ後冷泉帝ニ至ル藤原氏權ヲ專ニス

臣ニシテ
天位ニ登
ル者ナシ

シ。是ニ由テ衆議多ク基經ノ刑賞ヲ失フヲ譏ル。四年。十二月。右大臣藤原基經ヲ以テ太政大臣ト爲ス。攝政故ノ如シ。八年。二月。天皇位ヲ遜ル。史ニ稱ス。天皇長スルニ及テ甚タ昏狂ナリ。基經廢立ヲ行ハント欲シ。諸親王ヲ相テ心ヲ時康親王ニ屬ス。乃チ公卿ヲ會シテ之ヲ告ク。衆論紛紜タリ。左大臣源融、帝位ヲ望ムノ志アリ。曰ク。宗室ノ胄ヲ求メハ融在リ。基經曰ク。古ヨリ未タ一タヒ姓ヲ賜ヒ臣ト爲リ。而シテ天位ニ登ル者アラス。參議藤原諸葛、劍ヲ按シ叱シテ曰ク。今日ノ事。誰カ太政大臣ノ言ニ依ラサラン。群議乃ヲ定ル。是ニ於テ伴テ車駕ヲ陽成院ニ遷シ。奏シテ曰ク。陛下君德闕ルアリ。臣等社稷ノ爲ニ計テ乘輿ヲ此ニ遷スト。帝聞テ大ニ驚キ。號叫悲悔ス。基經乃チ百官ヲ率キテ時康親王ヲ迎立ス。是ヲ光孝帝ト爲ス。是ヨリ先。孝謙帝。淳仁帝ヲ廢シテ重祚ス。其他未タ廢立ノ例ナシ。況ヤ臣ニシテ君ヲ廢スルヲヤ。當時ノ事已ムヲ得サルニ出ツト雖モ。亦以テ大勢ノ推移ヲ徵スヘシ。

臣ニシテ
君ヲ廢ス

光孝天皇。仁明帝ノ子。母ハ贈太政大臣藤原總繼ノ女ナリ。元慶八年。二月。太政大臣基經、親王公卿ト謀リ。策ヲ定メテ璽鏡劍ヲ奉シ。天皇ニ勸進ス。天皇乃チ踐祚ス。六月。詔シテ曰ク。百官事ヲ奏スル。先ツ太政大臣基經ニ諮稟シ。而後ニ奏聞セヨ。仁和元年。正月。天皇紫宸殿ニ御シテ事ヲ視ル。三年。八月。詔シテ皇子源定省ノ臣姓ヲ削リ。以テ親王ニ列ス。初メ天皇、皇子多シ。皆朝臣ノ姓ヲ賜フ。而シテ基經ヲ憚テ未タ敢テ太子ヲ立テス。天皇不豫ナリ。基經臥内ニ入テ奏シテ曰ク。陛下萬歲ノ後神器將ニ誰ニ付セントス。天皇曰ク。唯公ノ擇フ所ナリ。對テ曰ク。臣カ見ル所ヲ以テセハ。其レ唯王侍從カ。王侍從ハ定省ナリ。天皇大ニ喜ヒ。定省ヲ召シ。右ニ其手ヲ執リ左ニ基經ノ手ヲ執リ。泣テ曰ク。大臣輔助ノ恩深シ。汝敢テ忘ルル勿レト。尋テ定省親王ヲ立テ。皇太子ト爲ス。是月。天皇崩ス。天皇頗ル墜典ヲ修飾スルノ志アリ。屢、事ヲ外廷ニ視ル。在位ノ間典儀ノ久廢スル者。稍、之ヲ復興スト云。

關白ノ始

阿衡ノ任

宇多院天皇。先帝ノ子。母ハ仲野親王ノ女ナリ。太政大臣藤原基經、左大臣源融等故ノ如シ。仁和三年。十一月。詔ス。萬機巨細皆太政大臣基經ニ關白セヨト。關白此ニ始ル。四年。二月。太政大臣基經ヲ准三后トシ。年官年爵ヲ賜フ。良房ノ故事ノ如シ。五月。是ヨリ先基經上表シテ政ヲ歸サンコトヲ乞フ。許サス。詔シテ曰ク。社稷ノ臣ナリ。朕カ臣ニ非ス。宜ク阿衡ノ任ヲ以テ卿ノ任ト爲スヘシ。時ニ阿衡ノ任ヲ疑フ衆議紛然タリ。或ハ曰ク。阿衡典職ナシ。何ソ庶務ヲ關白セン。遂ニ官奏ヲ示サス。事聞ユ。天皇諸博士ヲシテ阿衡ノ職掌ヲ勘ヘシム。衆議云フ。阿衡ハ三公ナリ。座シテ道ヲ論スルノミ。基經憚ハス。曰ク。然ラハ則チ吾ハ閑人ノミト。命シテ廐馬ヲ放タシメ。奏シテ曰ク。國家ノ事。一日萬機ナリ。而シテ去年八月ヨリ今日ニ到ルマテ。未タ太政官申ス所ノ政ヲ奏セス。臣伏テ去年十一月ノ詔ヲ奉スルニ。萬機巨細臣ニ關白セヨト。次テ又敕シテ阿衡ノ任ト爲ス。臣聞ク。阿衡ノ任職掌ナシト。崇高知ルヘシ。臣ヲ以テ之ニ擬スル。恐クハ堪ル所ニ非シ。然トモ無職ノ地ニ居ル。固ヨリ臣カ素志ナリ。伏テ請フ早ク執奏ノ官ヲ置キ。萬機ヲシテ壅滯セシムル勿レト。天皇乃チ百官ニ宣詔シテ曰ク。去年詔ヲ下シテ。萬機ヲ太政大臣ニ關白セシム。而シテ大臣上表堅ク閑退ノ志ヲ執ル。朕庶事舊ニ依テ大臣ニ關白セシメント欲ス。而シテ左大辨橘廣相、草詔朕カ本意ヲ失ヒ。遂ニ大臣ヲシテ疑ヲ持セシム。自今萬機皆必ス先ツ太政大臣ニ諮稟セヨ。朕將ニ垂拱シテ成ヲ仰カントス。基經乃チ詔ヲ奉ス。寬平三年。正月。基經薨ス。此ヨリ後。醍醐帝ヲ歷テ。朱雀帝ニ至ル。四十年間。攝政關白ヲ置カス。天子政ヲ親ラス。然トモ實權ハ尙藤原氏ニ在リ。九年。六月。中納言兼右近衛大將藤原時平ヲ以テ大納言兼左近衛大將ト爲シ。中納言菅原道眞ヲ以テ權大納言兼右近衛大將ト爲ス。七月。天皇位ヲ皇太子ニ禪リ。藤原時平、菅原道眞ニ詔シテ。少主ヲ輔佐シ機務ヲ參決セシム。天皇又自ラ書ヲ著シ。古今ノ得失。臣士ノ賢否ヲ歷

舉シ。以テ新主ヲ誠シム。其略ニ曰ク賞罰ヲ明ニシ。愛憎ヲ用フル勿レ。喜怒ヲ慎ミ色ニ形ハス勿レ。婦言ヲ聽ク勿レ。小人ヲ近ツクル勿レ。治ヲ有職ニ詢ヒ。道ヲ六經ニ求メヨ。左大將藤原朝臣ハ功臣ノ後。少シト雖モ政事ヲ諳ン。初メ頗ル内行謹マサルヲ聞ク。屢、激勵ヲ加ヘ輔導ニ資クヘシ。右大將菅原朝臣ハ。當今ノ鴻儒。深ク政理ニ通シ。直言忌マス。朕儲貳ヲ立ルトキ。獨リ之ト議定ス。且ツ將ニ位ヲ讓ラントシテ未タ果サス。朝臣曰ク。事留ラハ變生セント。遂ニ朕カ意ヲシテ金石ノ如クナラシム。則チ唯リ朕ノ忠臣ノミナラス。乃チ新君ノ功臣ナリ。新君其レ之ヲ敬重セヨト。蓋シ天皇。道眞ヲ擧用シテ。藤原氏ノ權ヲ抑ヘント欲スルナリ。時ニ天下久シク無事。後世政理ヲ言ヘハ。必ス延喜天曆ヲ稱ス。然トモ寬平ノ治。反テ上世無爲ノ風アリ。

醍醐天皇。先帝ノ子。母ハ中納言藤原高藤ノ女ナリ。天皇即位時。年甫メテ十三。大納言兼左近衛大將藤原時平、權大納言兼右近衛大將菅原道眞、政事ヲ參決ス。八月。始テ紫宸殿ニ御シテ政ヲ聽ク。昌泰二年。時平ヲ以テ左大臣ト爲シ。道眞ヲ以テ右大臣ト爲ス。三年。正月。宇多法皇ニ觀シ。相議シテ曰ク。左右大臣竝ニ朝政ヲ執テ統一スル所無シト。乃チ右大臣道眞ヲ召シ。密ニ庶政ヲ關白セシメ。藤原基經ノ故事ノ如クセンコトヲ諭ス。道眞固辭シテ受ケス。延喜元年。正月。右大臣道眞ヲ貶シテ大宰權帥ト爲ス。初メ道眞已ニ殊遇ヲ受ケ君ヲ格シ治ヲ致スヲ以テ己カ任ト爲シ。知テ言ハサルコト無ク。政務ヲ綜理ス。左大臣時平、固執相下ラス。關白ノ密旨ヲ聞クニ及テ。益、憚ヒス。遂ニ群小ト共ニ道眞ヲ譴シ。其廢立ヲ圖ルヲ誣ユ。天皇怒テ之ヲ貶謫ス。法皇亦之ヲ救解スルコト能ハス。天下之ヲ冤トス。蓋シ道眞ノ黜ケラルルハ。特ニ當時ノ不幸ノミナラス。皇室千歲ノ不幸ナリ。貞觀以後。藤原氏權ヲ專ニシ。天子默シテ其制ヲ受ケ。朝廷ノ紀綱。陵遲シテ振ハサルモノ已ニ久シ。宇多帝之ヲ患ヒ。其權ヲ抑ヘント欲シ。道眞

皇室千歲ノ不幸

三善清行封事ヲ上ル

ヲ擢テ委スルニ大政ヲ以テス。道眞亦天下ヲ以テ己カ任トシ。忠ヲ輸シ誠ヲ竭シ。自ラ恤ルニ暇アラズ。天皇ヲシテ終ニ之ヲ疑ハサラシメハ。即チ藤原氏ノ權ヲ抑ヘテ。以テ近江奈良ノ盛ニ復スルコト。亦甚ク難カラス。唯其レ讒ヲ信シテ之ヲ謫ス。是ヲ以テ藤原氏ノ權益、熾ニシテ椒房一門ニ出テ。攝籙一氏ニ歸ス。此後村上帝ノ賢明ヲ以テ爲平親王ノ位ヲ定ムルコト能ハス。後三條帝ノ英邁ヲ以テ。教通ノ請ヲ奪フコト能ハス。一轉シテ保元トナリ。再轉シテ建久トナリ。三轉シテ承久ト爲リ。延元トナリ。大權長ク武人ノ竊攘スル所ト爲ル。其始メ天皇一聽斷ノ不明ニ出ルノミ。惜ムヘキ哉。十四年。群臣ニ詔シテ。直言ヲ求ム。式部大輔兼大學頭三善清行、意見封事ヲ上リ。便宜十二事ヲ陳ス。其一。請フ祭祀ヲ肅マン。其二。請フ奢侈ヲ禁セン。其三。請フ口分田ヲ修メン。其四。請フ學田ヲ復セン。其五。請フ前朝内ヲ好ムノ弊ヲ除カン。其六。請フ裁判ヲ慎マン。其七。請フ百官四季ノ祿ヲ均クセン。其八。請フ吏民ノ超訴ヲ停メン。其九。請フ勘籍人數ヲ定メン。其十。請フ檢非違使弩師ヲ選任セン。其十一。請フ僧徒及ヒ宿衛ノ濫暴ヲ禁セン。其十二。請フ西南三道ノ舟程ヲ便ニセント。凡ソ五千餘言。能ク時弊ニ切中スルヲ以テ。天皇之ヲ嘉納ス。延長八年。九月。天皇位ヲ皇太子ニ讓ル。左大臣藤原時平ニ詔シテ。幼主ヲ輔ケ政ヲ攝セシム。天皇、資性英敏。心ヲ政治ニ致シ。百姓ヲ哀矜ス。寒夜御衣ヲ脫シ以テ民間ノ凍餒ヲ省スルニ至ル。此時國家無事。民庶安堵ス。世以テ仁德帝ニ比ス。

朱雀院天皇。先帝ノ子ナリ。母ハ藤原基經ノ女ナリ。左大臣兼左近衛大將藤原忠平攝政ス。天慶二年。十一月。平將門反ス。平氏ハ桓武帝ヨリ出ツ。帝ノ夫人葛原親王ヲ生ム。其孫高望平朝臣ノ姓ヲ賜フ。高望ノ四子國香、良將、良兼、良文竝ニ東國ノ守介鎮守府將軍ニ任ス。將門ハ良將ノ子。性桀黠ナリ。攝政藤原忠平ニ倚テ檢非違使タルヲ求ム。

文德帝ヨリ後冷泉帝ニ至ル藤原氏權ヲ專ニス

忠平省セス。將門怒リ去テ東國ニ之キ。相馬ノ里ニ據リ。近國ヲ劫掠ス。時ニ其伯父國香常陸大椽タリ。將門ト隙アリ。承平中。將門遂ニ國香ヲ攻殺ス。國香ノ子。貞盛材武アリ。父ノ仇ヲ復セント欲シ。將門ヲ攻ム。利アラス。貞盛謂フ。是レ私闘ナリ。敕ヲ受ケテ之ヲ討スルニ如カスト。乃チ京師ニ入ル。已ニシテ將門下總、常陸、下野、上總、武藏、相模ヲ攻テ悉ク之ヲ下シ。僞宮ヲ下總ニ建テ。自ラ新皇ト稱ス。初メ將門、藤原純友ナル者ト共ニ叛ヲ謀ル。之ニ謂テ曰ク。他日志ヲ得ハ吾ハ皇族ニ出ツ。當ニ天子タルヘシ。公ハ藤原氏。能ク我カ關白タラン乎。是ニ至リ。純友伊豫ニ據テ盜ヲ爲シ。以テ遙ニ將門ニ應ス。三年。二月。貞盛將門ヲ討テ之ヲ誅ス。八州皆定マル。純友尋テ平ク。貞盛ノ功ヲ賞シテ從四位下ニ敍ス。鎮守府將軍ニ任シ。陸奥守ヲ兼ヌ。世呼ンテ平將軍ト曰フ。貞盛ノ子皆武幹アリ。世、源氏ト竝ニ武臣タリ。蓋シ皇朝上古制ヲ定メテヨリ。兵革ヲ動カス者邊寇ニ止マル。未タ臣民内ニ叛ク者アラス。其之レ有ルハ天慶ニ始レリ。是時藤原氏ノ勢倍盛ナリ。國儲ハ必ス其出ニ非レハ立テス。臺位ハ必ス其族ニ非レハ列セス。時平歿シテ其弟忠平政ヲ執リ。八歳ノ天子臨制ス。時ニ經理ノ政アリト雖モ。徒ラニ近ニ行ハレテ遠ニ周ネカラス。當時相家ノ務ムル所。概ネ目前ノ私ニ過キス。而シテ天下紀綱ノ廢壞スル。人才ノ壅滯スル。姦雄ノ窺伺スル。漫然トシテ省恤スルナシ。之ヲ如何ソ禍亂ヲ生セサランヤ。將門志ヲ一檢非違使ニ逞クスル能ハス。遂ニ天下未曾有ノ叛亂ヲ作ス。抑、亦原因スル所無カラサルナリ。天慶四年。十月。太政大臣忠平攝政ヲ罷ム。十一月。忠平ヲ以テ關白トナス。五年。三月。群臣ニ詔シテ時政ノ得失ヲ陳セシム。九年。天皇位ヲ皇太弟ニ讓ル。天皇政事寬仁ヲ尙フ。議者以テ寬ニ過ルト爲ス。天皇曰ク。政ハ琴ヲ張ルカ如シ。大絃急ナレハ則チ小絃絶エン。朕若シ嚴急ナラハ。下民何ソ堪ヘン。

臣民叛ク者邊寇ニ止ラス

天曆ノ治延喜ニ愧ツ

村上天皇。先帝ノ同母弟ナリ。關白太政大臣藤原忠平故ノ如シ。天曆三年。八月。關白太政大臣忠平薨ス。八年。七月。大内記菅原文時等ニ敕シテ關政ヲ言ハシム。文時封事ヲ上ル。其略ニ曰ク。方今授任正カラサルニ非ス。而シテ財ヲ以テ人ヲ官シ。國用ヲ助クル者アリ。乃チ功勞ノ臣自ラ退キ。聚斂ノ徒爭ヒ進ム。昔漢ノ明帝公主ノ其子ノ爲メニ郎ヲ求ムルヲ許サス。之ニ錢十萬ヲ賜ヘリ。官其人ニ非レハ。害百姓ニ及フヲ以テナリ。降テ桓靈ニ及テ。乃チ初メテ官ヲ賣リ。漢業以テ衰フ。是レ鑑ム可キナリ。又奢侈ヲ禁シ。外人ヲ懷ケント。天皇皆之ヲ嘉納ス。天皇寬裕溫恕ナリ。嘗テ侍臣ニ問テ曰ク。外議朕ヲ以テ如何ノ主ト爲ス。侍臣應テ曰ク。天下皆寬ト稱ス。天皇曰ク。上若シ嚴酷ナラハ。下何ソ命ニ堪ヘン。又嘗テ紫宸殿ニ御シ。一老吏ヲ見ル。問テ曰ク。當今ノ政延喜ニ孰與ソヤ。吏畏縮シテ言ハス。天皇頻リニ問テ措カス。吏曰ク。方今太平復タ議スヘキコト無シ。唯主殿寮多ク松明ヲ進メ、率分堂前草ヲ生ス。是レ前代ト少シク異ナルノミ。天皇之ヲ聞テ愧色アリ。是ヨリ益、意ヲ政治ニ留ム。康保四年。五月。天皇崩シ。皇太子立ツ。

冷泉院天皇。先帝ノ子。母ハ右大臣藤原師輔ノ女ナリ。康保四年。六月。右大臣藤原實賴ヲ以テ關白ト爲ス。九月。皇弟守平親王ヲ立テ皇太弟ト爲ス。安和二年。三月。初メ村上帝ノ中宮、天皇及ヒ爲平、守平ニ親王ヲ生ム。村上帝殊ニ爲平親王ヲ愛ス。親王左大臣源高明ノ女ヲ納レテ妃ト爲ス。村上帝天皇ノ心疾アルヲ以テ、爲平親王ヲ立テ儲貳ト爲ント欲ス。藤原氏ノ黨、其源氏ニ婚スルヲ以テ之ヲ沮ム。村上帝崩スルニ及テ。關白實賴遺詔ト稱シ。守平親王ヲ立ツ。是時天皇病癒エス。中外謂ラク。當ニ禪位アルヘシト。左馬助源滿仲、中務少輔橋繁延等密ニ爲平親王ヲ奉シ。關東ニ走テ亂ヲ作サント謀ル。已ニシテ滿仲悔ユ。高明、繁延等廢立ヲ謀ルト誣告ス。其事跡未タ明ナラサルヲ

文德帝ヨリ後冷泉帝ニ至ル藤原氏權ヲ專ニス

以テ。天皇之ヲ信セス。右大臣藤原師尹。急ニ兵ヲ遣シテ高明ノ第ヲ圍ミ。詔ヲ矯メ高明繁延等ヲ貶謫ス。京師騷擾。天慶ノ亂ノ如シ。八月。天皇位ヲ皇太弟ニ讓ル。

兄弟攝關
ヲ争フ

圓融院天皇。先帝ノ同母弟ナリ。安和二年。八月。太政大臣藤原實賴ニ詔シテ攝政セシム。天祿元年。五月。實賴薨ス。右大臣藤原伊尹ヲ以テ攝政トス。二年。十一月。伊尹ヲ以テ太政大臣ト爲ス。攝政故ノ如シ。三年。十月。伊尹病ヲ以テ攝政ヲ罷ム。權中納言藤原兼通ニ詔シテ庶務ヲ參決セシム。尋テ兼通ヲ内大臣ト爲シ。宣旨ヲ内覽セシム。兼通ハ伊尹ノ弟中納言右大將兼家ノ兄ナリ。兼家ノ己レニ超エテ顯達スルヲ以テ。常ニ觖望ス。意ラク關白ヲ望ムモ恐クハ兼家ニ妨ケラレント。村上帝ノ中宮ハ其妹ナリ。因テ請テ手書セシメテ曰ク。從來攝關關ルコトアラハ。宜ク兄弟ノ次第ヲ以テ相及ホスヘシト。伊尹病篤キニ及テ。兼通間ニ乘シテ其書ヲ進メント欲ス。天皇諸舅ニ於テ雅ヨリ兼通ヲ疏ス。其來リ前ムヲ見テ。起テ内ニ入ル。兼通隨テ言テ曰ク。臣奏スル所アリ。陛下復座セヨ。即チ其書ヲ奉ル。天皇母后ノ手跡ヲ視テ。愴然トシテ感容アリ。其遺命ニ違フヲ難カリ。遂ニ此命アリ。是ニ由テ兼家兼通ト隙アリ。天延二年。二月。兼通ヲ以テ太政大臣ト爲シ。次月關白ト爲ス。三年。八月。公卿以下ニ詔シテ封事ヲ上ラシム。近來變災荐リニ臻ルヲ以テナリ。貞元二年。四月。左大臣源兼明ヲ以テ親王トナス。時ニ關白兼通柄ヲ執テ專恣ナリ。從兄藤原賴忠ヲ以テ左大臣ト爲サント欲ス。兼明疾アリト誣奏シ。左大臣ヲ罷メ。策シテ親王トナシ。二品ヲ授ケ中務卿ニ任ス。陽ニ之ヲ尊フヲ示シ。實ハ之カ權ヲ奪フナリ。尋テ右大臣藤原賴忠ヲ以テ左大臣ト爲ス。十月。兼通病ム。是ヨリ先。兼家ノ女冷泉上皇ノ女御ト爲リ。皇子ヲ生ム。兼通悅ハス。誣告シテ曰ク。兼家院ノ皇子ヲ奉シテ非望ヲ僥倖ス。宜ク之ヲ擯クヘシト。天皇信セス。己ニシテ兼通疾劇シ。兼家曰ク。吾レ將ニ關白タラントスト。遽ニ

盜賊横行

入朝ス。兼通喝道ノ聲ヲ聞キ。以テ己カ病ヲ問フトナシ。席ヲ掃テ歎ツ。門ヲ過テ入ラス。乃チ大ニ怒リ。奮起疾ヲカメテ入朝ス。兼家望見シテ之ヲ避ク。兼通意色殊ニ惡シ。直ニ前テ奏シテ曰ク。臣今日最後ノ除目ヲ行ハン。左大臣賴忠當ニ臣ニ代テ關白タルヘシ。兼家反ヲ謀ル。當ニ見任ヲ解キ治部卿ニ左轉スヘシ。奏可ス。兼通公卿ヲ顧テ曰ク。誰レカ大將タラント欲スルヤ。中納言藤原濟時進テ曰ク。臣可ナランカ。兼通乃チ奏シテ兼家ニ代ラシム。便チ第二歸テ薨ス。兼通政ヲ專ニシ。第宅宮闕ニ擬ス。謗ル者アレハ。朝官貴戚ヲ避ケス。中ルニ危法ヲ以テス。時人語テ曰ク。寧ロ虎口ニ投スルモ。攝政ノ口ニ觸ルル勿レト。其横恣斯ノ如シ。天元元年。十月。賴忠ヲ以テ太政大臣ト爲ス。關白故ノ如シ。兼家ヲ以テ右大臣ト爲ス。五年。二月。檢非違使ノ懈怠スルヲ以テ、敕シテ其職ヲ修セシム。是ヨリ先。海賊大ニ起リ。調庸ノ路梗塞ス。是ニ至テ益熾ニ行旅ヲ劫掠ス。又京師盜多ク。火ヲ放チ人ヲ劫ス。三月。諸衛飭マス。出入猥濫ナルヲ以テ。使廳ヲシテ伺察セシム。永觀元年。二月。京畿私ニ弓箭兵杖ヲ帶フル者ヲ捕ヘテ之ヲ案ス。頻年盜賊横行スルヲ以テナリ。二年。五月。制ス。非職ニシテ兵ヲ帶フル者ハ罪杖ニ當ツト。八月。天皇位ヲ皇太子ニ讓ル。天皇ノ末年。紀綱大ニ紊レ。盜賊横行シ。火ヲ禁内ニ放チ。朝士宮ニ入テ盜ヲ爲ス。延喜天曆ノ政此ニ於テ衰フ。

華山院天皇。先帝ノ子。母ハ藤原伊尹ノ女ナリ。關白太政大臣藤原賴忠故ノ如シ。永觀二年。八月。先帝ノ皇子懷仁親王ヲ立テ皇子ト爲ス。權中納言藤原義懷、左中辨藤原惟成機務ヲ參決ス。義懷ハ故攝政伊尹ノ子ナリ。機敏ニシテ朝章ヲ諳ス。未タ臺司ニ昇ラスト雖モ。外舅ノ故ヲ以テ親任セラル。惟成亦方正ニシテ幹略アリ。義懷ト心ヲ協セテ。贊畫ス。天皇方ニ精ヲ勵マシ治ヲ圖リ。紀綱稍ク振ヒ。盜賊屏息ス。是ヨリ先。太宰府私ニ兵杖ヲ帶フル者多シ。天

文德帝ヨリ後冷泉帝ニ至ル藤原氏權ヲ專ニス

皇ノ即位ヲ聞キ皆解散ス。十二月。詔シテ直言ヲ求ム。曰ク。朕東闈ニ在ルコト十餘年。即位日淺シ。粗前事ヲ聞キ後治ヲ圖ラント欲ス。頃年水旱頻ニ降り。民土木ニ困ミ。浮食日ニ多ク。儉約ニ處ル者少シ。倉廩已ニ竭キ。田園自ラ荒ル。夫レ國ノ將ニ興ラントスルヤ。上下唇ヲ聚ム。其將ニ廢セントスルヤ。道路目ヲ側タツ。澆季ノ俗。疲極ノ民ト雖モ。身ヲ忘レテ力ヲ戮セハ。庶クハ扶濟スヘシ。人和シテ而シテ天和シ。民足テ而シテ君足ル。大臣祿ヲ重シテ諫メス。小臣罪ヲ畏レテ言ハス。下情上ニ通セサルハ。是レ患ノ大ナル者ナリ。宜ク公家以下内外百官五位以上及ヒ秀才明經及第セシ者。各封事ヲ上リ。朕力逮ハサルヲ匡ケヨ。凡ソ國ノ利害。政ノ得失。盡ク肝膽ヲ吐露シ。諱隱スルヲ得ル莫レト。已ニシテ寵姬藤原氏卒ス。天皇哀毀甚タシ。是ヨリ心ヲ佛法ニ專ニシ。深ク世縁ヲ厭フ。寛和二年。六月。藤原兼家其子道兼ヲシテ天皇ヲ誘テ宮ヲ出テ華山ノ佛寺ニ入ラシム。初メ兼家天皇ヲシテ早ク位ヲ讓ラシメ。已レ攝政タラント欲ス。時ニ道兼藏人左少辨タリ。兼家ノ計ヲ受ケ。天皇ニ位ヲ遜リ佛ニ歸センコトヲ勸ム。曰ク。臣亦奉從セン。天皇之ヲ許ス。是ニ至テ夜ニ乘シ人ヲシテ先ツ劍璽ヲ皇太子ニ奉セシメ。潛ニ天皇ヲ奉シテ宮ヲ出ツ。天皇猶豫ス。道兼急ニ促シテ曰ク。劍璽業ニ既ニ東宮ニ歸ス。事復タ止ム可ラス。遂ニ寺ニ入テ落飾ス。道兼即チ去テ復タ來ラス。天皇始メテ其賣ル所ト爲ルヲ悟ル。藤原義懷、藤原惟成之ヲ聞キ馳テ寺ニ至リ。相視テ聲ヲ失ス。輔翼ノ無狀ナルヲ愧チ。竝ニ薙髮シテ僧ト爲ル。是時ニ當リ。藤原氏ノ專橫極マレリ。其意謂ラク。子ハ皇后トナリ孫ハ天子トナリ。而シテ躬ハ外祖ト爲テ以テ威福ヲ專ニセント。世此意ヲ以テ相承ケ。天下ノ權柄全ク其手ニ在リ。天子手ヲ束ネテ聽從スルノミ。兼家道兼ニ至テ最モ甚シ。其罪天地ニ容レサル者アリ。惟其顯ニ大逆ヲ謀テ。神器ヲ窺望スルニ至ラサルモノハ。是レ建國以來大義確立シ。君臣ノ名分明カニシテ。溷亂ス可ラサルヲ以テナリ。

兼家天皇ヲ誘テ出家セシム

藤原氏ノ專橫極ル

一條院天皇。圓融帝ノ子。母ハ藤原兼家ノ女ナリ。寛和二年。六月。右大臣藤原兼家ヲ以テ攝政トス。永延元年。正月。申ネテ私ニ兵杖ヲ帶フルヲ禁ス。三月。新制十三條ヲ定ム。五月。又新制五條ヲ定ム。永祚元年。十二月。兼家ヲ以テ太政大臣ト爲ス。攝政故ノ如シ。正曆元年。五月。兼家罷ム。詔シテ關白ト爲ス。尋テ又之ヲ罷ム。内大臣藤原道隆ヲ攝政トス。四年。正月。道隆ヲ以テ關白ト爲ス。長徳元年。四月。道隆薨ス。右大臣藤原道兼ヲ以テ關白ト爲ス。五月。道兼薨ス。權大納言藤原道長ヲシテ太政官ノ文書ヲ内覽セシム。長保元年。十二月。新制十一條ヲ頒ツ寛弘八年。五月。天皇位ヲ皇太子ニ讓ル。天皇慈仁ヲ心ト爲シ。常ニ民庶ヲ憫ム。寒夜嘗テ御衣ヲ脱ク。上東門院異ミ之ヲ問フ。天皇曰ク。方今天寒シ。窮民堪ヘサル者有ン。朕豈獨リ重襲スルニ忍ンヤ。然トモ藤原道長ノ專橫ニ遭ヒ。政己ニ由ラス。意之ヲ惡ムト雖モ。力之ヲ制スルコト能ハス。兼明親王嘗テ菟裘ノ賦ヲ作ル。中ニ扶桑豈無影乎。浮雲掩而乍昏。叢蘭豈不芳乎。秋風吹而先敗ノ句アリ。天皇之ヲ見テ深ク感シ。自ラ其句ヲ書シテ巾箱ニ藏ム。天皇崩シテ後。道長臥内ニ入り。親テ之ヲ惡ミ。手ツカラ之ヲ裂クト云フ。是時ニ當テ。藤原氏天下ノ權ヲ握リ。專恣ヲ極ムト雖モ。徒ニ目前ノ威福ヲ努メ。政事ノ實權ニ至テハ殆ト萎靡ス。攝政兼家嘗テ新邸ヲ落シ。大ニ朝臣ヲ宴ス。東宮大進源賴光馬三十四匹ヲ贈テ之ヲ祝ス。東宮大進ハ職賤ク祿薄シ。而シテ馬匹ノ富此ノ如キモノハ何ソヤ。蓋シ此時源氏平氏ト武臣タリ。公卿大夫。恬熙ヲ以テ務ト爲シ。媮衣甘食。色ヲ漁シ歌ヲ鬪ハスノミ。賊ヲ捕ヘ盜ヲ討ツノ事ハ。擧ケテ之ヲ武臣ニ委ヌ、而シテ地方平馬ノ權。漸ク其手ニ歸ス。當時京畿諸寺ノ惡僧數千。屢朝憲ヲ犯シ。敕書ヲ破裂スルニ至ルモ。之ヲ問ハス。平維茂等私ニ東國ニ戰フモ。之ヲ省ミス。故ニ桀黠有力ノ徒。皆意ヲ得ルニ至ル。他日平治建久ノ勢。隱然トシテ已ニ此ニ胚胎セリ。

兵馬ノ權漸ク武臣ニ歸ス

文德帝ヨリ後冷泉帝ニ至ル藤原氏權ヲ專ニス

朝廷ノ綱紀日ニ頽敗ス

三條院天皇。冷泉帝ノ子。母ハ藤原兼家ノ女ナリ。寛弘八年。八月。左大臣藤原道長ニ詔シテ太政官ノ文書ヲ知ラシム。長和元年。四月。女御藤原成子ヲ立テ皇后ト爲ス。贈太政大臣濟時ノ女ナリ。是ヨリ先。道長ノ女立テ中宮タリ。時ニ道長専ラ朝政ヲ總ヘ。威福ヲ逞クシ。驕蹇殊ニ甚シ。朝臣上下夤緣攀附シテ唯及ハサランコトヲ恐ル。朝廷ノ綱紀日ニ益々頽退ス。是日廷臣佞媚ノ徒。其皇后職ニ補セラレシコトヲ恐レ。悉ク中宮ノ居ル所ニ往テ朝命ヲ逃ル。天皇使ヲ遣シ之ヲ召スモ。至ル者無シ。甚シキハ敕使ヲ罵辱シ。瓦礫ヲ以テ之ニ投スルニ至ル。天皇大ニ悲リ。之ヲ如何トモスルコト能ハス。大納言藤原實資適病アリ。之ヲ聞テ曰ク。天ニ二日ナク。地ニ兩主無シ。實資豈權臣ヲ恐レテ王事ヲ忽カセニ可シヤ。即時疾ヲ力メテ其徒數輩ト與ニ入朝シテ。嘉會ニ陪セリ。十月。左大臣藤原道長ニ敕シ。京官ノ除目ヲ直廬ニ行ハシム。儀攝政ニ准ス。時ニ天皇目疾ヲ患フ。道長屢位ヲ讓ランコトヲ勸ム。天皇之ヲ惡ム。已ニシテ不念ナリ。意ヲ決シテ位ヲ讓リ。敦明親王ヲシテ新帝ノ儲貳タラシメント欲ス。道長之ヲ沮メテ曰ク。諸皇子。儲君ニ堪ルモノ無シ。唯先帝ノ第三子可ナリ。天皇益々之ヲ憤リ。復タ位ヲ禪ルノ意無シ。即チ道長ニ詔シテ除目ヲ視セシム。因テ左右ニ謂テ曰ク。朕今除目ヲ道長ニ委ス。道長ノ爲ス所公ナラスンハ。自ラ冥譴ヲ取ランノミト。五年。正月。天皇遂ニ位ヲ皇太子ニ讓ル。

後一條院天皇。一條帝ノ子。母ハ藤原道長ノ女ナリ。長和五年。正月。左大臣藤原道長ヲ以テ攝政トス。寛仁元年。三月。攝政道長罷ム。内大臣頼通ヲ以テ攝政トス。八月。皇太子位ヲ辭ス。太子ハ上皇ノ子敦明親王ナリ。天皇踐祚ノ始メ。親王ヲ立テ皇太子ト爲ス。上皇ノ志ナリ。道長悅ハス。已ニシテ上皇崩ス。東宮ノ官屬厮役ニ至ルマテ。皆道長ヲ憚リ肯テ職ニ供セス。庭草蕪沒。門雀羅ヲ設クヘシ。太子堪ルコト能ハス。疾ニ託シテ位ヲ逃レント欲ス。道

道長皇太子ヲ憚シテ位ヲ辭セシム

長又人ヲシテ太子ヲ憚サシム。太子愈々懼レ。道長ノ子能信ニ依テ位ヲ辭ス。道長喜フ甚シ。急ニ奏シテ之ヲ許ス。從テ其宮屋ヲ撤毀ス。聞ク者歎歎セサル莫シ。三年。十二月。攝政頼通ヲ以テ關白ト爲ス。長元元年。五月。武官ニ非スシテ弓箭ヲ帶ヒ。街路ヲ往來スル者ヲ糾ス。六月。是ヨリ先上總介平忠常反ス。忠常ハ武臣ナリ。世々東國ニ居リ。族衆彊盛。勢ヲ恃テ暴橫ナリ。二總ノ地ニ盤踞シ。貢錢ヲ輸セス。徭役ニ供セス。是ニ至テ反シテ安房守某ヲ殺ス。詔シテ將ヲ遣シ。官符ヲ東海東山二道ニ降シテ之ヲ討ス。三年ニ至テ克タス。乃チ甲斐守源頼信ニ敕シテ坂東諸國ノ兵ヲ率キテ之ヲ討セシム。四年。四月。忠常ヲ降ス。頼信ヲ賞シテ從四位上ニ敘シ。上野常陸介ニ任ス。六年。二月。盜禁中ニ入ル。九年。四月。天皇薙髮シ。位ヲ皇太弟ニ讓リ。尋テ崩ス。天皇頗ル文藻アリ。又常ニ民ヲ勞スルヲ憚カル。葬ムルニ及テ役夫相語テ曰ク。二十年間我儕ヲシテ肩ヲ息ハシム。今豈力ヲ效ササランヤ。蓋シ天皇君德ノ美。此語ヲ以テ徵スヘシ。而シテ在位ノ間。政理未タ濶合スル能ハス。刑憲或ハ多ク廢弛シ。盜賊輦轂ニ劫掠シ。桀驁邊鄙ニ跳踉スルモノ。實ニ宰相輔弼ノ速ハサル所アルナリ。

後朱雀院天皇。先帝ノ同母弟ナリ。關白左大臣頼通故ノ如シ。長久元年。五月。京師盜賊アリ。弓箭ヲ帶テ往來シ。連夜火ヲ行フ。是月。盜又宮中ニ入テ御衣ヲ竊ム。當時綱紀ノ紊亂。以テ見ルヘシ。寛德二年。正月。天皇位ヲ皇太子ニ讓ル。天皇風度明秀。嚴峻ニシテ才アリ。然トモ關白頼通權ヲ專ニスルヲ以テ。垂拱成ヲ仰キ。施爲スル所無シ。世以テ憾ト爲ス。

奥羽亂ル 後冷泉院天皇。先帝ノ子。母ハ藤原道長ノ女ナリ。關白左大臣頼通故ノ如シ。永承六年。陸奥ノ俘囚安倍頼時亂ヲ作ス。國守秋田城介等共ニ之ヲ伐テ克タス。白河關以北盡ク叛附ス。朝議源頼義ヲ以テ陸奥守ト爲シ。其子義家等ト兵

文德帝ヨリ後冷泉帝ニ至ル藤原氏權ヲ專ニス

源氏霸業ノ基

ヲ率キテ赴キ伐タシム。賴義ハ源氏ノ領袖ナリ。源氏ハ清和帝ニ出ツ。帝ノ子桃園親王經基ヲ生ム。經基武幹アリ。源朝臣ノ姓ヲ賜フ。天慶中武藏守タリ。將門ノ反スルヤ。京ニ入テ之ヲ奏シ。軍ニ從テ將門ヲ伐チ。又純友ヲ伐ツ。終ニ從四位下ニ敍シ。鎮守將軍ニ任ス。子孫世武臣タリ。經基ノ子滿仲、其子賴光、賴信。長元中賴信平忠常ヲ伐テ功アリ。其子ハ即チ賴義ナリ。沈斷ニシテ武略アリ。相模守タリ。州ノ俗武ヲ好ム。賴義義家ト撫スルニ恩威ヲ以テス。豪族爭ヒ附キ。之カ用ヲナスヲ樂ム。是ニ於テ威風大ニ行ハル。源氏ノ霸業ヲ興ス。此ニ基ス。既ニシテ賴義陸奥ニ至ル。會、大赦アリ。賴時兵ヲ解テ降り。賴義ニ臣事ス。賴義遂ニ鎮守府將軍ヲ兼ヌ。任滿チ將ニ還ラントス。賴時復タ反ス。朝廷賴義ニ詔シテ之ヲ討タシム。賴時敗死シ。其ノ子貞任ノ軍猶ホ張ル。康平五年。賴義任復タ滿チ。新守代リ任ス。國民賴義ヲ慕ヒ。新守ニ服セス。新守已ムヲ得スシテ去ル。是ニ於テ賴義銳意虜ヲ滅サント欲シ。土豪ヲ諭スニ大義ヲ以テシ。歸順スル者頗ル多シ。九月。賴義大ニ貞任ヲ敗リ。遂ニ之ヲ斬ル。餘黨悉ク平ク。六年。二月。賴義貞任以下ノ首ヲ闕下ニ送獻ス。詔シテ賴義ヲ正四位下ニ敍シ。伊豫守ニ任シ。義家ヲ從五位下ニ敍シ。出羽守ニ任ス。七年。三月。賴義義家諸降虜ヲ以テ陸奥ヨリ入朝ス。奏シテ有功ノ將士ヲ賞センコトヲ請フ。廷議未タ許サス。故ヲ以テ任ニ赴カス。會、任國登ラス。私資ヲ以テ貢賦ヲ濟フ。此ノ如キコト二年ニ及フ。是時朝政ノ苟且以テ見ルヘシ。治曆三年。十二月。賴通關白ヲ罷ム。特ニ敕シテ政事ヲ諮詢ス。四年。四月。左大臣藤原教通ヲ以テ關白ト爲ス。此月。天皇崩ス。

以上清和帝ヨリ後冷泉帝ニ至ルマテ。二百十餘年間。政權相門ニ在リ。後三條帝立ツニ至テ。カメテ相權ヲ抑ヘ。天子親政ノ實アリ。而シテ在位久シカラス。白河帝位ヲ繼キ。能ク後三條帝ノ意ヲ承ケ。大政ヲ臣下ニ委ネス。以テ大權ヲ恢復シタリ。

大政紀要 上編

總記六

後三條帝及ヒ白河帝ノ親政

後三條院天皇。後朱雀帝ノ子。母ハ一條帝ノ女ナリ。天皇既ニ藤原氏ノ出ニ非ラス。勢孤弱ナリ。藤原氏復タ之ヲ憚忌セス。然トモ奮テ相門ノ權ヲ抑ヘ。萬機ヲ親ラセント欲ス。初メ尙方ニ壺切ノ劍アリ。例シテ東宮ニ傳フ。天皇ノ皇太弟タルヤ。關白賴通之ヲ進ムルヲ肯セスシテ曰ク。東宮タリト雖モ。藤原氏ノ出ニ非サルヨリハ。得可ラサルナリ。天皇之ヲ聞テ曰ク。吾何ソ此ノ劍ノミヲ用ヒン。是時ニ當テ。中外天皇ノ孤立援ナキヲ危フム。而シテ天皇自若トシテ動搖ノ色ナシ。是ヨリ先。藤原氏競フテ驕侈ヲ以テ相高フリ。憚ル所アル無シ。以爲ラク。我族ノ爲ス所。誰カ敢テ議ヲ容ント。天皇位ニ即クニ及テ。皆畏懼シテ自ラ戢ム。賴通又天皇ノ威嚴ヲ憚リ。宇治ニ屏居シテ政事ニ與カラス。教通關白タリト雖モ。員ニ備ハルノミ。是ニ於テ。大權復其古ニ復セリ。延久元年。二月。敕ス。寬德二年以後新置ノ莊園一切之ヲ罷メヨ。二年前ニ在リト雖モ。券契明ナラス。國務ニ妨アル者ハ。宜ク停止スヘシト。蓋シ當時貴權多ク莊園ヲ占メ。民害ヲ爲スコト大ナルヲ以テナリ。天皇亦躬親ヲ節儉ニ從ヒ。以テ天下ヲ率キテ勤儉ノ風

ヲ起サント欲ス。七月。諸國ノ御厨贄。後院ノ御贄ヲ停メ。始メテ御厨子所ヲシテ菜蔬ヲ進メシム。閏十月。始メテ記録所ヲ太政官朝所ニ置キ。訟訴ノ虚實ヲ檢覈ス。四年。八月。沽價法ヲ定ム。九月。斗升法ヲ定メ。長保ノ例ヲ用フ。初メ天皇量制ヲ審ニセント欲シ。藏人頭ヲシテ之ヲ督作セシメ。天皇自ラ簾竹ヲ抽テ。截テ量準ト爲ス。成ルニ及テ。殿庭ノ洲ヲ量テ之ヲ試ミ。穀倉院ノ米ヲ取テ之ヲ量ル。後世遵用シテ延久ノ宣旨升ト謂フ。又嘗テ方櫃ヲ造リ。石ヲ以テ鍾ト爲シ。輕重ヲ衡ル。此等ノ事。以テ天皇政ニ蒞ムノ密ナルヲ見ルヘシ。十二月。位ヲ皇太子ニ讓ル。天皇少ヨリ學ヲ好ミ。才能絶倫ナリ。儲位ニ在ル二十餘年。藤原氏ノ擅權ヲ見テ心甚タ不平ナリ。而シテ含忍發セス。位ニ即クニ及テ。痛ク其權ヲ抑ヘ。之カ政柄ヲ奪フ。關白教通嘗テ興福寺ノ南圓堂ヲ作り。大和守ヲシテ役ヲ督サシム。守ノ任滿ツ。教通其再任ヲ請フ。許サス。固ク請フ。天皇髯ヲ奮テ曰ク。攝關ノ憚カルヘキハ其國威タルヲ以テナリ。朕ノ如キハ何カ有ン。教通大ニ恚リ。衣ヲ拂テ起テ曰ク。藤原氏卿相タル者皆罷ヨ。春日ノ神威春日神ハ藤原氏ノ祖天兒屋命ヲ祭ル今日地ニ墜チタリ。諸藤原氏皆起ツ。朝廷爲メニ一空ナリ。天皇已ムヲ得ス。教通ヲ召還シテ。之ヲ許ス。後冷泉帝ノ末年ヨリ。風俗華侈。下吏ノ車ト雖モ。之ヲ飾ルニ金ヲ以テス。天皇其弊ヲ革メント欲ス。即位ノ初メ。石清水ニ幸ス。都人士女出テテ鹵簿ヲ觀ル。車ノ金飾スル者アレハ。天皇爲メニ變輿ヲ駐メ。命シテ盡ク剔リ去ラシム。後賀茂ニ幸スルニ。絶エテ金飾ノ車ナシ。又常ニ國用ヲ損センコトヲ慮リ。供御衣物。專ラ儉素ヲ尙フ。一條帝以來。政權相門ニ歸シ。朝憲稍弛フ。天皇牽制ヲ受ケス。精ヲ勵マシ、治ヲ圖リ。機務ヲ躬親ス。俗淳素ニ反リ。規模大ニ定ル。公道ニ是レ從ヒ。請託行ハレス。理苟モ合ハサレハ。太后ノ言フ所ト雖モ。猶肯テ從ハス。是ヨリ皇綱再ヒ張り群下肅然タリ。天皇位ヲ東宮ニ傳ヘ。院ニ居テ政ヲ決セント欲ス。未タ幾ナラスシテ崩ス。前關白賴通嘆シテ曰ク。

天皇ニシテ早世ス。邦家ノ不幸斯ヨリ甚シキ莫シト。大江匡房謂フ。教化世ニ被ムルコト。隆ヲ承和延喜ニ比ス可シト。知言ト謂フヘシ。

白河院天皇。先帝ノ子ナリ。關白藤原教通故ノ如シ。承保二年。九月。關白教通薨ス。十月。左大臣藤原師實ヲ以テ關白ト爲ス。天皇性嚴ニシテ溫雅。頗ル後三條帝ノ風アリ。信賞必罰。剛斷果決。政宸衷ニ出テ。相門手ヲ斂ム。是時ニ當テ。藤原氏苟且政ヲ爲スノ餘弊ヲ受ケ。庶政萎靡ス。先帝奮テ之ヲ鼎革セント欲ス。不幸ニシテ天年ヲ假サス。政事ノ改良スヘキ者。猶ホ十ノ五六ヲ遺セリ。天皇資性。先帝ニ肖タリト雖モ。器宇及ハサル所アリ。故ニ弊害ノ先帝ノ時ニ鎮壓セラレテ。天皇ノ朝ニ發現スルモノ尠カラス。其特ニ史上ニ著シキハ。兵備ノ緩急是ナリ。當時。朝廷ノ紀律漸ク亂レ。兵權皆源平二氏ニ歸セリ。而シテ源氏較平氏ノ右ニ出ツ。承曆ノ初。美濃ノ亂ルルヤ。前下野守源義家ニ詔シ。往テ之ヲ定メシム。亂人義家ノ聲ヲ聞ケハ輒チ遁ル。天皇嘗テ石清水ニ幸スル毎ニ。源義家、源義綱等ニ敕シ。乘輿ニ扈從シテ。惡僧ノ暴舉ニ備ヘシム。義家其職ニ非ルヲ以テ。關白ノ前驅ト爲リ。夜ニ及テ服ヲ更メ。弓矢ヲ執テ御輿ノ側ニ立ツ。蓋シ朝廷六衛アリ。檢非違使アリ。又彈正臺アリ。而シテ天子京城ノ中ニ行幸スルニ。其職ニ非ルノ武人ニ賴テ。纔ニ乘輿ヲ護衛ス。是レ兵權下ニ移リ。紀綱弛廢スルノ故ニ非スヤ。天皇又愛惡意ニ任セ。官ヲ授ケ職ニ任スル。率ネ舊典ニ遵ハス。篤ク佛法ヲ信シ。營造ヲ好ムヲ以テ。國用凋喪セリ。應德三年。十一月。天皇位ヲ皇太子ニ讓リ。太上天皇ト稱ス。後雜髮シテ法皇トイフ。天皇前數朝ノ間。攝關ノ大權ヲ私スルニ懲リ。先帝ノ遺意ヲ繼テ。其權ヲ抑ヘント欲ス。新帝立ツニ及テ。閑院ニ御シ。始メテ院ノ別當ヲ置キ。納言參議ヲ選テ之ニ充テ。又兵曹ヲ設ケ。北面ノ士ヲ置テ。院中ニ宿直セシメ。凡ソ事院宣ヲ以テ天下ニ號令ス。是ニ於テ。院宣ノ重キ

コト詔敕ニ超ユ。後堀河、子鳥羽、孫崇徳^曾孫^會ノ三帝ヲ立テ。政ヲ決スルコト四十六年ニシテ崩ス。蓋シ後三條帝ノ世ヨリ。相門ノ權漸ク王室ニ歸シ。延久承保ノ交。藤原氏益々微ナリ。院中政ヲ決スルニ至テ。大權乃チ遜位ノ君ニ歸ス。天子ハ虚器ヲ擁シ。攝關ハ員ニ備ハルノミ。而シテ兵馬ノ權ハ。業ニ已ニ源平二氏ニ屬セリ。

大政紀要

自第七卷
至第八卷

上編總記自七至八

第四册

大政紀要上編

總記七

堀河帝ヨリ安德帝ニ至ル院中政ヲ決ス

堀河院天皇。白河帝ノ子ナリ。白河上皇萬機ヲ聽決ス。關白藤原師實、攝政タリト雖モ、政事ノ實權ニ與カル少ナシ。寛治元年。十二月。陸奥守源義家上言ス。俘囚藤原武衡誅ニ伏スト。是ヨリ先。永保三年。義家陸奥守兼鎮守府將軍ニ任ス。陸奥ノ豪族清原武衡、家衡等兵ヲ擧テ亂ヲ作ス。義家征戰リアラス。對守久ヲ持ス。是ニ至テ。討テ之ヲ平ク。義家乃チ武衡家衡等ノ首ヲ獻セント欲シ。奏シテ官符ヲ下サンコトヲ請フ。廷議以テ私鬪ト爲シ許サス。此ヲ以テ其功ヲ賞セス。義家遂ニ首ヲ棄テテ京師ニ還ル。蓋シ義家既ニ鎮守府ニ將タリ。其部内ノ亂ヲ定ムルニ。先ツ奏シテ官符ヲ請ハスト雖モ。豈之ヲ目シテ私鬪ト爲ス可ンヤ。朝廷言ヲ藉テ賞ヲ吝ム。是ヨリ武臣心ヲ離シ。朝威益、輕シ。嘉承二年。七月。天皇崩ス。天皇臨御日久シク。深ク心ヲ政事ニ留ム。諸曹ノ奏スル所。夜必ス覆視シ。疑フ可キ者アレハ。再ヒ商議セシム。嘗テ左右ニ謂テ曰ク。普天ノ下皆王民ナリ。遠民何ソ疎ニ。近民何ソ親ナラン。一人ノ耳周ネク四海ノ事ヲ聞クコトヲ得ス。是レ大患ナリ。卿等聞クコトアラハ。告ケテ隱ス勿レト。然トモ天下ノ事。皆

堀河帝ヨリ安德帝ニ至ル院中政ヲ決ス

法皇ニ決スルヲ以テ。復タ乾綱ヲ攬ルニ由ナシ。在位ノ間。武臣屢亂ヲ作セトモ。之ヲ禁スルコト能ハス。朝威漸ク衰替セリ。

鳥羽院天皇。先帝ノ子ナリ。關白右大臣忠實ヲ以テ攝政トス。白河法皇。萬機ヲ聽決ス。十二月。是ヨリ先。對馬守源義親西ヲ剽掠ス。敕シテ之ヲ討シ。隱岐ニ流ス。義親流所ニ至ラス。出雲ニ留テ目代ヲ殺シ。官物ヲ掠ム。是ニ至テ。因幡守平正盛ヲ追討使ト爲シ。兵ヲ率キテ之ヲ討シム。月ヲ經テ義親誅ニ伏ス。正盛ハ貞盛四世ノ孫。武幹アリ。是ヨリ平氏漸ク兵權ヲ執ル。蓋シ當時源氏ノ勢強盛ナルヲ以テ。朝廷平氏ヲ用ヒテ之ヲ箝制セント欲スルナリ。永久元年。十二月。攝政忠實ヲ關白ト爲ス。二年。七月。延曆寺ニ宣シテ。僧徒ノ兵仗ヲ帶ルヲ禁ス。初メ一條帝ノ世ヨリ。興福、園城、延曆寺等ノ僧徒。濫行甚シク。屢衆兵ヲ擁シ。關ニ逼テ事ヲ訴ヘ。或ハ官使ヲ凌辱シ。民戸ヲ毀燒ス。而シテ檢非違使之ヲ禁スル能ハス。京師騷擾シ。乘輿戒嚴スルニ至ル。蓋シ惡僧濫行ノ事。醍醐帝ノ時。三善清行既ニ之ヲ痛論ス。則チ其來ルコト舊シ。頃日ニ至テ愈々甚シ。故ニ此禁アリ。然トモ僧徒遂ニ其令ヲ奉セス。是歲。京師盜起リ。公行劫掠シ。南海道ノ貢調ヲ剽竊シ。都鄙騷然タリ。三年。十二月。藤原璋子ヲ以テ女御ト爲ス。大納言公實ノ女ナリ。後ニ崇德帝ヲ生メリ。天皇其嘗テ白河法皇ニ養ハルルヲ以テ之ヲ猜ヒ。崇德帝ヲ子視セス。終ニ父子相惡シ。蓋シ保元ノ亂此ニ因レリ。元永二年。二月。天下飢餓シ民多ク死亡ス。京師盜起リ。人ヲ殺シ火ヲ行ツ。保安元年。十一月。法皇ノ意ヲ以テ關白忠實ノ内覽文書ヲ罷ム。初メ忠實事ヲ以テ法皇ノ意ニ忤フ。法皇怒テ之ヲ罷ム。二年。正月。藤原忠通ニ敕シテ内覽文書ヲラシム。三年。右大臣源雅實ヲ以テ太政大臣ト爲ス。藤原氏ノ權ヲ專ニセシヨリ。攝關及ヒ此官皆其族ニ非レハ任セス。源氏此官ニ任スル此ニ始レリ。四年。正月。天皇位ヲ

皇太子ニ讓ル。天皇在位ノ間。武臣豪橫ナリ。制禦スル能ハス。因テ屢制符ヲ下シ。諸州ノ武士源平二氏ニ屬スルヲ禁ス。然トモ勢業ニ既ニ成ルヲ以テ。之ヲ奈何トモスル能ハス。

崇德院天皇。先帝ノ子ナリ。關白左大臣忠通ヲ以テ攝政トス。白河法皇政ヲ院中ニ聽決ス。大治四年。三月。山陽、南海二道盜起ル。法皇備前守平忠盛ニ敕シテ之ヲ捕ヘシム。七月。白河法皇崩ス。是ヨリ鳥羽上皇院中ニ在テ萬機ヲ專理スルコト。一ニ白河法皇ニ倣ヘリ。長承元年。九月。新制十四條ヲ定ム。保延元年。四月。西國海賊頻ニ起リ。貢調多ク滯ルヲ以テ。平忠盛ニ敕シ之ヲ討セシム。七月。飢疫シ災異多ク。盜賊起ルヲ以テ。天皇諸儒ニ敕シテ政事ノ得失ヲ言ハシム。式部大輔藤原敦光七弊ヲ疏陳ス。曰ク祭祀ヲ疎スルナク。佛ヲ信セサルナク。農時ヲ奪フナク。賦歛ヲ重クスルナク。奢侈ヲ縱ニスルナク。學校ヲ廢スルナク。府庫ヲ虛クスルナシ。永治元年。三月。上皇薙髮シ法皇ト稱ス。法皇内寵多シ。最後ニ中納言藏原長實ノ女得子ヲ納ル。寵房ヲ專ラニス。美福門院ト稱ス。體仁親王ヲ生ム。生レテ三月。長承五年八月立テテ儲貳ト爲ス。美福門院其速カニ位ヲ得ンコトヲ欲ス。是年十二月。法皇天皇ニ諭シテ位ヲ禪ラシム。詔書案、皇太子ヲ改メテ皇太弟ト曰フ。天皇大ニ愕テ曰ク。何ソ遽ニ此ノ如キヤ。明日ヲ須テ審議セント。是日。百官已ニ儀ヲ備ヘ。詔書ノ出ルヲ待ツ。天皇書ヲ法皇ニ奉リ。中使往復數次。終ニ聽カス。昏ニ及テ劍璽ヲ傳フ。天皇時ニ年二十三。太弟生レテ三歲ナリ。

近衛院天皇。鳥羽帝ノ子ナリ。關白忠通ヲ以テ攝政トス。鳥羽法皇政ヲ院中ニ聽ク。久安二年。二月。中務大輔平清盛ヲ以テ安藝守ト爲ス。清盛ハ忠盛ノ子ナリ。初メ白河帝、祇園女御ヲ寵ス。既ニ娠シテ忠盛ニ賜フ。密ニ詔シテ曰ク。女ヲ生マハ朕ニ還セ。男ナラハ汝之ヲ子トセヨ。既ニシテ清盛ヲ生ム。故ヲ以テ清盛寵進甚タ速カナリ。六年。

九月。前太政大臣忠實、其長子攝政忠通ノ氏長者ヲ奪テ。二子左大臣賴長ニ授ク。初メ忠實最モ賴長ヲ愛シ。忠通ヲ惡ム。忠實、忠通ヲシテ内覽ヲ賴長ニ讓リ。而シテ他日。忠通ノ子ニ及ハシメント欲ス。忠通肯セス。忠實法皇ニ請テ之ヲ諭ス。忠通、賴長ノ凶險用フ可ラサルヲ白ス。忠實怒テ曰ク。攝政ハ朝廷ノ授クル所。氏長者ハ我ノ與フル所ナリト。乃チ兵ヲ遣シ忠通ノ第二入り。藤原氏傳家ノ重器ヲ奪ヒ。以テ賴長ニ授ク。又其邑ヲ奪テ之ヲ法皇ニ獻ス。尋テ忠通ヲ關白ト爲シ。賴長ヲシテ文書ヲ内覽セシム。是ニ於テ。賴長政ヲ專ニスルヲ得。忠通ハ位ニ備ハルノミ。是ヨリ兄弟相惡シ。保元ノ亂實ニ此ニ胚胎セリ。既ニシテ賴長驕傲日ニ甚タシ。法皇ノ近臣ヲ凌辱ス。法皇漸ク之ヲ疎シ。始メテ忠通ノ言ヲ信ス。久壽二年。七月。天皇崩ス。天皇子無シ。崇德上皇因テ位ニ復センコトヲ冀フ。然ラサレハ其長子重仁親王ヲ立テント欲ス。重仁長シテ賢ナリ。中外亦意ヲ屬ス。而シテ美福門院、法皇ニ雅仁親王ヲ立テシコトヲ勸ム。關白忠通モ亦之ヲ德薄ス。是ニ於テ遂ニ雅仁ヲ立テテ祚ニ登ス。是ヲ後白河天皇ト爲ス。時ニ四宮ト稱ス。微ニシテ聞フル無シ。朝野之ヲ聞テ愕然タリ。

後白河院天皇。崇德帝ノ弟ナリ。九月。皇子守仁親王ヲ立テテ皇太子ト爲ス。親王幼ニシテ恃ヲ失ヒ。美福門院ニ鞠ハル。故ニ門院、天皇ニ勸メテ之ヲ立テシム。保元元年。七月二日。鳥羽法皇崩ス。崇德上皇入臨。門ニ及フ。門者遺詔ヲ奉シ。拒テ納レズ。上皇大ニ悲テ還ル。是ヨリ先。左大臣賴長寵ヲ法皇ニ失ヒ。上皇ニ諛事ス。上皇嘗テ夜密ニ之ニ語テ曰ク。法皇宜ク立ツヘキノ重仁ヲ舍テ。匪文匪武ノ小子ヲ立ツ。今法皇已ニ昇遐ス。吾大事ヲ舉ケ。豎子ヲ廢シテ再ヒ踐祚セント欲ス。如何。賴長事成レハ己レ權ヲ專ニセンコトヲ意ヒ。カテ之ヲ贊成ス。上皇乃チ將士ヲ誘召ス。是ヨリ先。法皇豫メ源義朝、賴政等武臣十餘人ノ名ヲ署シ。美福門院ニ屬シ。緩急之ヲ召サシム。時ニ上皇

ノ謀頗ル泄ル。朝野涵々タリ。天皇將士ヲ召シテ。禁内ヲ衛護セシム。法皇崩スル後七日。上皇兵ヲ北殿ニ召シ。將ニ明日ヲ待テ皇居ヲ攻メントス。天皇、義朝、清盛已下ノ諸將ヲ遣シテ白河殿ヲ攻ム。上皇大敗將ニ東ニ奔ラントシ。勢窮テ薙髮ス。賴長走テ流矢ニ中リ死ス。遂ニ上皇ヲ讚岐ニ流ス。義朝ノ父爲義、亦上皇ニ應ス。敗レテ義朝ニ降ル。天皇、義朝ニ命シテ之ヲ誅セシム。此他諸ノ叛人。悉ク論死ス。其刑亦慘酷ヲ極ム。蓋シ嵯峨帝、藤原仲成ヲ誅スルノ後。今ニ至テ三百四十餘年。幾ト刑措ヲ致ス。今諒闇ニ際シテ。久ク廢スルノ死刑ヲ行ヒ。絶テ宥恤ノ典ナシ。是ヲ以テ時人目ヲ反シ。衆議以テ刑ニ淫スト爲ス。蓋シ保元ノ亂。我朝未タ嘗テ有ラサル所ナリ。天皇ト上皇トハ連枝ナリ。關白忠通ト左府賴長トハ兄弟ナリ。武將爲義ト義朝トハ父子ナリ。而シテ變亂ノ源。亦故院鳥羽ノ愛憎ニ出テ。受禪ノ不正ナルニ因由ス。願フニ我邦天憲ノ自ラ存スルモノ有テ。以テ君臣父子ノ綱常ヲ維持ス。今ヤ君臣相刻シ。父子相賊ス。倫理内ニ亂レテ。名分外ニ紊レ。而シテ禍害生ス。是ヨリ兵亂相踵キ。大權長ク將門ニ歸スルニ終フ。豈鑑ミテ且ツ戒シメサル可ンヤ。亂平クノ後。後三條帝ノ例ニ依テ記錄所ヲ設ケ。天皇政務ヲ親ラス。時ニ天皇乳母ノ夫少納言通憲ヲ寵任シ。其言ヲ用ヒ。五畿七道ニ敕シテ大内ヲ造ル。蓋シ白河帝ノ世ヨリ大内荒廢ス。是ニ於テ舊觀ニ復ス。三年。八月。天皇位ヲ皇太子ニ禪ル。此後政ヲ院中ニ聽クモノ三十餘年。其間叛臣傍ニ在テ之ヲ知ラス。亂逆相踵キ。武臣跋扈。綱紀壞亂シ。皇室日ニ衰フ。

二條院天皇。後白河帝ノ子ナリ。後白河法皇政ヲ院中ニ聽ク。此時ニ當テ。藤原信賴、上皇ニ寵セラレ。中納言ニ累遷シ。右衛門督ヲ兼ヌ。勢ヲ恃テ驕肆ナリ。大將タランコトヲ希望シ。數、上皇ニ請フ。上皇以テ少納言通憲ニ語ル。通憲之ヲ諫ム。信賴之ヲ啣ム。時ニ源義朝、平氏ノ功勞少クシテ勢已ノ上ニ在ルヲ嫉ミ。又事ニ因テ通憲ヲ恨ム。信

堀河帝ヨリ安德帝ニ至ル院中政ヲ決ス

頼因テ義朝ト結ヒ。密ニ通憲及ヒ平氏ヲ除カンコトヲ謀ル。平治元年。十二月九日。清盛ノ熊野ニ赴クヲ聞ヒ事ヲ舉ケ。上皇ヲ幽シ。天皇ヲ遷シ。通憲ヲ殺ス。信賴庶政ヲ決シ。自ラ大臣大將ト稱シ。黨與皆官ヲ授ク。清盛歸途變ヲ聞テ。六波羅ノ第二歸リ。兵ヲ遣シ潛ニ天皇ヲ迎ヘ其第二入ル。公卿多ク踵キ至ル。上皇亦潛ニ出テテ仁和寺ニ入ル。天皇乃チ平氏ニ敕シテ賊ヲ討ス。賊敗レ。信賴誅ニ伏ス。遂ニ其黨五十餘人ヲ囚フ。清盛及ヒ子弟皆官ヲ進ム。初メ信賴上皇ノ宮ヲ圍ムトキ。宮人多ク井ニ墜テ死ス。左大臣藤原伊周戲テ曰ク。人ヲ殺スコト多キ者賞ヲ得ハ。宮井當ニ先ツ官ヲ受クヘシト。時事見ルヘシ。義朝東走シ。其下ノ爲ニ殺サル。義朝ノ諸子亦皆平氏ノ捕殺スル所ト爲ル。獨リ第三子頼朝死ヲ減シテ伊豆ニ流サル。婢ノ子三人皆幼ナリ。亦免ルルヲ得タリ。時ニ藤原經宗、藤原惟方、天皇ニ親任セラレテ事ヲ用フ。毎ニ上旨ヲ以テ行ヒ。上皇ニ知ラシメス。又上皇ニ不敬ナリ。上皇恚リ。清盛ヲシテ之ヲ收メシメ。遂ニ流ス。時ニ永曆元年。三月ナリ。平清盛是ヨリ威福ヲ專ニスルヲ得タリ。八月。内大臣藤原伊通ヲ以テ太政大臣ト爲ス。伊通朝綱ノ廢弛ヲ憂ヒ。上疏シテ三事ヲ言フ。一ニ曰ク。人材ヲ用ル宜ク短ヲ捨テ長ヲ取ルヘシ。二ニ曰ク。宿衛宜ク材武ヲ選ヒ文具ニ備フ可ラス。三ニ曰ク。君臣學ヲ所皆時ヲ濟フヲ要ス。宜ク徒ニ詩賦ヲ事トス可ラス。三者皆時弊ニ切ナリ。然トモ氣運已ニ傾ク。遂ニ之ヲ援フ能ハス。永萬元年。六月。天皇位ヲ皇太子ニ禪リ尋テ崩ス。天皇政ヲ決スル毎ニ。上皇ニ咨稟セス。是ヲ以テ上皇ト協ハス。

六條院天皇。二條帝ノ子。即位ノ時甫メテ二歳ナリ。後白河上皇政ヲ院中ニ決ス。永萬元年。八月。先帝ヲ葬ル。興福延曆一寺葬ニ會シテ班ヲ爭ヒ。兵ヲ構フ。京師訛言ス。上皇僧徒ヲシテ平氏ヲ討タシムト。平氏兵ヲ聚メテ自ラ衛ル。上皇親ヲ往テ清盛ヲ諭ス。清盛疾ト稱シテ見エス。仁安元年。十月。上皇ノ意ヲ以テ皇叔父憲仁親王ヲ立テテ皇太子ト爲ス。上皇清盛ノ妻ノ妹ヲ納レテ之ヲ嬖ス。親王ハ即チ其出ナリ。二年。二月。清盛ヲ以テ從一位太政大臣ニ陞ス。三年。二月。天皇位ヲ皇太子ニ讓ル。是ヨリ清盛ノ驕駕跋扈至ラサル所ナシ。蓋シ清盛ノ爲ス所。皆藤原氏ノ爲ス所ニ倣ヘリ。然トモ其勢驟ニ此ニ至ル者ハ。其故無キニ非サルナリ。夫レ平氏白河鳥羽ノ世ナリ。已ニ寵任ヲ受ケ。門望源氏ノ上ニ出ツ。後白河帝無望ノ親王ヲ以テ忽チ天位ニ登ル。有望ノ武臣ニ倚リ以テ重ヲ爲ス。故ニ保元ノ變清盛ノ功勞。源義朝ニ及ハスシテ。賞ハ則チ之ニ過ク。遂ニ源氏ノ不平ヲ激シ。平治ノ亂ヲ成ス。是ヨリシテ平氏ノ威獨盛ナリ。二條帝立ツニ及テ。後白河上皇已レ其政ヲ聽クコト白河鳥羽ノ如クセント欲ス。然ルニ帝其親信ト謀テ。上皇ノ志ヲ逞クセシメス。上皇乃チ清盛ノ力ヲ借テ。帝ノ謀主ヲ除キ。因テ官爵ヲ超進シテ其勞ニ酬ユ。二條帝崩シ。天皇位ニ即クニ及テ。上皇又其愛スル所ヲ以テ儲貳ト爲ス。而シテ衆情之ヲ是トセス。即チ復清盛ノ力ヲ借テ大援ト爲ス。是ニ於テ。驟ニ其官爵ヲ進メテ太政大臣ニ超拜ス。是レ顯然舊時藤原氏ノ地ヲ以テ之ヲ與フルナリ。而シテ清盛ハ固ヨリ無學ノ武人。功ヲ負ヒ力ヲ恃ミ。忌憚スル所ナシ。意ラク我已ニ藤原氏ノ地ヲ得タリ。藤原氏ノ爲ヲ爲サランヤト。是ニ於テ。女ヲ納テ后ト爲シ。其生ム所ヲ立テテ天子トナシ。已レ外祖ヲ以テ政ヲ專ニシ。族類卿相ニ列シ。莊園天下ニ跨ル。而シテ天下ノ兵大半之ニ屬ス。是レ能ク藤原氏ノ爲ササル所ヲ爲スヲ得ル所以ナリ。然リ而シテ當時天下ノ武士。猶源氏ニ服屬スル者多シ。源氏則チ其舊怨ヲ復シ。且ツ彼ノ爲ス所我レ亦之ヲ爲サンコトヲ意フ。是ニ於テ。奮起シテ取テ之ニ代リ。終ニ關東ノ霸政ヲ致セリ。

高倉院天皇。嘉應元年。六月。後白河上皇雜髮シテ法皇ト稱ス。是ヨリ先平清盛髮ヲ削テ太政入道ト稱シ。驕奢ヲ極メ。權威ヲ專ニシ。朝廷ノ賞罰其喜怒ニ出ツ。法皇之ヲ惡ム。然トモ之ヲ制スル能ハス。二年。陸奥ノ夷酋藤原秀衡

ヲ以テ鎮守府將軍ト爲ス。藤原兼實嘆シテ曰ク。土酋ヲ以テ此職ニ任ス。朝廷ノ衰知ルヘシ。承安元年。清盛其女ヲ納テ女御ト爲シ。尋テ中宮ト爲ス。治承元年。正月。清盛ノ子大納言兼右大將重盛。左大將ニ遷リ。權中納言宗盛ノ弟右大將ヲ兼ス。尋テ重盛内大臣ニ遷ル。是ヨリ先。權大納言藤原成親大將ヲ望テ得ス。此ニ因テ平氏ヲ怨ミ。檢非違使平康賴、左衛門尉藤原師光、法勝寺執行俊寛等ト平氏ヲ滅サント謀リ。藏人源行綱ヲ引テ黨ト爲ス。法皇其議ニ與ル。四月。法皇事ニ託シテ兵ヲ徵ス。行綱事ノ成ラサルヲ惧レ。清盛ニ自首ス。清盛兵ヲ六波羅ノ第二聚メ。兵ヲ遣シ法皇ノ宮ニ至テ師光ヲ執ヘ。訊鞠シテ狀ヲ得タリ。遂ニ法皇ヲ取テ之ヲ幽セント欲ス。曰ク。輕躁ノ君ヲ以テ儼倅ノ臣ヲ御ス。何ノ底止スル所アラント。重盛君臣ノ大義ヲ陳ヘテ之ヲ諫止ス。清盛卒ニ成親、俊寛ヲ流シ。師光ヲ殺ス。二年。十一月。皇子言仁生ル。母ハ平氏ナリ。月ヲ越エ立テ皇太子ト爲ス。初メ中宮身アリ。清盛其男ヲ生マンコトヲ希ヒ。毎月嚴島ノ祠ニ禱ル。産ニ臨テ法皇其第二幸シ。爲ニ經ヲ誦ス。已ニ娩ス。清盛大ニ喜ヒ金ヲ獻シテ之ヲ謝ス。法皇之ヲ擲テ曰ク。驗者ヲ以テ朕ヲ視ルカ。三年。十一月。是ヨリ先。内大臣平重盛薨ス。重盛忠賢。常ニ王室ヲ輔ク。朝野之ニ倚ル。薨スルニ及テ清盛益、兇悖ナリ。清盛已ニ法皇ニ不平ナリ。是ニ至テ俄ニ兵ヲ率キテ京ニ入り。奏シテ關白基房ヲ罷メ。太政大臣師長以下法皇ニ親近スル者三十九人ノ官爵ヲ奪ヒ。基房ヲ貶シ。師長ヲ流シ。又宗盛ヲ遣シテ法皇ヲ鳥羽ノ離宮ニ幽ス。天皇ニ奏シテ曰ク。自今諸政陛下ノ意ノママニセヨ。四年。二月。天皇位ヲ皇太子ニ讓ル。清盛之ヲ諷スルナリ。天皇優學才藻ナリ。性仁孝ナリ。法皇ノ幽セラレシヨリ。悒憤疾ヲ成シ。遂ニ崩スルニ至ル。

安德天皇。先帝ノ子ナリ。此時平氏既ニ外戚ヲ以テ勢甚タ強シ。天皇院中ニ於テ復タ政事ニ關セス。關白藤原基通亦攝政ノ名アルノミ。政事ヲ決スルハ實ニ前太政大臣清盛ナリ。治承四年。四月。源賴政密ニ皇伯以仁王ヲ勸メ。平氏ヲ亡サント謀リ。令ヲ東國ニ下シテ。諸源氏ヲ發ス。所在ノ源氏皆響應ス。五月。事覺ル。清盛大ニ驚キ。兵ヲ遣シ之ヲ討ス。以仁王流矢ニ中テ薨シ賴政自殺ス。六月。清盛奏シテ都ヲ攝津福原ニ遷シ。法皇ヲ福原ニ幽ス。以仁王ノ事ニ因テナリ。八月。源賴朝以仁王ノ令ヲ奏シ。兵ヲ伊豆ニ起シテ平氏ヲ討ス。九月。源賴朝ノ從弟義仲モ亦兵ヲ信濃ニ擧ク。賴朝、上總、下總、武藏。相模ヲ徇ヘテ悉ク之ヲ下シ。鎌倉ニ據ル。是月。平氏ノ軍大ニ富士川ニ潰ユ。十一月。清盛天皇ヲ奉シテ復タ平安ニ都ス。養和元年。二月。筑紫伊豫ノ兵起テ賴朝ニ應ス。閏二月。前太政大臣平清盛薨ス。遺表シテ曰ク。凡ソ事皆宗盛ニ咨レト。又子弟ヲ遺戒シ。カテ賴朝ヲ伐タシム。六月。平氏敕旨ヲ請ヒ。鎮守府將軍藤原秀衡ニ令シテ賴朝ヲ攻メシム。秀衡令ヲ受ケス。壽永元年。九月。越後守城長茂兵ヲ發シテ義仲ヲ擊ツ。義仲襲テ之ヲ破ル。是ニ於テ。北陸道悉ク義仲ニ屬ス。二年。四月。平維盛等兵十萬ヲ將テ北義仲ヲ擊ツ。義仲大ニ之ヲ破リ。追擊シテ西上シ。七月。進テ叡山ニ軍ス。宗盛、天皇及ヒ法皇ヲ挾テ福原ニ奔ル。義仲進テ京師ニ入ル。法皇、源義仲ヲ以テ左馬頭兼越後守ト爲シ。敕シテ平氏ヲ討タシメ。平氏二百餘人ノ官爵ヲ削ル。是ニ於テ。平氏衰滅ニ瀕シ。源氏復タ盛ナリ。賴朝霸府ヲ鎌倉ニ開クニ至テ。乃チ平氏ノ兵力。藤原氏ノ政權トヲ併セテ一手ニ掌握シ。後鳥羽、土御門ヲ歷テ順德帝ニ至ルマテ凡ソ三十餘年間。天下ノ政事皆其欲スル所ノママナリ。然トモ皇室ハ。天祖以來一系ノ鴻緒ヲ繼キ。無上ノ神靈威德ヲ以テ其位ヲ保護シ。名分亂レズ。未タ嘗テ其尊嚴ヲ瀆サス。既ニシテ順德帝ノ朝ニ至テ。國家一大變ヲ生シ。形勢亦一大變ヲ成セリ。

大政紀要上編

總記八

後鳥羽帝ヨリ順德帝ニ至ルマテ鎌倉霸府政權ヲ分掌ス

後鳥羽院天皇。壽永二年。八月。安德帝、筑前ニ在リ。後白河法皇。敕ヲ下シテ遙ニ之ヲ廢シ。皇弟尊成親王ヲ立テテ踐祚セシム。天皇即チ之ナリ。是ヨリ先。法皇、旨ヲ平宗盛ニ諭シテ駕ヲ還サシム。宗盛詔ヲ奉セス。法皇、公卿ヲ會シテ之ヲ議ス。右大臣藤原兼實上言ス。京師、主無ク四方觀望ス。今平氏乘輿ヲ挾ムニ。吾之ヲ討ツハ無名ナリ。宜ク更ニ新主ヲ立テテ以テ臣民ノ心ヲ繫クヘシ。祖宗ノ制。劍璽無ケレハ位ニ即クコトヲ得ス。然トモ繼體天皇即位以前。踐祚ヲ稱シ。劍璽ヲ得ルニ及テ。乃チ即位ス。今宜ク此例ニ據ルヘシ。法皇之ニ從ヒ遂ニ天皇ヲ立ツ。十月。敕シテ源賴朝ヲ右兵衛佐ニ復シ。召シテ京師ニ宿衛セシム。賴朝、關東未タ平ナラサルヲ以テ辭シ。因テ二弟範賴、義經ヲシテ兵ヲ將テ貢賦ヲ護リ。京師ニ入ラシム。是ヨリ先。源義仲、賴朝ト協ハス。法皇又之ヲ疎ス。義仲、法皇ニ逼テ。賴朝ヲ討ツノ宣旨ヲ乞ヒ。範賴、義經ヲ蒐道勢多ニ拒キ敗死ス。元暦元年。二月。平氏還テ福原ニ據ル。賴朝、法皇ノ宣旨ヲ以テ範賴、義經ニ命シ兵ヲ移シ。攻テ之ヲ破ル。平氏屋島ニ遁ル。七月。天皇即位ノ禮ヲ行フ。是ヨ

神器ニ依
テ即位ヲ
定ム

後鳥羽帝ヨリ順德帝ニ至ルマテ鎌倉霸府政權ヲ分掌ス

安徳帝海
ニ崩ス

大權武門
ニ移ルノ
始

リ先。法皇平氏ニ諭シテ劍璽ヲ奉還セシム。平氏詔ヲ奉セス。敕使ヲ罵辱シテ之ヲ逐フ。法皇大ニ怒ル。或ハ曰ク。劍璽、賊所ニ在リ。吾、位ニ即カスンハ。賊重クシテ吾輕シ。早ク即位ノ禮ヲ行フニ如カス。法皇之ヲ然トス。内大臣兼實曰ク。劍璽ヲ傳ヘスシテ大位ニ即クハ古ヨリ未タ有ラサル所ナリ。當今ノ謀。神器ヲ復スルニ在リ。神器未タ復セスシテ。即位ノ禮ヲ行フハ。天下ニ神器ヲ輕スルヲ示シ。甚タ國體ヲ傷ツケ。且ツ後世ノ僭亂ヲ啓カン。願クハ之ヲ熟圖セヨ。法皇聽カス。遂ニ大禮ヲ行フ。八月。法皇、義經ヲ以テ左衛門尉ニ任シ。檢非違使ニ補シ。尋テ從五位下ニ敘シ。院昇殿ヲ聽ス。九月。賴朝奏請シ。範賴ヲ追討使ト爲シ。平氏ヲ討タシム。此時。凡ソ關東ノ家人。賴朝ノ奏ニ由ラスシテ衛府ノ官ヲ拜スル者ハ。盡ク其邑ヲ收テ東ニ還ルコトヲ許サス。文治元年。三月。源義經、範賴ト挾テ平氏ヲ長門壇浦ニ擊ツ。平氏破レ。先帝海ニ赴キ崩ス。平氏ノ宗族多ク之ニ死ス。是ニ於テ平氏滅フ。義經、寶劍ヲ索メテ獲ス。鏡璽ヲ獲テ京師ニ還ル。四月。鏡璽ヲ溫明殿ニ奉シ。神樂ヲ奏ス。是月。賴朝ニ從二位ヲ授ク。十一月。賴朝兵ヲ發シテ西上ス。是ヨリ先。義經。行家讒ニ因テ賴朝ニ惡シ。賴朝ノ西スルヲ聞クヤ。義經、行家逃走ス。諸國ニ敕シテ之ヲ追捕ス。賴朝乃チ途ヨリ還リ。部將北條時政ヲ遣シテ京師ヲ護衛セシメ。因テ奏シテ曰ク。亂人逃匿シテ。輒ク搜獲シ難シ。若シ兵ヲ發シテ。遍ク四方ニ索メハ。大ニ郡國ヲ擾シ。費ス所皆ラレス。請フ諸國ニ守護地頭ヲ置キ。臣之ヲ統領シ。所在ニ就テ擒獲セシメハ。勞セスシテ定マルヘシ。須ル所ノ兵糧ハ。五畿、山陰山陽、南海、西海、諸國常賦ノ外。每段ニ米五升ヲ課シ之ニ充テント、奏可ス。是ヨリ先。賴朝、幕府ヲ鎌倉ニ立テ、公文所ヲ置テ政事ヲ綜理シ。又問注所ヲ置テ獄訟ヲ聽決ス。是ニ於テ。朝廷ハ獨リ虛器ヲ擁シ。政權率ネ鎌倉ニ歸セリ。之ヲ大權武門ニ移ルノ始ト爲ス。十二月。賴朝、右大臣藤原兼實ヲ薦メテ章奏ヲ内覽セシメ。尋テ請フテ攝政ト

形勢ノ大
變

源賴朝征
夷大將軍
ニ拜ス

爲シ。又議奏十人ヲ定メ。内大臣實定等、已ニ善キ者ヲ以テ之ニ充テ。凡ソ奏請スル所ハ。是ニ由テ咨決ス。且ツ參議平親宗以下十餘人、義經ニ黨スル者ノ官爵ヲ削リ。之ヲ貶流ス。此時賴朝已ニ守護地頭ヲ以テ海内ヲ網羅シ。議奏十人ヲ以テ朝廷ヲ置萃セリ。賢良、兼實ノ如キモ之カ餌スル所ト爲リ。恬トシテ自ラ覺ラス。二年。三月。源賴朝奏シテ曰ク。兵興テ以來民農務ニ暇アラス。關東衰弊特ニ甚シ。臣カ領スル所ノ相模、武藏、伊豆、駿河、上總、下總、信濃、越後、豐後等。去年以往ノ逋租。皆已ニ蠲除セリ。請フ諸國皆之ニ准シ。以テ百姓ヲ安シ。自今民力ヲ量テ賦稅ヲ收メシメント。賴朝兵ヲ窮ムルコトヲ好マス。民ヲ恤ムニ意アリ、是レ其伯業ヲ成ス所以ナリ。三年。六月。賴朝其下ヲ遣シテ閑院ヲ修ス。八月。京師盜多シ。賴朝部將ヲ遣シテ京師ヲ鎮ス。此ニ至テ。朝廷院ヲ修メ盜ヲ捕フ。自ラ辨スルコト能ハス。必ス鎌倉ノ力ヲ藉ル。形勢ノ大變ト謂フヘシ。五年。七月。賴朝大ニ兵ヲ徵ス。奏シテ曰ク。陸奥押領使藤原泰衡。久シク亂人義顯義經ノ改名ヲ庇ス。請フ之ヲ討タント。朝議未タ之ヲ許サス。賴朝東下シ。奥羽二國ヲ擊テ。悉ク之ヲ平ク。九月ニ至リ。始メテ征討ノ敕アリ。賴朝乃チ將ヲ置テ陸奥ヲ安撫シ。鎌倉ニ還ル。建久元年。十一月。賴朝敕召ニ應シテ京師ニ入ル。騎從甚ク盛ナリ。先ツ法皇ニ觀エテ。後ニ入朝ス。權大納言兼右近衛大將ヲ授ク。法皇、數、賴朝ヲ見ルニ。待禮甚厚シ。十二月。上表シテ兩職ヲ辭シ。尋テ鎌倉ニ還ル。二年。正月。賴朝公文所ヲ改メテ政所ト曰フ。是ヨリ功臣ヲ賞シ。封邑ヲ頒ツ。皆政所ノ下文ヲ以テス。二月。賴朝敕旨ヲ以テ法修寺殿ヲ修シ。法皇ヲ奉ス。三年。三月。後白河法皇崩ス。法皇遜位ノ後。院ニ在ル三十餘年。二條、六條、高倉、安徳、後鳥羽五帝ヲ立ツ。皆幼冲相承ルヲ以テ。凡事皆院ニ決ス。其間喪亂止マス。天下多事ナリ。七月。敕使鎌倉ニ至リ。就テ賴朝ヲ征夷大將軍ニ拜ス。九年。正月。天皇位ヲ皇太子爲仁ニ讓ル。

後鳥羽帝ヨリ順徳帝ニ至ルマテ鎌倉幕府政權ヲ分掌ス

北條氏威福ヲ恣ニ

土御門院天皇。先帝ノ子ナリ。正治元年。正月。征夷大將軍源賴朝薨ス。賴朝形勝ノ地ニ據リ。八州ノ兵ヲ擁シ。父祖累世ノ威ニ藉リ。王室式微ノ會ニ乘シ。長策ヲ振テ以テ天下ヲ制ス。天下ノ豪傑。賴家ノ俊良。皆奔走シ之カ用ヲ爲ス。西平氏ヲ攘ヒ。東奥羽ヲ平ケ。輦下ヲ鎮撫シテ以テ伯業ヲ成ス。蓋シ其雄圖固ヨリ人ニ過ル者アリ。而シテ恩威亦以テ人ヲ服スルニ足レリ。但自ラ棟蓐ヲ翦リ。羽翼ヲ鍛テ。其後ヲ固クセント欲シ。而シテ老姦ノ側ニ覬覦スルヲ知ラス。不明ノ甚ト謂フヘシ。賴朝ノ父義朝。父ヲ弑シ弟ヲ殺シテ。禍其身ニ及ヒ。賴朝亦一族無辜二從父義廣行家三弟範賴義經三皆其殺シ盡ス所ナリヲ殺シテ。而シテ其二子。賴家實朝北條氏ノ殺ス所ト爲リ。遂ニ其祀ヲ絶チ。掌握スル所ノ政權亦其竊攘スル所ト爲リ。創業ノ勞亦徒爾ニ屬ス。自然ノ乘除。豈ニ偶然ナランヤ。敕シテ賴朝ノ長子賴家ヲ以テ左近衛權中將ト爲シ。諸國守護地頭ヲ總フルコト故ノ如シ。建仁二年。七月。賴家ヲ從二位ニ敘シ。征夷大將軍ト爲ス。三年。八月。賴家病アリ頗ル篤シ。執政北條時政。賴朝ノ妻政子時政ノ女ト謀リ。天下ノ地ヲ割キ。西三十八國ヲ賴家ノ弟千幡ニ與ヘ。東二十八國ヲ賴家ノ子一幡ニ傳ヘント欲ス。一幡ノ外祖比企能員之ヲ聞テ。一幡ノ母ヲシテ賴家ニ告ケシメテ曰ク。近日ノ議ノ如クナラハ威權分レテ爭鬪起リ。以テ天下ヲ安スル無ケン。早ク計ヲ定メテ北條氏ヲ滅サスンハ。一幡必ス立ツヲ得スト。賴家之ヲ然リトシ。能員ヲ召シテ與ニ謀ル。政子側カニ之ヲ聞キ。以テ時政ニ告ク。時政事ニ託シテ能員ヲ召シ。甲ヲ伏シテ之ヲ殺ス。遂ニ其子義時ヲシテ兵ヲ將テ攻テ比企氏ヲ滅サシメ。諸、能員ト善キ者皆之ヲ殺シ。又一幡ヲ殺ス。賴家病聞ナリ。之ヲ聞テ怒リ。和田義盛ヲシテ時政ヲ討タシム。義盛之ヲ時政ニ告ク。時政遂ニ賴家ニ迫テ薙髮セシメ。伊豆ニ幽ス。明年七月盜ヲ遣シ之ヲ殺ス千幡ヲ立テ命ヲ朝廷ニ請フ。九月。詔シテ千幡ニ名ヲ實朝ト賜ヒ。征夷大將軍ト爲ス。時二年十二ナリ。政子、時政ト専ラ政治ヲ決ス。是ヨリ北條氏、威福ヲ恣ニシ、

漸次賴朝ノ功臣骨鯁ノ者ヲ艾除シ。己レ陪臣ヲ以テ國命ヲ執ルニ及ヘリ。元久元年。六月。北條時政、畠山重忠ヲ殺ス。重忠ハ賴朝ノ功臣。忠直ニシテ材武アリ。蓋シ北條氏之ヲ忌ミ。事ニ託シテ之ヲ除ケリ。七月。北條時政、大將軍實朝ヲ廢シ。女婿源朝雅ヲ立テント謀リ。事覺ル。之ヲ伊豆ニ放ツ。時政ノ子義時ヲ以テ代テ執政セシム。是時ニ方テ實朝、孤立少弱。成ヲ政子ニ仰ク。政子尼ト爲テ軍國ノ事ヲ聞ク。世、尼將軍ト稱ス。義時沉勇ニシテ謀略父ニ過キ。政子ノ信任スル所ト爲ル。是ニ於テ。天下ノ權勢皆之ニ歸セリ。四年。十月。天皇位ヲ皇太弟守成ニ讓ル。順德院天皇。後鳥羽帝ノ子ナリ。建保元年。五月。信濃人泉親衡。故大將軍賴家ノ少子千壽ヲ奉シ。兵ヲ起シテ北條氏ヲ討ツ。北條義時兵ヲ遣シ擊テ之ヲ敗ル。千壽逃テ僧ト爲ル。後殺サル。部將和田義盛兵ヲ起シテ義時ヲ攻ム。克シテ死ス。是ニ於テ。賴朝ノ舊將威名アル者。率ネ遺ル所無シ。而シテ北條氏ノ專恣益々甚シ。承久元年。正月。是ヨリ先。實朝、右大臣兼右近衛大將ニ累遷ス。後鳥羽上皇。其貫盈自斃レンコトヲ幸フ。除拜毎ニ請フ所ニ從ヒ。兼テ車服ヲ賜フテ之ヲ寵異ス。大江廣元、實朝ニ謂テ曰ク。先將軍謙讓敢テ朝官ニ任セス。今幕下爵位連ニ進ム。武臣ノ宜キ所ニ非ス。我ハ征夷使ニシテ足レリ。當ニ悉ク他職ヲ辭スヘシ。實朝曰ク。吾思フニ源氏ノ祚已ニ極マル。余飽マテ崇高ヲ致シテ。以テ家聲ヲ著サント欲スルノミ。是月。二十七日。夜鶴岡祠ニ詣ス。廣元、晝日ヲ用ヒ。且ツ東甲シテ自ラ備ヘンコトヲ勸ム。聽カス北條義時劍ヲ捧ケテ從フ。祠門ニ及テ病作ルト稱シ。劍ヲ源仲章ニ授ケテ還ル。禮畢リ階ヲ下ル。賊アリ暗中ヨリ實朝及ヒ仲章ヲ斫殺ス。賊ハ賴家ノ子公曉ナリ。初メ賴家ノ難ニ及フヤ。公曉避ケテ京師ニ在リ。長スルニ及テ。義時、政子ノ命ヲ以テ迎ヘテ鶴岡別當ニ補ス。公曉、常ニ實朝義時ヲ殺シテ以テ父仇ヲ復サント欲シ。未タ間ヲ得ス。是ニ至テ其志ヲ遂ク。誤テ仲章ヲ以テ義時ト爲スナリ。公曉、三浦義村ト故ア

後鳥羽帝ヨリ順德帝ニ至ルマテ鎌倉幕府政權ヲ分掌ス

賴朝ノ正統絶ユ

リ。使ヲ遣シ義村ニ謂テ曰ク。吾當ニ代テ將軍ト爲ルヘシ。子爲メニ之ヲ計レ。義村急ニ義時ニ告ク。義時、政子ノ命ト稱シ。趣シテ之ヲ殺サシム。源氏賴朝ノ創業ヨリ是ニ至テ三世三十五年ニシテ絶ユ。是ヨリ以降。仲恭、後堀河、四條、後嵯峨、後深草、龜山、後宇多、伏見、後伏見、後二條、花園ヲ歷テ。後醍醐天皇ニ至ルマテ凡ソ百十四年間。鎌倉、將軍アリト雖トモ。北條氏陪臣ヲ以テ國命ヲ執レリ。此間又承久ノ變アリ。亦形勢ノ一大變ト謂フヘシ。

大政紀要

自第九卷
至第十一卷

上編總記自九至十一

第五册

大政紀要上編

總記九

順德帝承久元年ヨリ後醍醐帝元弘二年ニ至ル北條氏國命ヲ制ス

順德院天皇。承久元年。源實朝已ニ薨シテ子無シ。是ヨリ先。政子義時ト俱ニ京師ニ詣ル。後鳥羽上皇藤原賴實ノ妻ヲシテ待接セシム。政子與ニ語テ曰ク。實朝即チ子無クンハ。敢テ請フ一皇子ヲ降シテ。鎌倉ノ主トナサント。是ニ至テ。義時等連署シテ之ヲ請フ。上皇ニ主ヲ樹ルノ嫌アルヲ以テ許サス。攝政藤原道長源氏ト姻親アルヲ以テ。其子賴經ヲ請フ。七月。賴經鎌倉ニ至ル。年甫メテ二歳ナリ。北條義時執權タリ。蓋シ北條氏已ニ天下ノ政柄ヲ握レトモ。名位ノ犯ス可ラサルト。人心ノ與セサルトヲ度リ。仍チ皇子ヲ請テ之ヲ戴キ。以テ其主ト爲シテ。自ラ其權ヲ固メント欲ス。宜ナリ上皇ノ之ヲ許サルルヤ。而シテ皇子已ニ得可ラサレハ。即チ源氏葭葦ノ親ヲ取り。立テ將軍ト爲ス。亦必ス嬰孩ヲ以テスルハ。其制シ易キヲ欲スルナリ。中古藤原氏連リニ幼沖ノ天子ヲ立ツ。北條氏襁褓將軍アル。其故智ヲ襲フモノノ如シ。是時ニ當テ。後鳥羽上皇常ニ王室ノ陵替ヲ憤リ。鎌倉ヲ討スルノ志アリ。院ニ西面ノ士ヲ置キ。武事ヲ親ラシ。手ツカラ刀劍ヲ造ルニ至ル。實朝害ニ遭フニ及テ。謂ラク。大政復スヘシト。而シテ關東ノ權勢

順德帝承久元年ヨリ後醍醐帝元弘二年ニ至ル北條氏國命ヲ制ス

依然タルヲ以テ。意益、不平ナリ。嘗テ鎌倉ノ家人仁科盛遠ヲ召シ。其子ヲ并セ録シテ西面ト爲ス。義時怒テ其邑ヲ奪フ。朝旨之ヲ還サシム。義時救ヲ奉セス。會、三浦胤義。京師ニ宿衛タリ。事ヲ以テ義時ヲ憾ム。後鳥羽上皇親信ヲシテ就テ與ニ謀ラシム。胤義奮テ曰ク。天子逆臣ヲ誅セント欲ス。海内臣民誰カ敢テ從ハサラン。臣カ兄義村。力能ク義時ヲ誅セン。上皇大ニ喜フ。天皇幼ヨリ穎敏ナリ。上皇ノ志ヲ濟サント欲ス。因テ位ヲ皇太子ニ禪リ。以テ謀議ニ便ニス。時ニ三年四月ナリ。

承久ノ變

仲恭天皇。先帝ノ子ナリ。承久三年。五月。後鳥羽上皇策ヲ決シ。事ニ託シテ近畿ノ兵ヲ集メ。院宣ヲ天下ニ下シテ曰ク。關東天下ノ政ヲ亂ル久シ。今將軍猶幼ナルニ。義時言ヲ教命ニ假テ。逆威ヲ逞クシ。皇憲ヲ蔑ニシ。妄ニ朝野ヲ擅制ス。之ヲ典刑ニ考フルニ。謀反ト謂フ可シ。須ラク天下ニ下知シテ。義時ヲ征討スヘシト。又潛使ヲ發シ。誥ヲ齎ラシテ。三浦義村及ヒ關東ノ諸豪ニ諭シ。募ルニ厚賞ヲ以テス。義村之ヲ義時ニ告ク。義時晒テ曰ク。吾レ豫メ此事アルヲ知ルト。因テ大ニ諸將ヲ會シ。政子ヲ請フ。政子命ヲ傳ヘテ曰ク。汝等院宣ニ遵テ關東ヲ滅スカ。抑、先將軍ノ業ヲ全クシ。共ニ食邑ヲ保タンカ。諸將皆答テ曰ク。誰カ肯テ東向シテ弓ヲ彎ンヤト。諸將足柄箱根ヲ保タント請フ。大江廣元曰ク。事久ケレハ衆心ヲ生セン。直ニ西上シテ關ヲ犯スニ如カス。北條泰時曰ク。人臣何ソ天子ニ抗セン。宜ク身ヲ束ネテ以テ罪ヲ請ヒ。死生唯命ニ之レ從ハン。泰時ハ義時ノ子ナリ。義時默然タル久シテ曰ク。汝ノ言有道ノ君ニ於テハ則チ可ナリ。今君無道ニシテ人心我ニ歸ス。我安ソ天下ノ心ニ負カンヤ。讒ヲ誅シテ亂ヲ靖シ。昏ヲ廢シテ明ヲ立テ。皇基ヲ萬世ニ固クスルハ。是レ吾輩ノ忠ニ非スヤ。汝宜ク軍ヲ率キテ西上スヘシ。泰時仍チ發ス。東兵之ニ從フモノ十九萬人ナリ。泰時單騎途ヨリ還リ。問テ曰ク若シ乘輿親征ニ遇ハハ則チ之ヲ如何セン。義時

人臣何ソ天子ニ抗セン

陪臣天子ヲ放流ス

低頭少間。曰ク。若シ然ラハ胄ヲ免テ以テ命ヲ聽カンノミ。他ノ將士來リ抗セハ則チ進テ失フコト勿レ。泰時諾シ。鼓行シテ西ス。官軍兵少シ。之ヲ拒テ利アラス。六月。泰時京師ニ入ル。敕アリ曰ク。此舉皆謀臣ノ誤ル所ナリト。泰時首謀者ヲ求メ權中納言藤原光親等六人ヲ收テ。皆之ヲ斬ル。獨權大納言藤原忠信鎌倉ニ親アルヲ以テ。宥シテ之ヲ流ス。七月。泰時政子ノ命ヲ以テ天皇ヲ廢シテ。高倉帝ノ孫茂仁ヲ立ツ。是ヲ後堀河帝ト爲ス。後鳥羽上皇ヲ隱岐ニ。順德上皇ヲ佐渡ニ。雅仁親王ヲ但馬ニ。賴仁親王ヲ備前ニ遷シ。尋テ土御門上皇ヲ土佐ニ遷ス。當時ノ事。開關ヨリ以降。未タ嘗テ有ラサル所ナリ。平清盛ノ暴ヲ以テスト雖モ。鳥羽離宮ノ幽アルノミ。今陪臣ニシテ天子ヲ放流ス。所謂世道ノ大變ニ非スヤ。唯泰時ノ一二語言以テ名位ノ苟モ犯ス可ラサルヲ見ル。噫逆賊ノ言ニ徵シテ。以テ國體ノ尊ヲ知ル。抑、亦天地反覆ト謂フヘキナリ。已ニシテ事定リ。諸籍沒スル所三千餘邑。義時悉ク頒テ戰功ノ將士ニ與ヘ。自ラ取ル所無シ。而シテ北條氏ノ勢威滋熾ナリ。天皇在位七十餘日。世ニ半帝ト稱ス。明治二年仲恭ト追諡ス。後堀河院天皇。高倉ノ皇子。守貞親王ノ子ナリ。北條氏既ニ官軍ヲ破リ。六波羅ニ南北兩府ヲ建テ。諸所ニ籌卒ヲ置テ之ニ隸シ。泰時北條時房ト與ニ留テ上國ヲ鎮壓シ。宮城護衛ヲ以テ名ト爲ス。是ニ於テ四方屏息シ。敢テ心ヲ生スル莫ク。關西諸國ノ士。皆奔赴シテ命ヲ聽ク。元仁元年。六月。北條義時死ス。泰時代テ執權トナリ。北條時氏。時盛ヲシテ六波羅ノ兩府ヲ鎮セシム。時ニ事ヲ謀ルモノアリ。人心恟々タリ。二人曰ク。鎌倉虞カルヘシ。泰時曰ク。京師ノ虞カル可キニ如カスト。遂ニ之ヲ遣ス。嘉祿元年。七月。賴朝ノ寡妻政子死ス。是ニ於テ天下ノ事專ラ泰時ニ決ス。藤原賴經鎌倉ノ主タリト雖モ。亦泥塑ニ異ナラス。泰時銳意治ヲ求メ。評定引付ノ兩職ヲ置キ。政事ヲ諮詢ス。又地頭相侵攘シ、及京官ト抗スルヲ禁シ。鎌倉ノ將士衛府ノ官ヲ帶フル者ヲ戒メテ。宿衛ヲ謹マシム。貞永元年。泰

順德帝承久元年ヨリ後醍醐帝元弘二年ニ至ル北條氏國命ヲ制ス

泰時式目ヲ作ル

時式目五十條ヲ立ツ。十月天皇位ヲ皇太子ニ禪ル。

四條院天皇。先帝ノ子ナリ。仁治三年。正月。天皇崩ス。嗣無シ。前攝政道家將ニ順德帝ノ子忠成王ヲ立テントス。

泰時部下ノ將ヲ遣シテ。土御門帝ノ子邦仁王ヲ立テシム。是ヲ後嵯峨天皇ト爲ス

後嵯峨院天皇。仁治三年。六月。北條泰時卒ス。孫經時嗣テ執權タリ。寛仁二年。四月。北條經時奏請シテ。大將軍

經時將軍ヲ廢ス

賴經ヲ廢シ。其子賴嗣ヲ立テ職ヲ襲カシム。甫メテ六歳ナリ。四年。正月。天皇位ヲ皇太子ニ禪ル。

後深草院天皇。先帝ノ子ナリ。寛仁四年。閏四月。北條經時卒ス。弟時賴執權ト爲ル。時賴ノ從兄光時。前將軍賴經

ニ寵アリ。時賴ヲ除テ己レ之ニ代ラント欲ス。七月。兵ヲ擧ク。時賴之ヲ伊豆ニ流シ。賴經ヲ京師ニ還ス。寶治元年。

六月。北條時賴攻テ三浦泰村。光村等ヲ殺シ。三浦氏ヲ滅ス。建長四年。賴嗣又北條氏ヲ圖テ成ラス。二月。時賴、

時賴將軍ヲ廢ス

大將軍賴嗣ヲ廢シ。送テ京師ニ還シ。更ニ議シテ後嵯峨上皇ノ皇子宗尊親王ヲ鎌倉ノ主ト爲サント請フ。上皇大ニ悅

親王ヲ請フテ將軍トス

テ之ヲ許ス。四月。親王鎌倉ニ至ル。尋テ詔シテ征夷大將軍ト爲ス。時賴更ニ府第ヲ造リ。崇奉舊ニ超ユ。政子ノ志

ヲ成スナリ。蓋シ前ニハ後鳥羽上皇一主ヲ樹ツルヲ嫌ヒ。今ハ則チ大ニ悅フ。以テ皇室ノ益衰へ。鎌倉ノ愈熾ナル

ヲ知ルヘシ。康元元年。十一月。北條時賴疾ム。子時宗猶幼ナルヲ以テ。族、長時ヲシテ執權ヲ攝セシメ。而シテ大

事ハ己レ之ヲ決ス。時賴泰時ノ式目ヲ循守シ。カヲ政務ニ盡ス。嘗テ諸州ノ守護地頭等ノ私ヲ爲シ。上ヲ塞キ下ヲ毒

スルヲ憂ヒ。職ヲ去ルノ後。僧ト爲テ。密ニ親ラ諸國ヲ巡行ス。是ニ由テ。郡國ノ吏人相戒メテ修省シ。風化大ニ行

ハル。正元元年。十一月。天皇位ヲ皇太子ニ讓ル。

龜山院天皇。後深草帝ノ同母弟ナリ。文永元年。七月。北條政村。長時ニ代リ時宗ヲ輔テ政ヲ爲ス。三年。六月。將

時宗將軍ヲ廢ス

軍宗尊病ト稱シテ出テス。僧ヲ召テ入テ禱ラシメ藥ヲ徵サス。頗ル物議アリ。政村、時宗乃チ宗尊ヲ廢シテ京師ニ還

シ。其子惟康親王ヲ立ツ。七月。敕シテ惟康ヲ征夷大將軍ト爲ス。甫テ三歳ナリ。五年。三月。北條時宗執權タリ。

歲甫テ十八。時宗人ト爲リ強毅撓マス。時賴嘗テ曰ク。此兒必ス負荷ニ任ン。是時ニ當リ。支那ノ宋氏胡元ニ敗ラレ。

諸ノ隣國皆元ニ服ス。獨リ我邦使聘ヲ通セス。元主忽必烈韓人ヲシテ書ヲ我ニ致サシメテ曰ク。服セサレハ即チ兵ヲ

尋ヒン。朝廷之ヲ鎌倉ニ下シテ議セシム。時宗其書辭無禮ナルヲ以テ答ヘス。元主復タ使者ヲ遣シ來ル。時宗太宰府

ニ命シテ之ヲ逐フ。元使來ルモノ前後六反皆拒テ納レス。十一年。正月。天皇位ヲ皇太子ニ讓ル。

後宇多院天皇。龜山帝ノ子ナリ。文永十一年。十月。元兵一萬許。來テ對馬ヲ攻メ。轉シテ壹岐ニ至リ。遂ニ太宰府

ニ寇ス。府兵力戰シテ之ヲ防ク。虜軍破レ奔ル。然トモ。元主必ス初志ヲ遂ケント欲ス。建治元年。元ノ使者又至ル。

元使ヲ斬ル

時宗之ヲ斬リ。乃チ北條實政ヲ以テ鎮西探題ト爲シ。太宰府及ヒ縁海諸國ニ命シ。守備ヲ修ム。弘安二年。六月。元

ノ使復タ至ル。復タ之ヲ斬ル。元主之ヲ聞テ憤恚ス。是時。元既ニ宋ヲ滅ス。乃チ兵十餘萬人ヲ遣シ入寇ス。四年。

七月。水城ニ抵ル。實政擊テ大ニ之ヲ破ル。閏七月朔。大風。虜艦敗壞我兵奮擊ス。虜兵悉ク死シ。脱シ歸ル者纔ニ

三人ノミ。願フニ我邦上古ヨリ以還。時ニ外寇アリト雖モ。止ニ三韓ノ小醜ノミ。未タ元寇ノ患ヲ可キカ如キモノア

外寇ノ虞ナキハ時宗ノ力

ラス。而シテ一戰之ヲ鏖シ。彼ヲシテ復タ我邊ヲ窺ハサラシムル者ハ。時宗ノ力ナリ。七年。四月。北條時宗卒ス。

子貞時嗣テ執權タリ。八年。十一月。貞時讒ヲ以テ評定衆安達泰盛ヲ殺シ。其族ヲ亡ス。十年。十月。天皇位ヲ皇太

子ニ禪ル。

貞時將軍ヲ廢ス

伏見院天皇。後深草帝ノ子ナリ。正應二年。十月。北條貞時。將軍惟康北條氏ヲ滅スノ志アリト聞キ。之ヲ廢シテ京

順德帝承久元年ヨリ後醍醐帝元弘二年ニ至ル北條氏國命ヲ制ス

皇統二派
迭立

師ニ送還シ。後深草上皇ノ第三子久明親王ヲ請テ將軍ト爲ス。初メ後嵯峨上皇。龜山帝ヲ愛シ。後深草帝ニ強テ位ヲ讓ラシメ。龜山帝ノ後、世、皇統ヲ承クルコトヲ定ム。後嵯峨上皇崩シ。後宇多帝立ツニ及テ。龜山上皇。後深草上皇ヲ疎待ス。後深草上皇憤憂シ。授ヲ時宗ニ求ム。時宗乃チ奏シテ天皇ヲ立ツ。龜山上皇之ヲ恚ル。三年。三月。盜禁門ニ入ル。天皇之ヲ避ケ宿衛ヲシテ盜ヲ捕ヘシム。盜屠腹シテ死ス。或ハ曰フ。龜山上皇ノ使ムル所ナリト。龜山上皇懼レ。誓書ヲ貞時ニ賜ヒ。事寢ムコトヲ得。然トモ是後遂ニ皇統二派ノ弊ヲ致スモノハ實ニ此ニ原セリ。永仁六年。七月。天皇位ヲ皇太子ニ禪ル。

後伏見院天皇。先帝ノ子ナリ。正安三年。正月。位ヲ皇太子ニ讓ル。

攝政五家
ニ分ル

後二條院天皇。後宇多帝ノ子ナリ。初メ伏見帝人ヲシテ密ニ北條貞時ニ言ハシメテ曰ク。龜山上皇每ニ承久ノ事ニ切齒ス。如シ其後ヲ立テハ。卿カ家ノ利ニ非シ。貞時乃チ後伏見帝ヲ立ツ。後宇多上皇恚リ。貞時ヲ讓ムルニ後嵯峨上皇ノ旨ニ違フヲ以テス。貞時乃チ請テ後深草、龜山ノ兩宗。十年毎ニ更立スルノ議ヲ定メ。著シテ恒例ト爲ス。是ニ於テ天皇後伏見ノ從祖兄ヲ以テ其嗣ト爲リ。後伏見帝立テ僅ニ三年ニシテ受禪シ。伏見帝ノ皇子富仁ヲ以テ嗣ト爲ス。初メ頼朝、藤原氏近衛九條二家ヲ以テ互ニ攝政タラシム。其後九條分レテ一條二條ト爲リ。近衛分レテ鷹司ト爲リ、凡ソ五家更、攝政ス。是ヲ五攝家ト曰フ。亦北條氏ノ約スル所ナリ。蓋シ皇統ノ二派。攝政ノ五家。皆北條氏ノ定ムル所ニ由ル。其勢相爭テ合セサラシメ。而シテ北條氏、其間ニ於テ權ヲ持シ恩ヲ樹ツルヲ得。巧詐ノ極ト謂ヘシ。夫レ皇統ハ天祖ノ定ムル所ニシテ。攝關ハ朝廷ノ極官ナリ。今之ヲ陪臣ノ手ニ弄フ。何ソ其レ已甚シキヤ。即チ天下ノ亂レサラシコトヲ欲スト雖モ。得可ラサルナリ。德治三年。八月。北條貞時、大將軍久明親王ヲ廢シテ京師ニ還シ。其

貞時將軍
ヲ廢ス

子守邦ヲ立ツ。詔シテ守邦ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス。時ニ七歳ナリ。是月。天皇崩ス。皇太子立ツ。是ヲ花園帝ト爲ス。

花園院天皇。伏見帝ノ子ナリ。應長元年。十月。北條貞時卒ス。是ヨリ先。貞時、時頼ノ風ヲ慕ヒ。執權ヲ師時ニ讓リ。僧ト爲テ諸國ヲ巡行シ。吏民ヲ伺察スルコト三年。府ニ還テ枉ヲ押ヘ姦ヲ摘ス。治績頗ル著ル。其職ニ在ル二十年。四天子ヲ立テ。二將軍ヲ易フ。是年。師時亦卒ス。貞時ノ子高時猶少ナリ。族基時。貞顯連署シテ事ヲ行ヒ。高時ヲ夾輔ス。正和五年。高時執權タリ。時ニ年十四。文保二年。二月。天皇位ヲ皇太子尊治ニ讓ル。

後醍醐天皇。後宇多帝ノ第二子。花園帝ノ從祖兄ナリ。穎敏英毅。有爲ノ氣アリ。龜山上皇之ヲ愛シ。其位ヲ得シコトヲ欲ス。然トモ後二條帝ノ長ニシテ過ナキヲ以テ。次ヲ超テ立ツヲ得ス。花園帝ノ踐祚ニ及テ。後二條帝ノ皇子邦良ヲ以テ儲貳ト爲ント議ス。後宇多法皇曰ク。朕思フ所アリ。宜ク先ツ尊治ヲ立テ。次ニ邦良ニ及フヘシト。因テ立テ皇太子ト爲リ。遂ニ受禪ス。時ニ年三十一。皇侄邦良親王ヲ以テ皇太子ト爲ス。後宇多法皇院中ニ在テ政ヲ聽ク。蓋シ天皇ノ立ツヲ得ルハ。龜山ノ愛ニ始リ。後宇多ノ意ニ成ル。後宇多ノ思フ所果シテ何ソ。關東ヲ圖ルニ非スヤ。夫レ長者ヲ立ツルハ。關東ノ利ニ非ス。關東盡ソ之ヲ拒マサル。且ツ兩統更立ノ制ニ依レハ。天皇ノ儲嗣。宜ク後深草ノ統ヲ以テスヘシ。而ルニ龜山ノ統ヲ立テ。貞時ノ約ヲ渝フ。關東盡ソ之ヲ拒マサル。願フニ貞時已ニ卒シ。高時猶ホ少ニシテ。慮此ニ及ハサルナリ。此レ關東ノ釁隙ニシテ、王室興復ノ兆已ニ現ハル。天享元年敕シテ記録所ヲ復シ、天皇親ヲ訟ヲ聽ク。又大津葛葉ヲ除クノ外。諸ノ新關ヲ廢シ。以テ民ニ便ス。時ニ高時長シテ荒縱ナリ。政ヲ内管領長崎高資ニ委ス。高資貪テ私多ク。衆情日ニ離ル。二年。陸奥ノ人安藤堯勢亂ヲ作ス。高時兵ヲ遣テ之ヲ討ツ。

王室中興
ノ兆已ニ
現ハル

順德帝承久元年ヨリ後醍醐帝元弘二年ニ至ル北條氏國命ヲ制ス

北條氏ノ
政案ル

興亡ノ幾
既ニ判ル

克タス。承久以後。天下ノ武者一モ北條氏ニ叛ク者無シ。其叛ク者アルハ此ニ始マレリ。而シテ北條氏兵威ノ縉スル。亦此ヲ以テ始メト爲ス。天皇、北條氏ノ政稍、紊ルヲ見。益、自克シテ萬機ヲ精勵ス。是歲夏旱シ。穀價騰貴ス。天皇爲メニ膳ヲ減シ。都下ノ富戸ニ諭シテ發糶セシム。民大ニ悅フ。蓋シ鳥羽以後。幼主相繼キ。院政混淆シ。權武家ニ歸スルコト且ツ二百年ナリ。是ニ至テ。長君始テ立チ。院政亦止ム。關東荒樂シテ而シテ朝廷修省ス。天皇ノ心ヲ民政ニ勵マシ。高時ノ高資ヲ用フル。興亡ノ幾價定ノ徵是ニ於テ已ニ判ル。正中元年。六月。後宇多法皇崩ス。天皇遺旨ヲ奉シテ。益、關東ヲ圖ル。權中納言藤原資朝、藏人藤原俊基等參預計議シ。竊ニ諸國ノ武士ヲ徵ス。土岐賴兼、多治見國長徵ニ應シテ先ツ至ル。既ニシテ事漏ル。九月。六波羅鎮將賴兼、國長ヲ襲殺シ。資朝、俊基ヲ執テ鎌倉ニ送ル。天皇誓誥ヲ賜テ。高時ニ諭解ス。二年高時遂ニ資朝ヲ佐渡ニ放チ。俊基ヲ釋シテ京師ニ還ス。嘉曆元年。三月。皇太子薨ス。時ニ天皇ノ第三子護良英姿アリ。立テ儲嗣ト爲ント欲ス。後嵯峨ノ遺詔ニ依テ。旨ヲ高時ニ諭ス。高時可カス。兩統迭立ノ議ヲ執リ。遂ニ後伏見帝ノ子量仁親王ヲ立テ皇太子ト爲ス。護良親王乃チ僧ト爲テ。尊雲ト號シ、叡山座主ニ補シ。因テ僧徒ノ心ヲ結フ。三年。三月。敕シテ僧圓觀文觀等ヲ内ニ召シ。高時ヲ呪咀セシム。元弘元年。五月。天皇ノ謀復ヲ洩ル。六波羅ノ鎮將兵ヲ發シテ圓觀文觀等ヲ執ヘ。鎌倉ニ送り。七月。復タ藤原俊基ヲ執テ鎌倉ニ送ル。後伏見法皇亦密ニ使ヲ鎌倉ニ遣テ變ヲ告ク。高時驚キ。諸將ヲ會シテ議ス。長崎高資曰ク。當ニ天皇及ヒ大塔宮親王ヲ遷シ。公卿ノ黨スル者ハ悉ク之ヲ斬テ。而シテ新主ヲ立ツヘシ。二階堂貞藤曰ク。關東國命ヲ執ル此ニ百六十年。能ク四海ヲ服スル者ハ他無シ。上ニ忠ニ下ニ惠ナルヲ以テナリ。今廷臣及僧徒ヲ拘囚ス。此ヲ已甚シト爲ス。況ヤ敢テ至尊及座主ヲ遷サンヤ。古ニ曰ク。君、不君ナリト雖モ。臣以テ不臣ナル可ラスト。我能ク臣節ヲ效シテ渝

二階堂貞
藤ノ確言

塔宮親王
護良

神器ハ帝
王ノ守ル
可キ所ナ
リ

陪臣再
天子ヲ放
流ス

ラスンハ。則チ天威自ラ霽ンノミ。且ツ天下ノ人心苟モ我ヲ去ラスンハ。即チ廷臣異謀アリト雖モ。執力敢テ之ニ與セ
ン。高資色ヲ作シテ曰ク。孔孟ノ道安ソ今日ニ陳セン。承久ノ事法トス可シ。高時遂ニ高資ノ言ニ從フ。八月。高時
其將貞藤等ヲ遣シ。兵ヲ率テ京師ニ入ル。天皇笠置ニ幸ス。護良親王東兵ヲ幸崎ニ擊テ之ヲ走ラス。已ニシテ衆潰エ。
南都ニ奔ル。詔シテ四方勤王ノ士ヲ召ス。至ル者甚タ少シ。九月。貞藤、高時ノ命ヲ以テ皇太子量仁ヲ奉シテ帝ヲ京
師ニ稱ス。是ヲ光嚴廢帝ト爲ス。兵ヲ遣シ行在ヲ犯ス。行在陷ル。十月。天皇宇治ノ平等院ニ御ス。賊使ヲ遣シ奏シ
テ神器ヲ新主ニ傳ヘンコトヲ請フ。天皇許サス。曰ク。神器ハ自ラ帝王ノ守ルヘキ所ニ在リ。臣下ノ敢テ與奪ス可キ
ニ非ス。賊之ヲ六波羅ニ遷サント慾ス。天皇行幸ノ儀ヲ備ヘシメテ。而後ニ往ク。天皇ノ笠置ニ在ルヤ。河内人楠正
成ヲ召シ。委スルニ興復ヲ以テス。正成慷慨賊ヲ滅サンコトヲ誓ヒ。兵ヲ起シテ赤坂城ニ據ル。笠置陷ルニ及テ。賊
兵萃テ之ヲ攻テ克タス。已ニシテ正成糧盡キ退テ金剛山ニ入ル。是ヨリ先。備後ノ人櫻山茲俊、亦義兵ヲ起ス。行在
守ラサルヲ聞クニ及テ。衆潰エ自殺ス。二年光嚴帝三月。高時、天皇ヲ隱岐ニ遷ス。備前ノ人兒島高德車駕ヲ途ニ候
ヒ。天皇ヲ奉シテ賊ヲ討タント計リ成ラス。四月。車駕隱岐ニ至リ。國分寺ニ御ス。願フニ保元平治以還。天子上皇
親ラ事ヲ舉ケ。敗ルレハ則チ罪ヲ臣下ニ委シテ自ラ免レント欲ス。是ヲ以テ勤王敵愾ノ士。皆之カ用ヲ爲サス。今天
皇及親王親ラ矢石ヲ犯シ。備サニ艱苦ヲ嘗メ。志操確乎トシテ拔ケス。是ヲ以テ蒙塵ニ至ルモ天下ノ義心ヲ感發シ。
遂ニ一タヒ中興ノ業ヲ成セリ。且ツ夫レ神器ノ授受。以テ正統ノ所在ヲ見ル。天皇勢窮シ。賊之ニ迫ルコト急ナリト
雖モ。拒テ聽サス。故ニ新主北條氏ノ爲ニ立ツト雖モ。正統ニ非ルコト論亡シ。是亦能ク士心ヲ維テ乖カシメサル所
以ナリ。

順德帝承久元年ヨリ後醍醐帝元弘二年ニ至ル北條氏國命ヲ制ス

大政紀要上編

總記十

後醍醐帝ノ中興

後醍醐天皇。元弘二年。天皇隱岐ニ至ルノ月。楠正成金剛山ヲ出テ赤坂ヲ復シ。和泉河内ヲ徇フ。五月。賊兵來リ攻ム。正成逆ヘ擊テ大ニ之ヲ破リ。進テ天王寺ニ陣ス。護良親王亦兵ヲ吉野ニ起シ。赤松則村兵ヲ播磨ニ起シテ正成ニ應ス。三年。^{正慶}二月。賊大舉シ來リ攻ム。閏月。吉野陷リ。護良親王逃ル。正成固ク金剛山城ヲ守テ下ラス。是月。天皇伯耆ニ還幸ス。州人名和長年族ヲ舉テ之ヲ奉ス。乃チ詔ヲ諸國ニ下シテ。北條高時ヲ討クシム。是ニ於テ山陽、山陰。南海、西海ノ兵士竝起テ勤王ス。三月。左近衛中將源忠顯、兒島高德。赤松則村等兵ヲ率テ東上シテ六波羅ヲ攻ム。四月。高時、足利高氏、名越高家ヲ遣シ六波羅ヲ援フ。高家赤松則村ト戰テ敗死ス。是ヨリ先。高氏竊ニ款ヲ納ル。是ニ至テ歸順ス。五月。諸軍進テ六波羅ヲ攻テ之ヲ拔ク。鎮將北條仲時等。新主及兩上皇^{後伏見花園}ヲ挾テ東奔ス。近江ノ兵邀擊ス。仲時等皆誅ニ伏ス。官軍新主上皇ヲ收メテ京師ニ復ス。是ニ至テ。金剛山ノ圍始テ解ク。天皇乃チ行在ヲ發ス。是ヨリ先。上野人新田義貞、護良親王ノ令ヲ奉シテ義兵ヲ舉ケ。正成ニ應ス。是ニ於テ。攻テ鎌倉ヲ拔

四方勤王ノ師起ル

北條氏亡

覇術權詐
以テ國體
ト大義ト
ヲ改變ス
ルヲ得ス

キ。高時ヲ誅シ。捷ヲ奏ス。征夷大將軍守邦親王薙髮ス。蓋シ北條氏、源賴朝ノ緒業ヲ承ケ。陪臣ヲ以テ國命ヲ執ル
 コト九世百六十年。天子將軍皆其手ニ立テ。視ルコト猶弁髦ノ如シ。其宗族強盛。郡國ニ盤結シ。京師ニ守護アリ。
 西南ニ探題アリ。以テ天下ヲ羅網ス。而シテ天下敢テ其志ニ違フ無キ者ハ。泰時、時賴相繼テ恩信ヲ以テ人心ヲ固結
 スルニ由ル。時宗、貞時ニ至テ。亦其業ヲ墜サス。獨リ高時年少ヲ以テ盤樂怠傲シ。小人ヲ用ヒ私ヲ營ミ。始メテ天
 下ノ人心ヲ失フ。嗚呼祖先數世。儉勤ニシテ成ス者。一旦之ヲ忽諸ス。所謂覆墜ノ易キモ燎クカ如キモノナリ。然
 ト雖モ將門大權ヲ握ルハ固ヨリ國體ノ容ササル所。陪臣國命ヲ執ル。亦大義ノ許ササル所ナリ。故ニ賴朝ノ覇術。泰
 時ノ權詐。能ク一時ヲ籠絡スト雖モ。焉ノ能ク國體ヲ變シ君臣ノ大義ヲ易フルコトヲ得ンヤ。則チ天皇中興ノ業。亦
 偶然ニシテ成ルモノニ非ルナリ。六月。楠正成兵庫ニ迎謁シ。前驅シテ京師ニ入ル。車駕巡狩ノ儀ヲ用テ闕ニ還リ。
 新主ヲ廢シ。悉ク其署スル所ノ官爵ヲ削リ。詔シテ關白ヲ置クコトヲ罷メ。躬ラ庶務ヲ攬リ。護良親王ヲ拜シテ征夷
 大將軍ト爲ス。是ニ於テ王政中興ノ業成ル。七月。諸國ニ詔シテ士卒ヲ休メ農桑ヲ勸ム。八月。決斷所ヲ置キ。軍士
 ノ賞ヲ議シ。左兵衛督足利高氏ニ名ヲ尊氏ト賜フ。時ニ將士闕下ニ聚ル者數萬。功ヲ爭ヒ。紛拏シテ決セス。論賞明
 ナラス。内外牴牾シ。功アル者賞セラレス。地アル者之ヲ失フニ至ル。且ツ一新ノ後。武人頗ニ勢ヲ失ヒ。所在驅使
 セラル。是ニ於テ。天下囂然トシテ復々武門ノ治ヲ思ヘリ。十月。參議源顯家ヲ以テ陸奥守ト爲シ。上野介結城宗廣
 ト皇子義良ヲ奉シ。出テ奥羽ヲ鎮セシメ。顯家ノ父前大納言親房ヲシテ之ヲ輔ケシム。詔シテ曰ク。古ハ皇子皇孫及
 ヒ大臣ノ子。内朝政ヲ輔ケ。外戎旅ヲ總フ。方今海内一統ス。文武何ソ二揆ト爲ン。夫レ往テ爾ノ藩屏ヲ守レ。蓋シ
 此詔善ク古制ノ宜ヲ復スト謂フヘシ。夫レ山東ハ武ヲ用フルノ國ナリ。後來南風競ハス。官軍數、利ヲ失フニ至テ。顯

王政中興
ノ業成ル

記錄所ニ
親臨ス

家、宗廣毎ニ其闕ヲ補ヒ。其急ヲ救ヘリ。則チ南朝ヲシテ維持時ヲ延ヘシムル者ハ。實ニ之ニ由レリ。十二月。皇子
 成良親王ヲ以テ上野大守ト爲シ。出テ鎌倉ヲ鎮セシメ。尊氏ノ弟左馬頭直義ヲ相模守ト爲シ。之ヲ輔ケシム。建武元年。
 正月。大内ヲ營ミ。安藝周防ノ租賦ヲ以テ其費ニ充テ。又諸國地頭ノ所入二十分一ヲ徵ス。是月第六皇子恒良親王ヲ
 立テ皇太子ト爲ス。内侍廉子ノ出ナリ。廉子殊寵アリ。言聽カレサル無ク、内謁頗ル盛ナリ。而シテ護良親王ノ勳勞
 名望大ニ太子ニ過ルヲ忌ム。足利尊氏之ヲ知り。因テ深ク之ニ結フ。初メ車駕闕ニ還ルヤ。天皇意ヲ興隆ニ銳シ。孜々
 トシテ倦マス。關東廂番奥州評定衆ヲ置キ、其方ノ專ヲ掌治セシメ。決斷所ヲ置キ。卿相ヲ頭人ト爲シ。五畿七道
 ノ事ヲ分治セシメ。其大事ハ後三條帝ノ制ニ倣ヒ。記錄所ニ親臨シテ裁斷ス。卿相及太史。外記、判事。河内守楠正
 成、伯耆守名和長年等參預ス。又武者所ヲ置キ。新田氏ノ族ヲ頭人ト爲ス。是ニ於テ群下風聲ヲ希望シ。守成ノ業漸
 ク將ニ緒ニ就カントス。已ニシテ寢ク政ニ倦ミ。内ヲ好ミ色ヲ樂ミ。嬖臣請託ヲ受ケ。其姦ヲ市ル。尊氏之ヲ視テ外
 恭順ヲ示シ。内權威ヲ樹テ。以テ天下ノ心ヲ收ム。而シテ天皇之ヲ悟ラス。護良親王。尊氏ノ兇奸ナルヲ奏シ。之ヲ
 除カント請フ。許サス。益、之ヲ親近シ。正三位ニ敘シ。參議ニ拜ス。權中納言藤原藤房朝政ノ日ニ亂ルルヲ憂ヒ。事
 ニ因テ數、之ヲ諫ムレトモ聽カス。十月。藤房官ヲ棄テ去ル。是ニ至テ尊氏愈、事ヲ用ヒ遂ニ内侍廉子ニ緣テ護良親王
 ヲ讒シ。反ヲ謀ルト告ケ。之レヲ囚フ。十一月。護良ヲ鎌倉ニ流シ。足利直義ヲシテ之ヲ監セシム。是時。軍賞未タ
 行ハレス。先ツ元功ヲ錄シ。尊氏ヲ以テ第一ト爲シ。武藏常陸下總守護ト爲ス。直義、義貞、正成等皆賞アリ。赤松
 則村初メ播磨守護タリ。護良罪ヲ得ルニ及テ。之ヲ奪フ。則村因テ怨望シ。尊氏反スルニ及テ首トシテ之ニ與ス。其
 餘武人功有テ賞セラレサル者。皆款ヲ尊氏ニ通ス。蓋シ先王ノ制、官ヲ置クニ任限アリ。所謂守宰ノ治是ナリ。武家

尊氏霸業ヲ成スノ原

ニ及テハ則チ世其職ヲ襲キ。封殖自ラ厚クス。是ニ於テ。天下ノ勢一變シ。封建ノ形ヲ成ス。當時王政ノ復スルヤ。守護ノ武人己レニ便ナラサルヲ以テ。更ニ武門ノ治ヲ思ヒ。尊氏反スルニ及テ。争テ之ニ附クハ。亦已ムヲ得サルノ勢ナリ。況ヤ撫御其道ヲ失フモノアルニ於テヤ。十二月。上野太守成良親王ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス。二年。七月。北條高時ノ子、時行餘黨ヲ聚テ鎌倉ヲ攻ム。直義護良親王ヲ害シ。成良親王ヲ挾テ西走ス。八月。足利尊氏自ラ將トシテ。時行ヲ討クント請フ。之ヲ許ス。征夷將軍ニ任センコトヲ請フ。許サス。尊氏辭セスシテ發シ。途ニ直義ト合シ。時行ヲ擊テ之ヲ走ラシ。鎌倉ニ入ル。詔シテ尊氏ノ功ヲ賞シ。促シテ師ヲ班サシム。尊氏詔ヲ奉セス。府ヲ源賴朝ノ故趾ニ開キ。自ラ征夷將軍東國管領ト稱シ。遂ニ兵ヲ舉ケテ反シ。新田義貞ヲ誣奏シ。之ヲ誅スルヲ以テ名ト爲ス。十一月。詔シテ尊氏ノ官爵ヲ奪ヒ。中務卿尊良親王ヲ東國ノ管領ト爲シ。新田義貞等之ニ從ヒ。東海道ヨリ發シ。彈正尹忠房親王。權中納言藤原實世等ハ東山道ヨリシ。義良親王、鎮守府將軍源顯家ハ奥羽ノ兵ヲ發シ。竝ニ鎌倉ニ會シテ尊氏ヲ討タシム。尊氏兵ヲ遣シ要擊ス。義貞連戰之ヲ破リ。箱根ニ至ル。内叛スル者アリ。官軍敗績ス。是ニ於テ東西諸國多ク叛テ賊ニ應シ。賊勢益々振フ。十二月。義貞ヲ召シ還ス。尊氏追躡ス。延元元年。正月。京師守ヲ失シ。天皇遂ニ叡山ニ幸ス。賊行在ニ迫ル。時ニ源顯家義良親王ヲ奉シ陸奥ノ兵ヲ以テ入援シ。義貞正成等ト共ニ賊ヲ擊テ。大ニ之ヲ破ル。賊西走シ。筑前ヲ保ツ。二月。車駕宮ニ還ル。三月。義貞ニ詔シテ。山陽、山陰十六國ヲ管領シ。尊氏ヲ討タシム。四月。後伏見法皇崩ス。是ヨリ先。尊氏朝敵ノ名ヲ以テ事ヲ成ス可ラサルヲ料リ。竊ニ法皇ノ宣旨ヲ請ヒ。是ニ至テ大學シテ東上ス。五月。義貞之ヲ兵庫ニ拒テ。利アラス。河内守楠正成之ニ死ス。官軍敗レ還ル。天皇又叡山ニ幸ス。六月。尊氏京師ニ入り。兵ヲ遣シ行在ヲ犯ス。官軍ノ將士多ク之ニ死ス。七月。北國ノ兵入

朝敵ノ名ヲ以テ事ヲ成ス可ラス

北朝ノ始 援シ。賊ヲ討テ利アラス。八月。尊氏廢帝ノ弟豐仁親王ヲ立テ帝ヲ京師ニ稱ス。是ヲ光明帝ト爲ス。建武ノ年號ヲ用

フ。然トモ當時ノ縉紳。苟モ皇統ノ正僞及我邦君臣ノ大義ヲ知ル者ハ。皆新王ニ仕フルヲ恥チ。目スルニ僞主僞朝ヲ以テス。時人ノ言ニ曰ク。親王末タ一戰ノ功アラス。將軍之ニ帝位ヲ賜フト。而シテ武人利ニ徇フ者皆尊氏ニ應シ。官軍大ニ困ス。十月。是時ニ當テ。大權已ニ尊氏ニ歸ス。然トモ正統ノ天子猶叡山ニ在テ。尊氏之ニ敵ス。故ニ名義正カラス。國體ニ戻リ。政理ニ反シ。人心卒ニ尊氏ニ服セス。尊氏乃チ上書シ。甘言以テ降ヲ請ヒ。且ツ車駕ヲ京師ニ迎フ。天皇官軍孤弱ニシテ事ヲ濟シ難キヲ以テ。權ニ之ヲ許シ。新田義貞ヲシテ皇太子恒良及ヒ尊良親王ヲ奉シ。北國ヲ經略シテ再舉ヲ計ラシメ。車駕遂ニ京師ニ還ル。尊氏乃チ天皇ヲ幽シ。悉ク朝臣駕ニ從フ者ノ官爵ヲ奪ヒ。十一月。迫テ神器ヲ新主ニ傳ヘンコトヲ請フ。天皇授クルニ僞器ヲ以テス。是ニ於テ。天下忠義ノ士望ヲ墜シ。中興ノ業廢セリ。爾後天皇又南山ニ幸シ。再ヒ克復ヲ圖ルト雖モ。形勢崩裂シテ。復タ收拾スル能ハス。京師ニ閔位ノ君ヲ立テ。以テ擾亂相踵クニ至レリ。

大政紀要上編

總記十一

後醍醐帝ヨリ後龜山帝ニ至ル南北朝ヲ分ツ

後醍醐天皇。延元元年。十二月。天皇神器ヲ奉シテ潛ニ吉野ニ幸シ。行宮ヲ建テ此ニ居ル。楠正成ノ子正行其族ヲ率
キテ來リ衛ル。是ヨリ正統ノ天子吉野ニ在リ。而シテ尊氏閥位ノ君ヲ京師ニ立テ之ヲ戴キ。二帝相爭ニ誘シテ。而シ
テ已レ賊名ヲ免レント欲ス。是ヨリ吉野ヲ南朝ト稱シ。京師ヲ北朝ト稱ス。二年。北朝光明帝
建武四年正月。新田義貞皇太子ヲ
奉シテ越前金崎城ニ在リ。賊兵急ニ之ヲ攻ム。三月。城陷リ。尊良親王自殺ス。義貞ノ子義顯以下忠義ノ士多ク之ニ
殉ス。皇太子賊ノ爲ニ獲ラレ。尋テ尊氏ノ爲メニ酖弑セラル。八月。天皇吉野ニ在ルヲ聞キ。四方ノ官軍復タ起ル。
菊池武重筑紫ヲ徇ヘ大館氏明及ヒ土居得能ニ氏四國ヲ略シ。江田行義金谷經氏丹波ニ據リ。宇都宮公綱兵ヲ率キテ吉
野ニ詣リ。北條時行亦歸順シテ賊ヲ討ス。而シテ義貞其弟義助ト越前ニ再舉シ。其次子義興兵ヲ上野ニ起シ。鎮守府
將軍源顯家及ヒ結城宗廣等義良親王ヲ奉シテ入援シ。轉戰賊ヲ破リ。鎌倉ヲ復シテ直ニ西上ス。已ニシテ官軍屢、利ア
ラス。三年。北朝曆
應元年五月。顯義安陪野ニ戰死シ。閏七月。左近衛中將新田義貞越前ニ戰死ス。是ニ於テ。官軍振ハ

後醍醐帝ヨリ後龜山帝ニ至ル南北朝ヲ分ツ

ス。前上野介結城宗廣奏請ス。陸奥ノ地海内ノ半ニ敵ス。三年ノ間。兩次入授スル皆其力ニ資レリ。宜ク其民心未タ變セサルニ及テ。撫シテ朝廷ノ用ト爲スヘシ。朝議之ヲ然トシ。源顯信ヲ鎮守府將軍ト爲シ。源親房結城宗廣ト共ニ義良親王ヲ奉シ。海路陸奥ニ赴カシム。九月。海中颶風ニ遇ヒ。船四散ス。親房ハ常陸ニ至リ。義旅ヲ糾合シ。宗廣ハ安濃津ニ抵リ。病ニ嬰リ憂憤シテ卒ス。親王ハ顯信ト與ニ篠島ニ至リ。四年。北朝曆三月。吉野ニ還ル。八月。天皇不豫ナリ。位ヲ義良親王ニ禪リ、遺詔シテ曰ク。朕深ク逆徒ヲ誅シテ四海ヲ定メサルヲ恨トス。群臣嗣君ヲ輔ケ、務テ恢復ヲ謀リ。以テ朕カ志ヲ成セヨ。朕骨ヲ南山ニ埋ムト雖モ。神ハ常ニ北關ニ臨ム。汝臣子朕カ命ヲ墜サハ。是レ子ニ非ス。臣ニ非スト。劍ヲ按シテ崩ス。

後村上院天皇。先帝ノ第八子ナリ。延元四年。十月。天皇吉野ノ行宮ニ即位ス。權大納言藤原實世、權中納言藤原隆資政ヲ輔ク。遺詔ヲ天下ニ宣ス。是ニ於テ。諸國忠義ノ士各州縣ニ據テ恢復ヲ圖ル。新田義貞ノ戰死スルヤ。義助越前ノ府城ニ還リ。義故ヲ糾合シテ。賊ト戰ヒ。一ヒハ勝チ。一ヒハ敗レ。遂ニ走テ吉野ニ詣ル。興國元年。北朝曆三月。義助ヲ以テ刑部卿ト爲ス。會、伊豫ノ義徒將帥ヲ請フ。乃チ義助ヲ遣ハシ。西國ノ軍事ヲ總督セシム。四國ノ官軍爲ニ振フ。已ニシテ義助病テ卒シ。西南ノ官軍皆解ク。此時准大臣源親房、常陸ノ小田城ヲ保ツ。三年。北朝康六月。賊將高帥冬之ヲ攻ム。親房擊テ之ヲ卻ク。十一月。部將叛テ賊ニ降ル。親房走テ關城ヲ保ツ。四年。北朝康六月。關城ノ書攻ムルコト急ナリ。親房援ヲ結城親朝ニ求ム。親朝款ヲ賊ニ通シ。肯テ兵ヲ出サス。親房書ヲ貽リ讓ルニ大義ヲ以テス。其略ニ曰ク。方今東國官軍ノ爲メニ守ル者數城ノミ。而シテ關城久シク圍アル。足下ノ來援ヲ得ハ。則チ伊達以西必ス響應スル者有ラン。夫レ我邦ハ神聖統ヲ承ケ。苟モ叛逆ヲ謀ル者。能ク首領ヲ保ツ莫シ。尊氏何者ゾ。中原ニ

關城ノ書

盜據シ。家奴ヲシテ世家ヲ凌轢セシム。罪前日ノ高時ニ浮ク。方今中興。朝爵故ニ復シ。志士忠ヲ盡スノ秋ナリ。足下ノ父宗廣、勳閥ノ世家ヲ以テ。王政ノ恢復ヲ圖リ。大ニ家聲ヲ振ヒ。乃弟又節ニ死シテ名ヲ著ハセリ。足下宜ク前志ヲ繼キ。後昆ニ輝カスヘシ。坐シテ成敗ヲ觀ハ。祖考ヲ如何センヤ。僕敢テ餘命ヲ愛ムニアラス。唯天下ノ爲ニ言フノミト。親朝聽カス。尋テ賊ニ降ル。親房及ヒ鎮守府將軍源顯信守ヲ棄テ走テ行宮ニ歸ル。是ニ於テ東北ノ官軍悉ク燬ス。正平二年。北朝貞和三年。楠正行弟正時正儀從弟和田正朝等ト金剛山ニ據リ。兵ヲ出シ地ヲ略シ。屢、賊軍ヲ破ル。三年。北朝貞和四年。大ニ賊ト戰ヒ。正行正時之ニ死ス。是ニ於テ賊遂ニ行宮ヲ犯ス。天皇穴生ニ幸ス。楠正儀賊ヲ石河ニ拒ク。

尊氏專橫

十月。北朝ノ光明帝位ヲ從子興仁ニ禪ル。是ヲ崇光帝ト爲ス。是ヨリ先。北朝、尊氏ヲ以テ征夷大將軍ト爲シ。弟直義ヲ以テ副將軍ト爲ス。稱シテ兩御所ト曰フ。初メ尊氏叛逆ノ人心ヲ厭カシムル能ハサルヲ以テ北朝ノ主光明帝ヲ擁立シテ。陽ニ之ヲ尊ヒ。每事奏聞ス。官軍諸將相尋テ戰没スルニ及テ。大ニ其志ヲ得。復タ稟請セス。擅ニ天下ノ事ヲ制ス。土地ヲ割テ功臣ヲ賞シ。公卿ノ食邑ヲ奪ヒ。供御闕乏スルニ至テ顧ミス。武臣君上ヲ慢侮スル至ラサル所ナシ。四年。北朝崇光帝。尊氏子義詮ヲ鎌倉ヨリ召シ。直義ニ代テ政ヲ執ラシメ。義詮ノ弟基氏ヲシテ代テ鎌倉ヲ鎮セシム。貞和五年。北朝觀應元年。高師冬上杉憲顯執事タリ。五年。足利直冬、其父尊氏ニ叛キ兵ヲ起ス。十一月。尊氏之ヲ討ス。是ヨリ先。足利直義亦尊氏ト隙アリ。十二月。大和ニ奔リ。行宮ニ上書シテ。降ヲ請フ。廷議之ヲ納レ。詔シテ北伐ヲ圖ラシム。六年。北朝觀應二年。正月。足利直義京師ヲ攻ム。尊氏義詮西ニ奔リ。再ヒ直義ト戰テ大ニ敗ル。遂ニ直義ト和シ京師ニ還ル。是ニ於テ。直義復タ叛ク。此時尊氏直義ト内相諧ハス。直義、義詮ヲ廢シ。己レ復タ政ヲ執ラント欲ス。尊氏勉メテ之ニ從フ。既ニシテ直義復タ尊氏ト相闘キ。直義敗レテ東ニ奔ル。尊氏之ヲ追擊セント欲シ。官軍ノ虚ニ乘

後醍醐帝ヨリ後龜山帝ニ至ル南北朝ヲ分ツ

スルヲ恐レ。伴テ歸順ヲ乞フ。天皇亦伴テ之ヲ許ス。冬尊氏東伐シテ直義ヲ降シ。尋テ之ヲ殺ス。十一月。尊氏義詮ヲシテ崇光帝ヲ廢シ。正平ノ號ヲ奉シ。車駕ヲ迎ント請フ。七年。北朝後光嚴帝文和元年二月。車駕行宮ヲ發ス。兒島高德ヲシテ密旨ヲ奉シ。東國ニ赴キ。新田氏ノ兵ヲ發シ。尊氏ヲ鎌倉ニ伐タシム。閏月。車駕男山ニ至ル。楠正儀、和田正忠等河内紀伊ノ兵ヲ以テ。北畠顯能。伊勢ノ兵ヲ以テ皆會ス。正儀等義詮ヲ擊テ之ヲ破リ。近江ニ走ラス。官軍京師ニ入リ。廢帝太子及ヒ光嚴光明二上皇ヲ收ム。此時ニ當テ。新田義宗等尊氏ト武藏ニ戰テ之ヲ破リ。基氏ヲ鎌倉ニ襲テ之ヲ走ラス。已ニシテ義宗、宗良親王ヲ奉シ。尊氏ト碓氷嶺ニ戰テ敗レ。越後ニ走ル。三月。義詮東山ニ據ル。官軍利アラス。退テ男山ヲ保ツ、義詮復タ京師ニ入ル。五月。北軍急ニ男山ヲ攻ム。天皇親カラ甲ヲ擲シ馬ニ跨リ。圍ヲ衝テ南ニ出テ。行宮ニ還ル。此時宗良親王新田義宗東北ヨリシ。土居、得能氏西南ヨリシ。共ニ難ニ赴ク。男山守ラサルヲ聞キ。皆途ヨリ還ル。八月。義詮京師主無キヲ以テ。崇光帝ノ弟彌仁親王ヲ奉シテ帝ヲ京師ニ稱ス。初メ後醍醐帝偽器ヲ以テ光明帝ニ授ク。亂ニ逢テ之ヲ失フ。衆議ス。神器無シ。踐祚ス可カラスト。關白藤原良基曰ク。尊氏ハ劍ナリ。良基ハ璽ナリ。何ソ不可ナランヤト。遂ニ之ヲ立ツ。是ヲ後光嚴帝ト爲ス。八年。北朝文和二年六月。楠正儀等ヲ遣ハシテ京師ヲ攻ム。足利義詮新主ヲ奉シテ近江ニ起ル。秋尊氏西ニ歸リ。義詮ト兵ヲ合シテ復タ京師ニ入ル。是ヨリ先直冬ノ勢鎮西ニ振フ。直義歿スルニ及テ。歸順ス。敕シテ總追捕使ト爲シ。西國ヲ徇ヘシム。九年。北朝文和三年十二月。直冬京師ヲ攻ム。尊氏近江ニ走ル。十年。北朝文和四年正月。直冬等京師ニ入ル。二月。藤原隆俊等ヲ遣ハシテ男山ニ據ル。尊氏近江ノ兵ヲ以テ叡山ニ據リ。義詮南海ノ兵ヲ率キテ東上ス。官軍之ヲ擊テ敗績ス。三月。官軍及ヒ直冬尊氏ト京師ニ戰テ敗レ。退テ男山ヲ保チ。遂ニ各引キ還ル。尊氏義詮復タ京師ニ入ル。十三年。北朝延文三年四月。足利尊

神器有光ノ議

尊氏ノ頼朝ニ異ナルヲ論ス

氏死ス。北朝從一位左大臣ヲ贈ル。義詮嗣テ征夷大將軍タリ。尊氏固ヨリ源頼朝ノ爲ヲ希望シ。遂ニ其志ヲ成セリ。然トモ頼朝ハ陽ニ皇室ヲ尊ヒ。陰ニ其權ヲ奪ヒ。以テ天下ノ亂ヲ定ム。尊氏ハ叛逆ノ臣ト爲テ。天下ヲ一ニスルコト能ハス。僞朝ノ將軍タルコト二十餘年。生民ヲシテ塗炭ニ苦マシム。即チ頼朝ノ爲ト大ニ差異アリ。是レ實ニ名義正カラス。國體ニ反戾スルヲ以テノミ。尊氏已ニ死シテ。四方ノ官軍又起リ。坂東ノ諸豪多ク新田義興ニ歸ス。足利基氏之ヲ患ヒ。十月。遂ニ義興ヲ誘フテ之ヲ殺ス。是ヨリ先。征西將軍懷良親王肥後ニ在リ。菊池武重之ヲ奉シ。所在ノ賊ト戰フ。已ニシテ武重卒シ。弟武光繼テ勤王ス。十四年。北朝延文四年三月。武光西國ノ賊ト戰テ大ニ之ヲ破ル。是ニ於テ。西南ノ官軍復タ振フ。十月。賊將畠山國清大ニ關東ノ兵ヲ擧ケ。西上シテ足利義詮ト合シ行宮ヲ犯ス。楠正儀之ヲ拒ク。十五年。北朝延文五年春ヨリ秋ニ至ルマテ戰フコト數次。賊遂ニ退ク。七月。賊將仁木義長行宮ニ降ル。山名時氏又足利氏ト戰フ。十六年。北朝康安元年十月。賊將細川清氏歸順ス。奏シテ曰ク。足利氏ノ兵西時氏ヲ拒キ。東義長ニ備フ。臣其空虚ニ乘セハ。京師復スヘシ。楠正儀曰ク。元弘以來官軍五タヒ京師ヲ復シテ。守ル能ハサルハ。力繼サレハナリ。今京師ヲ取ント欲セハ。臣一人ノ力能ク辨スヘシ。必シモ清氏ヲ待タス。唯恐クハ已ニ取ルノ後。復タ之ヲ失ハシ。之ヲ恥テ強戰セハ。今ノ有スル所。併セテ之ヲ失ハシノミ。宜ク威力ヲ養フテ。徐ニ匡復ヲ圖ルヘシト。時ニ朝議恢復ニ急ナルヲ以テ其言ヲ聽カス。十一月。正儀清氏等ニ敕シ。大舉シテ京師ヲ攻メシム。十二月。義詮北帝ヲ奉シテ近江ニ奔ル。官軍京師ニ入ル。既ニシテ時氏義長東西皆敗レ。義詮兵ヲ還シ。部將ヲシテ行宮ヲ侵サシム。我諸將軍ヲ旋ス。義詮復タ京師ニ入ル。十七年。北朝貞治元年四月。楠正儀等賊兵ヲ神崎ニ破リ。九月。赤松光範ヲ多田部城ニ攻メ。兵庫ヲ略シテ還ル。十九年。北朝貞治三年大内、山名、仁本、石塔、上杉ノ諸族一タヒ歸順スル者。相繼テ叛テ

後醍醐帝ヨリ後龜山帝ニ至ル南北朝ヲ分ツ

義詮ニ降ル。是ヨリ四方ノ官軍稍ク微ナリ。獨リ西國ハ菊池武光、征西將軍懷良親王ヲ奉シテ肥後ニ在リ。東北ハ征東將軍宗良親王信濃ニ在リ。新田義治上野ニ在テ其令ヲ奉スルノミ。二十二年。北朝貞治六年十二月。足利義詮死ス。子義滿嗣テ征夷大將軍タリ。二十三年。北朝應安元年三月。天皇吉野ノ行宮ニ崩ス。天皇幼ニシテ東藩ヲ鎮メ。入テ大統ヲ繼キ。吉野ニ偏安スト雖モ。粗、舊典ヲ修ム。恒ニ恢復ヲ以テ心ト爲シ。親ラ艱危ヲ踏ム。將士力ヲ竭シ。能ク強敵ヲ控制ス。臨御三十年、征戰殆ト虚日無シ。

南朝ノ勢日ニ蹙ル

後龜山院天皇。先帝ノ第二子ナリ。正平二十三年。三月。位ヲ天野ノ行宮ニ嗣ク。七月。新田義宗脇屋義治兵ヲ越後上野ニ起シ。賊ト戰テ克タス。義宗之ニ死ス。義治出羽ニ奔ル。二十四年。北朝應安二年正月。楠正儀叛テ北朝ニ降ル。建徳元年。北朝應安三年正月。脇屋義治兵ヲ武藏上野ニ出シ。賊ヲ撃テ克タス。信濃ニ奔ル。二年。北朝應安四年二月。北朝ノ後光嚴帝位ヲ太子緒仁ニ禪ル。是ヲ後圓融帝ト爲ス。是時ニ當テ。天皇銳意恢復ヲ圖リ。志士亦心ヲ屬シテ中興ヲ冀カフ。而シテ數年來。國勢日ニ蹙マリ。官軍ノ將士多ク款ヲ北朝ニ納レ。賊軍屢、行宮ヲ犯ス。是ニ至テ復タ蹕ヲ吉野ニ移ス。天授二年。北朝後圓融帝永和二年七月。足利直冬叛テ北朝ニ降ル。三年。北朝永和三年關東ノ賊兵屢、征東將軍宗良親王ヲ信濃ニ攻ム。親王走テ吉野ニ歸ル。是ヨリ東北復タ官軍無シ。征西將軍懷良親王猶ホ菊池氏ニ依テ西南ノ一隅ヲ保ツ。菊池氏ノ族前後皆戰死シ。親王亦病テ薨ス。西南復タ官軍無シ。獨リ楠正時、正種等紀伊ニ據リ。楠正勝正元金剛山ニ據テ賊ヲ拒キ。以テ南朝ヲ維持ス。是ニ於テ足利義滿專ラ楠氏ヲ圖リ。以テ南朝ノ基趾ヲ覆サントス。五年。北朝康暦元年正月。賊入寇シテ數城ヲ陷ル。楠氏益、孤ナリ。義滿將ニ一舉シテ楠氏ヲ滅サント欲シ。大ニ兵ヲ徵ス。會、内叛スル者アルヲ以テ果サス。是時ニ當リ。南朝一方ニ偏安シ。彈丸ノ地ヲ保ツノミ。足利氏天下ノ勢ヲ以テ之ヲ包舉セ

ハ。雷ニ疾風ノ鴻毛ニ於ケルカ若キノミナラス。而シテ數年ヲ曠シテ功ヲ卒フルコト能ハサルハ。每ニ其内亂有ルニ由ルナリ。南北兩朝既ニ合シ。天位正ニ歸スルニ至テ。彼レ遂ニ内亂ニ堪ヘス。國勢漸ク微ニシテ。其間寧歲アルコト無シ。國體ニ戻リ業ノ就ル可ラサルヤ此ノ如シ。是ヨリ先。義滿諸將ヲ役シテ。大ニ室町ノ第ヲ營ミ。花御所ト稱シ。驕侈ニシテ政ヲ怠リ。頗ル人心ヲ失フ。六年。北朝康暦二年七月。足利義滿紀伊及ヒ駿河ニ遊テ。南海東海ヲ圖リ。尋テ又西遊シテ軍又賊ノ爲ニ破ラル。南海盡ク足利氏ニ屬ス。是ニ於テ官軍ノ保ツ所。獨リ吉野及ヒ金剛山一城ノミ。而シテ北畠氏源親房伊勢伊賀大和志摩ヲ管シ。世々國司ヲ襲キ。以テ行宮ニ藩屏タリ。四月。北朝ノ後圓融帝位ヲ皇子幹仁ニ讓ル。ノ子孫是ヲ後小松帝ト爲ス。元中五年。北朝後小松帝嘉慶二年七月。足利義滿紀伊及ヒ駿河ニ遊テ。南海東海ヲ圖リ。尋テ又西遊シテ鎮西ヲ圖ル。是時ニ當テ。義滿天下ノ事ヲ制シ。四方漸ク定マリ。諸宿將前後死亡シ。其嗣皆孱弱ニシテ。獨リ山名氏ノ聲威甚タ熾ナリ。初メ山名時氏叛テ五州ヲ略取シ。復タ降テ其守護タリ。諸子氏清等皆世ニ顯ハレ。富諸將ニ最タリ。領スル所十州ニ跨ル。世相語テ曰ク。其家ヲ大ニセント欲セハ。叛ヨリ善キハ莫シト。當時ノ人情以テ知ルヘシ。義滿其強大ヲ惡ミ。陰ニ是ヲ除カント計リ。其骨肉相閱クニ乘シ。詭計ヲ設ケテ之ヲ弱クシ。遂ニ撃テ其族ヲ亡ス。義滿又天下ニ購テ。新田氏ノ族及ヒ諸ノ忠ヲ正統天子ニ致ス者ヲ索メ。所在之ヲ夷ラク。是ニ於テ四方大ニ定マル。而シテ楠氏ノ族猶ホ大和河内ノ間ヲ保守シ。以テ吉野ノ藩蔽タリ。三月。義滿手書ヲ楠正勝ニ貽リ。利ヲ説テ之ヲ招ク。正勝忠孝ノ大義ヲ論シテ之ヲ卻ク。九年。北朝明德三年五月。賊軍攻テ楠氏ノ城壘ヲ拔ク。楠氏遂ニ亡フ。是ニ於テ行宮孤立ス。義滿乃チ使ヲ遣ハシ。來テ和ヲ請ハシメテ曰ク。車駕還幸シ。神器ヲ北帝ニ傳ヘハ。則チ兩統更ヒニ立ツコト。北條氏ノ時ノ如クセント。天皇遂ニ之ヲ許ス。十月。車駕行宮ヲ發ス。群臣戎衣シテ扈從ス。義滿北朝ノ

楠氏亡ヒ南山孤立ス

後醍醐帝ヨリ後龜山帝ニ至ル南北朝ヲ分ツ

意ヲ以テ來降ノ禮ヲ用ヒント請フ。天皇許サス。曰ク。當ニ父子禪讓ノ禮ヲ用テ相授受スヘシ。否ラサレハ則チ朕神器ヲ以テ斃レンノミ。豈屈下シテ祖宗ノ神統ヲ辱カシメンヤ。是ニ於テ物議洵々タリ。六角滿高、義滿ニ謂テ曰ク。神器南帝ニ在リ。南帝ハ即チ眞天子ナリ。豈其敕ニ違フ可ンヤ。義滿之ニ從フ。閏十月。天皇遂ニ父子ノ禮ヲ以テ神器ヲ後小松帝ニ授ク。蓋シ後醍醐帝皇業ヲ克復シテヨリ。幾モ亡クシテ賊徒蜂起シ。海内鼎沸ス。是ニ於テ南山ノ駕アリ。爾後子孫相承ケ。君臣志ヲ繼キ。危クシテ能ク持チ。倒レテ復タ起リ。以テ五十七年ノ久ヲ保テリ。而シテ人心ヲ收メ天命ヲ回スコト能ハス。勤王ノ師。日ニ衰ヘ。月ニ耗シテ。南山孤立シ。羽翼股肱翦鍛略盡キ。如何トモス可ラサルニ至ルハ。亦時勢ノ已ムヲ得サル所ナリ。然トモ後龜山帝和議ノ彼レヨリ至ルヲ待チ。徐ニ起テ北還シ。猶ホ儼然トシテ來降ノ議ヲ拒ミ。禪讓ノ禮ヲ執リ。遂ニ正閏一ニ歸シ。物情之ニ服ス。則チ能ク天祖ノ成憲ヲ守リ。名器ヲ護ルト謂フヘキナリ。是ヨリ後。足利氏ハ乃チ眞天命スル所ノ將軍ニシテ。天下ノ事皆之カ決スル所ト爲リ。大權又遂ニ武門ニ歸セリ。

正閏歸一
ヲ論ス

大政紀要

自第十二卷
至第十三卷

上編總記自十二至十三

第六册

大政紀要上編

總記十二

後小松帝ヨリ正親町帝永祿三年ニ至ル足利氏天下ノ事ヲ制ス

後小松院天皇。後伏見帝ノ玄孫ナリ。先ニ足利氏ノ爲ニ擁立セラレ。北朝閏位ノ君タリ。元中九年。閏十月。神器ヲ後龜山帝ニ受テ正位ヲ嗣キ。尋テ後龜山帝ヲ尊テ。太上天皇ト號ス。應永元年。十二月。足利義滿奏シテ征夷大將軍ヲ其子義持ニ讓リ。自ラ太政大臣タラント欲ス。平清盛以還。武官此官ニ昇ル者無キヲ以テ。朝議之ニ許スヲ難カル。義滿強請ス。乃チ之ヲ許ス。二年。六月。義滿太政大臣ヲ辭シ。金閣ヲ北山ニ營ミ。徙テ此ニ居ル。義滿聰英ニシテ偉度アリ。其甫メテ嗣クヤ。細川頼之、心ヲ傾ケテ輔導シ。尋テ軍政ヲ修飾シ。紀綱ヲ肅振ス。故ヲ以テ能ク禍亂ヲ定メ。尊氏ノ業ヲ成セリ。是ニ至テ。驕盈奢侈ヲ極メ。政令意ニ任ス。是レヨリ天下復タ亂レ。足利氏衰微ノ機ヲ兆セリ。五年。義滿讒ヲ信シテ鎮西探題今川貞世ヲ罷ム。九國復タ擾レ。菊池、少貳、千葉、大村等ノ亂アリ。六年。大内義弘周防長門數國ノ兵ヲ帥テ難ヲ作ス。土岐詮直、美濃ニ起リ。京極某、近江ニ起リ。山名氏清ノ三子丹後ニ起リ。竝ニ之ニ應ス。而シテ鎌倉管領足利滿兼ノ孫基氏。亦叛テ義弘ニ應シ。以テ義滿ヲ圖ル。當時足利創業ノ威勢猶

後小松帝ヨリ正親町帝永祿三年ニ至ル足利氏天下ノ事ヲ制ス

足利氏衰
微ノ機

君臣ノ秩
序判然犯
ス可ラス

ホ強大ナルヲ以テ。十二月。能ク此亂ヲ討平シ。義弘ヲ斬テ和ヲ滿兼ニ講シ。以テ一時ノ安ヲ爲セリ。義滿志益驕
 リ。諸將ヲ待スル甚タ倨リ。朝臣其家ニ往來スル者。或ハ家隸ヲ以テ之ヲ遇ス。嘗テ叡山ニ適クニ。儀衛法皇ノ御幸
 ニ擬ス。其大ヲ好ミ譽ヲ喜フノ心斯ノ如シ。然トモ本邦古來ノ成憲。自ラ定マルモノアリ。皇室ノ式微。當時ノ極ニ
 至ルモ。君臣ノ秩序判然トシテ犯ス可ラス。若シ一タヒ之ヲ犯セハ。群下亂擾シテ將軍ノ業亦保チ難シ。故ニ彼亦太
 政大臣ヲ以テ。人臣尊榮ノ極ト爲シ。強テ此ヲ請テ。復タ其他ヲ望マス。但此官ハ五攝家ノ常ニ迭任スル所ナルヲ以
 テ。猶ホ其心ニ慊足セス。遂ニ外國ニ向テ榮譽ヲ求ムルニ至レリ。是ヨリ先。支那國、元亡テ明興リ。數、使命ヲ我
 ニ通ス。八年。義滿私ニ使ヲ遣シ。好ヲ明ニ通ス。書辭ノ卑遜。本朝外邦ニ與フルノ書ニ於テ。前古其例無キ所ナリ。
 九年。明主使ヲ遣シ璽書冠服ヲ齎ラシ。義滿ヲ封シテ日本國王ト爲ス。義滿悅テ之ヲ受ク。是ヨリ足利氏ノ中世ニ至
 ルマテ。國書往復皆國王臣某ヲ以テ稱ス。是レ蓋シ義滿名譽ヲ好ムノ餘ニ出ツト雖モ。内ニ於テハ則チ憚トシ。外ニ
 於テハ則チ屈トシ。其名分ヲ愆リ。國體ヲ失フ。焉ヨリ甚キハナシ。十五年五月。義滿薨ス。義滿初メ從五位下ニ敍
 シ。左馬頭ニ任シ。從一位左大臣ニ累遷シ。右近衛大將ヲ兼ネ。終ニ太政大臣ニ至リ。准三后タリ。故事源氏ノ長者
 ヲ以テ。淳和辨學兩院ノ別當ニ充ツ。保延以降。久我氏ノ世職タリ。義滿ノ時ニ至リ。乃チ之ヲ足利氏ニ屬ス。足利
 氏ノ世ヲ終ルマテ。其官爵敍任ノ例。概ネ此ノ如シ。而シテ太政大臣ニ任スル者ハ。義滿一人ノミ。義滿ノ薨スル。
 敍シテ太上天皇ノ尊號ヲ贈ル。義持惶懼シ。辭シテ受ケス。明主諡シテ恭獻王ト曰フ。義持之ヲ受ク。十九年八月。
 天皇位ヲ皇子寶仁親王ニ禪ル。南朝ノ遺臣前約ニ依テ後龜山帝ノ後ヲ立テテコトヲ請フ。聽カス。是ニ於テ。南朝ノ
 餘孽所在兵ヲ起シテ克タス。尋テ皆平ク。

義滿明ノ
封册ヲ受ク

稱光院天皇。後小松帝ノ子ナリ。此時ニ當リ。鎌倉管領足利持氏滿兼兵力、京師ノ將軍ニ倍ス。而シテ天子ノ廢立。

公卿ノ易置ハ。則チ將軍之ヲ專ニシ。威權比無シ。世俗呼テ公方ト曰フ。初メ義滿、幕府ノ官政ヲ定メ。斯波、細川、
 畠山氏更、管領家令ノ稱タリ。之ヲ三管ト謂フ。山名、一色、京極、赤松氏更、侍所別當タリ。之ヲ四職ト謂フ。武田、小
 笠原氏更、弓馬ノ禮式ヲ司トリ。吉良、今川、澁川氏更、武者頭ト爲リ。伊勢氏奏者ト爲ル。之ヲ七頭ト謂フ。是ニ至
 テ。持氏亦之ニ擬シ。自稱シテ公方ト曰ヒ。上杉氏憲、上杉憲基ヲ執事ト爲シ。滿兼ノ弟奥羽ヲ管スル者ヲ併セテ三
 管領ト曰ヒ。千葉、小山、長沼、結城、佐竹、小田、那須、宇都宮ノ八族ヲ八館ト曰フ。應永二十三年。持氏、執事
 氏憲ト隙アリ。其權ヲ奪フ。十月。氏憲、持氏ノ弟持仲ヲ奉シテ亂ヲ作ス。持氏駿河ニ奔ル。二十四年正月。義持關
 東ノ諸將ニ令シテ。持氏ヲ援ケ。攻テ鎌倉ヲ復シ。持仲、氏憲ヲ誅ス。初メ義滿、義持ノ弟義嗣ヲ愛シ。爲メニ請テ
 其官爵ヲ超遷シ。北山ノ第二居ル。勢威義持ノ右ニ出ツ。鎌倉ノ事起ルニ及テ。義嗣、氏憲ト謀ヲ通シ。將ニ幕府ヲ
 襲ハントス。事覺ハレ義持之ヲ殺ス。是ヨリ關東屢亂ル。三十年二月。義持征夷大將軍ヲ辭シ。請テ其子義量ヲ以テ
 職ヲ襲カシム。義量在職ニ歳ニシテ薨ス。義持再ヒ事ヲ視ル。義持性愉惰ナリ。時ニ京畿小虞。宴遊ヲ事トシ。政、偏
 頗多シ。遂ニ赤松氏ノ亂アリ。二十四年十二月。義持疾作ル。初メ義持、義嗣ノ禍ニ懲リ。悉ク諸弟ヲ僧トス。義量
 早世スルニ及テ子ナシ。或ハ鎌倉管領持氏ヲ立シテ議ス。持氏聞テ之ヲ喜フ。既ニシテ義持ノ第三弟僧正義圓ヲ
 以テ嗣ト爲ス。正長元年。正月。前大將軍義持薨ス。義圓名ヲ義教ト改メ。室町ノ第二入ル。七月。天皇崩ス。後小
 松上皇議シテ北朝崇光帝ノ曾孫彥仁親王ヲ立ツ。後龜山ノ皇子小倉王立シテ冀フテ得ス。怒テ伊勢ニ奔ル。明年。
 北畠氏越智氏之ヲ奉シテ兵ヲ起シ。足利氏ノ數、約ニ倍クヲ責ム。足利氏擊テ之ヲ平ケ。皇子ヲ以テ歸リ。之ヲ嵯峨ニ

後小松帝ヨリ正親町帝永祿三年ニ至ル足利氏天下ノ事ヲ制ス

勤王ノ人

置ク。此時ニ當テ天位既ニ正統ニ歸スト雖モ。南朝ノ餘燼時有テ燃ユル者。以テ人心皇室ヲ思フノ已ムコト無キヲ觀ル可シ。爾後織田氏王事ニ勤テヨリ。徳川氏ノ末造ニ至テ。尊攘ノ論盛ニ起リ。終ニ王政復古ノ大業ヲ致セルハ。亦當時勤王ノ人心再燃セル者ニ外ナラス。然レハ則チ我臣民勤王ノ道ハ。初ヨリ未タ起滅斷續スル者ニ非ルナリ。後花園院天皇。崇光帝ノ曾孫ナリ。永享元年。三月。足利義教ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス。義教還俗シテ將軍タリ。物情ノ已ニ服セサルヲ知り。銳意政ヲ爲シ。軍國ノ事釐革スル所多シ。二年。筑紫ノ豪族ヲ京師ニ徙ス。三年。伊勢紀伊ニ遊ヒ。南朝ノ遺族ヲ制置ス。四年。又駿河ニ遊ヒ。今川氏ニ館シテ鎌倉ヲ伺察ス。初メ鎌倉管領持氏將軍ヲ冀フテ得ス。居常憤々トシテ曰ク。吾何ソ還俗將軍ニ屈センヤト。驍僭自ラ脩メス。遂ニ釁端ヲ生ス。十年十月。義教兵ヲ發シテ持氏ヲ討ス。諸將進テ鎌倉ヲ攻メ。十一月。持氏ヲ執ヘテ永安寺ニ囚ス。持氏ノ執事上杉憲實。持氏ニ逼テ自殺セシム。初メテ尊氏、義詮ノ暗弱ナルヲ以テ基氏ヲシテ。鎌倉ヲ鎮シテ之カ應援ヲ爲サシメ。戒テ曰ク。子々孫々相輔ケテ相背クコト勿レト。子孫其心ヲ以テ心トセス。是ニ至テ鎌倉亡フ。而シテ幕府亦益々寧カラス。十二年正月。結城氏朝故ノ管領持氏ノ遺孤ヲ奉シテ兵ヲ起ス。七月。上杉憲實將軍ノ令ヲ以テ之ヲ攻メ。嘉吉元年。四月ニ至テ之ヲ平ク。時ニ義教ノ弟義照、大覺寺ノ僧正タリ。後龜山ノ皇子ト親ミ善シ。關東ノ兵亂ヲ聞テ。皇子ニ説キ舊業ヲ復センコトヲ勸メ。密ニ南朝ノ遺臣ニ約シ。兵ヲ起サントス。事覺レテ逃匿ス。五月。義照ヲ捕テ之ヲ殺ス。義教人ト爲リ猜暴。盛氣ヲ以テ下ヲ馭ス。既ニ關東ヲ滅シ。意益々驕ル。自ラ以爲ク天下復々畏ルルニ足ル者無シト。此時赤松滿祐、播磨備前美作ノ守護タリ。其族貞村之ト隙アリ。義教貞村ヲ寵シ。毎ニ貞村ヲ曲スシテ滿祐ヲ抑斥シ。滿祐積怨。六月。義教ヲ其第ニ饗シテ之ヲ弑シ。播磨ニ奔ル。八月。詔シテ義教ノ子義勝ヲ以テ嗣ト爲シ。諸將ヲ遣シ

鎌倉管領
亡フ

テ滿祐ヲ討ス。九月。山名持豐等滿祐ヲ攻テ之ヲ誅シ。赤松氏ノ地ヲ領ス。滿祐ノ兄ノ子教祐少貳嘉頼ニ依ル。大内教世、幕府ノ命ヲ以テ。嘉頼ヲ討平シ。其地ヲ并ス。是ニ於テ。山名氏大内氏復々興ル。二年十一月。義勝征夷大將軍ニ任ス。三年七月。天ス。管領畠山持國議シテ義勝ノ同母弟義成ヲ立ツ。甫メテ八歳。後名ヲ義政ト改メ。尋テ征夷大將軍ニ任ス。九月。南朝ノ遺臣藤原有光、資親、楠次郎等潛ニ興復ヲ圖リ。後龜山帝ノ皇子ヲ奉シテ。主ト爲シ。中興ノ宮ト稱ス。夜、禁内ニ入テ神器ヲ奪フ。兵ヲ遣シ追撃シテ神鏡寶劍ヲ獲タリ。文安元年。八月。有光、資親南朝ノ皇子ヲ助ケ。神璽ヲ擁シテ叡山ニ據ル。大和、紀伊、河内ノ兵竝起テ之ニ應ス。畠山持國、山徒ニ説テ内應ヲ爲サシム。皇子自殺シ資親、次郎等之ニ死ス。諸國ノ應スル者皆平ラク。而シテ次郎ノ殘兵猶ホ後醍醐帝ノ曾孫某ヲ奉シ。吉野ヲ保ツ。是ヨリ先。後村上帝ノ子説成、圓胤ヲ生ム。圓滿院僧正タリ。蓄髮シテ名ヲ義有ト改ム。楠次郎ノ兵ヲ起スヤ。其弟某、義有ヲ奉シテ紀伊ニ據ル。四年十二月。畠山氏ノ將之ヲ攻メ。義有害ニ遇フ。而シテ吉野猶ホ神璽ヲ擁シテ南朝ト稱シ。勤王ノ士足利ノ約束ヲ渝フルヲ憤ル者之ヲ守護ス。長祿元年。十二月。赤松ノ遺臣某伴リ來テ之ニ事ヘ。終ニ皇曾孫ヲ弑シ。璽ヲ奪テ去リ。之ヲ幕府ニ獻ス。二年。神璽宮ニ入ル。後醍醐帝南山ニ幸セシヨリ五十七年ニシテ。南北一ニ歸シ。其後五十年ニシテ皇曾孫再ヒ吉野ニ起リ。更ニ十五年ニシテ。神璽亦北朝ニ歸ス。總テ一百二十餘年ニシテ南朝ニ關スルノ事終レリ。是時ニ當テ。足利將軍ノ權既ニ管領ニ移リ。而シテ三管ハ細川氏獨リ盛ナリ。其權又四職ニ下テ。而シテ山名氏獨リ盛ナリ。蓋シ足利氏既ニ權詐ヲ以テ大權ヲ竊攘セリ。故ニ部下ノ將士亦皆其爲ス所ニ倣ヒ。我取テ以テ代ラント欲セサル者無シ。畠山政長、義就、山名持豐、細川勝元ノ輩其尾大掉ハサルヲ見テ。兵ヲ興シテ相侵伐ス。子ニシテ父ヲ弑スル者之アリ。臣ニシテ君ヲ弑スル者之アリ。而シテ天下ノ豪

南朝ニ關
スルノ事
終ル

後小松帝ヨリ正親町帝永祿三年ニ至ル足利氏天下ノ事ヲ制ス

義政奢侈

僕。皆我邦ノ治體ニ適シ。人心ヲ攬ルコトヲ勉メス。巖然トシテ頭角ヲ禽獸相食ムノ間ニ露シ。斯民ヲ水火ノ中ニ拯
 フ者アルコト無シ。將軍義政治安ノ政ニ意無ク。内謁公行シ。號令抵牾ス。且ツ其奢侈前代未タ曾テ其比ヲ見ス。高
 倉第ノ障子。一間ノ直ニ二萬錢。其他之ニ稱フ。故ヲ以テ征賦亦前代ニ十倍ス。前代畿内富商ノ金ヲ借ルコト率ネ一歲
 數次ニ過キス。義政ノ時ニ至テハ。即チ一月或ハ八九次ニ及フ。既ニシテ負債漸ク積ミ。之ヲ償フコトヲ得ス。乃チ
 士民ニ令シテ負債ヲ辨セサラシムルコト十三度。之ヲ平均ノ德政ト曰フ。又故事ニ幕府大義アル毎ニ。諸將ニ課シテ
 其費ヲ助ケシムルコト、率ネ十歲ニ一舉ス。義政ハ五歲ニ九舉ス。是ニ於テ天下凋弊シ。百姓流離ス。寛正元年。天
 下兇荒。道饑相望ム。而シテ義政舊ニ依テ奢侈ヲ事トシ。遊飲自如。第沼ヲ修營シ。四方ニ令シテ。奇樹巨石ヲ致サ
 シム。士民命ニ堪ヘス。二月。天皇聞テ之ヲ憂ヒ。詩ヲ賜フ曰ク。殘民爭採首陽蕨。處々閉爐銷竹扉。詩興吟酸春二
 月。滿城紅綠爲誰肥ト。義政爲メニ役ヲ罷ム。時ニ近江ノ士人某。天下ノ將ニ大ニ亂レントスルヲ知リ。上書シテ之
 ヲ諫ム。義政怒テ曰ク。其言ハ則チ然リ。而モ其人ニ非スト。其采邑ヲ奪テ之ヲ逐フ。是ヨリ先。關東ノ將士請テ故
 ノ管領持氏ノ子成氏ヲ立テ。鎌倉ノ管領ト爲ス。上杉憲實ノ子憲忠執事タリ。已ニシテ成氏、上杉氏其父ヲ殺スヲ以
 テ。故ノ結城氏朝ノ子成朝ト謀テ憲忠ヲ殺ス。憲忠ノ家宰長尾兼春等憲忠ノ弟房顯ヲ立テ。兵ヲ發シテ。成氏ヲ攻ム。
 成氏走テ古河ニ居ル。古河御所ト稱ス。房顯鎌倉ニ入テ自ラ管領ト稱ス。是ヨリ連年兵ヲ構ヘ。關東大ニ亂ル。上杉
 氏因テ義政ノ弟政知ヲ請ヒ。鎌倉管領ト爲ス。而シテ將士心ヲ成氏ニ歸スル者多シ。政知留テ伊豆ノ堀越ニ居ル。堀
 越御所ト稱ス。御所ハ皇居ノ稱ナリ。之ヲ將軍ニ用フル已ニ僭ト爲ス。況ヤ之ヲ管領ニ用フルヤ。名分ノ紊ル甚
 タシト云フ可シ。此時。畠山政長、弟義就ト河内ニ相闘キ。久ク解ケス。義政兩ナカラ赦シテ共ニ京師ニ入ル。已ニ

名文ノ紊
ル甚シ

關東大亂

シテ義就旨ニ忤ヒ。復タ河内ニ奔ル。三年。細川勝元兵ヲ遣シ。政長ヲ援ケ義就ヲ攻ム。義就逃レ走ル。當時幕府政
 刑ヲ失ヒ。管領以下皆自ラ兵ヲ擅ニシテ相戰フ。則チ兵柄已ニ幕府ヲ去ル。將タ何ヲ以テ亂ヲ弭メンヤ。五年七月。
 天皇位ヲ皇太子ニ禪ル。時ニ義政亦政ニ倦ミ。辭職ノ志アリ。而シテ子無シ。弟義尋僧トナリテ佛寺ニ在リ。義政之
 ヲ嗣ト爲シ。還俗シテ名ヲ義視ト改メ。今出川ノ第二居ラシム。將士赴キ謁ス。細川勝元執事タリ。既ニシテ義政職
 ヲ讓ルノ意ナシ。

後土御門院天皇。先帝ノ子ナリ。寛正六年。三月。義政、花頂山、若王子、大原野等ニ遊ヒ。又伊勢、春日ニ至ル。
 衛從甚タ盛ナリ。靡麗ヲ窮極ス。是ニ由テ賦役度無ク。上下罷敝シテ。民皆亂ヲ思フ。是歲。義政、子義尙ヲ生ム。
 其母嗣ト爲サンコトヲ冀ヒ。之ヲ山名持豐ニ託ス。時ニ持豐、細川勝元ト隙アリ。勝元。義視ヲ輔ク。文正元年。持
 豐、義政ニ請テ。畠山義就ヲ召還シ援ト爲ス。應仁元年。正月、持豐又義政ニ請ヒ。管領畠山政長ヲシテ本第ヲ避ケ
 シメ。義就ヲ納レントス。細川勝元聽カス。政長ト兵ヲ聚テ自ラ備フ。持豐亦兵ヲ召シテ幕府ヲ守ル。既ニシテ義就
 政長ト戰ヒ。政長敗走ス。義就乃チ本第二入ル。五月。勝元潛ニ管國ノ兵ヲ徵ス。政長等皆屬ス。兵凡ソ十六萬。持
 豐亦管國ノ兵ヲ徵ス。義就等之ニ屬ス。兵凡ソ十一萬。兩軍絡繹京師ニ入ル。京師ノ民負擔シテ奔竄ス。勝元ノ第ハ
 幕府ノ東ニ在リ。持豐ノ第ハ西ニ在リ。義政兩軍ニ令シテ曰ク。先ニ戰フ者ハ我敵ナリト。勝元乃チ將軍ヲ挾ント欲
 ス。謀テ幕府ニ入リ。將軍ノ牙旗ヲ樹テ義視ヲ迎ヘ府中ニ入ル。是ヨリ兩軍京中ニ交戰シ。互ニ勝負アリ。八月。勝
 元又天皇及ヒ上皇ヲ幕府ニ迎フ。其意義政若シ持豐ヲ右ケハ。則已レ天子ヲ挾ミ。順逆ヲ天下ニ告ケ。然後ニ戰ハン
 ト欲スルナリ。已ニシテ勝元謀テ義視ヲ西陣ニ遣ル。是ヨリ東西ノ陣。將軍兄弟相戰フ者ノ如シ。文明二年。十二月。

後小松帝ヨリ正親町帝永祿三年ニ至ル足利氏天下ノ事ヲ制ス

後花園上皇、室町ノ行宮ニ崩ス。葬儀備ハラス。大將軍義政徒步シテ柩ニ從フ。五年三月。持豐卒ス。五月。勝元亦卒ス。子政元嗣ク。兩軍相持シテ未タ解カス。十二月。大將軍義政職ヲ義尙ニ讓ル。甫メテ九歳。後名ヲ義熙ト改ム。九年春。天皇宮ニ還ル。冬、西軍悉ク解ク。義視美濃ニ奔リ。土岐氏ニ依ル。東軍モ亦解ク。應仁元年ヨリ此ニ至ルマテ。凡ソ十有一歳。兩陣ノ兵士交、出テ焚掠シ。文武ノ第宅蕩シテ荒野ト爲ル。關白兼良以下ノ諸公卿。四方ニ散走シ。或ハ戕害セラレ。歷朝ノ典籍概ネ兵燹ニ罹ル。開闢以來喪亂ノ慘ナル。未タ此ノ如キモノ有ラサルナリ。而シテ義政遊宴自若。奢侈滋、甚シク。使ヲ朝鮮及ヒ明ニ遣シ。海外ノ珍寶ヲ購ナヒ。以テ自ラ樂ム。十一年。遂ニ東山ニ退居シ。銀閣ヲ起シ。以テ義滿ノ金閣ニ擬シ。爭亂ヲ以テ意ニ加ヘス。諸國ノ強臣。往々亂ニ乘シテ國ヲ奪ヒ。將軍ノ令行ハレス。天下是ヨリ戰國ト爲ル。長享元年。八月。細川政元管領ト爲ル。是ヨリ先。上杉房顯ノ子顯定、上杉定正ト堀越政知ヲ奉シテ。成氏ヲ古河ニ攻ム。後兩上杉氏隙アリ。定正、成氏ニ黨ス。是ヨリ關東兵結テ解ケス。九月。六角高頼、義熙ノ命ニ抗ス。義熙自ラ將トシテ之ヲ討ス。近江ニ次ス。久シク下ラス。延徳元年。三月。大將軍義熙薨ス。義熙學ヲ好ミ。慨然トシテ撥亂ノ志アリ。薨スルニ及テ。中外之ヲ惜ム。義熙子ナシ。義政、義親ノ子義植ヲ養テ嗣ト爲ス。二年。正月。前大將軍義政薨ス。七月。義植征夷大將軍ニ任ス。此時。畠山義就ノ子義豐河内ニ據ル。明應二年。二月。畠山政長、將軍義植ヲ奉シテ。義豐ヲ擊ツ。四月。細川政元、義豐ヲ援ケ。共ニ政長ヲ攻テ之ヲ殺ス。義植身ヲ脱シテ越前ニ走ル。是ヨリ先。足利政和、長子ノ爲ニ弑セラレ。次子義通駿河ニ奔リ。今川氏親ニ依ル。是ニ於テ。政元、義政ノ遺志ト稱シ。義澄ヲ立ツ。諸將敢テ異議スル者ナシ。後名ヲ義澄ト更ム。八年十一月。義植周防ニ奔リ。大内義興ニ依ル。十二月。義通征夷大將軍ニ任ス。九年九月。天皇薨ス。勝仁親王立ツ。

天下戰國トナル

皇室式微ノ極

後柏原院天皇。先帝ノ子ナリ。明應九年。十一月。後土御門帝ヲ葬ル。時ニ擾亂相踵キ。葬資給セス。柩ヲ黒戸ニ置クコト四十餘日。始メテ葬ル。皇室ノ式微此極ニ至ル。然トモ征夷將軍以下ノ敍任ハ。猶悉ク朝廷ニ出ツ。則チ天子ノ大權ハ。未タ嘗テ始メヨリ失墜スルコト無キナリ。文龜元年。二月。義澄奏請シテ。前大將軍義植ノ官爵ヲ削ル。永正四年。六月。細川政元ノ家宰香西元長、政元ヲ殺シテ。其養子澄之ヲ立ツ、義澄制スル能ハス。八月。三好長輝阿波ノ兵ヲ以テ。政元ノ養子澄元ヲ奏シテ。元長澄之ヲ攻殺シ。澄元ヲ以テ管領ト爲ンコトヲ請フ。義澄輒チ之ニ從フ。長輝是ヨリ權ヲ專ニス。五年四月。大内義興前大將軍義植ヲ奉シ。大舉シテ東上ス。細川高國亦兵ヲ舉テ之ニ應シ。京師ニ入ル。大將軍義澄近江ニ奔ル。長輝、澄元ヲ以テ阿波ニ奔リ。尋テ京師ヲ攻テ敗死ス。七月。義植征夷大將軍ニ復任シ。奏請シテ義澄ノ官爵ヲ削リ。義興ヲ以テ管領ト爲ス。八年八月。義澄近江ニ薨ス。澄元ノ家人細川政賢兵ヲ舉テ京師ニ入ル。義植避テ丹波ニ之ク。義興謀テ政賢ヲ襲殺ス。義植京師ニ還ル。義興功ヲ以テ從三位ニ敍シ。聲威大ニ振フ。而トモ久シク京師ニ在リ。兵食ノ費給セサルヲ以テ。尋テ西ニ歸ル。細川高國代テ管領ト爲ル。十七年二月。三好長輝ノ孫元長、義興ノ亡キヲ時トシ。細川澄元ヲ擁シテ京師ニ入ル。細川高國近江ニ走リ。五月。兵ヲ發シ還テ京師ヲ攻メ。澄元。元長ヲ走ラス。澄元尋テ卒ス。是ヨリ高國又專横ナリ。大永元年。三月。天皇紫宸殿ニ即位シ。尋テ改元ス。初メ天皇ノ立ツヤ。喪亂日久シク府庫耗竭。大禮ヲ廢スルコト二十年。是ニ至テ本願寺ノ僧其資ヲ獻シ。大禮ヲ舉クルコトヲ得タリ。是月。細川高國逼テ大將軍義植ヲ逐フ。故大將軍義澄ノ子義晴ヲ迎立ツ。十二月。義晴ヲ征夷大將軍ニ任シ。義植ノ職ヲ奪フ。義植尋テ阿波ニ薨ス。應仁ノ亂幕府一タヒ柄ヲ失ヒシヨリ。此ニ至テ政元高國ノ輩將軍ヲ易置スルコト。猶其掌ヲ翻スカコトシ。而シテ彼モ亦皆家臣ノ手ニ死ス。以テ亂ノ滋、甚シキ

踐祚ノ後二十年ニシテ即位ス

後小松帝ヨリ正親町帝永祿三年ニ至ル足利氏天下ノ事ヲ制ス

倫理壞亂
シテ自然
ノ憲法存
ス

ヲ觀ル可シ。此時ニ當テ。人々唯利勢是レ争ヒ。臣其君ヲ弑シ。子其父ヲ弑シ。兄弟相屠リ。親戚相讎シ。世間復タ仁義アルヲ知ラス。苟モ利ト勢トヲ見レハ。即チ之ニ赴キ。倫理性命ヲ顧ミス。然リ而シテ獨リ朝廷究乏ノ極ニ在リト雖モ。綱々トシテ能ク名器ヲ守リ。蛇虺鬼蜮敢テ之ヲ覬覦スルコト無キハ。利勢ヲ失フノ已ニ久キニ因ルト雖モ。抑亦以テ天祖ノ定ムル所。自然ノ憲法嚴トシテ犯ス可ラサルヲ以テナリ。六年四月。天皇崩ス。知仁親王立ツ。後奈良院天皇。先帝ノ子ナリ。大永七年。三月。三好元長、細川澄元ノ子晴元ヲ相ケ。兵ヲ發シテ京師ニ入り、屢々細川高國ト戰ヒ。終ニ之ヲ殺ス。已ニシテ晴元、三好宗三元長ノ叔父ノ言ヲ聽キ。元長ヲ殺ス。天文五年。二月。天皇即位ス。天皇踐祚以來。連年兵革熄マス。國內匱乏シテ大禮ヲ舉ルコト能ハス。大内義隆奏シテ其費用ヲ供シ。始テ此典ヲ行フコトヲ得タリ。詔シテ義隆ヲ太宰大貳ト爲ス。八年六月。大將軍義晴、三好ノ黨ヲ避ケ。八瀬ニ居ル。十五年。十月。土寇起リ輦下騷擾ス。幕府兵ヲ發シテ四門ヲ警衛シ。復タ德政ヲ下シテ揭示ス。而シテ土寇服セス。宮闕ヲ犯シテ幕府ノ秕政ヲ愬フ。幕府ノ兵撃テ之ヲ卻ク。十二月。義晴征夷大將軍ヲ罷メ。其子義輝ヲ以テ之ニ代フ。十八年。三好元長ノ子長慶、細川高國ノ子氏綱ト連和シ。三好宗三、細川晴元ヲ攻テ。父ノ讎ヲ報セントス。六月。宗三敗死ス。義晴義輝坂本ニ走ル。明年五月。義晴薨ス。二十一年正月。義輝、三好長慶ト和シ。京師ニ還リ。氏綱ヲ以テ管領ト爲ス。時ニ長慶ノ家奴松永久秀長慶ニ親任セラレ。大ニ威福ヲ張ル。弘治三年。九月。天皇崩ス。方仁親王立ツ。正親町院天皇。先帝ノ子ナリ。永祿三年。正月。天皇即位ス。是時ニ當テ。姦宄草竊京畿ニ暴橫シ。復タ公武ノ命ヲ奉スル者アル無シ。大内ノ供御殆ト竭乏シ。公卿ノ呂稅百司ノ稟祿皆給セス。往々職ヲ解テ諸國ニ流寓シ。留居スル者ハ民家ニ寄食ス。朝廷ノ衰頽此ニ極マレリ。海内分裂。豪傑競ヒ起リ。各國ニ據リ。勢ヲ張リ。爭戰攻奪。諸道虛

足利氏ノ
紀綱解ク

日無シ。特ニ毛利元就心ヲ王室ニ存シ。大禮ノ行ハレサルヲ嘆シ。請テ之ヲ修ス。天皇深ク之ヲ嘉シ。元就ヲ從四位下陸奥守ニ敘任シ。菊桐ノ徽章ヲ賜フ。是時。將軍義輝、三好長慶ノ爲メニ制セラレ。屢々京師ヲ逐ハル。是ニ於テ足利氏ノ紀綱已ニ解ケ。將軍ハ則チ虛名ノミ。

大政紀要上編

總記十三

正親町帝永祿三年ヨリ後陽成帝慶長四年ニ至ル織田氏王事ニ勤メ
及豊臣氏天下ヲ合一ス

正親町院天皇。永祿三年。五月。今川義元大舉シテ尾張ヲ侵ス。織田信長桶峽ニ逆撃シテ義元ヲ斬ル。是ヨリ織田氏ノ威漸ク盛ナリ。蓋シ足利義滿ノ時。南北兩朝一ニ歸シテ將軍ノ權大ニ張リ、天下復タ天子アルヲ知ラス。足利氏ノ霸業。義滿ニ盛ニシテ。義政ニ衰ヘ。義熙以後。強臣權ヲ争ヒ黨ヲ分チ。復タ將軍アルヲ知ラス。其後細川氏。其臣三好ノ爲ニ制セラレ。三好氏。又其臣松永ノ爲ニ制セラルルニ至テハ。復タ言フニ足ラサルナリ。此時ニ當テ足利氏ノ綱紀已ニ解ケ。海内ノ地四分五裂シ。群雄割據ス。北條氏、兩上杉ヲ滅シテ關東ヲ管シ。今川氏。駿遠參三國ヲ有シ。徳川氏之ニ屬ス。甲斐ノ武田氏。信濃ヲ取り、越後ノ長尾氏越中加賀ヲ略ス。齋藤氏美濃ニ起リ。尼子氏出雲ニ據リ。毛利氏安藝ニ興テ。大内氏ノ故地ヲ收ム。其餘大友、伊東、島津、龍造寺四氏。九州ニ争ヒ。細川及三好ノ黨ニ

正親町帝永祿三年ヨリ後陽成帝慶長四年ニ至ル織田氏王事ニ勤メ及豊臣氏天下ヲ合一ス 一〇三

四國ニ分レ。赤松、浦上、山名ノ三氏中國ニ相攻メ。近江ニ六角氏淺井氏アリ。越前ニ朝倉氏アリ。伊勢ニ北畠氏アリ。常陸ニ佐竹氏アリ。奥羽ニ葦名。南部、最上氏等アリ。而シテ織田氏尾張ニ起テ。最モ雄ト爲ス。時ニ天皇信長ノ英略アルヲ稔聞シ。意ラク其人能ク天下ノ亂ヲ定ム可シト。五年十月。天皇圖ヲ鏡室ニ探テ計ヲ決シ。幣ヲ熱田ノ祠ニ奉スルニ託シテ。使ヲ尾張ニ遣シ。密旨ヲ信長ニ授ク。錫フニ御用ノ合香ヲ以テス。信長敕使ニ謂テ曰ク。吾宜ク天子ニ共職スヘシ。今反テ使命ヲ辱フシ。加フルニ寵賤ヲ以テス。吾何ヲ以テ之ニ勝ヘン。當ニ天威ニ藉テ以テ凶徒ヲ夷ラケ。不日入朝シ。カヲ竭シテ報ヲ圖ルヘシト。因テ家人ヲ召集シテ。日夜西上ノ策ヲ議ス。七年八月。信長攻メテ齋藤氏ヲ滅シ。美濃ヲ定ム。十年十月。天皇復タ使ヲ遣シ。信長ニ詔シテ曰ク。朕四方ヲ顧ミルニ卿ノ武ニ如クモノ無シ。曩ニ密敕ヲ降シ。囑スルニ征討ヲ以テス。卿心ヲ王室ニ存シテ跋涉ヲ憚ラス。聞ク已ニ美濃ヲ平クト。朕深ク之ヲ嘉ミス。宜シク益、果毅ヲ勉ミ。以テ朕カ望ニ副フヘシ。因テ戰袍一領ヲ賜フ。信長旨ヲ領シテ感激ス。是ヨリ先。將軍足利義輝、松永久秀ニ弑セラル。義輝ノ弟義昭、外ニ流寓スルコト三歲。十一年七月。義昭美濃ニ到リ。信長ヲ見テ託スルニ興復ヲ以テス。信長之ヲ諾ス。九月。信長義昭ヲ以テ西上シ。六角義賢ヲ近江ニ攻メテ之ヲ破リ。軍ヲ整ヘテ京師ニ入ル。天皇使ヲ遣シ。之ヲ栗田口ニ迎勞ス。信長稽首シテ恩ヲ謝ス。信長號令嚴明。士卒秋毫モ犯スコト無シ。京師ノ物情大ニ安シ。十月。信長大和河内攝津ヲ定メテ。成事ヲ義昭ニ告ケ。請フテ。其地ヲ幕府ノ功臣ニ分チ。一モ自ラ取ル所ナシ。是時ニ當テ。京畿ノ將士。調ヲ信長ニ執リ。軍門市ノ如シ。詔シテ義昭ヲ征夷大將軍ニ任シ。信長ヲ從四位下ニ敍シ。左兵衛督ニ任ス。信長辭シテ拜セス。乃チ從五位下ニ敍シ。彈正忠ニ任ス。信長即日兵ヲ釋キ。畿内ノ關塞ヲ撤シ。以テ行路ニ便ス。遠近悅服ス。信長乃チ岐阜ニ歸ル。十二年。信長京師ニ入リ。

幕府ヲ拓修シテ。義昭ヲシテ居ラシメ。又村井貞勝等ニ諭シテ曰ク。應仁以來。天下大ニ亂レ。王室衰微シ。宮闕廢ス。凡ソ王土ニ居リ王臣タル者。誰カ嗟悼セサラン。信長夙ニ修學ノ志アルモ。兵亂倥傯。延テ此ニ至レリ。今畿内粗定アル。當ニ禁内ヲ修メテ帝座ヲ安スヘシト。乃チ木下秀吉ヲ留メテ京師ヲ護衛セシメ。遂ニ近畿諸國ヲ略ス。元龜元年。四月。信長、朝倉義景ヲ越前ニ攻ム。淺井長政兵ヲ稱ケテ義景ニ應ス。信長引テ還ル。九月。信長三好ノ黨ヲ攝津ニ攻ム。義景長政虚ヲ伺テ南上ス。信長還リ。擊テ之ヲ叡山ニ棲マシメ。使ヲ遣シ山僧ニ諭シテ曰ク。我ニ内應セヨ。否レハ中立倚ラサルヘシ。僧徒聽カス。北軍ヲ助ク。既ニシテ信長、義景長政ト和シ兵ヲ解ク。二年九月。信長將ニ叡山ヲ焚カントス。諸將其王城ノ鎮タルヲ以テ之ヲ止ム。信長曰ク。吾四海ヲ定メテ。王道ノ衰ヲ興サント欲ス。去歲。吾僧徒ニ諭スニ順逆ヲ以テス。而シテ彼服セス。務テ凶徒ヲ右ケテ。以テ王師ニ梗ス。是レ國賊ナリ。何ソ王城ヲ鎮スルニ在ランヤト。乃チ山ヲ圍テ之ヲ燔キ。悉ク僧徒婦女ヲ斬ル。中古以來。僧徒ノ凶暴ナル者はニ於テ漸ク漸盡ス。是歲皇宮成ル。初メ應仁而來。畿内諸道大ニ亂レ。輦轂荒廢シ。宮闕壞傾シ。荆棘ヲ束ネテ垣ト作ス。信長乃チ大ニ工役ヲ起シ。是ニ至テ成ル。殿堂門廡悉ク舊制ニ依ル。壯麗觀ル可シ。信長供御ノ田ヲ置カント欲シテ。寇賊ノ侵奪ヲ恐ル。乃チ權ニ若干金ヲ出シ。都下ノ商賈ニ貸シ。每月息ヲ收メ。以テ大内ニ奉ス。且ツ廷臣ノ爲メニ家計ヲ計畫シ。缺典ヲ擧ケ。廢職ヲ繼キ。品流ヲ甄チ。滯淹ヲ振ヒ。紀綱頽ル古ニ復ス。信長、將軍義昭ノ失行多キヲ病ヒ。上書シテ之ヲ諫メ。且ツ曰ク。信長ノ志。幕下ト心ヲ協セカヲ戮セテ。以テ王政ヲ興サント欲スルノミ。願クハ幕下讒言ヲ信スルナク。以テ先業ヲ恢弘セヨ。義昭納レス。遂ニ相嫌隙ス。天正元年。義昭兵ヲ擧ケテ信長ト戰ヒ。克クス。義昭降リ。遂ニ安藝ニ走ル。詔シテ其官爵ヲ削ル。是ニ於テ。織田氏遂ニ足利氏ニ代テ。令ヲ京師ニ出シ。

正親町帝永祿三年ヨリ後陽成帝慶長四年ニ至ル織田氏王事ニ勤メ及豐臣氏天下ヲ合一ス 一〇五

織田氏足利氏ニ代

戸租ヲ蠲キ。徭役ヲ免シ。窮民ヲ賑ハシ。節孝ヲ旌シ。村井貞勝ヲ所司代ト爲ス。是歲。八月ヨリ十一月ニ至ルマテ。淺井、朝倉、六角、三好氏ヲ滅シ。悉ク近畿ヲ平ラク。二年三月。信長入朝ス。從三位參議ニ任ス。是歲。信長使者ヲ四方ニ發シ。道里ヲ均クシ。行樹ヲ植エ。津梁ヲ通シ。關征ヲ蠲ク。四民之ヲ便トス。三年三月。信長入朝ス。廷臣ノ采田ヲ檢シ。其人ニ賣ル者ハ爲ニ之ヲ償還ス。五月。武田勝頼大舉シテ三河ニ入ル。徳川家康援ヲ請フ。信長赴キ援ケテ大ニ之ヲ破リ。三河ヲ定ム。七月。入朝ス。詔シテ昇殿ヲ聽シ。宴ヲ御前ニ賜ヒ。左大臣ニ超拜ス。信長固辭ス。九月。信長北伐シテ加賀越前ヲ定メ。其地ヲ將士ニ分賜ス。十一月。復タ入朝ス。即チ權大納言ニ拜シ。右近衛大將ヲ兼ヌ。四年。信長治ヲ近江ノ安土ニ移シ。四月。入朝ス。詔シテ二條城ヲ修テ之ニ館セシム。成ルニ及テ敢テ自ラ居ラス。請テ皇子誠仁親王ニ獻ス。十一月。信長正三位内大臣ニ進ム。五年十一月。更ニ從二位右大臣ニ任ス。六年正月。諸節會ヲ復ス。是ヨリ先。兵革相踵キ。朝儀廢缺ス。信長業ヲ興スニ至テ。王室ヲ崇敬シ。朝典ヲ復興ス。觀者感歎ス。既ニシテ信長佐々成政ヲシテ越中ヲ定メ明智光秀ヲシテ丹波ヲ略シ。羽柴秀吉ヲシテ播磨但馬ヲ取ラシム。九年八月。北畠信雄等伊賀ヲ定ム。十月。秀吉毛利氏ヲ伐テ因幡ヲ定ム。織田氏既ニ足利氏ニ代テ。近畿二十餘國ヲ定メタリ。而シテ足利氏制度廢地ノ後ヲ受ルヲ以テ。之ヲ振張シテ弊俗ヲ一新セント欲ス。是ニ於テ。法令嚴峻ナリ。一錢ヲ竊ム者ト雖モ斬ニ處ス。乃チ奸盜屏息シ。道路遺タルヲ拾ハス。行旅囊ヲ委シテ睡ル。是時西ニ毛利氏アリ。東ニ長尾武田二氏アリ。我ト境ヲ接シテ。未タ從服セス。北條氏ハ關東八州ヲ以テ内屬ヲ求ム。是ニ於テ。信長將ニ甲斐ニ事アラントス。十年二月。信長大舉シテ武田氏ヲ伐チ。三月。甲斐ニ入ル。徳川家康及北條氏政等兵ヲ以テ之ニ會シ。武田勝頼ヲ斬リ。甲斐、信濃、上野、駿河ヲ定ム。其地ヲ將士ニ分チ。瀧川一益ヲ關東ノ管領ト爲シ。徳川

法令嚴峻

家康ト共ニ長尾氏ヲ圖ラシメテ西歸ス。五月。羽柴秀吉備中ニ入テ。高松城ヲ圍ム。毛利輝元大舉シテ來リ救フ。秀吉信長ノ親ヲ援ハンコトヲ請フ。信長乃チ部將ニ命シテ先ツ發セシメ。繼テ進テ京師ニ至ル。是ヨリ先。信長ノ臣明智光秀反心アリ。而シテ信長之ヲ覺ラス。自ラ近臣百餘人ヲ以テ本能寺ニ館ス。子信忠妙覺寺ニ館ス。六月。光秀急ニ本能寺ヲ襲ヒ。信長ヲ殺シ。又信忠ヲ殺ス。信長尾張ニ起テ常ニ四方ヲ平定シ。忠ヲ天子ニ致スヲ以テ志ト爲シ。足利氏ノ爲ス所ヲ惡ムヲ以テ。己レ復タ征夷大將軍タラス。公廉ヲ獎用シテ。政偏私無シ。其能ク大功ヲ數歲月ノ間ニ立ツル者ハ。寔ニ勤王ノ志ヲ存シ。先皇ノ憲法ニ戻ラス。民心ノ望ム所ニ從ヘハナリ。然トモ時足利氏倫情ノ後ヲ承ケ。刑殺ヲ以テ威ヲ立テ、性亦猜忍ナルヲ以テ。終ニ殺逆ニ遭テ。其志ヲ終フルコト能ハス。深く惜ムヘキナリ。羽柴秀吉變ヲ聞キ。毛利氏ト和シ。師ヲ班シテ織田信孝ト兵ヲ併セ。光秀ヲ山崎ニ討テ大ニ之ヲ破ル。賊悉ク誅ニ伏ス。捷ヲ朝廷ニ奏ス。是時ニ當テ。秀吉威畿内ニ振ヒ。氣貌已ニ天下ヲ呑ム。四方ノ兵士多ク來附ス。八月。天皇秀吉ノ功ヲ嘉シ。詔シテ從四位下ニ敘シ。右近衛中將ニ任ス。秀吉辭シテ拜セス。諸將ト俱ニ。信長ノ孫秀信ヲ以テ信長ノ嗣ト爲シ。安土ニ居ラシム。十月。詔シテ秀吉ヲ從五位下左近衛少將ニ任ス。秀吉因テ信長ニ爵位ヲ追賜センコトヲ請ヒ。自ラ葬主ト爲テ之ヲ葬ル。是ヨリ庶事一ニ秀吉ニ決ス。織田信孝、柴田勝家等之ヲ嫉忌シ。遂ニ隙アリ。十一年四月。秀吉、勝家ト梁瀨ニ戰フ。勝家敗死ス。織田信雄岐阜ヲ圍ム。信孝走り死ス。五月。詔シテ秀吉ヲ從四位下參議ト爲ス。是ニ於テ。近畿粗定リ。山陽山陰ノ將士來テ去歲ノ盟ヲ尋キ。上杉氏徳川氏皆使ヲ遣シテ戰捷ヲ賀ス。秀吉既ニ天下ニ霸タルノ志アリ。謂ラク京師狹迫。漕運ニ便ナラス。且ツ邸第ヲ列スルノ地無シ。大阪ハ北大河ヲ帶ヒ西海水ヲ控ヘ。地勢宏壯。以テ七道ヲ管攝スヘシト。十一月。遂ニ大ニ大阪ニ城キ。既ニ成テ之ニ徙ル。十三

秀吉氣貌已ニ天下ヲ呑ム

正親町帝永祿三年ヨリ後陽成帝慶長四年ニ至ル織田氏王事ニ勤メ及豊臣氏天下ヲ合一ス 一〇七

秀吉關白
ト爲ル

年三月。秀吉正二位内大臣ニ任ス。秀吉奏ス。至尊春秋漸ク高ク。皇子齡不惑ニ近シ。宜ク禪代ヲ行フヘシト。敕シテ曰ク。可ナリト。秀吉乃チ仙宮ヲ造營ス。是日。秀吉大兵ヲ將テ南伐シテ南海ヲ定ム。七月。秀吉ヲ關白ト爲シ。姓ヲ豐臣ト賜フ。秀吉吏五人ヲ置テ政令ヲ奉行セシム。淺野長政、石田三成、増田長盛訟獄ヲ掌リ。長束正家錢穀ヲ掌リ。前田玄以僧祝ヲ掌ル。秀吉五人ヲ戒テ曰ク。大事ハ會議シテ之ヲ決セヨ。小事ハ必シモ然ラス。留滯アラシムル勿レ。贈賄ヲ納ルル勿レ。恩仇ヲ挾ム勿レ。訟獄ノ事ハ。貧富貴賤ト無ク一切ニ從事セヨト。是時ニ當テ。豐臣氏ノ歲入二百萬石。府庫之ニ稱フ。曰ク。吾獨リ自ラ封殖ス可ラスト。遂ニ令ヲ下シテ。金五千枚銀三萬枚ヲ諸將士ニ分チ。其軍費ヲ償フ。八月。秀吉北伐シテ。越前ニ入り。上杉景勝ト盟ヒ。遂ニ北陸ヲ定ム。十月。伊勢大神宮ヲ正殿ニ奉遷ス。初メ天武帝詔シ。定メテ二十年毎ニ兩宮ヲ改造シ。遷宮ノ儀ヲ行ヒ。著シテ永式ト爲シ。後世喪亂相尋キ王室衰替シテ。例ヲ舉ル能ハス。神宮類圯。典故修マラサル者久シ。是ヨリ先。右大臣信長奏請シ。經營悉ク舊例ニ復ス。未タ果サスシテ弑ニ遇フ。是ニ至テ。關白秀吉廣テ其功ヲ成ス。十四年二月。秀吉第ヲ内野ニ築キ。名ツケテ聚樂ト曰フ。將ニ天皇ノ幸ヲ請ヒ。諸侯ヲシテ之ニ朝セシメントスルナリ。九月。秀吉使ヲ遣シ。島津義久ヲ責テ曰ク。何ヲ以テ朝貢セサル。何ヲ以テ座シテ官爵ヲ受ル。何ヲ以テ隣國ヲ侵略スルヤ。宜ク速カニ入朝スヘシト。義久從ハス。是歲。七月。皇子誠仁親王薨ス。十一月。天皇位ヲ皇孫和仁親王ニ讓ル。

神宮ノ典
故ヲ修シ
遷宮ノ儀
ヲ行フ

後陽成院天皇。正親町帝ノ孫ナリ。天正十四年。十二月。詔シテ秀吉ヲ以テ太政大臣ニ任シ。從一位ニ敘ス。關白故ノ如シ。是ニ於テ。秀吉奏請シテ曰ク。臣島津義久ノ入朝ヲ徵ス。義久命ヲ奉セス。臣請フ自ラ將トシテ之ヲ伐タン。乃チ越中尾張以西三十七國ノ兵ヲ發シテ西伐シ。十五年五月。薩摩ニ入ル。義久出テ降り。西海平ラク。七月。凱旋

外教ヲ禁
ス

聚樂城誓
ミ

シテ太宰府ニ至リ。大ニ功罪ヲ論シ。九州ヲ分テ諸將ヲ封ス。時ニ大村氏私ニ西蠻ノ賊ヲ舍ス。之ヲ罰シテ賊二十餘人ヲ磔殺シ。鍋島氏ヲシテ外國互市ノ事ヲ監セシメ。天主教ヲ禁ス。蓋シ秀吉將ニ數百年ノ國亂ヲ一定セントス。故ニ外教ノ新ニ入テ人心ヲ誘惑センコトヲ恐ルルナリ。遂ニ大ニ西海ノ政令ヲ修メ。七月。京師ニ復命ス。天皇使ヲ遣シテ之ヲ迎勞ス。十六年四月十四日。天皇聚樂ニ幸ス。關白秀吉文武百官ヲ率キテ扈從ス。黎庶群聚シテ縱觀ス。父老或ハ流涕スル者アリ。曰ク。圖ラサリキ今日復タ太平ノ儀ヲ觀ントハ。即日享禮ヲ行フ。明日。秀吉早ク盛服シ。出テ御座ノ右ニ侍シ。盡ク天下ノ牧伯ヲ召シテ前ニ列セシム。内大臣信雄、大納言家康、右近衛少將以下次ヲ以テ進ミ。盟テ曰ク。皇恩ヲ奉戴シ。カヲ王事ニ竭シ。敢テ怠ルアル莫ケン。關白ノ令スル所。事大小ト無ク敢テ奉セサルアル莫ケン。斯盟ヲ渝フル者ハ。國神之ヲ罰極セント。天皇蹕ヲ駐ムルコト五日。奉獻ノ腆。供億ノ殷。蓋シ前古ヲ踰ニ。天皇大ニ樂シム。尋テ又金銀三十六萬五千兩ヲ文武官ニ分ツ。是時。秀吉ノ威命。幾ト天下ニ遍ネク。東北ノ豪傑。佐竹、里見、結城、那須、岩城、葦名、松前ノ諸族爭テ使幣ヲ修ム。秀吉其私鬪ヲ禁シテ朝覲セシム。獨リ北條氏政關東八州ニ據リ。伊達政宗陸奥ニ據テ。肯ヲ降ラス。十七年。秀吉屢々使ヲ遣テ氏政ニ諭シ。其入朝ヲ趣カス。氏政答ヘス。政宗モ亦命ニ應セス。秀吉大ニ怒リ。奏シテ氏政ヲ討タンコトヲ請ヒ。書ヲ氏政ニ遣テ曰ク。秀吉太政ノ任ヲ忝クシ。天子ヲ佐ケテ以テ亂逆ヲ定ム。叛者ハ伐テ。服者ハ撫ス。七道ノ豪傑靡從セサルハ莫シ。汝氏政險ヲ負ミカヲ恃テ。敢テ朝貢ヲ脩セス。天子ノ命ヲ輕蔑ス。凡ソ天地ノ際。一モ詔敕ニ違テ。誅討ニ漏ルル者有レハ。秀吉之ヲ恥ツ。明年吾將ニ王節ヲ操リ。諸軍ヲ率テ以テ汝氏政ノ罪ヲ正サントス。書至ル。氏政以テ意ト爲サス。十八年三月。秀吉戎服シテ入朝シ。節刀ヲ受ケテ拜辭シ。關ヲ出テテ馬ニ上リ。駿河越後以西四十五國ノ兵凡三十萬ヲ率

キテ東ス。四月。北條氏政ヲ小田原城ニ圍ム。是ニ於テ關以東風ヲ望テ降附シ。相馬、秋田、南部、津輕ノ諸族或ハ
 謁ヲ軍門ニ執リ。或ハ使ヲ遣シテ幣ヲ納レ。項背相望ム。伊達政宗乃チ大ニ懼レ。自ラ軍ニ至テ降ヲ請フ。秀吉之ヲ
 詰責シテ曰ク。我王命ヲ受テ天下ヲ經略ス。遐方絶域ノ人ト雖モ。來歸セサル莫シ。汝東北ニ屈強シ。兵數萬ヲ擁シ
 テ。未タ嘗テ一介ノ使ヲ發セス。葦名義廣心ヲ王室ニ歸ス。而ルニ汝擅ママニ之ヲ攻ム。是レ何ノ故ソ。政宗拜伏シテ
 罪ヲ謝ス。七月。氏政大ニ怖レテ降ヲ請フ。秀吉諸將ニ謂テ曰ク。吾此行。不廷ノ臣ヲ誅セント欲ス。今ニシテ之ヲ
 釋サハ。是レ信ヲ天下ニ失フナリ。吾氏政ヲ誅シテ其餘ヲ釋サント。乃チ之ニ死ヲ賜フ。秀吉其首ヲ覽テ。罵テ曰ク。
 汝王命ヲ輕シ。又敢テ我ヲ侮ル。今如何ソヤ。之ヲ京師ニ梟ス。乃チ八州ノ地ヲ擧テ德川氏ニ賜ヒ。又甲斐、伊勢、
 三河、遠江、信濃ヲ分テ有功ノ將帥ヲ封ス。遂ニ兵ヲ引テ東下シ。白河ニ至リ。蒲生氏郷ニ東北ノ鎮撫ヲ命シ。九月。
 京師ニ復命ス。是ニ於テ。海内盡ク定マル。初メ秀吉朝鮮ノ中古以來屬邦ノ禮ヲ缺クヲ憤リ。而シテ明亦政ヲ失フト
 聞キ。則チ朝鮮及明ヲ征シテ。盡ク我俗ニ化シテ。天朝ニ貢セシメント欲ス。乃チ書ヲ朝鮮ニ贈リ。明ヲ攻ムルノ前
 導タラシメントス。朝鮮王李昞答ヘス。十九年十二月。關白秀吉上書シテ骸骨ヲ乞ヒ。自ラ太閤ト稱シ。奏請シテ兵備
 ヲ修ム。文祿元年。四月。秀吉諸軍凡五十萬ヲ率テ肥前ニ次シ。浮田秀家ヲ以テ元帥ト爲シ。朝鮮ヲ伐ツ。王李昞出
 奔シ。秀家國都ニ入ル。先鋒ノ將攻テ國ノ極北ニ至リ。二王子ヲ拘シ。大ニ明ノ援軍ヲ破ル。二年五月。明、和ヲ請
 フ。之ヲ許ス。慶長元年。六月。軍ヲ旋ス。九月。明ノ使者伏見ニ至テ成ヲ行フ。明ノ冊書。爾ヲ封シテ日本國王ト
 爲スノ語アリ。秀吉勃然トシテ大ニ怒リ。冊書ヲ取テ之ヲ扯裂シ。罵テ曰ク、吾日本ヲ掌握ス。王ヲラント欲セハ則
 チ王タリ。何ソ髯虜ノ封ヲ待タンヤ。且ツ吾ニシテ王タラハ。天朝ヲ如何セン。乃チ使者ヲ逐ヒ。遂ニ西南四道ノ兵

海内盡ク
 定マリ朝
 鮮ノ役起
 ル

ヲ徵シテ。再ヒ西征ヲ命ス。三年。七月。秀吉病ム。德川家康ヲ召シテ之ニ諭シテ曰ク。外國未タ服セスシテ。吾此
 疾ニ罹ル。吾死セハ難將ニ作ラントス。吾今日天下ヲ以テ卿ニ託ス。卿我カ爲メニ努力セヨ。兒秀頼幼弱ナリ。亦卿
 カ保護ヲ煩ハス。家康固辭シテ退ク。是ニ於テ。大老奉行ヲ定ム。奉行五人。前ニ置ク所ノ如シ。德川家康、前田利
 家、毛利輝元、浮田秀家、上杉景勝ヲ五大老ト爲シ。又中老ヲ置テ庶事ヲ決セシム。片桐且元、小出秀正ヲシテ秀頼
 ニ傳タラシメ。密ニ之ニ囑シテ曰ク。吾レ人奴ヨリ起テ關白ニ至ル。孰カ國恩ニ非ランヤ。吾明ト兵ヲ構ヘ。禍結テ
 解ケス。吾深ク之ヲ悔ユ。彼レ吾死ヲ聞カハ。或ハ大擧シテ來リ報セン。國朝古ヨリ未タ嘗テ外國ノ侵辱ヲ受ケス。我
 時ニ及テ之ヲ受ケハ。吾深ク之ヲ恥ツ。是レ吾國ヲ家康ニ託スル所以ナリ。我家ノ存亡ニ至テハ未タ恤フルニ暇アラ
 サルナリ。然ト雖モ。家康必ス我ニ負カシ。汝輩沖子ヲ保護シテ。釁隙ヲ生セシムル莫レト。是月。奏シテ白銀ヲ獻シ。
 以テ天恩ヲ謝ス。八月。秀吉盡ク大老奉行以下ヲ會シテ誓ヲ爲シ。前田利家、秀頼ヲ護シ。德川家康政事ヲ總ヘ。以
 テ秀頼ノ長スルヲ俟タシム。又遺命シテ在韓ノ師ヲ召還シ。遂ニ薨ス。秀吉壟畝ノ中ニ長シ。教育ノ素無シト雖セ。
 天縱ノ宏才。群類ニ絶ス。是ヲ以テ能ク織田氏ノ業ヲ嗣テ。一統ノ效ヲ奏シ。遂ニ太平ノ基ヲ爲ス。且ツ其志亦王室
 ニ存ス。故ニ天下一人モ王命ヲ拒ミ朝觀セサル有レハ。則チ以テ己カ恥トシ。必ス其罪ヲ問フ。而シテ其師ヲ出スヤ。
 必ス奏請シテ然後發ス。怒ヲ明ノ封冊ニ發シ。國事ヲ德川氏ニ託スル等ノ事ヲ見ルニ。畢生ノ業。敢テ私ニ徇フ者ニ
 非ス。則チ其蓋世ノ英雄タルハ論ナク。勤王ノ勳。撥亂ノ功。亦甚タ大ナリト謂フ可シ。四年正月。前田利家、秀頼
 ヲ奉シテ大坂ニ徙リ。德川家康伏見ニ居テ事ヲ視ル。五奉行更々兵ヲ遣テ城ヲ守ル。皆秀吉ノ遺命ノ如クス。閏三月
 前田利家卒ス。而シテ家康ノ威權獨リ熾ナリ。四月。秀吉ノ撥成ル。詔シテ豐國明神ト號ス。九月。家康徙テ大坂ノ

秀吉勤王
 ノ勳大ナ
 リ

西城ニ居ル。是ヨリ勢威滋々盛ニシテ。諸侯多ク之ニ服事ス。是ニ於テ。豊臣氏ノ業層ムニ幾シ。

大政紀要

第十四卷

上編總記十四

止第七册

大政紀要上編

總記十四

後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル徳川氏天下ノ事ヲ制ス

後陽成院天皇。慶長四年。内大臣徳川家康既ニ豊臣秀吉ニ代テ。權ニ天下ノ事ヲ決シ。威權日ニ熾ナリ。是時ニ當テ。天下ノ牧長豪傑。人々自立ノ志アリ。而シテ家康ヲ忌ム者亦尠ナカラス。七月。征韓ノ諸將及ヒ前田、上杉、毛利、浮田氏等。皆封國ニ就ク。而シテ上杉景勝陸奥ニ據テ叛ス。慶長五年。五月。家康大舉シテ東征シ。行テ下野ニ至ル。石田三成、浮田秀家等家康ノ東征ヲ時トシ。亂ヲ大坂ニ作シ。檄ヲ諸侯ニ移シテ。家康ヲ除カンコトヲ圖ル。西國ノ諸將之ニ黨スル者多シ。九月。西軍凡ソ十八萬。美濃ニ入り大垣ニ據ル。家康乃チ軍ヲ還シ。諸將ヲ率テ赤坂ニ至ル。是時ニ當テ。天下ノ兵。美濃以東ハ概ネ徳川氏ニ屬シ。以西ハ概ネ西軍ニ屬ス。所在ノ豪傑方隅ニ割據スル者。皆其成敗ヲ觀望ス。既ニシテ大ニ關原ニ戰ヒ。西軍潰エ。渠帥擒ニ就ク。四方ノ豪傑。之ヲ聞テ震懼セサル莫シ。上杉景勝及ヒ其他西軍ニ應スル者。皆降ヲ請ヒ。遠近悉ク屏息ス。旬月ノ間。六十餘國盡ク徳川氏ニ服ス。家康乃チ大坂ニ入ル。十二月。家康其子秀忠及ヒ諸ノ親信ト議シテ曰ク。禍亂略定ル。當ニ天下ヲ裂テ有功ヲ賞スヘシト。乃チ關東

全國徳川氏ニ服ス

後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル徳川氏天下ノ事ヲ制ス

封建ノ勢ヲ論ス

八國ヲ以テ根本ノ地ト爲シ。自ラ江戸城ニ居リ。越前、尾張、近江、伊勢ヲ以テ宗族舊臣ヲ封シ。其餘ハ盡ク外藩ト爲シ。諸降附ノ國ハ其嗣ヲ立ツ。蓋シ封建ノ勢ヲ我邦ニ成スコト。其來ル遠シ。在昔大權上ニ在リ。守宰治ヲ爲スノ時ニ於テハ。未タ封建ノ勢有ラサルナリ。源氏霸府ヲ鎌倉ニ建テシヨリ。國司ニ守護ヲ置キ莊園ニ地頭ヲ置キ。以テ盜賊ニ備フ。而シテ封建ノ勢昉レリ。北條氏其制ニ因テ猶ホ之ヲ考課易置ス。而モ往々之ヲ子孫ニ傳ヘ。漸ク封建ノ勢ヲ成ス。建武中興ノ後。足利氏務メテ大封ヲ以テ將士ニ啗ハシ。以テ朝權ヲ撓ハマス。而シテ封建ノ勢全ク成ル。既ニシテ其政衰ヘ。權臣難ヲ構ヘ。諸侯相吞滅シ。其勢削ル可ラス。終ニ天下ノ亂ヲ爲ス。織田氏崛起スルニ及テ。小ヲ并セ大ヲ略シ。盡ク暴ヲ鋤テ功ニ代フ。未タ成ラスシテ踏ル。豐臣氏繼テ起リ。天下ヲ混一シ。降ヲ存シ附ヲ撫シテ。甚ク殺削ヲ加ヘス。其没スルニ及テ。海内復タ分崩ス。此ニ由テ之ヲ觀レハ。封建ノ勢。源氏ニ始テ足利氏ニ成ル。足利氏未タ其利ヲ受ケスシテ。其弊ニ仆レ。織豊二氏其弊ヲ承ケテ。未タ之ヲ裁スルニ及ハス。徳川是ニ至テ前弊ヲ鑑ミテ。能ク之ヲ裁置セリ。是ニ於テ。家康秀忠ヲシテ入朝シテ成事ヲ告ケシム。是ヨリ先。秀吉嘗テ廷臣ト儲貳ヲ議シ。庶皇子良仁ヲ冊シテ親王ト爲シ。預シメ意ヲ之ニ屬ス。而シテ天皇ノ意ニ非ス。是ニ於テ。家康ニ諮詢ス。家康對テ曰ク。是レ臣カ敢テ議スル所ニ非ス。唯陛下下心ニ之ヲ裁セヨ。天皇乃チ皇嫡子政仁ヲ立テ親王ト爲ス。六年正月。朝廷家康ノ勳勞ヲ賞セント欲シ。擬スルニ大將軍ヲ以テス。家康固辭ス。十一月。家康江戸ニ歸ル。時ニ天下ノ牧長。江戸ニ觀セント請フ。辭シテ許サス。家康方ニ銳意治ヲ求ム。儒者ヲ延テ太平ノ策ヲ諮問シ。又命シテ經籍ヲ刊行ス。是ヨリ文教大ニ行ハル。是歲。家康供御ノ地及ヒ諸司百官ノ采邑ヲ京師ノ四邊ニ疆理シ。關東ノ奉行及ヒ京都ノ所司代ヲ定メテ。庶務ヲ綜理ス。七年正月。家康從一位ニ陞リ。秀忠正二位ニ進ム。前田利長請フテ江戸ニ

諸侯盡ク江戸ニ觀ス

觀シ。以テ天下ノ率ト爲ントス。家康之ヲ京師ニ避ケ。秀忠ヲシテ之ニ當ラシム。秀忠之ヲ板橋ニ迎フ。是ニ於テ。天下ノ勢大ニ定マリ。七道ノ將士皆江戸ニ會ス。而シテ豐臣秀頼獨リ攝河泉六十萬石ヲ食ムノミ。八年二月。詔シテ家康ヲ征夷大將軍ニ任シ。右大臣ニ進メ。淳和獎學兩院別當ヲ兼ネ。源氏長者ニ補シ。隨身兵仗ヲ賜フ。家康入朝シテ命ヲ拜ス。天皇饗體シ。之ヲ勞シテ曰ク。天下ノ亂久シ。汝能ク之ヲ略定ス。朕汝カ功ヲ勤トシ。乃祖ノ職ヲ舉ケシム。宜ク我師ヲ統ヘ。以テ王室ヲ鎮護スヘシ。家康稽首シテ曰ク。家康不才ト雖モ敢テ王命ヲ服膺セサランヤ。禮畢テ出ツ。三月。西道ノ牧長盡ク江戸ニ觀ス。九年。藤堂高虎議ヲ倡ヘ。諸侯ヲシテ邸ヲ江戸ニ造リ。質ヲ置カシム。十一年四月。家康將軍ヲ辭ス。詔シテ秀忠ヲ内大臣ニ任シ。征夷大將軍ト爲ス。五月。家康奏シテ禁内ヲ修拓ス。十二年。家康駿府ニ城キ。尋テ此ニ老ス。初メ永享中。足利義教琉球ヲ島津忠國ニ賜ヒ。世薩摩ニ來貢ス。既ニシテ國內多難。久シク使聘ヲ絶ツ。十四年。島津家久其來貢ヲ責ム。國王尙寧命ニ從ハス。家康乃チ家久ニ命シテ之ヲ征セシメ。六旬ニシテ平ラク。幕議因テ琉球ヲ家久ニ賜フ。是ヨリ琉球藩屬ノ國トナル。八月。伊勢兩宮成ル。九月。神宮ニ奉幣シ。皇太神宮及ヒ豐受太神宮ヲ正殿ニ奉ス。爾後兩宮ノ改造。限ルニ二十一年ヲ以テシ。立テ永典ト爲ス。是歲。諸侯ノ江戸ニ參觀スル者。期年ニシテ交代スルノ制ヲ定ム。是ヨリ先。西國ノ諸侯競テ城隍ヲ修メ。戰艦ヲ造ル。家康聞テ悅ヒス。是ニ於テ。之ヲ禁シ。其巨艦ヲ没ス。十五年二月。天皇詔シ。豫シメ三月ヲ以テ位ヲ讓ラント期ス。所司代ニ命シテ。儀衛ヲ設ケシム。板倉勝重私ニ奏シテ曰ク。將軍女ヲ亡ヒ。悲傷殊ニ甚シ。請フ以テ期ヲ延ヘント。天皇憐ヒス。初メ織田豐臣二氏。務メテ皇威ヲ宣揚ス。家康亦勉メテ其爲ヲ學ヒ。以テ人心ヲ收攬ス。大勢既ニ定マルニ及テ。汲々トシテ諸侯ヲ籠絡シ。又漸ク朝權ヲ撓マサンコトヲ謀ル。故ニ板倉勝重、一小牧司ニシテ。敢テ

琉球藩屬トナル

倒幕ノ機
初テ兆ス

此大不敬ノ語ヲ作ス。當時ノ事情以テ觀ルヘシ。後二百五十年。尊王倒幕ノ論天下ニ起テ。而シテ徳川氏ノ業終ニ熄ム者ハ。其機亦全ク此際ニアリトス。家康又毎ニ諸侯ヲ困弊セシメ。以テ其兵力ヲ削殺セントス。故ニ凡ソ土木ノ事アレハ。必ス命シテ役ヲ助ケシム。福島正則嘗テ池田輝政ニ私シテ曰ク。頻年ノ土木。財力俱ニ困ス。公ハ親密ナリ。盍ソ吾輩ノ爲ニ緩頰之ニ説カサル。家康之ヲ聞テ謂テ曰ク。役ニ勸ム者ハ。丞カニ國ニ就キ。壘ヲ修メ池ヲ深シ。以テ太旆ノ至ルヲ俟テ。正則等大ニ懼ル。初メ秀吉、多ク金ヲ大坂ニ藏シ。以テ軍須ニ備フ。是ニ至テ。家康秀頼ニ諭シテ方廣寺ヲ再造セシム。費ス所鉅萬ナリ。十六年二月。將ニ立太子ノ儀有ントス。事アリテ遽ニ之ヲ停ム。是ヨリ先。朝旨家康ヲ以テ太政大臣ト爲サント欲ス。之ヲ辭シ。菊桐ノ章ヲ賜フ。亦受ケス。三月。天皇位ヲ政仁親王ニ讓ル。後水尾院天皇。後陽成帝ノ第三子ナリ。慶長十六年。四月。家康入朝シテ即位ヲ賀ス。五月。家康列侯ニ命シテ。皇宮ヲ修メ供御ノ田ヲ奉ス。又御府亡失スル所ノ祕籍寶器ヲ檢シ。其人間ニ流傳スル者ヲ搜索シ。悉ク之ヲ獻ス。是時ニ當テ。西南ノ海外五市ヲ乞フ者二十餘國ナリ。乃チ長崎ヲ以テ市場ト爲シ他所ニ泊スルヲ禁ス。文祿中。外征多事ヲ以テ。天主教ノ禁頗ル弛ヒ。流傳漸ク甚シ。是ニ於テ。洋人某變ヲ上テ曰ク。洋教ヲ倡フル者皆非望ヲ覬覦スト。幕府乃チ天主教ノ禁ヲ嚴ニシ。其種ヲ檢シテ盡ク之ヲ逐フ。十八年正月。家康復タ三十四藩及ヒ大坂ニ命シテ皇宮ヲ修セシム。十九年。秀頼既ニ長ス。大坂ノ群臣扶テ以テ舊業ヲ復セント欲ス。而シテ家康必ス之ヲ除カント欲ス。事ニ因テ秀頼ノ傳小出秀正ヲ斥ケシメ。又計テ片桐且元ヲ逐ハシム。是ニ於テ。或ハ之ヲ驕ラシメ。或ハ之ヲ怵レシム。唯己レヨリ發スルヲ難カリ。彼ヨリ事ヲ動カサンヲ幸カフ。是ニ於テ。大坂自ラ安セス。竊カニ金帛ヲ散シテ士ヲ募ル。十月。所司代板倉勝重之ヲ覘ヒ知リ。以テ家康ニ報ス。幕府乃チ令ラ天下ニ下シテ大坂ヲ討ス。是時ニ當テ諸侯

皆家康ニ服シ。復タ豊臣氏ヲ扶クル者無シ。而シテ關ヶ原ノ敗後所在ニ潛匿スル者。若クハ諸國亡命ノ者。先ヲ爭テ大坂ニ聚集シ。號シテ十萬ト稱ス。十一月。家康遂ニ將軍秀忠ト。兵凡ソ五十萬人ヲ率テ大坂ヲ圍ミ。攻テ諸寨ヲ拔ク。既ニシテ間使ヲ遣シテ和ヲ議セシム。秀頼遂ニ和ヲ請フ。家康之ヲ許シ。城中ノ諸客兵ヲ逐ヒ。城外ノ周池ヲ填メシム。蓋シ家康已ニ秀吉カ託孤ノ誼ニ負ケリ。今又急ニ秀頼ヲ除カハ。或ハ物議ヲ生センコトヲ恐ル。乃チ故ラニ之ヲ緩ニシ。漸クニシテ大坂ノ勢ヲ殺キ。且ツ列侯ノ嚮背ヲ觀ント欲スルナリ。是月。家康入朝ス。上皇慰藉甚タ篤シ。命シテ朝廷ノ爵位ヲ正シ。諸ノ節會ヲ興スコトヲ議セシム。元和元年。正月。家康駿府ニ歸ル。諸侯皆罷テ國ニ就ク。二月。秀忠江戸ニ歸ル。秀頼復タ潛ニ檄ヲ傳ヘ兵ヲ募リ。十二萬人ヲ得。四月。板倉勝重報シテ曰ク。大坂ノ募兵前ニ倍スト。家康笑テ曰ク。多々益、可ナリ。必スシモ禁スルコト勿レト。終ニ令ラ諸侯ニ下シテ大坂ヲ攻ム。蓋シ家康天下不平ノ士人ヲ一網ニ打盡セント欲スルナリ。是ニ於テ。城中大ニ戰備ヲ議ス。或ハ速カニ京師ニ入り。天子ヲ挾テ以テ四方ニ號令スルノ議ヲ建ツ。幕府固ヨリ此ヲ恐ル。乃チ間ヲ城中ニ行テ之ヲ沮ム。既ニシテ。圍合ス。家康、秀忠ト諸將ヲ部署シテ曰ク。事竟ニ意ノ如シト。既ニ戰ヒ城陷ル。秀頼降ヲ乞フ。聽サス。秀頼自殺ス。家康乃チ大ニ索メテ豊臣氏ノ族ヲ殲ス。天正十一年。秀吉治ヲ此ニ移セシヨリ三十七年ニシテ豊臣氏亡フ。家康乃チ入朝シテ成事ヲ告ク。家康已ニ豊臣氏ヲ滅シ。天下復タ顧慮スヘキ者無シ。乃チ嚴ニ列侯ヲ約束セント欲ス。林信勝等ト貞永建武ノ式目ヲ參考シテ新式ヲ定メ。七月ヲ以テ諸侯ヲ伏見ニ會シテ之ヲ頒ツ。其略ニ曰ク。文武ノ道兼修メサルヘカラス。會同時ヲ以シ、驕從節アルヘシ。上下衣服ノ制ヲ紊ル勿レ。私ニ城ク母レ。姦宄ヲ庇スル母レ。捕逃ヲ萃ムル母レ。諸國ノ民其所ヲ移ス勿レ。此ノ如キ者十三條ナリ。蓋シ家康ノ政略。概ネ模型ヲ賴朝及ヒ北條氏ノ爲ス所

新式ヲ定ム

豊臣氏亡フ

後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル徳川氏天下ノ事ヲ制ス

ニ取り。而シテ新ニ機軸ヲ出シ。其未タ及ハサル所ヲ裁ス。故ニ列侯皆屏息シテ。敢テ復タ衝ヲ争フノ心アル無シ。家康又關白藤原昭實等ト議シ。朝廷ノ式ヲ撰ミ。奏請シテ之ヲ頒ツ。其略ニ曰ク。天子宜ク寛平ノ遺戒ニ因リ。専ラ古道ヲ學ヒ。傍ラ和歌ヲ習フヘシ。曰ク。見任三公ノ位次親王ノ上ニ在ルヘシ。曰ク。武家ノ官位ハ僉公家ノ員外ト爲ス。曰ク。朝紳ノ繼嗣必ス同姓ヲ取ルヘシ。曰ク。諸ノ僧官宜ク濫授スヘカラス。此ノ如キ者十七條ナリ。蓋シ家康前代將家ノ王室ヲ崇マスシテ。終ニ其祚ヲ永クセサルヲ見ルヤ。乃チ婉委ノ政略ヲ以テ。漸ク朝權ヲ撓ハメ。又之ヲ苟安ノ途ニ導テ。其力ヲ弱ハムルヲ謀ルナリ。而シテ務テ恭順ヲ粧ヒ。圭角ヲ露ハサス。朝廷ノ特權ニ於テハ。嘗テ傷ツクルコト無シ。是ヲ以テ上下皆籠牢スル所ト爲レリ。且ツ朝臣皆應仁以來ノ大亂ニ懲リ。關東勢威ノ日ニ熾ナルヲ見テ。氣息ヲ屏メテ。敢テ復タ奮然トシテ興復ノ策ヲ贊畫スル者無シ。然トモ天下尊王ノ道。固ヨリ絶滅セス。此後山縣大貳等幕威熾盛ノ際ニ起テ。尊王倒幕ノ議ヲ倡ヘ。幕府之ヲ目スルニ亂賊ヲ以テシ。之ヲ罪スルニ嚴刑ヲ以テスト雖モ。其音吐遂ニ志士ノ腦髓ヲ刺衝シ。遙カニ維新前ノ尊攘論ヲ喚起シ。徳川ノ業是ニ於テ已メリ。則チ所謂國體ハ人情ノ因ル所ニシテ。治體ハ決シテ國體ニ戻ルコト能ハサルノ理昭然タリ。是冬。天下盡ク平クヲ以テ。家康五畿七道ニ令シ。諸ノ壘砦ヲ毀タシメ。又使ヲ發シテ諸國ヲ巡察セシメ。定メテ三歳ニ一巡セシム。是歳。老中職ヲ置キ天下ノ諸政ヲ執ラシム。二年。家康病ム。天皇使ヲ駿府ニ遣ハシ。就テ家康ヲ太政大臣ニ拜ス。家康自ラ起タサルヲ知り。列侯ヲ召シ諭シテ曰ク。吾且暮ノ人ノミ。吾歿スルノ後。若シ將軍政ヲ失ハハ。其器ニ適フ者宜ク代テ大政ヲ執ルヘシ。天下ハ一人ノ天下ニ非ラス。吾胡ソ地下ニ憾ミンヤト。既ニシテ秀忠ヲ召シテ曰ク。我已ニ諸侯ヲ諭シテ將軍政ヲ失ハハ善者之ヲ取レト曰ヘリ。汝政事ヲ慎ミ。以テ守成ノ業ヲ建ヨ。天下若シ命ニ方フ者アラハ。親戚勳

治體ハ國體ニ戻ルコト能ハス

舊ト雖モ。宜ク速ニ誅伐ヲ加フヘシト。乃チ薨ス。三年。詔シテ東照大權現ノ號ヲ賜ヒ。正一位ヲ贈ル。是ヨリ徳川氏歴世敍任官位ノ例。概ネ世子タル時正三位ニ敍シ。大納言ニ任シ。大將軍ヲ襲クニ及テ。正二位ヨリ從一位ニ進ミ。内大臣ヨリ左右大臣ニ累遷シ。薨スルニ及テ。正一位太政大臣ヲ贈リ。諡ヲ賜フ。其軍職帶ル所皆同シ。五年。始テ大坂ノ城代城番ヲ置ク。是ヨリ京都所司代ト竝ニ京畿ヲ鎮スルコト。殆ト北條氏ノ兩六波羅府ヲ置テ。上國ヲ制スルノ略ニ似タリ。六年六月。將軍秀忠女和子ヲ禁内ニ納レ。女御ニ備フ。後中宮ニ進ム。九年七月。大將軍秀忠其子家光ヲ以テ入朝ス。秀忠大將軍ヲ辭ス。詔シテ家光ヲ征夷大將軍ニ拜ス。家光聰明英決ナリ。家康秀忠ノ世。諸臣藩各自偃蹇シ。其會同スル者ハ將軍之ヲ郊迎セリ。十月。家光諸侯ヲ江戸ニ召シ。自ラ諭シテ曰ク。我祖、卿等ノ力ニ賴テ。天下ヲ定ム。且ツ其嘗テ比肩同等ナルヲ以テ。故ニ禮待ヲ加ヘ。敢テ譜第將士ニ比セス。我身ニ至テハ。襁褓ヨリ四海ヲ統領ス。先世ト同カラサル者アリ。今ヨリ卿等ヲ待スルコト。當ニ譜第ニ同クスヘシ。若シ心ニ厭カスンハ。各、國ニ之キ去就ヲ決スヘシト。列侯頓首シテ命ヲ聽ク。是ヨリ徳川氏ノ權勢益々定マル。而シテ其皇室ニ事ヘテ恭順ヲ表スルハ。則チ故ノ如シ。寛永三年秋。秀忠及ヒ家光入朝ス。詔シテ秀忠ヲ太政大臣ト爲シ。家光ヲ左大臣ト爲ス。九月。天皇二條城ニ幸ス。秀忠家光乘輿ヲ奉迎シ。諸侯ヲ率キテ之ヲ饗ス。六年十一月。天皇遽ニ位ヲ興子内親王ニ讓ル。

徳川氏所出ノ女帝即位ス

明正院天皇。後水尾帝ノ女。母ハ太政大臣徳川秀忠ノ女ナリ。時ニ年七歳。孝謙帝以後殆ト一千年ニシテ始テ女帝アリ。而シテ徳川氏ノ出ナリ。顧フニ徳川氏既ニ大政ヲ專ニシ。今又幼沖ノ女帝ヲ擁立シ其外戚タリ。是レ源賴朝ノ未タ爲ササル所ナリ。且ツ彼レ天下兵馬ノ大權ヲ掌握ス。則チ藤原氏ノ盛時ト雖モ。遠ク及フ能ハス。然リ而シテ皇室

後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル徳川氏天下ノ事ヲ制ス

ノ特權ハ。確乎トシテ動カス可ラス。將軍愈恭順ナル者ハ。則チ天憲ノ犯ス可ラサルノ一證トス。八年。幕府始メテ少老及ヒ副老中ヲ置キ。雜事ヲ掌ラシム。九年。幕府始テ若年寄ヲ置ク。六月。武家ノ制度十九章ヲ定ム。又諸侯會同ノ期ヲ定メテ。期スルニ四月ヲ以テス。十一月。幕府始メテ評定所ヲ建ツ。尋テ諸侯及ヒ陪臣ノ衣服冠冕輿馬ノ制ヲ定メ。之ヲ天下ニ頒ツ。又始メテ寺社奉行ヲ置ク。十四年冬。耶蘇教ノ徒肥前島原ニ據リ。民ヲ煽シテ亂ヲ作ス。幕府將ヲ遣リ。西國ノ諸侯ヲ率テ之ヲ討セシム。十五年ニ至テ悉ク之ヲ平ラク。是ニ於テ。申ネテ耶蘇教ヲ嚴禁ス。是ヨリ幕府外交ヲ厭フコト益甚タシ。十六年。幕府始テ大老ヲ置キ。大議ニ參セシム。十八年。勘定奉行ヲ置キ。金穀ヲ掌ラシム。又譜代諸侯ノ交代ヲ定メ。期スルニ六月ヲ以テス。其關以東ニ至ル者ハ。半年ヲ以テ更期ト爲ス。二十年十月。天皇位ヲ皇太弟紹仁親王ニ讓ル。

皇子ヲ日
光山ノ座
主ト爲ス

後光明院天皇。後水尾帝ノ第三子ナリ。正保二年。家光ノ請ニ因テ。使ヲ遣シ幣ヲ日光山家康ノ廟ニ賜フ。後以テ恒例ト爲ス。又宮號ヲ賜ヒ。東照宮ト號シ。守澄法親王ヲ日光山ノ座主ト爲シ。東叡山ヲ兼掌セシメ。輪王寺宮ト稱ス。親王ハ後水尾上皇ノ第四子ナリ。是ヨリ皇子相繼テ日光ノ座主ニ補シ。必ス之ヲ江戸ニ置ケリ。蓋シ德川氏ノ志ナリ。是ヨリ先。上皇不豫ナリ。天皇親ラ之ヲ觀セント欲シ。所司代板倉重宗ヲ召シテ之ヲ命ス。重宗奏シテ曰ク。觀體ハ大儀。幕府ノ命ヲ聞クニ非サレハ不可ナリ。天皇色ヲ作シテ曰ク。然ハ即チ宜ク長廊ヲ構ヘ。禁垣ヨリ直ニ仙宮ニ接シ。複道ヨリ往來センノミト。遂ニ長廊ヲ構ヘテ親觀ス。慶安二年秋。後水尾上皇修學寺ニ幸ス。初メ離宮ヲ營ムヤ。宮女及ヒ廷臣ヲシテ往テ之ヲ督サシム。世人或ハ上皇潛幸スト謂フ。板倉重宗入テ奏シテ曰ク。臣聞ク。上皇離宮ニ微行スト。若シ果シテ實ナラハ。則チ之ヲ幕府ニ聞セン。上皇曰ク。朕決シテ此事無シ。或ハ訛傳ニ出ルノミ。以テ意

ト爲スコト勿レト。事因テ止メリ。當時幕府ノ朝廷ニ於ケル以テ觀ルヘシ、四年四月、征夷大將軍家光薨ス。子家綱繼キ。尋テ征夷大將軍ニ任ス。是ヨリ先。駿河ノ人由井正雪幼ニシテ大志アリ。一日史ヲ讀テ奮激スル所アリ。去テ江戸ニ遊ヒ。楠氏ノ後裔ト稱シ。兵法ヲ教授ス。弟子日ニ進ム。正雪節ヲ折テ人ニ交リ。志士數千人ヲ翕合シ。一時ニ京都江戸及ヒ駿河ニ起リ、幕府ヲ倒シテ天子ヲ奉セント圖リ。將ニ將軍ノ喪ニ乘シテ事ヲ舉ケントス。衆ヲ會シテ期ヲ約シ。自ラ駿河ニ赴ク。既ニシテ事露ル。正雪覺テ自殺ス。幕府悉ク其徒ヲ殺ス。承應元年。八月。江戸ノ處士別木某等亦密ニ幕府ヲ倒サンコトヲ謀ル。幕府捕ヘテ之ヲ磔ス。三年九月。天皇痘ヲ患フ。幕府醫山脇道策ヲシテ湯藥ニ侍セシム。天皇素ヨリ英明ニシテ學ヲ好ミ。大義ニ通ス。因テ肯セスシテ曰ク。朝ニ典藥アリ。朕ニ於テ足レリ。何ソ手ヲ外人ニ假ランヤ。固ク請テ之ヲ奉ス。天皇暴ニ崩ス。皇太弟良仁親王立ツ。

後西院天皇。後水尾帝ノ第七子ナリ。寛文二年冬。將軍家綱、松平某板倉某ヲシテ入テ讓位ノ事ヲ議セシム。三年正月。天皇位ヲ皇太弟識仁ニ傳フ。蓋シ天皇皇子アリ。而シテ位ヲ太弟ニ傳フ。何ノ所以ナルヲ知ラス。

靈元院天皇。後水尾帝ノ十六子ナリ。寛文三年。八月。將軍家綱武家法令二十四條ヲ頒ツ。延寶八年。五月。大將軍家綱疾ム。大老酒井忠清建議シテ鎌倉ノ故事ヲ援キ。親王ヲ迎ヘテ之ヲ奉セント欲ス。老中堀田正俊之ヲ爭ヒ。議乃チ止ム。老中更ニ之ヲ紀伊尾張水戸ノ三家ニ謀ル。德川光圀水戸公館林參議綱吉ヲ立テント請フ。家綱之ニ從フ。綱吉ハ家綱ノ弟ナリ。乃チ館林ヨリ入テ後ヲ承ケ。從二位權大納言ニ任ス。既ニシテ、家綱薨ス。八月。詔シテ綱吉ヲ征夷大將軍トナス。天和三年。二月。親王朝仁ヲ立テ皇太子ト爲ス。後小松天皇ノ後ヨリ東宮ヲ起ササルモノ十三世。是ニ至テ此典ヲ修ム。七月。幕府武家法則十條ヲ頒テ。舊章ヲ潤色ス。貞享四年。三月。天皇位ヲ皇太子朝仁ニ讓ル。

立太子ノ
典ヲ興ス

後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル德川氏天下ノ事ヲ制ス

大嘗會ノ典ヲ興ス

陵墓ヲ修ム

東山院天皇。先帝ノ子ナリ。貞享四年。十一月。大嘗會ヲ行フ。後柏原帝ヨリ以後。此典ヲ學ル事能ハサルモノ百數十歳。此ニ至テ之ヲ修ム。元祿七年。四月。詔シテ加茂兩祠ヲ祭ル。後醍醐帝ノ朝此典ヲ廢セシヨリ三百六十年。是ニ於テ始テ修ム。時ニ將軍綱吉學ヲ好ミ。舊典ヲ修メ。大ニ太平ヲ潤飾ス。而シテ稅政亦少カラス。國帑竭乏ス。嘗テ日光山ニ謁セント欲シ。之ヲ老中ニ謀ル。老中曰ク。日光ノ行費十萬金ヲ要ス。今殿下施與ヲ好ミ。國用匱乏ス。十萬ノ財遽カニ辨シ易カラス。綱吉流涕シテ曰ク。我海内ヲ統理シテ。數日ノ行ヲ辨スル能ハサル耶ト。因テ樂マサル者累日。老中之ヲ憂ヒ。遂ニ萩原重秀等ノ策ヲ用ヒテ。惡貨ヲ鑄。酒征ヲ摧シ。又麾下ノ士ノ封ヲ改メントス。而シテ百姓益困ミ。幕府ノ財政是ヨリ細ス。時ニ歷世天皇ノ陵墓。遠近諸處ニ散在シ。歷年ノ久シキ。毀壞スル者十ニ九ナリ。或ハ其所ヲ識ラサル者アルニ至ル。綱吉之ヲ憂ヘ。奏請シテ之ヲ修ム。寶永二年。三月。綱吉供御ノ料ヲ益奉シ。尋テ又上皇供御ノ田ヲ益奉ス。四年八月。綱吉敕ヲ奉シテ東宮ヲ造ル。五年二月。皇子慶仁親王ヲ立テ皇太子ト爲ス。六年。是ヨリ先。綱吉大ニ老中柳澤吉保ヲ寵シ。甲斐ノ國主ト爲ス。德川氏ノ故事。甲斐駿河ハ將軍ノ親族ニ非レハ封スルコトヲ得ス。吉保特命ヲ以テ封ヲ受ク。人皆之ヲ異トス。是ニ至テ。綱吉將ニ世子家宣ヲ廢シ。吉保ヲ甲駿百萬石ニ封シ。以テ幼兒ノ傳ト爲サントス。議粗定マリ。日ヲ刻シテ發セントス。夫人藤原氏之ヲ憂ヒ。密ニ井伊直興ト謀リ。一夜遽カニ綱吉ノ寢室ニ入ル。綱吉暴カニ薨ス。是ニ於テ。家宣嗣キ。柳澤吉保ヲ罷メ。諸近侍ヲ黜ケ。令ヲ下シテ前將軍ノ弊政ヲ罷ム。五月。詔シテ家宣ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス。六月。天皇位ヲ皇太子慶仁ニ讓ル。中御門院天皇。先帝ノ子ナリ。寶永七年。四月。將軍家宣新令十七條ヲ頒ツ。正徳元年。八月。家宣諸侯ニ令シテ曰ク。頃口巡察使ノ上言ニ因テ。詳カニ郡國政治ノ得失ヲ聞クニ。良治善政一モ見ル所ナク。風俗衰頹。四民困窮ス。

幕府四脚門ヲ壞ツ

吉宗德川氏ヲ中興ス

予職ヲ承ケ未タ久シカラス。且ツ慮ル所アリ。敢テ其罪ヲ問ハス。自今已後。公田縣吏郡國領主大小ノ政事。其レ宜シク各自ラ勉勵シ。四民ヲシテ其業ヲ安ンセシムヘシ。倘シ舊弊ヲ悛メサル者ハ。具サニ其罪ヲ論シ。赦ス攸アルコトナシト。二年十月。大將軍家宣薨ス。初メ家宣藩邸ニ在テ。舊弊ヲ改ムルノ志有リ。入テ職ヲ襲クニ及テ。精ヲ勵マシ治ヲ圖リ。稅政ヲ祛ソケ。禁網ヲ寬ニス。而シテ其職ニ在ルコト久シカラス。未タ盡ク奢靡ヲ革ムルニ及ハス。家宣ノ子家繼嗣ク。三年四月。詔シテ家繼ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス。享保元年。四月。大將軍家繼薨ス。嗣ナシ。幕府ノ諸老策ヲ定メテ。紀伊大納言光貞ノ四男吉宗ヲ迎テ嗣ト爲ス。五月。儀ヲ整ヘテ本城ニ入ル。幾ナラスシテ吉宗命シテ四脚門ヲ壞ツ。四脚門ハ皇居ノ制ナリ。或ハ之ヲ諫ム。吉宗可カスシテ曰ク。父祖ノ不義ヲ知テ改メサルハ不孝ナリ。八月。詔シテ吉宗ヲ征夷大將軍ニ任ス。三年。吉宗人ヲ遣ハシ山陵ノ在ル所ヲ檢シテ之ヲ修ム。後數年ニシテ。功ヲ竣フ。蓋シ綱吉ノ未タ盡ササル所ヲ竣ルナリ。二十年三月。天皇位ヲ皇太子昭仁ニ讓ル。

櫻町院天皇。先帝ノ子ナリ。延享二年。九月。吉宗軍職ヲ辭ス。吉宗勤儉。下ヲ率キ。言路ヲ開キ。賢良ヲ庸ヒ。恭敬ヲ皇室ニ致ス。弊風頓ニ變シ。稱シテ德川氏ノ中興ト爲ス。十月。詔シテ其子家重ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス。四年三月。退仁親王ヲ立テ皇太子ト爲ス。天皇資性英敏。時ニ年猶ホ壯ナリ。公卿意ヲ屬ス。而シテ故アリテ震怒シ。遜位セント欲ス。五月。遂ニ位ヲ皇太子ニ讓ル。

桃園院天皇。先帝ノ子ナリ。寶曆十年。四月。家重軍職ヲ辭ス。七月。詔シテ其子家治ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス。十二年七月。天皇崩ス。皇姉智子内親王立ツ。是ヲ後櫻町帝ト爲ス。

後櫻町院天皇。櫻町帝ノ第一女ナリ。寶曆十二年。七月。先帝大漸ナリ。群臣議シテ英仁親王猶ホ幼ナルヲ以テ。明

後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル德川氏天下ノ事ヲ制ス

正帝ノ故事ニ因リ。天皇ヲ邀立ス。是時ニ當テ。太平既ニ久シク。幕府ノ勢威甚タ重ク。忌諱亦密ナリ。而シテ時ニ皇室ノ式微ヲ嘆シ。王政ノ光復ヲ圖ル者アリ。先帝ノ時京師ノ處士諏訪良房。有爲ノ公卿ト謀リ。密ニ近畿ノ諸侯ニ遊説シ。難ヲ作シテ以テ幕府ヲ滅サントス。而シテ幕府ノ爲ニ覺ラレ。事未タ發セスシテ止ム。是ニ於テ。良房ノ門人。藤井右門等。甲斐ノ處士山縣大貳等十數人ト謀リ。良房ノ志ヲ爲サント圖ル。大貳乃チ書ヲ著ハシ。勤王ノ事ヲ論シ。兵ヲ講シテ謀ヲ畫ス。明和四年。八月。幕府其黨ヲ捕ヘ。謀叛ヲ以テ之ヲ論シ。悉ク之ヲ斬流ス。五年二月。皇姪英仁親王ヲ立テ皇太子ト爲ス。七年十一月。天皇位ヲ皇太子ニ讓ル。後桃園院天皇。桃園帝ノ子ナリ。安永八年。十一月。天皇崩ス。天皇ノ大漸ナルヤ。儲位未タ定マラス。或ハ命ヲ矯ハリ擁立スル所アラントス。崩スルニ迄テ。關白藤原尙實遺詔ヲ奉シテ。天皇ノ族叔大宰帥典仁親王ノ子。兼仁ヲ迎立ス。之ヲ光格天皇ト爲ス。

光格天皇。東山帝ノ曾孫ナリ。天明六年。九月。大將軍家治薨ス。七年三月。詔シテ其子家齊ヲ征夷大將軍ト爲ス。是ヨリ先。比年登ラス。天下大ニ飢ウ。幕府穀ヲ糶シテ之ヲ賑ハス。是年。天下又飢エ。江戸尤モ甚シ。饑民群起シテ亂ヲ作ス。攝津、播磨、肥後、武藏ノ飢民モ亦蜂起ス。幕府吏ヲ遣ハシテ之ヲ平ク。寬政二年。天皇。頻年五穀豐カナラス。加フルニ災變ヲ以テシ。群臣以下困窮シ。幕府ノ多事ナルヲ怜ミ。詔シテ三章ヲ下シ。自今三年ノ間。凡ソ事省略ニ從ハシム。是時ニ當テ。天下久シク太平ニ慣レ。武備大ニ緩弛ス。而シテ海外諸國時ニ我邊海ヲ窺フ者アリ。時ニ仙臺ノ人林子平慷慨國ヲ憂フ。幕府ノ苟且ヲ偷ミ。海外ノ大勢ヲ知ラサルヲ病ヒ。書ヲ著ハシテ海防ノ策ヲ論ス。言幕府ノ忌諱ニ觸ルルヲ以テ罪ヲ得タリ。五年二月。天皇生父典仁親王ヲ尊テ太上天皇ト爲サント欲シ。議奏前大納

中山愛親等江戸ニ使ス幕府ヲ奉セ

言中山愛親等ヲ江戸ニ遣シ。旨ヲ幕府ニ傳ヘシム。幕府議ス。主上統ヲ繼キ。父子ノ義固ヨリ定マル。豈ニ帥宮ニ尊號ヲ奉ルノ理アラシヤト。愛親松平定信ト論辯シ。定信理屈ス。幕府怒テ愛親ノ門ヲ杜キ。出入ヲ禁シ。遂ニ詔ヲ奉セス。時ニ上野ノ人高山正之。人ト爲リ精悍倜儻ナリ。常ニ大義ヲ唱ヘ。天下ヲ跋涉シテ志士ヲ鼓舞ス。京師ニ入ル毎ニ。先ツ三條橋上ニ至リ。遙ニ天關ヲ望ミ。地ニ跪ツキ振董シテ曰ク。艸莽ノ臣正之ト。途人怪ミ笑フモ。以テ意ト爲サス。嘗テ足利尊氏ノ墓ヲ鞭チ。其罪惡ヲ數メ。慷慨淋漓。聲淚共ニ隨フ。又中山愛親ノ邸ニ詣リ。朝廷ノ衰替ヲ歎シ。幕府ノ所爲ヲ憤リ。泣テ曰ク。時事一ニ是極ニ至ル乎ト。後西國ニ遊ヒ。志ノ成ラサルヲ憤リ。遂ニ屠腹シテ死ス。是ヨリ勤王憂國ノ士稍起ル。是ヨリ先。露西亞、英吉利等ノ船我邊海ニ出沒シ。或ハ北疆ニ寇スルコトアリ。幕府是ニ於テ稍ク戒心アリ。然トモ太平ノ久シキ。上下恬嬉ヲ事トシ。苟モ難ヲ口ニスルヲ忌ミ。安ヲ一時ニ偷メリ。文化十四年。三月。天皇位ヲ皇太子惠仁ニ讓ル。

勤王憂國ノ士稍ク起ル

仁孝天皇。先帝ノ子ナリ。文政五年。五月。上皇修學院ニ幸ス。靈元帝以後國費甚タ繁キヲ以テ。幕府奏請シテ行幸ノ典ヲ廢シ。離宮頽敗スルコト百數十年。是ニ至テ之ヲ修ス。時ニ下毛ノ處士蒲生秀實奇節アリ。朝典ノ地ニ墜ルヲ慨シ。嘗テ徧ク諸陵ノ在ル所ヲ歷テ。以テ山陵志ヲ著シ。之ヲ上ル。是ニ於テ朝廷幕府ト俱ニ其修營ヲ圖ル。而シテ外人時ニ邊海ニ寇シ。幕府多事ナルヲ以テ果サス。天保八年。五月。家齊軍職ヲ辭ス。八月。詔シテ其子家慶ヲ征夷大將軍ト爲ス。是ヨリ先。比歲外國ノ警アリ。而シテ幕府ノ財政久シク窮シ。屢節儉ヲ行ヒ。武備ヲ嚴ニスルノ令ヲ申フ。然トモ復タ其效ヲ見ルコト無シ。弘化元年。五月。是ヨリ先。徳川齊昭大ニ文教ヲ興シ。英才ヲ育シ。首トシテ大義名分ヲ明ニセント欲ス。又外人ノ屢邊境ヲ窺フヲ患ヒ。務テ武備ヲ修ス。家慶深ク之ヲ疑ヒ。是ニ至テ幽閉ヲ

後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル徳川氏天下ノ事ヲ制ス

命ス。是歲蘭人長崎ニ來リ告テ曰ク。方今ノ形勢。西洋諸國ト盟約ヲ結ビ。交易ヲ爲ササレハ。則チ各國軍艦數十艘ヲ將テ將ニ來リ寇セントスト。而シテ幕府外交ヲ以テ治安ニ害アリト爲シ。乃チ鎖國ノ舊制ヲ守テ變セス。三年一月。天皇崩ス。皇太子統仁立ツ

歐米諸國ト締交ス

孝明天皇。先帝ノ子ナリ。嘉永六年。六月。亞米利加合衆國ノ水師提督彼理兵艦四艘ヲ帥テ浦賀ニ來リ。曰ク。使ヲ奉シテ互市ヲ乞フ。請フ重臣ニ謁シテ國書及ヒ方物ヲ獻セント。家慶大ニ驚キ。令シテ武總ノ海防ヲ戒メ。日夜城中ニ會議ス。衆情恟々タリ。既ニシテ幕府館ヲ久里濱ニ建テ。吏曹ニ命シテ國書ヲ受ケシム。九月。米使、書及ヒ方物ヲ獻シ。直ニ將軍ニ達センコトヲ請ヒ。儀畢テ出ツ。家慶吏ヲシテ答ヘシメテ曰ク。事體極メテ大ナリ。輒ク辨スヘキニ非ス。宜シク明年長崎ニ來テ報ヲ待ツヘシト。諭シテ之ヲ遣歸ス。是月。大將軍家慶薨ス。子家定嗣ク。七月。露西亞ノ使臣兵艦ヲ以テ長崎ニ來リ。國書ヲ獻シ。隣交ヲ修シ。疆場ヲ正シ。港ヲ開テ互市セント請フ。之ヲ江戸ニ致ス。既ニシテ家定答書シテ曰ク。輿論一定ノ後之ヲ報スヘシト。是ニ於テ。幕府漸ク恐ルル所アリ。有司ニ命シテ兵艦ヲ造リ。巨砲ヲ鑄。砲臺ヲ品川ニ築キ。以テ外寇ニ備フ。十一月。詔シテ家定ヲ征夷大將軍ト爲ス。安政元年。正月。米國使臣復ヒ兵艦ヲ帥テ浦賀ニ入ル。幕府吏ヲ横濱ニ遣シテ引見ス。遂ニ和親ヲ許シ。下田箱館長崎ニ泊スルヲ可ス。是ヨリ英吉利露西亞等相尋テ至リ。互市ヲ乞フ。幕府竝ニ其下田箱館長崎ノ三港ニ泊スルヲ許シ。尋テ條約ヲ荷蘭ニ結フ。十二月。將軍家定ニ詔シテ。天下ノ梵鐘ヲ鎔シテ煩磬ヲ鑄。以テ海防ニ資セシム。家定乃チ太政官符ヲ以テ天下ニ頒布ス。初メ徳川氏ノ盛ナルヤ。務メテ朝權ヲ撓メテ。以テ政權ヲ專ニス。今ハ則チ朝威ヲ藉テ以テ天下ニ令ス。蓋シ幕府漸ク衰ヘ。王政將ニ古ニ復ラントス。其幾以テ觀ルヘキナリ。三年七月。米國總領事巴爾理、下田

外國ト假條約ヲ定ム

ニ來リ。直ニ國書ヲ將軍ニ呈セント乞フ。四年五月。幕府終ニ米國ト和親ヲ締盟シ。尋テ米使ヲ江戸城ニ延見シ。又假ニ公使館ヲ置クコトヲ許ス。米使又逼テ通商條約ヲ結ハシコトヲ請フ。幕府乃チ使ヲ京師ニ遣シ。外國ノ事情ヲ具狀シ通商ノ救允ヲ請フ。廷議幕府ノ專斷ヲ求メ。其請フ所ヲ可サス。幕府以爲ラク。朝命ヲ奉セス以テ歸好スルコト能ハスト。乃チ井伊直弼ヲ大老ト爲シ。五年六月。遂ニ朝命ニ依ラスシテ。英佛諸國ト條約ヲ定メ。米使ニ假條約書ヲ與フ。是ヨリ先。將軍家定子無シ。徳川齊昭ノ子一橋慶喜ヲ立ント欲ス。直弼等其長ヲ忌ミ。徳川慶福ヲ立テ。其幼沖ニ因テ已レ事ヲ專ニセント欲ス。議因テ決セス。家定勅旨ヲ請フ。詔シテ曰ク。賢ニシテ長ナル者ヲ立テヨト。直弼等之ヲ祕シ。勅旨ニ違ヒ。急ニ議ヲ決シテ慶福ヲ立テ。名ヲ家茂ト改メ。尋テ假條約ヲ締結スルコトヲ奏ス。天皇震怒ス。是ヨリ朝廷幕府ト協ハス。七月。將軍家定薨ス。初メ將軍ノ繼嗣未タ定マラサルヤ。水戸藩士安島某同志ト謀リ。勅ヲ奉シ以テ事ヲ就サント欲シ。京師ニ周旋ス。既ニシテ繼嗣定リ。事果シテ成ラス。更ニ相議シ。密ニ奏請スル所アリ。是ニ於テ。天皇密勅ヲ徳川齊昭ニ下ス。蓋シ幕府違勅ノ罪ヲ聲ラスナリ。是ニ至テ。天下ノ志士尊攘ヲ唱フル者。所在ニ起リ。幕威漸ク振ハス。幕府乃チ老中間部詮勝ヲ京師ニ遣シ。吏ヲ四方ニ縱チ。幕政ヲ臧否スル者數十人ヲ捕フ。江戸亦志士數十人ヲ捕テ獄ニ下シ。更ニ公卿數人ニ逼リ。髮ヲ削テ屏居セシム。十月。家茂征夷大將軍ニ任ス。六年八月。幕府徳川齊昭等ノ罪ヲ論シ。國ニ就テ終身ヲ禁錮シ。尋テ命シテ去年賜フ所ノ勅書ヲ納メシム。又一橋慶喜ヲ讓メテ屏居セシム。其他太田資始安島帶刀等志士數十人。或ハ自裁セシメ。或ハ斬流ニ處ス。最後志士ノ牢獄ニ死スル者甚タ多シ。是ヨリ天下ノ志士幕政ニ切齒シ。大老直弼ノ罪ヲ鳴ラス者愈々激烈ナリ。萬延元年。三月。水戸薩摩藩士十數人。大老伊井直弼ヲ櫻田ニ邀撃シテ之ヲ弑シ。上書シテ其五罪ヲ數フ。幕府之ヲ斬ニ處ス。是ヨ

幕府ヲ臧否スル者ヲ捕フ

後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル徳川氏天下ノ事ヲ制ス

皇妹ヲ蓋降ス

勤王ノ士所在ニ起ル

リ幕威益振ハス。時ニ老中安藤信正事ヲ專ニシ。利ヲ徇ヒ。政ヲ亂ル。部下ノ士堀利熙之ヲ極諫ス。聽カス。九月。利熙自裁シテ。書ヲ信正ニ遣テ其罪ヲ指斥ス。其略ニ曰ク。聞ク足下陰ニ廢帝ノ事ヲ議シ學者ヲシテ古例ヲ索メシムト。是レ實ニ天下ノ逆賊。天誅容ササル所ナリト。一時流傳シ。讀者流涕セサルハ無シ。是ニ於テ。處士皆幕府ノ失政ヲ橫議シ諸親藩亦幕府ヲ助ケス。幕府孤立セリ。將軍家茂乃チ奏シテ皇妹ヲ尙セント請フ。聽サス。固ク請フ。天皇乃チ皇妹親子内親王ヲ家茂ニ釐降スルヲ許シ。文久元年。十月。親子内親王東下ス。是ニ於テ。朝廷幕府ヲ親シムノ形アリ。而シテ幕府ノ實情甚安カラス。是ヨリ先。水戸亡命ノ士各處ニ屯集シ。齊昭ノ遺志ヲ奉シ。王室ヲ尊ミ。醜吏ヲ掃フヲ聲言ス。諸藩ノ亡命之ヲ聞テ競集スル者數千人。所在騷擾ス。幕府之ヲ平ラクルコト能ハス。外人兵ヲ置テ自ラ守リ。幕府又洋館ノ警備ヲ嚴ニス。二年正月。處士大橋順藏等將ニ輪王寺宮ヲ奉シテ。日光山ニ據リテ兵ヲ舉ントス。事露レテ獄ニ下サル。下野ノ人甲田顯三等安藤信正ヲ阪下門ニ刺ス。成ラスシテ鬪死ス。各一書ヲ懷ニス。略ニ曰ク。信正井伊氏ノ意ヲ紹キ。洋夷ヲ親昵シ。志士ヲ忌害シ。皇妹ヲ釐降シテ。以テ幕威ヲ擅ニシ。竊ニ廢帝ノ例ヲ議ス。大逆無道。天人容ササル所ナリ。故ニ天下ノ爲メニ之ヲ誅戮スト。四月。筑前ノ人平野國臣志士數百人ト尊攘ノ說ヲ攝播ニ唱フ。會、島津久光姫路ヲ過ク。國臣等要請シテ曰ク。願クハ公ヲ戴キ。皇駕ヲ函嶺ニ奉シ。罪ヲ幕府ニ問ヒ。竝セテ醜吏ヲ殲滅セント。久光之ヲ慰諭シ。自ラ京ニ入り其狀ヲ奏ス。朝廷乃チ久光ヲシテ。京師ヲ鎮セシム。天皇又久光及ヒ毛利定廣ニ詔シテ曰ク。關東奏シテ外夷ヲ絶ント乞フ。十年ヲ限ト爲ス。汝其レ旨ヲ奉シテ謀ヲ運ラシ。國威ヲ更張セヨト。六月。大原重徳ヲシテ詔ヲ齎ラシテ東下シ。家茂ニ三事ヲ敕ス。曰ク。家茂宜シク諸侯ヲ率キ。入朝シテ内外ノ事務ヲ議決スヘシ。宜シク豐臣氏ノ例ニ依テ大藩ヲ撰ミ五大老ト爲シ。以テ國政ヲ諮詢

家茂ニ三事ヲ敕ス

薩長土三藩威望天下ニ重シ

諸侯上京シテ禁闕ヲ護ス

男山ニ行幸シ攘夷ノ事ヲ舉ケントス

スヘシ。宜ク一橋慶喜ヲ以テ夾輔ト爲シ。松平慶永ヲ執政ト爲シ。各戮力協心シテ。以テ中外ヲ指揮ス可シト。七月。家茂大ニ黜陟ヲ行ヒ。慶喜ヲ起シテ將軍補佐ト爲シ。慶永ヲ政事總裁職ト爲シ。大ニ新政ヲ布キ。以テ輿望ヲ收メントス。八月。山内豐範京師ニ入ル。詔シテ毛利慶親島津久光ト同シク闕下ヲ鎮撫セシム。是ヨリ薩長土三藩ノ威望天下ニ重シ。尋テ又毛利定廣ヲ江戸ニ遣シ。旨ヲ傳テ戊午以來譴累セラルル者ヲ釋サシム。幕府乃チ安政五年以來國事ニ關シテ罪ヲ獲ル者ヲ釋シテ。死者ノ罪名ヲ削リ。墓碑ヲ建ルヲ許ス。尋テ故井伊直弼及ヒ安藤信正等ノ罪ヲ數メテ。其封ヲ削ルコト各差アリ。十月。中納言三條實美少將姉小路公知ヲ使シテ家茂ニ敕ス。宜シク衆旨ニ遵ヒ。速ニ攘夷ノ策ヲ決シ。兵ヲ諸藩ニ徵シテ親兵ト爲シ。以テ京畿ヲ守禦セシムヘシト。是時ニ當テ。諸侯京師ニ在リ。禁闕ヲ護ル者八十餘名。皇威日ニ熾ナリ。一橋慶喜松平慶永又京師ニ入ル。二年二月。近衛忠熙關白ヲ辭ス。右大臣鷹司輔熙ヲ關白ト爲ス。三月。將軍家茂入朝ス。是時諸藩亡命ノ志士。關白及ヒ將軍ニ逼ルニ攘夷ノ期ヲ以テシ。其決行ノ速カナラサルヲ憤リ。動モスレハ暴舉ヲ爲シ。或ハ足利將軍ノ木像ヲ馘シ。以テ源賴朝以來武臣擅横ノ弊ヲ一掃シ。王政復古ヲ冀フノ意ヲ示ス者アリ。殺伐ノ風大ニ行ハル。而シテ其意皆尊王ノ外ニ在ラサルナリ。天皇將ニ輿論ニ應シテ。攘夷ノ事ヲ舉ケント欲ス。乃チ四月十一日ヲ以テ男山ニ行幸シ。將ニ祠前ニ就テ攘夷ノ節刀ヲ家茂ニ賜ハントス。是日家茂疾ト稱シテ出テス。乃チ慶喜ヲシテ代リ受ケシム。慶喜窮蹙シ。俄ニ疾ト稱シテ祠ヲ下ル。浪士等之ヲ聞キ。罵テ曰ク。情夫事ヲ共ニスルニ足ラスト。遂ニ迫テ天皇ノ親征ヲ請フ。朝廷之ヲ慰止ス。二十一日。將軍家茂入朝シ。敕ヲ奉ス。五月十日ヲ以テ攘夷ノ期ト爲シ。徧ク諸侯ニ告ク。家茂將ニ東歸セントス。朝廷之ヲ留メ。更ニ德川慶篤ニ詔シテ。將軍目代ト爲シ。委スルニ攘夷ノ事ヲ以テス。是ヨリ先。島津久光ノ從士英人ヲ生麥ニ斬ル。是ニ至テ。

後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル德川氏天下ノ事ヲ制ス

長藩薩藩
外國艦ヲ
砲撃ス

英人日ヲ刻シテ幕府ニ逼リ。償金ヲ請フ。幕府ノ老中内外ノ逼ル所トナリ。大ニ怖レ病ト稱シテ出テス。殆ント事ヲ視ル者無キニ至ル。五年。天皇一橋慶喜ニ敕シ。東下シテ事ヲ處セシム。老中小笠原長行先ツ下リ。獨橫濱ニ至リ。各國公使ニ鎖港ノ事ヲ説ク。聽カス。遂ニ洋銀四十五萬元ヲ輸シテ生麥ノ償金トス。十日。夜長藩米艦ヲ赤馬關ニ砲撃ス。六月。天皇使ヲ長門ニ遣ハシ。攘夷ノ期ヲ失セサルヲ賞シ。紅白ノ御旗ヲ毛利慶親ニ賜ヒ。益之ヲ獎勵ス。且ツ諸藩ニ詔シテ。カヲ戮セテ速カニ掃攘ノ功ヲ奏セシム。家茂亦攘夷ノ詔ヲ奉シテ東歸ス。七月。英艦七艘鹿兒島ニ入リ。生麥ノ事ヲ問フ。藩兵之ヲ砲撃ス。幕府使ヲ遣ハシ長藩ノ擅ニ洋船ヲ砲撃スルヲ詰ル。長人分疏シテ。服セス。幕使ヲ抑留ス。尋テ死ス。是ニ由テ。幕府毛利氏ヲ誣フルニ幕使ヲ殺スヲ以テス。八月。詔シテ曰ク。大和ニ行幸シ。畝傍山陵ヲ拜シ。春日山ニ於テ親征ヲ議セント。池田茂政等入朝シ。親征ヲ止メシテ請フ。聽カス。既ニシテ内外支牒スル所アリ。十八日。俄ニ行幸ノ議ヲ止メ。長藩人ヲシテ京師ヲ去ラシム。尊融法親王入朝シ。急ニ命シテ薩摩會津等ノ兵ニ九門ヲ分守セシム。衆皆戎裝シ。銃ヲ列シテ之ヲ備フ。道路騒然タリ。毛利元純等變ヲ聞キ馳セ至ル。入ルヲ許サス。三條實美急騎入朝ス。亦入レス。馳テ關白ノ第ニ至ル。尊融實美等ノ長人ニ黨スルヲ責メテ屏居セシメ。因テ元純等ヲ諭シテ退テ命ヲ待タシム。元純陳請スルモ聽カレス。乃チ三條實美、三條西季知、東久世通禧、四條隆調、壬生基修、錦小路頼徳、澤宣嘉等ヲ奉シテ長門ニ走ル。朝議七卿ノ官爵ヲ削リ。尋テ長人ノ入京ヲ禁ス。詔シテ曰ク。近來教令眞偽錯出ス。人心ヲ惑ハス者多シ。然トモ今日以降。實ニ朕ノ意ニ出ツ。列藩其レ之ヲ體セヨト。是ヨリ攘夷ノ事稍緩ク。幕府ノ威復タ稍朝廷ヲ壓ス。藤本眞金、松本衡等之ヲ憤リ。以爲ラク。君側奸人ノ爲ス所ト。侍從中山忠光ヲ奉シテ兵ヲ擧ケ。號シテ天誅黨ト曰フ。幕府命シテ之ヲ討平ス。十月。是ヨリ先。平野國臣學智院督

幕府ノ威
復タ朝廷
ヲ壓ス

長藩ヲ征

長タリ。朝議ノ變スルヲ憂ヒ。奏シテ七卿及ヒ毛利氏ヲ召サンコトヲ請フ。省セス。國臣謂ヘラク。尊融等之ヲ阻ムト。乃チ澤宣嘉ヲ推シテ將トシ。但馬ノ生野ニ據リ。書ヲ遠近ニ移シテ大義ヲ唱フ。亦幕兵ノ爲メニ捕ハレ。尋テ殺サル。十一月。鷹司輔熙關白ヲ辭ス。右大臣二條齊敬之ニ代ハル。元治元年。正月。將軍家茂諸侯ヲ率テ入朝ス。詔シテ曰ク。暴舉夷ヲ攘フハ朕ノ好ム所ニ非ス。三條實美等宇内ノ大勢ヲ察セス。詔ヲ矯テ親征ヲ議ス。長人亦其生命ヲ忽ニシ。夷船ヲ砲撃ス。其罪至レリ。自今海内敵愾ヲ一ニシ。外交ヲ絶チ。以テ朕ノ意ニ副ヘヨ。家茂旨ヲ奉ス。時ニ之ヲ翻覆ノ論旨ト謂フ。蓋シ皆幕府ノ志ナリ。四月。家茂ニ詔シテ曰ク。攘夷變スル勿レ。海防忽セニスル勿レ。必ス橫濱ヲ鎖シ。物價ヲ低シ。以テ民心ヲ安ンセヨ。實美慶親ノ事一切之ヲ委ス。當サニ適宜之ヲ處スヘシ。家茂大ニ喜ヒ。新法十八條ヲ奏シテ王室ヲ尊崇ス。是ヨリ朝威愈盛ナリ。六月。長藩福原元佃、久坂某等四百人山崎ニ至リ。上書シテ毛利父子勤王ノ情ヲ陳ヘ。七卿ノ復職ヲ請フ。朝廷省セス。既ニシテ長藩士及ヒ浪士山崎ニ在ル者。來島某等兵數百ヲ以テ鼓行シテ西シ。大ニ幕兵ト鬪ヒ。京師騷擾ス。是ニ於テ。一橋慶喜等入期シテ征長ノ議ヲ決シ。毛利氏ノ罪ヲ聲ラシ。徳川茂承ヲ以テ大將ト爲シ。令ヲ山陽、山陰、西海、南海ノ二十三藩ニ下シテ之ヲ討ス。詔シテ有栖川熾仁親王以下七十餘人ヲ幽屏ス。幕府ノ嫌疑ヲ受ルヲ以テナリ。十一月。長藩罪ヲ謝シテ恭順ヲ表ス。家茂乃チ奏シテ征討ノ師ヲ班ス。十二月。家茂逃走ノ五卿ヲ太宰府ニ拘ス。是ヨリ先。錦小路頼徳病死シ。澤宣嘉他邦ニ出寓ス。既ニシテ長藩ノ志士幕府ノ爲ス所ヲ憤リ。難ヲ國中ニ作ス。是ヨリ先。薩藩長藩ト互ニ相猜忌ス。是ニ至テ。西郷隆盛密使ヲ遣ハシ好ヲ長州ニ通ス。是ヨリ二藩怨ヲ釋キカヲ協セテ。國事ヲ圖ラントス。慶應元年。幕府更ニ長藩ノ處分ヲ議シ。再ヒ之ヲ征セントス。四月。家茂親伐ノ事ヲ令シ沿道諸侯ヲシテ衆ヲ整テ命ヲ俟タシム。徳川慶勝、

後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル徳川氏天下ノ事ヲ制ス

勝安芳諫テ曰ク。長事一タヒ釋ケテ。今復タ之ヲ伐ツ。師名ナシ。恐クハ天下是ヨリ解體セント。聽カス。五月。毛利敬親書ヲ淺野茂長ニ遣テ曰ク。今將軍復タ親ヲ來リ伐ツト。某等何ソ肯テ寃ヲ辭セン。惟與ニ一快戰シ。然ル後ニ斃レンノミ。而シテ我家ノ故事。戰ハ必ス之ヲ天子ニ奏ス。故ニ敢テ執事ヲ煩ハシ。以テ上聞スト。九月。家茂入朝ス。時ニ英佛米蘭兵艦ヲ率キテ。兵庫ニ來リ。開港ヲ請フコト甚タ急ナリ。而シテ防長ノ岬方ニ開キ。内外切迫ス。家茂大ニ憂ヒ。疾ト稱シ職ヲ辭シ。慶喜ヲシテ將軍タラシメント欲シ。上表シテ之ヲ請ヒ。竝ニ開港ノ敕允ヲ乞フ。朝議已ムヲ得ス。權ニ開港條約ヲ許シ。家茂ニ詔シテ。疾ヲカメテ復タ事ヲ視セシム。二年六月。幕府兵ヲ長防ノ四境ニ進メ。海陸竝ヒ攻ム。八月。將軍家茂大坂城ニ薨ス。詔シテ征西ノ師ヲ輟メ。一橋慶喜ヲシテ入テ宗家ヲ嗣カシム。慶喜勝安芳ヲ遣ハシ。長人ニ諭シテ兵ヲ解カシム。是ニ於テ。西事始テ平ク。軍起リシヨリ東兵一捷ヲ獲ル能ハス。是ヨリ諸藩多ク幕府ノ節度ヲ受ケス。德川氏ノ業熄ムニ幾シ。十二月。詔シテ慶喜ヲ征夷大將軍ト爲ス。是月。天皇痘ヲ患ヒ。遂ニ崩ス。在位二十一年ナリ。天皇資性剛明。每ニ皇室ノ陵替ヲ憂ヒ。精ヲ勵マシテ治ヲ圖ル。外事起ルニ及テ。深ク國家ヲ以テ憂トス。學習院ヲ開テ諸侯ノ建言ヲ納レ。天祖ニ祈リ。身ヲ以テ國難ニ當ラントス。是ニ於テ。勤王ノ士所在ニ起リ。奮テ王懷ニ敵ス。既ニシテ幕府漸ク衰ヘ。天下靡然トシテ皇室ニ嚮フ。天皇大ニ規畫スル所アラントス。大業未タ成ラス。志ヲ齎シテ崩ス。天下之ヲ悼ム。今上大統ヲ嗣ク。

今上天皇。先帝ノ皇子ナリ。關白左大臣齊敬政ヲ攝ス。慶應三年。正月。詔シテ大喪ヲ以テ熾仁親王以下公卿ノ幽禁ヲ免ス。九月。山内豐信幕府ニ獻議シテ曰ク。中古以還。武門政權ヲ握リ。海内ヲ制ス。然トモ近來外、國交ヲ開キ。物議紛々。内訌息マス。是レ時勢ノ一變ナリ。宜ク政權ヲ王室ニ還シ。以テ。萬國竝立ノ基ヲ立ツヘシト。淺野茂長

德川氏ノ業熄ムニ幾シ

朝政復古

モ亦將軍慶喜ニ説クニ大義ヲ以テシ。其政柄ヲ解カントヲ勸ム。慶喜乃チ大ニ悟ル。十月十四日。大將軍德川慶喜奏シテ政權ヲ奉還セント請フ。次日敕シテ之ヲ許ス。二十四日。慶喜上表シテ征夷大將軍ヲ辭ス。權大納言藤原資宗ヲ孝明帝ノ山陵ニ遣ハシテ。朝政復古ヲ告ク。此時ニ當テ大政ノ權已ニ朝廷ニ復スト雖モ。維新ノ計畫未タ確定スルニ至ラス。十一月。左大臣近衛忠房等大政一途確立ノ策。及ヒ太政官八省再興ノ議ヲ上ツル。朝廷之ヲ納ル。是ニ於テ。維新計畫ノ方向稍定マレリ。而シテ兵食ノ實力ハ。尙ホ德川氏及ヒ諸藩ニ在リ。是ヨリ先。三條實美等太宰府ニ在リ。岩倉具視京郊ニ居リ。東西密ニ聲息ヲ通シ。五ニ復古ノ業ヲ贊畫ス。十二年八月。岩倉具視、中山忠能、正親町三條實愛、徳大寺實則等ト共ニ。德川慶勝、松平慶永、島津茂久、山内豐信及ヒ尾越薩土ノ重臣ヲ小御所ニ會議シ。内外ノ處分制度ノ變更ヲ畫策ス。乃チ彈正尹尊融親王ヲ黜ケ。攝關及ヒ幕府ノ守護職所司代等ヲ廢シ。總裁議定參與ノ三職ヲ置キ。以テ時勢ノ宜キヲ制ス。有栖川宮熾仁親王ヲ以テ總裁ト爲シ。三條實美、岩倉具視、中山忠能、正親町三條實愛等ヲ以テ議定ト爲シ。薩藩小松帶刀、土藩後藤象次郎、長藩木戸孝允等ヲ以テ參與ト爲シ。以テ政治ヲ綜ヘシム。詔シテ曰ク。自今以往大小ノ政令朝廷ヨリ出ツ。四方其レ之ヲ體セヨ。是ニ於テ王政復古ノ大業始テ成ル。夫レ天祖肇メテ皇國ヲ闡テヨリ。歷朝相承ケ。王政ノ隆一日ノ如シ。中世ニ及テ。相門威福ヲ恣ニシ。始メテ乾綱撓マス。其後平源傾軋シ。血ヲ京都ニ躒ミシヨリ。鎌倉幕府ヲ設ケ。王化陵夷ス。爾後陪臣國命ヲ執テ。奕世跋扈シ。丹宸塵ヲ蒙リ。狩轍西南ス。建武一タヒ中興スト雖モ。久シカラスシテ姦雄權ヲ竊ミ。正位偏安シテ。南風競ハス。瓜分レ鼎沸キ。生靈塗炭ニ苦ムコト。應仁ニ至テ極レリ。織田氏足利氏ニ代テ起リ。克ク王事ヲ勤メ。豐臣氏勃興シ。織田氏ノ志ヲ繼キ。群雄ヲ叱咤シテ天下ヲ一ニス。德川氏之ニ代リ。能ク太平ノ業ヲ成スト雖モ。封建ノ治。王政ノ

復古ノ大業始テ成ル

上古以來ノ大勢ヲ總論ス

後陽成帝慶長四年ヨリ今上天皇慶應三年ニ至ル德川氏天下ノ事ヲ制ス

古ニ非ス。鎌倉ノ所爲ヲ學テ。將軍ノ權ヲ執レリ。是ヲ以テ。王室ハ舊ニ依テ虚器ヲ擁シ高ク九重ニ垂拱スルノミ。嘉永以降。事刺衝シ。四方勤王ノ士起リシヨリ。機運循環シ。此ニ至テ王政復古ス。中世以還。大勢ノ變遷定ニ斯ノ如ク。然リ而シテ皇室ノ特權ニ至テハ。終始渝ラス。大義ノ在ル所。名分ノ存スル所。儼然トシテ隳レス。天憲ノ冥々中ニ立テ犯ス可ラサルモノアリ。前ニ論敍スル所ヲ以テ。其梗概ヲ觀ル可シ。夫レ大政皇室ニ在ルハ。我カ建國ノ本體ナリ。臣下ニシテ大權ヲ擅ニスルハ。時勢ノ變ナリ。今ヤ七百年一時ノ變ヲ改テ。二千五百年建國ノ本體ニ復ス。大業是ニ於テ全ク成ル。天祖ノ神敕灼然トシテ相契セリ。其維新以後百度更張ノ事ハ。則チ載セテ下編ニ詳ナリ。

大政紀要下編總記

目録

第一	慶應三年ヨリ明治元年ニ至ル	一三五
第二	明治二年ヨリ同六年ニ至ル	一五三
第三	明治七年ヨリ同十五年ニ至ル	一七一

下
編

大英皇太子殿下御覽

目錄

一

二

三

四

五

六

七

八

九

大政紀要

第五十五卷

下編總記一

第一册

大政紀要下編

總記一

明治維新ノ業ハ。文治以來七百餘年因襲ノ跡ヲ破リテ。王政ノ古ニ復シ。併テ振古未曾有ノ變態ヲ國勢ニ及ホシタリ。今其由テ來ル所ノ緣由ヲ稽フルニ。蓋シ我邦ニ特有セル國體名分ノ義。漸ク士論ニ起ルニ胚胎シ。端緒ヲ外國人來航ニ啓キ。而シテ上下ノ耳目。宇内ノ形勢ニ慣ルルニ大成ス。

夫レ我國體ハ。前編記スル所ノ如ク。建國以來。皇統一系。主權一人ニ在リ。天下萬姓。皇上ヲ仰クコト天日ノ如ク。敢テ他アルヲ知ラサリシニ。中世以還。豪傑下ニ崛起シ。政柄武門ニ移リ。人心漸ク舊ヲ忘レ新ニ慣レ。將軍アルヲ知テ。朝廷アルヲ知ラサルカ如キ景況トナレリ。爰ニ徳川氏ノ初。其支族源光圀。特ニ國體名分ノ義ヲ發シテヨリ。慷慨氣節ノ士。世々繼出シテ。其旨ヲ演繹シ。輒近光圀ノ後裔齊昭、主從。大ニ其義ヲ闡明スルニ至テ。七百餘年堙晦シテ明カナラサルノ大義復ヒ世ニ現レ。國體名分。漸ク士人ノ口ニ喋々スルニ至レリ。但時期ノ未タ至ラサル間ハ。其勢力猶ホ微ニシテ。顯然彰著ノ跡ヲ見サリシナリ。

爰ニ徳川氏季世ノ景況ヲ舉クレハ。元和以來二百餘年ノ昇平ニ沿フテ。上下安逸ニ慣レ。紀綱衰頹。人心萎靡シテ。元氣振ハス。是時ニ當テ。豪傑有爲ノ士。利器ヲ懷抱スル者アリト雖モ。徒ニ腕ヲ扼シ志ヲ吞テ局促沈淪シ。

敢テ其技倆ヲ伸フルノ地ナカリシニ。嘉永ノ末年。俄然外國ノ警アリ。是ニ於テ乎。嚮ノ萎靡スルモノ頓ニ興キ。振ハサルモノ將ニ奮ハントシテ。非常ノ激動ヲ人心ニ起シタリ。蓋シ當時事ヲ執ルノ人。内安逸ニ慣レ。外畏怖ヲ抱キ。決然外ニ應スルノ道ヲ盡ス能ハス。先帝深ク之ヲ憂慮シ。屢攘夷ノ旨ヲ幕府ニ諭ス。然モ幕府ハ往年清國鴉片ノ亂ニ懲リ。攘夷ノ容易ナラサルヲ慮リ。且ツ一旦外國ト交ヲ通シテヨリ。私ニ開國ノ國是ヲ執リ。肯テ朝廷攘夷ノ旨ヲ奉行セス。然シテ又斷然其見ル所ヲ陳シテ朝廷ニ諍フコト能ハス。陽ニハ朝旨ヲ奉シ。陰ニハ之ニ戻リ。依違遷延。徒ニ歲月ヲ費ス。而シテ天下ノ人心始メテ幕府ヲ去レリ。幕府ハ人心ノ漸ク離ルヲ見テ。自ラ禍源ヲ省セス。徒ニ己ニ異ナルモノヲ搏撃シ。以テ離心ヲ維カント務メタリ。然モ其務ムル所ハ。卒ニ離心ヲ維クニ足ラスシテ。適以テ之ヲ促スニ當リ。夫ノ豪傑有爲ノ士。袂ヲ投シテ争ヒ起リ。國體名分ノ論ト引援牽聯シテ。専ラ攘夷ヲ唱ヘ。一變シテ尊王ト爲リ。再變シテ滅幕ト爲リ。政權ノ二途ニ出ツ可カラサルヲ論シ。幕府カ攘鎖ノ敕ヲ奉セス。果斷ノ處置ナキヲ咎メ。遠近嘖々トシテ德川氏始メテ岌々タリ。幕府ノ親戚譜第ノ諸藩。深ク之ヲ憂ヒ。カヲ竭シテ德川氏ヲ維持センコトヲ圖ル。是ニ於テ乎。勤王佐幕ノ名分ル。是時ニ當テ。列藩中又頗ル平穩ノ見ヲ執ル者アリ。朝廷幕府ノ間ニ居仲調停ス。是ヲ公武合體ト云フ。公武合體ノ説ハ。著シク其效ヲ見ハスコト能ハス。而シテ外國ノ關係八年々ニ薄リ。天下ノ勢八月々ニ蹙マリ。慶應ノ末年ニ至テハ。幕府ノ情勢已ニ窮シ。親藩譜第。百方其間ニ彌縫回護スルモ及ハス。征長ノ師一タヒ敗レテ後ハ。幕府ノ名聲頓ニ地ニ墜チ。復タ救フ可ラサルノ勢ニ至レリ。是ニ於テ乎。王政復古ノ議起ル。慶應三年九月。前土佐藩主山内豊信容堂ト號ス。書ヲ大將軍慶喜ニ呈シテ。幕府宜ク政

務ヲ朝廷ニ奉還シ。博ク天下ノ公論ヲ採リ。以テ國是ヲ決定スヘキノ意ヲ陳シ。其家臣後藤元輝。福岡孝悌等ヲ遣リ。説クニ理勢ノ已ム可ラサルヲ以テセシム。

安藝藩士辻將曹。備前藩士牧野權六郎。宇和島藩士都筑莊藏等。亦其議ヲ共ニシ。カメテ之ヲ贊ス。慶喜モ亦大勢ノ不可ナルヲ知り。心ニ悟ル所アリ。遂ニ其旨ヲ納レ。書ヲ發シテ親藩譜第ノ將士ニ告クルニ。時勢ヲ揆リ政權ヲ奉還セントスルノ意ヲ以テシ。各其意見ヲ陳セシム。親藩譜第、敢テ一言ヲ發スルモノ無シ。是ニ於テ十月十四日大政奉還ノ舉有ルニ至レリ。

初メ三條實美以下ノ紳士。太宰府ニ竄居セシヤ。薩長及ヒ自餘各藩勤王ノ士。往々密ニ意ヲ通シ。相共ニ幕府ヲ仆シ。王政ヲ復センコトヲ圖リ。密使ヲ岩倉具視ニ馳ス。時ニ具視譴責ヲ蒙テ京北ニ閑居シ。潛ニ興復ノ算ヲ畫ス。中山忠能。中御門經之。正親町三條實愛等モ。亦其謀ニ與ル。忠能等密奏シテ。毛利敬親父子ノ譴責ヲ解キ。薩長ニ藩ヲシテ幕府ヲ討セシメンコトヲ請フ。計畫已ニ定リ。十月十四日。討幕ノ密詔下テ薩長人ノ手ニ在リ。内外之ヲ知ル者ナシ。此日徳川慶喜、政權奉還ノ書上ル。故ヲ以テ密詔卒ニ下行セラルルニ至ラス。是時ニ當テ。勤王ノ徒ハ。銳意王政ノ實ヲ舉ケント欲シ。佐幕黨ハ。只管徳川氏ヲ維新スル所以ヲ計ル。調停ノ説又其間ニ行ハレテ。慶喜ヲシテ尙ホ百司ノ右ニ居リ。機務ニ與ラシムヘキヲ主張ス。朝廷亦頗ル其説ヲ容ル。然リ而シテ佐幕論者ノ極點ト。會津桑名二藩ノ如キ勤王黨ノ極點ノ如キ。長門藩トニ至テハ從來相屠殺敵視シ。仇怨殊ニ深ク。到底血ヲ流スニ非サレハ此局ヲ結フ能ハサルノ勢ニ至レリ。是レ復古ノ業成ルト共ニ伏見鳥羽ノ戰起リ。繼テ東征トナリ。函館追討トナル所以ナリ。古今ノ例ヲ考フルニ。大變革ノ起ルニ際シ。必ス一回流血堆屍ノ慘禍ヲ蒙ラサルモノナ

シ。蓋シ情勢然ルナリ。然リ而シテ此慘禍ニ由テ。反テ舊來ノ弊勢ヲ蕩盡シ。新朝ノ基礎眞ニ確立スルニ至ル。故ニ論者戊辰ノ亂ヲ以テ王政ノ爲ニ地步ヲ作ルモノトス。蓋シ謬見ニ非ルナリ。

此編。王政復古以來ノ行政事實ニ係ルモノヲ載ス。其部門ヲ分ツコト上編ニ同シ。而シテ總記ハ則チ各部門ノ要領ヲ總攬シテ。行政進歩ノ大勢ヲ記スルモノナリ。慶應三年丁卯十月十四日。大政奉還ニ始リ。明治十五年ニ卒ル。

惟ルニ此十五年間政治海ノ潮流ハ。汪洋滿濔トシテ派別シ難キカ如シト雖モ。心ヲ潛メテ之ヲ探究スレハ。其脈絡相連リ。次序相依リ、整然トシテ繩索ノ念珠ヲ貫クカ如シ。今十五年間ノ事實ニ就テ。其尤モ重要ナルモノヲ舉クレハ。慶應丁卯大政復古。伏見ノ戰。王師東征。函館追討。明治元年四月三權分掌。二年五月ノ改正。版籍奉還。廢藩置縣。新律頒布。地租改正。祿券發行。徵兵令。大使洋行。征韓論。佐賀征討。臺灣ノ舉。元老大密二院建設。議院憲法。地方官會議。府縣會。減租。西南之役。内閣分離等トス。今此等ヲ記載スルニ當テ。一大項毎ニ其要目ヲ項題ニ掲ケ。以テ搜索ニ便ニス。

政權奉還

慶應三年十月十四日。征夷大將軍内大臣徳川慶喜、上表シテ。政權ヲ奉還セント請フ。翌日。優詔シテ之ヲ允ス。是レ實ニ中世以降數百年紐ヲ解クノ乾綱ヲ回復シ。寛永以還鎖國ノ國是ヲ一變シテ。僅々十數年間ニ立憲ノ政治ニ進運スルノ機會ト爲レリ。其二十四日ニ於テ。徳川慶喜、復ヒ書ヲ上リテ。目下重要ノ事務數條ノ處分ヲ請ヒ。且ツ其大將軍職ヲ辭ス。朝廷其書ニ批シテ。黜陟ノ外ハ。姑ク舊ニ依テ之ヲ執行セシム。而シテ將ニ大ニ天下ノ諸侯ヲ京師ニ召集シ。諮詢討議シテ。國是ヲ公論ニ決セントス。召命ヲ諸藩ニ下シ。十一月ヲ以テ朝會ノ期トス。政體上斯ク非常

國是將ニ定マラントス

ノ變動ヲ起スト雖モ。天下ノ耳目ハ猶未タ舊習ヲ脱セス。列藩諸侯多クハ依違觀望シ。薩、長、土、藝以下數藩ヲ除クノ外。疾走命ニ赴キ。奮テ國事ニ任セントスル者少シ。就中徳川氏譜第諸藩ノ如キハ。情願ヲ疏シテ召命ヲ辭スル者多シ。是ヲ以テ勤王ノ徒。事ノ或ハ中變センコトヲ恐レ。日夜ニ奔走謀議シテ。王政ノ實ヲ舉ケントスルニ苦慮シタリ。十一月。左大臣近衛忠房等。書ヲ上リテ、太政官八省以下ヲ復興ス可キヲ言フ。既ニシテ計畫漸ク定ル。十二月朝命アリ。大將軍以下幕府ノ閣老、有司、及ヒ在京ノ諸侯ヲ召シテ會朝セシメ。將ニ議スル所有ラントス。慶喜及ヒ閣老等。病ヲ稱シテ朝セス。蓋シ當時朝廷ノ急務ハ。王政ノ基礎ヲ立ツルニ在リ。而シテ三條實美以下及ヒ防長ノ處分ハ。急ノ尤モ急ナルモノナリ。然ルニ幕府ニ在テハ。往年征長再度ノ舉。功ナクシテ師ヲ班シ。仇怨實ニ深ク。此一事ハ。其意見全ク朝旨ニ副フ能ハサルヲ知ル。故ヲ以テ疾ニ託セシナリ。是ニ於テ十二月八日。小御所會議アリ。當日會スル者。公卿ハ中山忠能、正親町三條實愛。徳大寺實則等。岩倉具視亦潛行シテ會ニ臨ム。諸侯ハ徳川慶勝、前尾張藩主松平慶永、前越前藩主春嶽ト號ス、島津久光、薩摩藩主淺野茂勳、安藝藩主山内豊信、前土佐藩主容堂ト號ス、藩主藩士成瀬正肥、田宮篤輝、中根賢。酒井忠温、西郷隆盛、大久保利通、岩下方平、後藤元輝、福岡孝悌等亦與ル。乃チ三條實美等及ヒ防長ノ處分ヲ議決シ。忠能等直ニ之ヲ奏上ス。即日實美以下竄居ノ紳士。及ヒ毛利敬親父子竝ニ其支族等ノ官位ヲ復シ。久我建通、岩倉具視、以下嘗テ幕府ノ旨ニ違テ譴責ヲ蒙ル者。悉ク之ヲ釋ス。慶喜聞テ之ヲ慊カラストス。九日。特旨ヲ以テ攝政、關白、及ヒ征夷大將軍職、議奏、傳奏、守護職、所司代ヲ廢シ。新ニ總裁、議定、參與ノ三職ヲ置ク。是ヲ王政復古ノ第一着手トス。中世以降千有餘年。攝政、關白臣位ノ第一ニ在リ。蓋シ清和ノ即位スル猶ホ幼沖ニ在ルヲ以テ。外戚藤原良房、始メテ人臣ヲ以テ攝政セシヨリ。藤原氏世々之ヲ襲キ。宇多ノ朝ニ至テ。萬機細大ト無ク。

丁卯十二月ノ大改

王政復古

藤原基經ニ關白セシム。爾來攝政、關白ハ。一ノ世襲職名ト爲リ。數世ノ間。施政ノ實權。殆ト攝、關ノ掌裏ニ在リ。文治二年。源賴朝、六十六國總追捕使ト爲リ。霸府ヲ鎌倉ニ開キシ以來。政權又武門ニ移リ。攝政、關白ヲ併セテ。亦虛位ニ齊シカリキ。斯ル因襲ノ積弊ヲ改革シテ。獨リ武門握柄ノ沿習ヲ除クノミナラス。攝關ノ宿例ヲ連ネテ之ヲ一掃シ。主權ノ名ト實ト。俱ニ天皇ノ親握ニ歸シ。清和以前ノ國勢ヲ。復ヒ今日ニ見ルニ至レリ。世之ヲ號シテ王政復古ト曰フ。初メ政權奉還ノ事アルヤ。勤王ノ人實ニ慶喜カスノ如キノ果斷アルヲ圖ラサルナリ。故ニ王政ノ規模體裁。未タ豫議確定セス。近衛忠房等ノ書上ルニ至テ。廷議紛々。或ハ建武中興ノ故事ニ據ラント欲スルモノアリ。時ニ岩倉具視カ客、玉松操。具視ニ就テ議ヲ建テテ曰ク。建武ノ中興ハ。姑息ノミ。空名ノミ。焉ソ模範トスルニ足ラン。今日ノ事。須ラク神武ノ創業ニ本キ。我ヨリ元ヲ作スヘシト。聽者爲ニ疎然タリ。蓋シ此議實ニ王政ノ主眼ト爲リ。十二月十四日ノ布告ニ神武創業ノ始ニ原ツクノ文アリト云。大政ノ組織已ニ定ル。乃チ大ニ黜陟ヲ行フ。攝政二條齊敬以下十三人ヲ免シ。自餘ノ朝官十餘人。或ハ參朝ヲ停メ。或ハ謹慎ヲ命ス。守護職松平容保會津藩主所司代松平定敬桑名藩主ヲ免シテ。各其封邑ニ就カシム。皆佐幕ノ黨ナルヲ以テナリ。有栖川宮熾仁親王ヲ以テ總裁トシ。入道純仁親王御室宮晃親王山階宮中山忠能、正親町三條實愛、中御門經之、島津茂久、徳川慶勝、淺野茂勳、松平慶永、山内豐信ヲ議定トシ。大原重徳、萬里小路博房、長谷信篤、岩倉具視、橋本實梁ヲ參與トス。尋テ岩下方平、佐次右衛門西郷隆盛、大島吉之助、大久保利通、一藏薩摩藩士丹羽賢、淳太田中輔、國之輔尾張藩士辻維嶽、將櫻井元憲、與四久保田秀雄、平司中根師質、安藝雪酒井忠溫、十之丞毛受洪、鹿之助越前藩士後藤元輝、象次神山君風、左太福岡孝悌、藤次土佐藩士等ヲ以テ參與トシ。武家傳奏ノ事ヲ掌ラシム。是ヲ徵士ト云フ。假ニ一乘院里坊ヲ以テ參與局トス。十五日。參與ヲ分テ上下二局ト爲ス。是ニ至テ王

神武創業ニ基クノ國是

王政維新

政ノ規制粗定マレリ。蓋シ我邦中葉以後。専ラ門閥ヲ崇ヒ。攝家、清華、門流、名族。進仕道アリ。起罷格アリ。儂才異能ノ士モ。其統ニ非ルヨリハ。技倆ヲ展ルノ地ナシ。隨テ政令常套ニ陥リ。國勢衰萎。以テ今日ニ至ル。有志ノ士。夙ニ之ヲ慨ス。今者公家武家ノ差別ヲ廢シテ。武家諸侯ヲ以テ議定ニ加ヘ。參與ハ多ク藩士ノ才能名望アル者ニ取ル。是ヲ改革ノ第一要旨トス。此レヨリ百般ノ設施。悉ク此方向ニ進ミ。舊章故典ハ。殆ト棄テ顧ミサルカ如ク。期月間ニシテ。政府ノ面目全ク一洗シ。人ヲシテ王政維新ノ名ヲ以テ之ヲ稱セシムルニ至レリ。改革ノ翌日大政復古ノ誥出ツ。其意ニ曰フ。自今以後。大小ノ政令。天下公平ノ議ニ從ヒ。之ヲ裁スルニ衷ヲ以テス。爾衆庶宜ク之ヲ體シテ。以テ報國ノ誠ヲ效スヘシト。是日。長門藩ノ老臣等ヲ召ス。老臣等兵八百ヲ以テ京師ニ入ル。乃チ松平慶永ヲシテ。二條城ニ就テ慶喜ニ其大將軍ヲ罷ムル旨ヲ宣シ。且ツ内旨ヲ傳ヘテ。其ノ内大臣ヲ辭シ。竝ニ封土ヲ獻セシム。蓋シ政權既ニ朝廷ニ復スト雖モ。金穀ノ以テ資用ニ充ツヘキ無シ。是ヲ以テ幕府封内ノ歲入ニ就テ幾分ヲ割キ。以テ朝廷ノ用ニ充テントセルナリ。慶喜、宣命ヲ奉ス。而シテ辭官獻地ハ。姑ク物情安靖ノ後ヲ俟タント請フ。徳川氏ノ隸屬等ハ。初メヨリ慶喜ノ政權奉還ヲ喜ハス。陰ニ徳川氏ヲ維持センコトヲ謀リ。江戸ニ於テハ。譜第數十藩ノ老臣等。密ニ紀伊藩邸ニ會議シ。滿城嘖々。物情騷然タリ。罷官納土ノ内旨ヲ慶喜ニ傳フルヤ。徳川氏隸屬ノ將士。憤恚殊ニ甚シ。朝命ノ特旨ニ出テ。列藩ノ審議ニ據ラサルヲ唱ヘ。會津、桑名ニ藩主ヲ推シ。入テ二條城ニ據ル。慶喜モ亦朝意初ニ異ナルカ如キヲ見テ喜ハス。因テ衆ヲ鎮撫スト稱シ。會桑以下ノ將士ヲ率キ。二條城ヲ去テ大坂城ニ赴ク。是ニ於テ。朝廷薩長以下數藩ノ兵ヲ以テ。嚴ニ宮闕ヲ守リ。會桑ニ藩ノ人京師ニ入ルヲ禁ス。慶喜モ亦抗疏シテ。近日更革ノ事。一二ノ巨藩。主聰ヲ眩惑シ。擅ニ威福ヲ弄スルコトヲ論ス。尾張、越前、土佐、三藩交其間ニ居リ。慶

喜ラシテ辭官納地ノ事ヲ決行セシメント欲ス。十二月二十四日。徳川慶勝、松平慶永、朝命ヲ含テ大阪ニ抵ル。慶喜ニ諭スニ。官衙ハ宜ク舊例ニ依リ前内大臣ト稱シ。軍國ノ資用ハ。則チ天下ノ公議ニ據テ其制ヲ立テ。徳川氏ノ管内ヨリ之ヲ徵スヘキヲ以テシ。且ツ其入朝ヲ勸ム。慶喜旨ヲ奉ス。但軍國ノ資用ハ。全國ニ課スルニ非レハ不可ナルヲ陳ス。二人復命ス。而シテ慶喜心窃ニ危懼シ。實ハ未タ入朝ヲ決セサルナリ。是ヨリ先。江戸巡警ノ幕兵、薩藩士ト事ヲ生シ。薩人砲ヲ放チ幕兵ノ屯營ヲ襲フ。幕兵薩邸ニ火シテ之ヲ燬ク。報大阪ニ到ル。將士之ヲ聞テ意増、決ス。明治元年戊辰正月朔日。會桑以下ノ諸將士、大阪城ニ聚リ。慶喜ニ説クニ。兵ヲ以テ京師ニ入り。君側ヲ清メンコトヲ以テス。慶喜遂ニ意ヲ決シ。旨ヲ奉シテ入京スト聲言シ。會桑二藩ノ兵。前驅ト爲リ。佐久間近江、久保田備前等三兵隊ヲ率キ。高松、濱田等譜第諸藩ノ兵ヲ應援トシテ北上ス。兵三萬ト號ス。伏見、鳥羽兩道ヨリ進ム。事京師ニ聞ス。京師震恐ス。乃チ薩長二藩ノ兵ヲ遣リ。兩道ヲ戍ラシム。三日。徳川氏ノ使者來リ過キントス。戍兵許サス。徳川氏ノ大兵繼キ至ル。戍兵砲ヲ發シテ之ヲ拒ク。遂ニ戰ヲ開ク。此ヲ伏見、鳥羽ノ戰トス。朝廷、幕府ノ故ナクシテ來テ關ヲ犯シ。其叛狀已ニ彰ハルルヲ以テ。議定嘉彰親王ヲ以テ。征討大將軍トシ。錦旗節刀ヲ賜テ往テ征セシム。連戰四日。幕軍遂ニ崩潰シテ大阪ニ走ル。是時ニ當テ。諸藩ノ兵多ク京師ヲ護リ。彦根、大垣等徳川氏ノ譜第數藩。亦官軍ニ屬ス。而シテ薩長二藩ノ兵。實ニ戰ニ主タリ。専ラ敵ニ當ル。死傷尤多シ。是ヨリ二藩ノ武天下ニ顯ハル。慶喜錦旗ノ出ツルヲ聞テ。自ラ大事ヲ誤ルヲ知り。倉皇奏狀ヲ遣シ。會桑兩藩主及板倉勝靜、小笠原壹岐、自餘扈從、數輩ヲ提ケ。海ニ航シテ東走ス。官軍既ニ大捷ヲ得。隨テ近畿ヲ定メントシ。兵ヲ佐幕ノ諸藩ニ向ケ嚮背ヲ問フ。諸藩皆圖ヲ改メテ帖服ス。是ヨリ先。長崎奉行河津祐邦、日田代官久保田次部右衛門等。京阪ノ敗。慶喜東奔ノ狀ヲ聞

伏見ノ戰

キ。皆守ヲ棄テテ江戸ニ奔ル。阪以西ニ幕軍ナシ。是月。九條道孝ノ第ヲ以テ太政官代トシ。尋テ之ヲ二條城ニ移シ。(後又禁内ニ移ス。)以テ太政ノ出ツル所トス。是ニ於テ慶喜以下二十七人ノ官爵ヲ削リ。遂ニ東征ノ師ヲ起シ。諸藩ノ兵ヲ徵ス。二月。有栖川宮熾仁親王ヲ征東大總督ト爲シ。錦旗節刀ヲ授ク。諸道ノ官軍。道ヲ分テ江戸ヲ攻メントス。徳川氏ノ譜第隸屬等。相聚テ軍事ヲ謀ル。慶喜皆斥ケテ容レズ。獨リ勝安芳、大久保一翁等ヲ別室ニ延キ。旨ヲ託シ書ヲ作テ臣屬等ニ諭シ。敢テ官軍ニ抗スルヲ得サラシメ。遂ニ城ヲ出テテ上野寛永寺ニ屏居シ。恭順以テ朝命ヲ俟ツ。曰ク。官軍ニ抗スル者ハ。猶ホ双ヲ吾ニ割スカ如キナリト。慶喜カ隸屬ノ豪壯ナル者。之ヲ喜ハス。人々圖ル所アラントシ。私ニ隊名ヲ唱ヘ。兵ヲ聚メテ各地ニ出沒ス。時人之ヲ激徒ト稱ス。諸道ノ官軍。漸々江戸ニ迫ル。幕臣連署シテ慶喜ノ爲ニ哀ヲ乞フ。勝安芳、山岡鐵太郎等。官軍ノ參謀西郷隆盛ニ就テ。具ニ慶喜。恭順ノ狀ヲ陳ヘ。討伐ヲ停メント請フ。是ニ於テ。隆盛總督宮ニ啓シ。進伐ヲ停ム。四月四日。敕使江戸ニ入り。慶喜ノ死一等ヲ減シ。五事ヲ命シテ。以テ謝罪ノ實效ヲ表セシム。一ニ曰ク。慶喜退テ水戸ニ居ル。二ニ曰ク。江戸城ヲ收ム。三ニ曰ク。軍艦銃砲ヲ收ム。四ニ曰ク。家臣ヲ郭外ニ屏ク。五ニ曰ク。家臣ノ與謀者ヲ處分ス。慶喜、皆命ヲ奉ス。十五日。大總督宮、江戸ニ入ル。乃チ徳川家達ヲシテ宗家ヲ續カシメ。其封ヲ定メ。駿遠陸奥ノ地七十萬石ヲ賜ヒ。其臣屬ノ官爵ヲ停ム。是ヨリ先。天皇蹕ヲ大阪ニ移シテ。以テ遙ニ東北ヲ節度ス。關東略定マルヲ以テ。閏四月八日。車駕京師ニ還ル。既ニシテ又東北諸藩聯合シテ。王命ニ抗スルノ事アリ。

爰ニ當時外國トノ關係ヲ稽ルニ。先朝攘鎖ノ主旨モ。後ニ至テハ時勢ノ已ムヲ得サルニ因テ。下田開港ヲ敕許セリ。既ニシテ先朝登遐シ。今上幼冲ニシテ。徳川氏大政奉還ノ事アルニ會ス。然リ而シテ從前幕府執行ノ事務ハ。姑ク舊

ニ依ルヘキヲ命ス。故ヲ以テ幕府ハ。丁卯十二月七日ヲ以テ。曩ニ外國人ニ約セシ兵庫開港、大阪五市ノ事ヲ履行セリ。是時各國公使等大阪ニ至リ。慶喜ニ問フニ。國勢變革政權遷移ノ際。外交ノ權。專ラ何處ニ屬スルヲ以テス。慶喜答フ。大政ハ己ニ之ヲ朝廷ニ奉還スト雖モ。外交ノ事ハ。猶ホ自ラ任スル所ナリト。公使等之ヲ諾ス。因テ兵庫、大阪ノ五市。及ヒ新潟開港等ノ事ヲ商議セリ。明治元年伏見開戦ノ日。慶喜書ヲ外國公使ニ致シ。薩摩藩ニ武器船艦ヲ販與シ士官兵卒等ヲ貸スコト勿ラシム。公使等亦諾ス。己ニシテ幕軍戦ヒ敗レ。慶喜東走スルニ及テ。外國人未タ其事實ヲ審ニスル能ハス。正月九日。朝廷初メテ外國事務官ヲ置キ。嘉彰親王ヲ以テ外國事務總裁ヲ兼ネシメ。時ニ征討將軍ノ敕ヲ奉シ。副總裁兼議定三條實美、參與東久世通禧、岩下方平、後藤元輝等ヲ。取調掛トシ。從前條約ニ載ルテ。大阪城ニアリ。副總裁兼議定三條實美、參與東久世通禧、岩下方平、後藤元輝等ヲ。取調掛トシ。從前條約ニ載ル所ノ大君ノ稱ヲ廢シテ。天皇ノ稱ニ更メ。朝廷親シク外交ノ事ヲ施行スル旨ヲ告ク。而シテ公使等。始メテ政權ノ一ニ歸スルヲ知レリ。十八日。岩下方平、伊藤博文等ヲ以テ。兵庫神戸ノ事務ヲ掌ラシメ。舊幕ノ遺務ヲ續行セシム。此ヲ朝廷開港場ニ官吏ヲ置クノ始メトス。十九日。外國ニ交際ヲ開クノ敕書ヲ上下ノ諸官ニ下ス。其要ニ曰ク。外國ハ先帝ノ多年宸憂スル所ナリ。幕府從來ノ失錯ヲ以テ。因仍シテ今日ニ至レリ。今ヤ世態一變シ。復タ鎖攘ヲ主トス可ラス。因テ宇内ノ公法ニ基キ。各國ノ交誼ヲ開ク。上下一致シテ。此旨ヲ遵奉セヨト。是時ニ當テ。朝議紛然。開鎖ノ兩議ニ分ル。特ニ東征ノ急アルヲ以テ。爭鬭ヲ開クニ至ラス。而シテ開國ノ論。勝ヲ朝廷ニ占メ。此敕書出ルニ至ル。二十五日。各國公使、各其管轄人民ニ局外中立ヲ令ス。繼テ二月七日。越前、土佐、長門、薩摩、安藝、肥後ノ六藩主連署建言シテ。開國ノ時宜ニ適フヲ陳ス。(世ニ之ヲ六藩建言ト云フ)是時ニ當テ。外國公使等ハ。朝廷親シク外國ト締交スルノ旨ヲ領シ。隨テ其事ヲ實ニセントシテ。頻ニ京師ニ入り朝見センコトヲ求ム。二月。朝廷斷シテ

鎖國ノ國
是變シテ
開國ノ國
是トナル

其請ヲ允ス。是月三十日。英佛蘭米ノ四公使、參朝ス。兇人アリ英公使ノ行伍ヲ衝突シ。英公使朝スルヲ果サス。初メ攘夷論ノ盛ナリシヤ。論者以謂ラク。一タヒ戦ヲ外國ニ開キ。全國死地ニ陥ルトキハ。武力講セスシテ自ラ強クスヘシ。故ニ天下ノ事。外國ト戦ヲ開クヨリ要ナルハナシ。糧仗ヲ備ヘ。艦船ヲ造リ。備足リテ然後ニ戦ハントスルハ。兵機ヲ知ラサルノ論ナリト。此論深ク士人ノ胸臆ニ蟠結シテ解ケス。加之。外人從來内地ニ在テ數、粗暴ノ行ヲ爲スヲ見テ。憤怒ニ堪ヘス。外人ヲ惡ムノ情。終ニ移シテ滅幕ノ舉ヲ企ルニ至レリ。然ルニ今者幕府政ヲ還シテ王政トナリ。幕府ハ罪ヲ得ルニ至ルヲ以テ。世論ハ多ク外交ノ面目。必ス一新スルモノアラント臆想シタリ。時ニ正月十一日。會備前藩長臣日置帶刀、部下ノ兵士。神戸ヲ戍ル者。英國人ト爭鬭シ、遂ニ之ヲ砲殺ス。事朝廷ニ聞ス。朝廷、内國ノ事方ニ急ニシテ。又事ヲ外國ニ開ク可ラサルヲ以テ。外國事務取調係東久世通禧ヲ遣ハシテ。各國公使ヲ慰諭シテ。稍其意ヲ安セシメ。日置帶刀部下ノ士官、發砲ヲ命セシモノヲ自刃セシム。又二月十五日。土佐ノ兵士、境浦ヲ戍ル者。佛艦水夫ノ國禁ヲ犯スヲ怒テ。十四名ヲ砲殺ス。朝廷又此ヲ妙國寺ニ自刃セシム。此二事ハ。攘夷論者ノ憤恚スル所ト爲リ。物議嗷々タリ。時ニ四國公使參朝ノ事アルニ會ス。大和ノ人三枝翁、山城ノ人朱雀操ナル者。相謀テ英公使ヲ要撃シ。以テ神戸、境浦兩刑人ノ爲ニ讎ヲ復セントス。事就ラス。護衛兵十餘人ヲ傷ケ。卒ニ殺サル。此時ニ當テ朝廷外交ノ或ハ破レテ。患害ヲ東征ニ及ホサンコトヲ恐レ。謝慰殊ニ渥ク。償金ヲ出スコト。神戸事件以來前後鉅萬ニ及フ。而シテ外交ハ。因テ以テ其好ヲ完クスルヲ得タリ。

東征 東北諸藩ノ聯合シテ王命ニ抗スルヤ。會津實ニ其首魁タリ。是ヲ以テ白川、藤原、越後、諸口ノ官軍。齊シク敵ヲ燈メテ若松城下ニ集ル。九月二十二日。會津藩主松平容保城ヲ致シテ降ヲ乞フ。仙臺、南部、莊内等ノ諸藩モ亦降ル。

慶應三年ヨリ明治元年ニ至ル

東北ノ事既ニ平定スルヲ以テ。十月。天皇、東京ニ臨幸ス。是ヨリ先。江戸ヲ以テ東京トス。江戸城ヲ皇居トス。大總督有栖川宮錦旗節刀ヲ奉還ス。乃チ群臣ニ命シテ諸藩ノ處置ヲ議セシム。會津、仙臺、米澤、以下二十三藩主。皆死一等ヲ減シ、各藩ニ幽ス。仙臺、米澤以下ノ封ヲ削リ。同姓ヲ以テ封ヲ襲カシム。松平容保ノ邑ヲ收メ(明年。陸奥斗南ニ三萬石ヲ與ヘテ其祀ヲ存ス。)奥羽諸藩臣ノ事ニ主タリシ者十三人ヲ斬ニ處ス。是ヨリ先。舊幕府ノ遺臣逃ル。而シテ蝦夷地ニ割據ス。因テ追討ノ師ヲ下シ。二年五月ニ至テ。逃人榎本武揚、松平太郎、荒井郁之助、大鳥圭介等ヲ降シ。東京ニ押送ス。而シテ天下ノ事大ニ定マレリ。戦起ルヨリ是ニ至ルマテ。兵争ノ地。幾ト全國三分ノ二ニ互リ兵ヲ用フルコト十一萬ニ超エ。而シテ一年有半ニシテ全ク大局ヲ了セリ。

丁卯十二月。攝關將軍ヲ廢シ。三職ヲ置キ。政揆ノ構造ヲ一新シテヨリ。翌明治元年正月。伏見ノ戦起リ。次テ東征ト爲リ。北討ト爲リ。兵馬倥傯。海内噪擾ナルモ。朝廷ハ勇往斷行シテ改革ノ實蹟ヲ學ケンテ欲シ。其月十七日ニ於テ。三職ヲ八課ニ分チ。二月。又三職八局(總裁局、神祇事務局、内國事務局、外國事務局、軍防事務局、會計事務局、刑法律務局、制度事務局)ノ制ヲ定メ。總裁局ニ正、副總裁、輔弼、顧問、辨事、史官ヲ置キ。他ノ七局ニ各督、輔、判事等ヲ置キ。列藩ヲ分チ大、四十萬中、十萬石、石以上中、以上小、一萬石以上ノ三等ト爲シ。徵士、諸藩士及ヒ都鄙ノ才能者ヲ拔擢シ。參與若クハ各局ノ判事等ニ任ス。在勤四年。各藩主ノ自ラ選拔スルニ任シ。議事官トシ。ノ制ヲ定ム。又列藩ヲ統轄スル爲ニ管長ヲ各地方ニ置キ。數藩若クハ八年。貢十年限ナシ。其才能ニ從テ徵士トナルヲ得。ノ制ヲ定ム。又列藩ヲ統轄スル爲ニ管長ヲ各地方ニ置キ。數藩ヲ聯結シテ。朝廷ノ政令ヲ傳達スルコトヲ掌ラシム。時ニ朝廷。専ラ舊習ヲ破テ。天下ノ耳目ヲ一新セントス。即チ改革ノ第三日。内請女謁ヲ痛戒スルノ告諭アリ。是月二十二日。萬機親裁士民直言議論敢テ忌憚スルコト勿ラシムルノ告諭アリ。戊辰正月二十五日。苞苴賄賂ヲ切禁スルノ告諭アリ。同十八日。宮、堂上及ヒ諸官人ニ示シテ。舊習ヲ

洗除シ。志操ヲ砥勵シ。以テ實用ニ適セシムルノ告諭アリ。又萬國ノ通誼ニ從ヒ。外國公使ヲ召見シ。親王、公卿ノ喝道ヲ禁シ。神佛混淆ヲ分テ。各其一ニ歸セシム。是時ニ當テ。天子、春秋猶ホ淺ク。輔弼ノ大臣、新ニ登用セラレ。名望未タ重カラス。朝廷ノ大策偉略。多クハ列藩藩士ノ建議ニ出ツ。前ノ六藩建言。及ヒ大久保利通、遷都ノ議ノ如キ。當時政揆ノ方向ニ於テ。尤モ與リテ力アリ。三月十四日。天皇、南殿ニ御シ。公卿、諸侯ヲ率キテ。天神地祇ヲ祭リ。五事ヲ誓約セリ。其條款ニ曰ク。廣ク會議ヲ興シ。萬機公論ニ決スヘシ。曰ク。上下心ヲ一ニシ。盛ニ經綸ヲ行フヘシ。曰ク。官武一途。庶民ニ至ルマテ各其志ヲ遂ケ。人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス。曰ク。舊來ノ陋習ヲ破リ。天地ノ公道ニ基クヘシ。曰ク。智識ヲ世界ニ求メ。大ニ皇基ヲ振起スヘシ。因テ詔ス。我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシテ。朕躬ヲ以テ衆ニ先タチ。天地神明ニ誓ヒ。大ニ斯國是ヲ定メ。萬民保全ノ道ヲ立ントス。衆亦此旨趣ニ基ツキ。協心努力セヨト。尋テ又億兆ヲ撫安シ。國威ヲ宣布スルノ詔ヲ下ス。其大意ニ曰ク。朕幼弱ヲ以テ大統ヲ紹ク。何ヲ以テカ萬國ニ對立シ。列祖ニ事ント。朕思フニ在昔列祖、萬機ヲ親ラシ。自ラ將トシテ不庭ヲ征シ。廟堂ノ内。政簡易ヲ尙フ。君臣相親ミ。上下相愛シ。德澤天下ニ治ク。國威海外ニ輝ケリ。中葉以降。武臣權ヲ專ニシ。廟陽ニハ推尊ヲ致シ。陰ニハ之ヲ辨駁ニス。名ハ億兆ノ父母タレトモ。其實ハ赤子ノ情ヲ知ラス。此ノ如クナラハ何ヲ以テカ天下ヲ統治センヤ。今ヤ政體一新シ。億兆ノ責。一ニ朕カ躬ニ歸ス。朕躬親ヲ勞劬ニ當リ。以テ列祖ノ治蹟ヲ紹述セント欲ス。宇内ノ形勢ヲ熟察スルニ。各國四方ニ雄峙シ。競テ開化ニ進メリ。是時ニ當テ。我邦獨リ時勢ニ暗ク。舊慣ヲ固守シ。時ニ隨ヒ機ニ應スルノ略ナクンハ。終ニ各國ニ凌侮セラレ。列祖ノ遺業ヲ荒墜スルニ至ラン。是ヲ以テ朕、百官諸侯ト誓ヒ。斯大業ヲ濟サンコトヲ約セリ。爾億兆。舊來ノ陋習ニ慣レ。過テ推尊ヲ致シ。朕ヲシテ

五條誓詔

艱難ヲ親ラスルコト能ハス。民ニ父母タルノ道ヲ失ハシムルコト勿レト。此誓詔ハ。當時國是ノ大主眼ト爲ルモノニシテ。爾來天下頓ニ舊慣ヲ革メ。上下ノ思想一變スルニ至レリ。尋テ諸國ノ通衢ニ掲クル所ノ榜文ヲ改メ。新法令ヲ掲ク。五倫ヲ正クシ。鰥寡ヲ憫ムヘシ。人ヲ殺シ。家ヲ燒キ。財ヲ盜ム勿レ。黨ヲ樹テ強訴スルコト勿レ。等ノ事ヲ以テス。全文ハ法令ノ部ニ載ス。閏四月。三職八局ノ制ヲ廢シ。更ニ新官制ヲ定メ。太政官ヲ分テ七官ト爲シ。政體書ヲ頒布ス。是ヲ官制第二ノ改正トス。蓋シ去冬三職ヲ置キ。尋テ八局ヲ設ケ。事務ヲ分課スト雖モ。倉卒ノ間。事業未タ恢弘セス。故ニ今誓詔ニ基キ。更ニ官制ヲ改定シ。從前未定ノ規律ヲシテ漸ク整頓セシムル所以ナリ。政體書條款ノ要旨ニ曰ク。國是ヲ定メ。制度ヲ建ツルハ。誓詔ヲ以テ標的トス。政權ヲ太政官ニ統ヘ。二途ニ出ルヲ許サス。太政官ノ權力ヲ分チ。立法、行政、司法ノ三權トシ偏重無キヲ要ス。立法官ハ行法官ヲ兼ルヲ得ス。行法官ハ立法官ヲ兼ルヲ得ス。但シ臨時都府巡察ト。外國應接トノ如キ。猶ホ立法官之ヲ管スルヲ得。親王、公卿、諸侯ニ非ルヨリハ。一等官ニ昇ルヲ得ス。是レ親ヲ親ミ大臣ヲ敬スル所以ナリ。藩士、庶人ト雖モ。徵士トナリ二等官ニ至ルヲ得。賢ヲ貴フ所以ナリ。各府、藩、縣貢士ヲ出シ議員ト爲サシメ。以テ輿論公議ヲ取ル。官等ノ制ヲ立テ。各其職任ノ重キヲ知り。敢テ自ラ輕ンセサラシム。僕從ノ制限ヲ定メ。親王、公卿、諸侯ハ帶刀者六人。僮僕三人。諸侯以下ハ帶刀者二人。僮僕一人トス。過重ノ風ヲ除キ。上下隔絶ノ弊無キヲ要ス。在官人、私ニ自家ニ於テ他人ト政事ヲ議スルヲ得ス。政事ヲ議セント欲スル者ハ。之ヲ官衙ニ建白シ。公論ヲ經ヘシ。諸官、四年ヲ以テ交代ス。公選入札ノ法ヲ用フヘシ。

但シ初度交代ノ時。全部ノ半ヲ殘シ。二年ヲ越ヘテ交代シ。繼續宜キヲ得セシム。交代人、衆望ノ屬スル所ニシテ。

已ミ難キ者ハ。猶ホ數年ヲ延フルコトヲ得。諸侯以下。農、工、商、各貢獻ノ制ヲ立テ。以テ政府ノ費用ヲ補ヒ。兵備ヲ嚴ニシ。民安ヲ保ツヘシ。秩祿官俸アル者。亦其三十分ノ一ノ貢スヘシ。各府、藩、縣ノ政令。亦深ク誓詔ヲ體スヘシ。

一方ノ制ヲ以テ他方ヲ概スル勿レ。私ニ爵位ヲ與ル勿レ。私ニ寶貨ヲ鑄ル勿レ。私ニ外國人ヲ雇フ勿レ。私ニ他藩、若クハ外國ト盟約ヲ立ツル勿レ。諸官、有司、此規律ヲ守リ。以テ失フナカルヘシ。若シ改革セント欲スルノ條件アラハ。大會議ヲ經テ之ヲ決スヘシ。

從來我邦ニハ。議政行政ノ區分ナカリシニ。今者ノ改正ニ於テ。太政官ヲ。立法、行法、司法ノ三官ニ分チ。立法ハ。議政官上下局ヲ以テ成リ。上局ハ。議定、參與之ニ充テ。政體ヲ創立シ。法制ヲ造作シ。機務ヲ決行シ。三等官以上ヲ銓衡シ。及ヒ賞罰ヲ明ニシ。條約ヲ定メ和戰ヲ宣スルコトヲ掌リ。下局ハ。貢士、之ニ充テ上局、議定スル所ノ條件ヲ承ク。行法ハ。行政、神祇、會計、軍務、外國ノ五官ヲ置キ。行法官ニ輔相、辨事、史官ヲ置キ。神祇官以下ニハ。每官正、副知事、正、權判事ヲ置キ。各其官ノ事務ニ掌ラシメ。司法ハ。刑法官ヲ設ケ。正、副知事、正權判事ヲ置キ。專ラ法律ノ事ヲ掌ラシム。官等ヲ設クル凡テ九階ナリ。又地方ヲ分チテ府、藩縣トシ。府縣ニ知事ヲ置キ。藩ハ姑ク其舊ニ仍ル。又議政官ニ日誌司ヲ設ケ。朝廷有ル所ノ事實ヲ記シ。之ヲ世ニ公布シテ。以テ公平ノ意ヲ示ス。是ヲ太政官日誌トス。政體書ノ條款ハ。未タ悉ク行ハレシニ非ス（立法、行法、相兼スルコトヲ得ス。及ヒ諸官、四年交代等ノ如キ。）ト雖モ。當時政接ノ方向。全ク斯點ニ傾注セリ。

蓋シ我邦ノ開化ハ。中古以來。支那印度ノ學術ニ興ル。就中、社會ノ交際。施政ノ法則ハ。大抵模範ヲ支那ニ採リ。

以テ律、令、格、式ヲ定メタリ。然ルニ徳川氏ノ中葉以後。二三ノ學者。泰西ノ書ヲ讀ミ。泰西ノ學術ヲ研究シ。其理論術藝ノ支那ニ無キ所ナルヲ喜ヒ。首メテ之ヲ唱ヘシヨリ。泰西學ノ種子。我邦ニ萌芽セリ。然モ當初ハ。其勢力甚タ微ニシテ。特志異好ノ人ニ非ルヨリハ。之ヲ知ル者無カリシニ。嘉永、安政間。外國ニ交通セシヨリ。世ノ耳目、次第ニ泰西ノ事實文物ニ慣レ。初メハ火器、艦舶、軍制、醫術等ニ止リシモ。漸ク進テ厚生利用ノ方トナリ。制度文物トナリ。政體學術トナリ。維新ニ際シテハ。豪傑策士ノ。事ヲ天下ニ濟サント欲スルモノ。過半此等ノ感ヲ頭腦中ニ發起シタリ。但幕府未タ仆レサルノ前ハ。公然之ヲ暴白セサリシモ。既ニ丁卯ノ變革ヲ經テ。大業ヲ擴張セントスルニ當リ。向ノ文明開化ノ感觸。豪傑ノ腦中ニ暗藏セシモノ。勃然發作シテ。一時ノ輿論ヲ誘導シ。以テ維新ノ國是ト爲リ。中古以來。支那ヨリ得來リタル典章、制度ヲ一變シテ。泰西ノ體裁ヲ模倣スルニ至レリ。斯ノ國是ハ。實ニ爾來十五年間ノ政揆ヲ指定シタルノ原質ナリ。然リ而シテ舊ヲ換ヘ新ニ就クノ際又大ニ天下ノ人心ヲ刺衝スルモノアリテ。社會ニ兩様ノ影響ヲ生スルニ至レリ。其一ハ守舊ノ人心ヲ刺衝シテ。不平ヲ感セシメ。其二ハ喜奇ノ人心ヲ刺衝シテ。誇張ニ趨ラシメタル是ナリ。蓋シ守舊ノ徒ハ、朝廷ノ國是ヲ見テ。其習慣ヲ破リ。常行ヲ變スルヲ痛ミ。以テ治道ヲ誤リ。國體ヲ傷クルモノト爲シ。不平ノ極。變シテ憤怒トナリ。終ニ力ヲ極メテ斯ノ政揆ヲ遮斷センコトヲ圖レリ。元年三月。英公使參朝ノ路ヲ遮撃シ。二年正月。參與橫井時存ヲ刺シ。其九月。兵部大輔大村永敏ヲ傷死シ。三年。山口縣奇兵隊ノ亂。其十一月。函館居留英人ノ橫殺。其年。暴徒、汽車鐵道ノ害ヲ唱ヘテ集議院ニ逼リ。雲井龍雄等ノ暴舉。四年冬。愛宕通旭等ニ死ヲ賜フノ如キ。明治初年以來。六七年間ニ起ル所ノ紛擾事變ハ。其緣由各同シカラスト雖モ。究竟スルニ。朝廷ノ國是。尋常意思ノ外ニ在リテ。守舊ノ人心ヲ刺激シ。不快ヲ感セシメタルノ結

果ニ外ナラス。喜奇ノ徒ハ。朝廷ノ改革ヲ見テ、殊ニ痛快ヲ覺エ。奮テ之ヲ翼贊シ。海内ノ開化。頓ニ面目ヲ改メタリ。然モ其勢ノ馴致スル所。明治六七年以後。民權自由ノ說。朝野ノ間ニ起リ。健訟ノ風下ニ長シ。一時ノ學者。架空ノ論ヲ以テ世ニ唱ヘ。國會ノ請願ト爲リ。政黨ノ說ト爲リ。反テ政府ニ負ハシムルニ守舊ノ名ヲ以テシテ。之ヲ攻撃スルニ至レリ。此等ノ狀況ハ。蓋シ後年ニ至テ始メテ現ハレタルモノニシテ。當時政治家ノ。曾テ想到セサリシ所ナリ。是月。肥前國長崎、浦上村、天主教ノ徒ヲ。諸藩ニ配付ス。初メ徳川氏ノ天主教ヲ嚴禁スルヤ。浦上村、猶ホ其餘孽ヲ遺ス。外交起ルニ從テ。泰西宣教ノ徒。竊ニ弘教ヲ圖リ。信徒漸ク増加シテ數千人ニ及フ。維新ノ初。木戶孝允ヲ長崎ニ遣テ之ヲ處理セシム。是ニ至テ。之ヲ諸國ニ分付ス。五月。舊幕府麾下ノ將士、歸順スル者ヲ朝臣ニ列シ。中、下大夫、上士ヲ置テ其班ヲ分ツ。明年正月。其官位ヲ停ム。是月。新貨ヲ鑄テ舊貨ノ丁銀、豆板銀等ノ通行ヲ停ム。五月。始メテ紙幣ヲ製シ。通行十三年ヲ限ト爲ス。尋テ之ヲ列藩ニ貸與ス。是月。江戸府ヲ置キ。六月。鎮臺ヲ江戸ニ置ク。時ニ民間私ニ新聞紙ヲ刊行スルモノアリテ。中外新報。江湖新聞。天理可樂怖。藻鹽草等ノ數種アリ。是月悉ク之ヲ禁ス。七月。江戸ヲ改メテ東京ト爲シ。江戸府ヲ東京府ト稱ス。鎮臺ヲ廢シ。鎮將府ヲ置キ。駿河以東十三國ヲ管ス。八月二十七日。天皇即位ノ禮ヲ紫宸殿ニ行フ。時ニ聖算十七。中葉以後用フル所ノ大禮服飾ヲ廢シテ。悉ク古典ニ復シ。繼テ明治ト改元ス。詔シテ一世一元ノ制ヲ立テ。以テ永式ト爲シ。赦ヲ天下ニ行フ。九月二十一日。聖誕日ヲ以テ天長節ト爲シ。海内ニ令シ。嘉辰ヲ祝セシム。是時。若松城下リ。東北鎮定ニ歸スルヲ以テ。十月。車駕東京ニ幸シ。江戸城ヲ以テ皇居ト爲シ。改メテ東京城ト稱ス。初メ車駕。京都ヲ發スルヤ。路ヲ東海道ニ取リ。親シク民間ノ疾苦ヲ問フ。中古以來。巡狩ノ典廢シテ。上下懸隔。九重復タ草野ノ狀ヲ知ラス。是ニ至テ。上、

始メテ之ヲ躬ラス。民庶、縱觀シテ感泣スル者アルニ至ル。因テ沿道ノ孝子義僕ヲ旌表シ。遂ニ之ヲ全國ニ施行ス。是月。鎮將府ヲ廢ス。時ニ天下略鎮定ス。而シテ列藩ノ處分。未タ定マラス。蓋シ大名ナルモノハ。祖先ノ武力ニ藉リ。封土ヲ私有シ。人民ヲ臣僕ニシ。法度職制ヲ設ケテ。之ヲ封内ニ行フ。中古以來。朝廷幕府ノ權ト雖モ。其大法ニ關スルモノヲ除クノ外ハ。一ニ藩國ノ自治ニ任シテ。制縛ヲ加フルコト能ハス。今ヤ大勢一變シテ。四海一家ト爲ルノ日ニ當テ。仍ホ自治ノ舊ニ隨フトキハ。畫一ノ治施ス可ラス。是ヲ以テ十月。藩治職制ヲ頒チ。藩主ノ下。家老、用人等ノ稱呼ヲ罷メ。執政、參政、公議人及ヒ家知事ヲ置カシメ。門閥ヲ論セス。專ラ人材ヲ擧ケ。其黜陟ハ。悉ク奏上シテ旨ヲ承ケシム。公議人ハ。朝命ヲ奉シテ國論ニ代ル者ニシテ。執參政ノ中ヨリ之ヲ兼ネ。明年二月十五日ヲ期シ。列藩ニ公議人一員ヲ出シ。公議所會議ニ與ラシム。其兵制、民政ハ。專ラ府縣ノ制ニ憑準セシメ。又每藩議事ノ制ヲ設ケ。以テ。公議輿論ヲ採ラシム。

藩治職制已ニ定マリテ。朝廷、列藩ノ間。自ラ相聯絡ス。而シテ實ニ明年。諸侯、版籍奉還。六年。廢藩置縣ノ楷梯ト爲レリ。十一月。各國公使ニ告ケテ。局外中立ヲ解カシム。是月。記録掛ヲ行政官ニ置キ。五官ニ令シ。其文書ヲ衰輯シテ之ヲ上ラシム。創メテ海軍局ヲ東京築地ニ置ク。十二月。車駕京師ニ歸ル。

大政紀要

第五十六卷

下編總記二

第二册

大政紀要下編

總記二

明治二年正月。奥羽ヲ分テ五國トス。是ニ於テ。諸道ノ關門ヲ撤シ。會津ノ降人ヲ蝦夷地ニ移シテ。之ヲ軍務官ニ隸ス。是月。墮胎ヲ禁シ。密賣淫ヲ申禁ス。又富籤ヲ停メ。圖書刊行規則ヲ頒チ。二月。新聞紙ノ禁ヲ解キ。昌平校ニ命シテ之ヲ検査セシム。東北既ニ平キ。又兵制ヲ釐革セントスルヲ以テ。徵兵ヲ歸休ス。

議會

三月。公議所ヲ設ク。是ヲ議會ノ初トス。當時封建相沿ノ勢ヲ承ケ。列藩互ニ主張スル所アリテ。藩論相同シカラス。朝廷之ヲ折衷シ。以テ制度律令ヲ定メント欲ス。是ヲ以テ變革ノ初。既ニ徵士貢士ノ名アリ。貢士ハ每藩ヨリ貢出セシメ。其職ハ。朝廷ノ下問ニ對ヘ。制度律令其他重要ノ處分ヲ討議セシムルニ在リ。戊辰二月。貢士ヲ改稱シテ公務人ト云ヒ。其八月。又公議人ト改ム。後之ヲ議員ト云フ。當時。西京菊亭修季ノ邸ヲ以テ。貢士ノ對策所ニ充ツ。大木喬任、坂田莠ヲ以テ假ニ議長ノ事ヲ行ハシム。其策問ハ。耶穌教徒ノ處分、德川慶喜謝罪後ノ處置、陸海軍制、財政ノ方法、東北剿定ノ策、政體書中所載ノ條件、(租稅、驛遞、貨幣、外國交際、通商章程)列藩ノ訟訴、衣服ノ制度、奥羽鎮定後降付人ノ處置等ヲ以テシ。刻期或ハ臨時ニ對策セシム。當時各藩ノ議員。盡ク其人ヲ得ルニ難ク。空論浮議亦尠カラス。加之。草創ノ際。議事ノ體裁モ亦甚タ粗漏ナリシヲ以テ。其年九月。福岡孝弟、大木喬任、秋月種樹、